

大阪府埋蔵文化財調査報告2010-10

府
中
遺
跡
Ⅱ

府 中 遺 跡 Ⅱ

—都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う調査—

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一〇—一〇—一〇

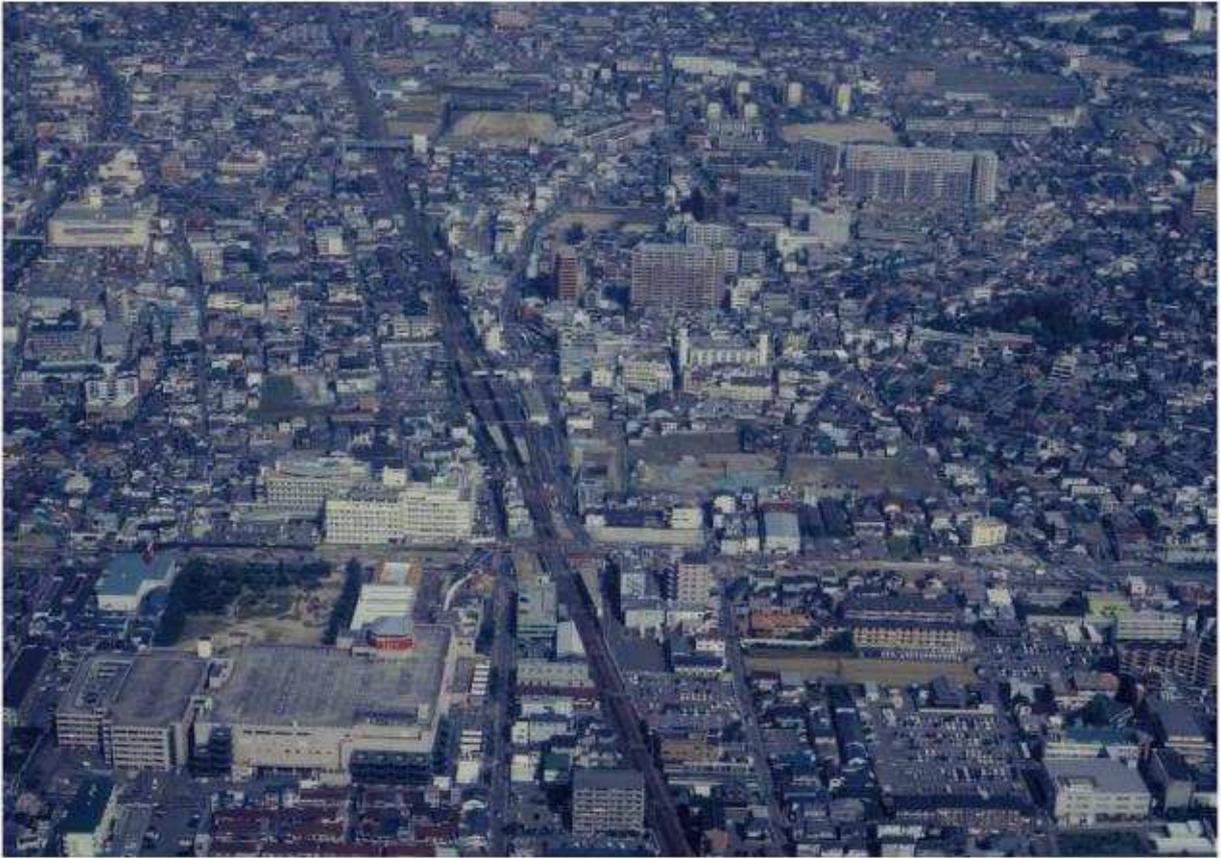
大阪府教育委員会

大阪府教育委員会

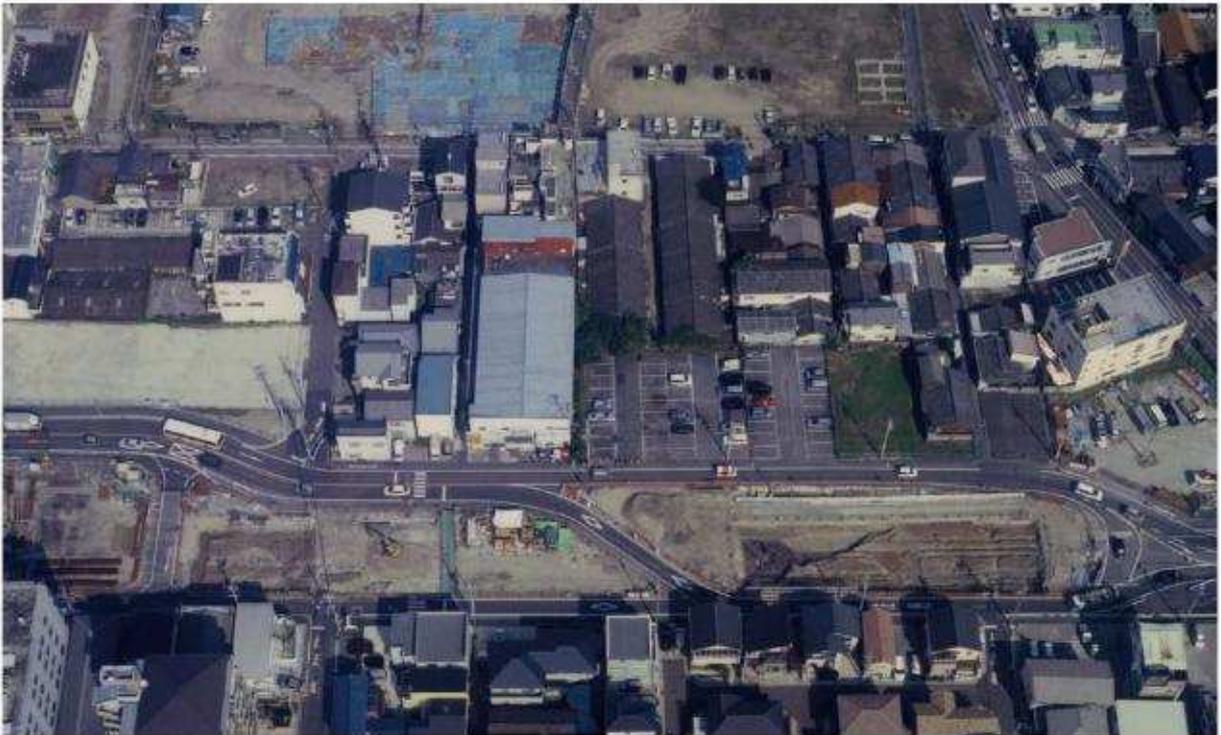
府 中 遺 跡 Ⅱ

—都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う調査—

大阪府教育委員会



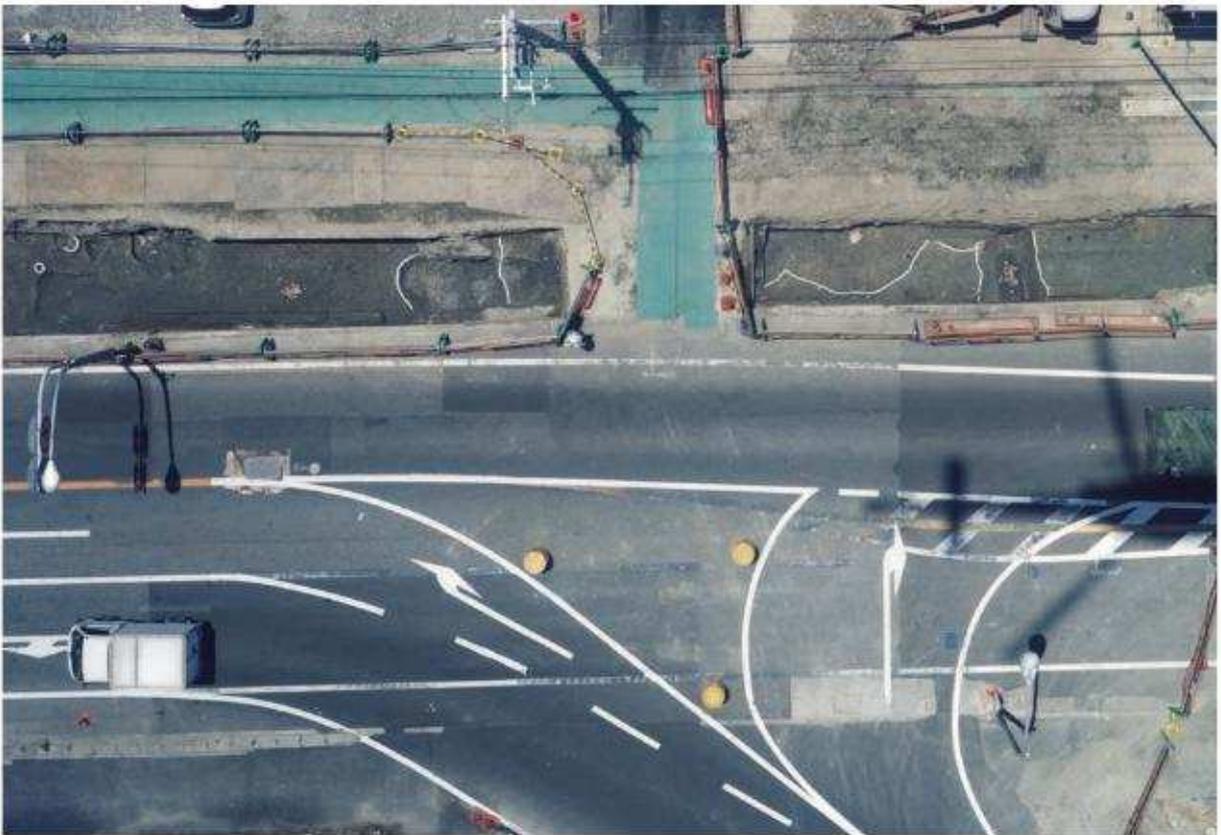
調査区遠景（南西から）



調査区全景（南西から）



08-4区



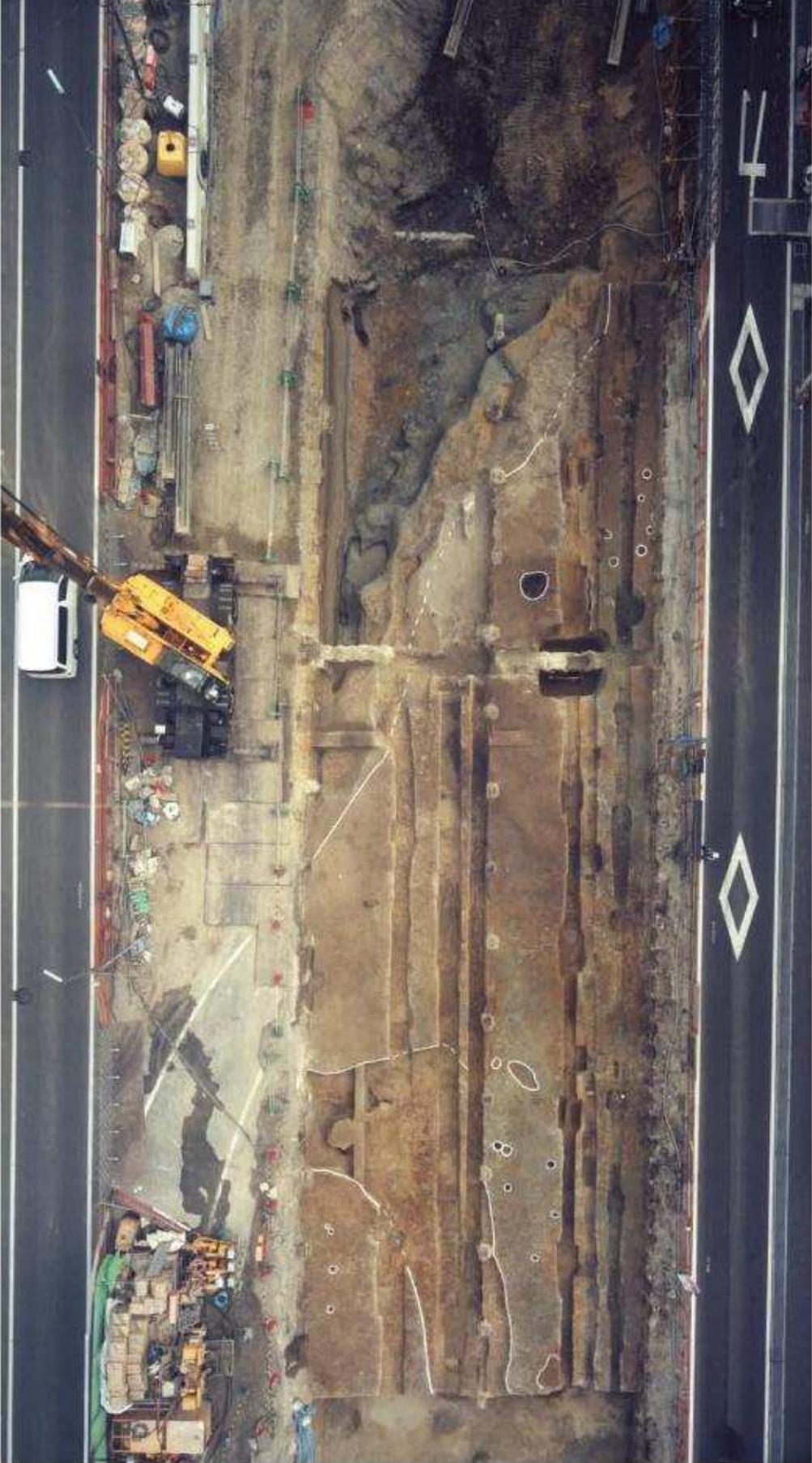
08-5・6区



08-11区



08-14区



08-14b区



08-8区 (北西侧)



08-8区 (南東側)



出土縄文土器

序 文

府中遺跡は大阪府の南部、和泉市府中町に所在する遺跡で、奈良時代の天平宝字元年（757）に和泉国が設置されたとき、国府が置かれた所と考えられています。

本遺跡ではこれまで数多くの発掘調査が積み重ねられてきました。国衙跡は、JR線と泉府中駅前市街地と重なっており、また、国衙に繋がる遺構は見つかっていませんが、縄文時代の炉跡や弥生時代の建物跡、墓地、古墳時代から平安時代までの各時代の建物跡などが見つかっており、和泉地域を代表する遺跡のひとつとして広く知られてきました。

本書は、大阪府教育委員会が都市計画道路和泉中央線整備事業に伴って、平成14年から平成21年まで8年間にわたり実施しました発掘調査のうち、平成19年度、平成20年度の調査成果を纏めたものです。調査では縄文時代の貯蔵穴、弥生時代から古墳時代の溝や土坑、中世の井戸などが見つかりました。特に縄文時代の中期前半から晩期まで各時期の土器が多数出土しました。これらの遺構、遺物は当地域の歴史を解明し、豊かな文化を形成していく上で貴重な資料になると思います。

最後になりましたが、本調査の実施にあたっては、地元の皆様をはじめ、大阪府都市整備部、和泉市教育委員会等、関係各位に多大なご協力とご指導を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも本府の文化財保護行政により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成23年 3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 野口 雅昭

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪都市整備部の依頼を受けて、平成14年度から平成21年度まで実施した、都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う府中遺跡、豊中遺跡、板原遺跡の発掘調査のうち、平成19年度、平成20年度に実施した府中遺跡の発掘調査報告書である。ただし、平成20年度、平成21年度の豊中遺跡調査で出土した縄文土器も併せて掲載した。
2. 調査は、文化財保護課調査第2グループの課長補佐高島徹の指示のもと、平成19年度が技師阿部幸一、平成20年度が主査三木弘、副主査土屋みづほ、技師阿部幸一、竹原伸次が担当した。遺物整理は、平成20年度から平成22年度まで調査管理グループ主査三宅正浩、副主査藤田道子が担当した。
3. 本調査の調査番号は、平成19年度が07001、平成20年度が08002である。
4. 本調査の写真測量は、平成19年度が有限会社エムズ、平成20年度が株式会社エムズ、株式会社フォックスに委託した。撮影フィルムは各社が保管している。
5. 本書に掲載した遺物の写真撮影は有限会社阿南工房に委託した。
6. 本書に掲載した03年の花粉分析、¹⁴C年代測定はバリノ・サーヴェイ株式会社、06年の¹⁴C年代測定が株式会社パレオ・ラボ、植物珪酸体分析は株式会社古環境研究所にそれぞれ委託した。
7. 調査で作製した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会が保管している。
8. 発掘調査・遺物整理にあたっては和泉市教育委員会文化財振興課の白石耕治、乾哲也、千葉太郎氏や京都大学文学部泉拓良氏をはじめとする考古学研究室の方々などから協力、助言を得た。記して感謝します。
9. 本書の編集は阿部幸一が担当した。執筆は阿部のほか、第3章第5節縄文土器は調査第二グループ課長補佐大野薫（平成21年度から）、京都大学大学院生妹尾裕介が執筆した。
10. 発掘調査、遺物整理並びに本書の作製に要した費用は大阪府都市整備部が負担した。
11. 本報告書は300部作製した。一部あたりの印刷単価は1,848円である。

目 次

序文
例言

本 文 目 次

第1章	調査の経過と方法	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査区名と調査の方法について	3
第2章	立地と環境	4
第1節	地理的環境	4
第2節	歴史的環境	5
第3章	調査結果	9
第1節	基本層序	9
第2節	中近世の遺構	13
第3節	古墳時代の遺構と遺物	15
第4節	弥生時代の遺構と遺物	25
第5節	縄文時代の遺構と遺物	40
第6節	縄文土器	49
第7節	石器	99
第4章	理化学分析	103
第1節	03-1区の花粉分析	103
第2節	03-1区出土材化石の放射性炭素年代測定	115
第3節	出土縄文土器の植物珪酸体分析	118
第4節	放射性年代測定2	127
第5章	まとめ	133
	報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	これまでの主な調査地点	2
第2図	調査区位置図	3
第3図	和泉地域の地質図（泉大津市史より転載）	4
第4図	府中遺跡周辺の主な遺跡	7
第5図	08-4区・08-8区・07-5区断面図	11・12
第6図	07-2区01 S E 平面図・断面図	13
第7図	08-14 b 区25 S E 平面図・断面図	14
第8図	08-14区04 S K 平面図・断面図	14
第9図	08-2区01 S K 平面図・断面図	15
第10図	08-2区01 S K 出土土器実測図	15
第11図	08-2 c 区平面図	16
第12図	08-14 b 区03 S K 平面図・断面図	17
第13図	08-14 b 区03 S K 出土土器実測図	17
第14図	08-14区ピット断面図	18
第15図	07-7区、07-10区、08-2区、08-3区平面図	19・20
第16図	07-5区、07-6区、08-5区、08-6区平面図	21・22
第17図	08-11区、08-14区02 S D、21 N R 断面図	23
第18図	08-4区（古墳時代以降）平面図、08-4区03 N R 断面図	24
第19図	07-5 b 区01 S D 断面図	25
第20図	07-5区01 S D 平面図	26
第21図	08-6区包含層土器出土状況実測図	26

第 22図	07-6区12 S K 平面図・断面図	27
第 23図	08-5区02 S D 平面図	27
第 24図	08-5区01 S K 平面図	27
第 25図	07-1区平面図、07-1区01 S K 平面図	29
第 26図	08-8区方形周溝墓01 S Z 平面図、01 S Z 南西溝土器出土状況平面図	30
第 27図	08-1区11 N R 断面図、08-8区11 N R 断面図	32
第 28図	07-5区出土土器実測図	33
第 29図	07-6区出土土器実測図1	34
第 30図	07-6区出土土器実測図2	34
第 31図	07-6区出土土器実測図3	34
第 32図	08-5区01 S K 出土土器実測図	35
第 33図	08-5区01 S K、08-5区03 S D 出土土器実測図	36
第 34図	08-5区02 S D 出土土器実測図	37
第 35図	08-8区01 S Z 出土土器実測図	37
第 36図	07-1区01 S K 出土土器実測図	38
第 37図	08-1区11 N R 出土土器実測図	39
第 38図	08-8区02 N R 断面図	40
第 39図	08-4区03 S K 平面図・断面図	42
第 40図	08-11区縄文時代中期面平面図 11・13 S P、14 S K、15～18 S P 断面図	43
第 41図	08-14区縄文時代中期面平面図 11 S P～17 S P 断面図	45
第 42図	08-14区31 S P～33 S P 平面図・断面図	46
第 43図	08-14区41 S X 平面図・断面図	47
第 44図	08-14区42 S K 平面図・断面図	48
第 45図	08-1区出土縄文土器実測図1	51
第 46図	08-1区出土縄文土器実測図2	52
第 47図	08-2区、08-3区出土縄文土器実測図3 (中期・晩期)	54
第 48図	08-4区出土縄文土器実測図1	56
第 49図	08-4区出土縄文土器実測図2	57
第 50図	08-5区、08-6区、08-7区出土縄文土器実測図	59
第 51図	08-8区出土縄文土器実測図1	62
第 52図	08-8区出土縄文土器実測図2	63
第 53図	08-8区出土縄文土器実測図3	65
第 54図	08-8区出土縄文土器実測図4	67
第 55図	08-8区出土縄文土器実測図5	68
第 56図	08-8区出土縄文土器実測図6	69
第 57図	08-8区出土縄文土器実測図7	70
第 58図	08-8区出土縄文土器実測図8 土製品実測図	71
第 59図	08-9区、08-10区、09-1区出土縄文土器実測図	73
第 60図	08-11区出土縄文土器実測図1	75
第 61図	08-11区出土縄文土器実測図2	76
第 62図	08-14区、07-21区出土縄文土器実測図	78
第 63図	出土石器実測図1	100
第 64図	出土石器実測図2	101
第 65図	出土石器実測図3	102
第 66図	主要花粉化石群集の層位分布	107
第 67図	検出花粉化石写真	113
第 68図	出土土器 (胎土) の植物珪酸体分析結果	121
第 69図	土器試料 (写真)	123
第 70図	出土土器の植物珪酸体 (プラント・オパール)	125
第 71図	暦年校正結果1	131
第 72図	暦年校正結果2	132

表 目 次

表 1	都市計画道路泉中央線関係発掘調査一覧	2
表 2	縄文土器観察表(1~18)	81~98
表 3	分析試料一覧	104
表 4	花粉分析結果	106
表 5	放射性年代測定結果	116
表 6	暦年校正結果	116
表 7	植物珪酸体分析結果	122
表 8	測定試料及び処理	129
表 9	放射性年代測定及び暦年校正結果	130

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版1	府中遺跡遠景(南西から) 調査地近景(南西から)
巻頭図版2	上08-4区 下08-5区、08-6区
巻頭図版3	上08-11区 下08-14b区
巻頭図版4	08-14区
巻頭図版5	08-8区(北西側)
巻頭図版6	08-8区(南東側)
巻頭図版7	出土縄文土器

図 版 目 次

図版表紙	08-4区03 S K出土縄文土器	図版13	上 08-2 c 区01 S K(南西から)
図版 1	上 08-4区03 S K北側検出時(西から)		中 08-2 c 区全景(北西から)
	中 08-4区03 S K北西側(北から)		下 08-2 c 区下層(南東から)
	下 08-4区03 S K北側土器検出状況(南東から)	図版14	上 08-3 a 区全景(南東から)
図版 2	上 07-1区全径(南東から)		中 08-3 a 区全景(南西から)
	中 07-1区01 S K(南西から)		下 08-3 b 区全景(南東から)
	下 07-1区01 S K(西から)	図版15	上 08-4区全景(北から)
図版 3	上 07-2区全景(南東から)		下 08-4区全景(南東から)
	中 07-2区全景(南から)	図版16	上 08-4区03 S K(西から)
	下 07-2区01 S E(南東から)		中 08-4区03 S K(西から)
図版 4	上 07-5区11 S D(南西から)		下 08-4区03 S K断面(南から)
	中 07-5区11 S D北東側土器出土状況(北東から)	図版17	上 08-4区03 S K北側(南西から)
	下 07-5区11 S D南西側土器出土状況(南西から)		中 08-4区03 S K北側(北西から)
図版 5	上 07-5区全景(南東から)		下 08-4区03 S K完掘時(南西から)
	下 07-5区全景(北から)	図版18	上 08-5区全景(北西から)
図版 6	上 07-6区全景(南東から)		中 08-5区02 S D(南西から)
	中 07-6 b 区全景(南東から)		下 08-5区01 S K(南西から)
	下 07-6 b 区03 S D(南西から)	図版19	上 08-5区02 S D下層(南西から)
図版 7	上 07-10区全景(南東から)		中 08-5区02 S D下層(北西から)
	下 07-10区ピット検出状況(北西から)		下 08-5区01 S K(西から)
図版 8	上 07-12区全景(南東から)	図版20	上 08-5 b 区全景(南東から)
	下 07-13区全景(南東から)		下 08-5 b 区03 S D(北東から)
図版 9	上 07-13 b 区(南東から)	図版21	上 08-6区全景(北西から)
	中 07-13 c 区全景(南東から)		中 08-6区壁際土器出土状況(北東から)
	下 07-13 c 区土坑(南西から)		下 08-6区包含層内土器出土状況(北西から)
図版10	上 08-1区全景(南東から)	図版22	上 08-7 a 区全景(南東から)
	下 08-1区遺物出土状況		下 08-7 b 区全景(北西から)
図版11	上 08-1 b 区11 N R(南東から)	図版23	上 08-7 c 区全景8北西から)
	下 08-1 b 区遺物検出状況(南西から)		下 08-7 d 区(第2面)全景(北西から)
図版12	上 08-2 b 区	図版24	08-8区全景(北西から)
	下 08-2 d 区		

図版25	上 08-8区01 S Z 南西周溝 (北西から)	図版37	縄文土器1
	下 08-8区01 S Z 南西周溝 (南東から)	図版38	縄文土器2
図版26	上 08-8区01 S Z 南西周溝 (南東から)	図版39	縄文土器3
	中 08-8区01 S Z 南西周溝 (北西から)	図版40	縄文土器4
	下 08-8区01 S Z 南西周溝土器出土状況 (南から)	図版41	縄文土器5
図版27	上 08-8区11 N R (北西から)	図版42	縄文土器6
	下 08-8区11 N R (南東から)	図版43	縄文土器7
図版28	上 08-8区02 N R 断面 (南西から)	図版44	縄文土器8
	下 08-8区02 N R 土器出土状況 (西から)	図版45	縄文土器9
図版29	上 08-11区全景 (南東から)	図版46	縄文土器10
	下 08-11区全景 (西から)	図版47	縄文土器11
図版30	上 08-11 c 区全景 (南東から)	図版48	縄文土器12
	下 08-11 c 区全景 (西から)	図版49	上 焼土塊 (縄文時代)
図版31	上 縄文土器出土状況 (南西から)		下 磨製石斧 (縄文時代)
	中 縄文土器出土状況 (南西から)	図版50	石器1
	下 縄文土器出土状況 (南西から)	図版51	石器2
図版32	上 08-11 c 区縄文時代面全景 (南から)	図版52	石器3
	下 08-11 c 区縄文時代面全景 (北西から)	図版53	石器4
図版33	上 08-14区全景上層の遺構 (南東から)	図版54	弥生土器1
	下 08-14区02 S D (東から)	図版55	弥生土器2
図版34	上 08-14区04 S K (南東から)	図版56	弥生土器3
	下 08-14 b 区03 S K (南東から)	図版57	弥生土器4
図版35	上 08-14 b 区全景 (南東から)	図版58	弥生土器5
	下 08-14 b 区全景 (北西から)	図版59	弥生土器6
図版36	上 08-14 b 区21 N R (南東から)	図版60	古墳時代前期土師器
	下 08-14 b 区41 S X (北西から)		

付 図

付図1	02-1区、02-4区、06-1区、08-1区、08-4区、08-11区平面図
付図2	02-2区、03-1区、03-2区、03-3区、07-12区、07-13区、08-2区、08-3区、08-11区、08-14区平面図
付図3	03-2区、03-3-4区、03-5区、03-6区、03-7区、05027区、07-10区、 07-13区、08-3区、08-7区、08-8区、08-11区、08-14区平面図
付図4	02-3区、03-7区、05027区、07-5区、07-6区、08-8区、08-5区、08-6区平面図

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査の経過

府中遺跡は和泉市府中町にあり、5町（約550m）四方と推定されている和泉国府跡を囲むように東西1km、南北0.9kmの範囲が設定されている。

都市計画道路和泉中央線は、和泉国府が府中に置かれていた時代、国府の外港である泉大津港と国府を結んでいた街道に由来し、中近世には小栗街道（熊野街道）と交差して国分峠を越えて東高野街道と結んでいた。現在の道路は、この街道の約100m南の里道が整備されたもので、昭和30年代までは府道富田林泉大津線と呼ばれていた。その後、平成4年（1992）に国道26号線と交わる穴田交差点から和歌山県有田市までが国道に昇格し、480号の番号が与えられている。

この道路の整備計画は、昭和41年（1966）に都市計画決定されていたが、具体化するのには、昭和50年代も末になってからである。

昭和59年（1984）、文化財保護課に大阪府土木部（現都市整備部）から、井ノ口交差点（現市役所北交差点）から和泉市民病院まで約210mを整備するため、埋蔵文化財の有無について問い合わせがあり、試掘調査を行った結果、遺構・遺物の存在が確認された。この結果に基づいて土木部と協議を行い、工事予定地全面の発掘調査を行うこととなり、昭和59年から60年にかけて発掘調査を実施した。また昭和61年から62年にかけて、南西側拡幅部の調査を実施している。

市役所北交差点から国道26号線まで約630m区間の拡幅計画が具体化したのは平成9年（1997）であるが、文化財保護課には平成12年に遺跡の有無について問い合わせがあり、府中遺跡と豊中遺跡、板原遺跡の3遺跡が工事予定地内に含まれていた。

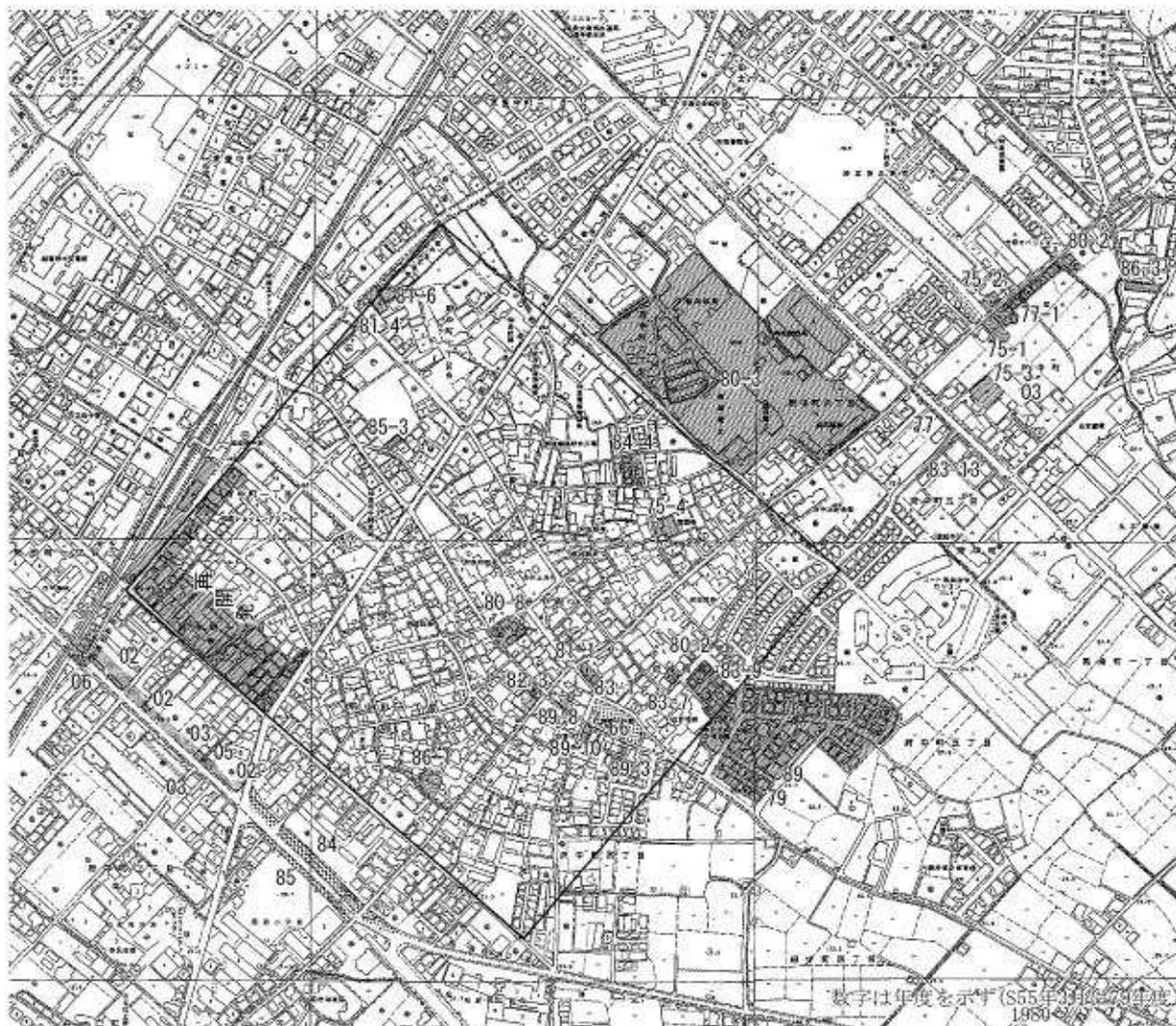
工事は道路幅を約10mから約30mに拡幅し、JR阪和線とアンダーパスで立体交差化するもので、現道路を延長約350mに渡って掘り下げる計画であったが、遺跡の状況を確認するため、まず試掘・確認調査を実施することとした。平成13年7月に実施した試掘調査で、工事区間の全域で遺構、遺物が確認され、発掘調査が必要であると判断された。

本調査は平成14年（2002）から平成21年（2009）まで毎年実施したが、市街地を通る幹線道路で、車両の通行を確保しながら発掘調査、道路工事を行うというものであった。また、工事は3つの工事区に分けて発注されたため、各施工業者が立てた工事計画を元に都市整備部道路課と3者で協議を行いながら、調査を実施せざるを得なかった。このため特に現道路部の調査は、迂回路を確保しながら実施することとなり、調査区が連続せず、細切れの調査となった。

調査が9年にわたり、担当者も多人数にのぼる。前回は平成14、15、17、18年に実施した府中遺跡の調査について報告したが、今回は平成19年度、20年度の府中遺跡の調査について報告する。豊中遺跡、板原遺跡については来年度以降に報告の予定である。

表1 都市計画道路和泉中央線関係発掘調査一覧

調査番号	調査地	現地調査期間	調査面積	概要報告等	発行年月	備考
	府中町3丁目	昭和59年11月5日～60年3月31日	2,415㎡	府中道路発掘調査概要	1985.3	
	府中町3丁目	昭和61年10月1日～昭和62年3月31日	300㎡	府中道路発掘調査概要・Ⅱ	1987.3	
1	01012 府中町1丁目・肥子町	平成13年7月9日	27㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報6	2003.3	試掘・確認調査
2	02020 府中町1丁目	平成14年7月15日～15年2月15日	1,748㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報7 府中道路	2004.3 2010.10	
3	03017 府中町1丁目	平成15年6月13日～15年11月28日	876㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報8 府中道路	2005.3 2010.10	
4	03020 肥子町	平成15年7月14日～17年3月31日	1,015㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報8	2005.3	
5	04017 肥子町	平成16年6月10日～17年3月31日	1,226㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報9	2005.11	
6	05027 府中町1丁目	平成17年7月14日～17年9月16日	165㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報10 府中道路	2008.9 2010.10	
7	05037 肥子町	平成17年8月24日～17年10月12日	140㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報10	2008.9	
8	06017 府中町1丁目・肥子町	平成18年11月1日～19年3月23日	960㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報11 府中道路	2007.11 2010.10	
9	07001 府中町1丁目・肥子町	平成19年4月9日～20年3月10日	800㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報12	2008.11	
10	08002 府中町1丁目・肥子町	平成20年4月3日～21年2月28日	2,000㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報13	2009.11	
11	09004 府中町1丁目・肥子町	平成21年5月20日～21年9月30日	850㎡	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報14	2010.11	



第1図 これまでの主な調査地点（再開発と枝番号は和泉市調査地点）

第2節 調査の方法

今回の調査は慢性的に渋滞している都市計画道路和泉中央線を拡幅し、JR阪和線とアンダーパスで立体交差化するためのものである。和泉市の玄関である和泉府中駅に近く、近辺に大型車の通行できる代替道路がないことから、車両の通行を確保しながら調査を進めざるを得ず、調査は、道路整備事業者の大阪府都市整備部や施工業者と意見を交換しながら実施した。

調査区名

2007、2008年に実施した調査区は、民家の出入り口や建物に接し、道路に沿って用水路も通っていたことから、適当な土留め措置を講ずることができず、調査当日に埋戻まで完了することが絶対条件となる調査区もあった。このため、特に南側拡幅部は小規模な調査を積み重ねざるを得なかった。

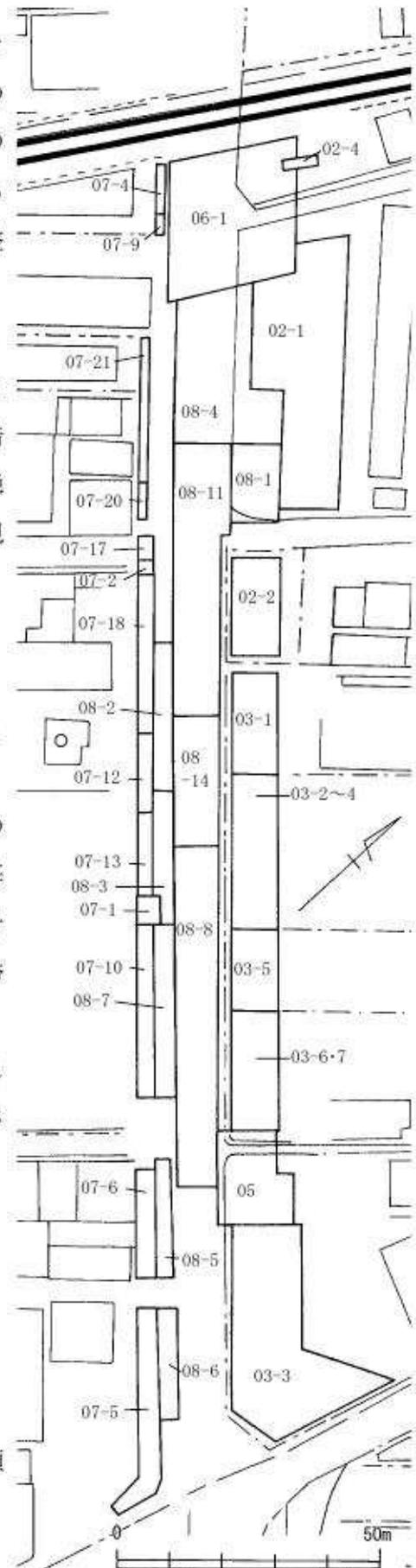
調査区の番号は、西暦年度に調査区番号を組み合わせた07-1区と表示し、連続する調査区や分割調査した調査区はアルファベットの小文字でa、b、cの小番号をつけ、075b区のように表示した。ただし、記述に支障のないものは小番号を省いている。遺構番号は各調査区毎に1から順に番号をつけて作業を行ったので、この番号を極力踏襲した。しかし、小番号を付した調査区毎に1から番号をつけた所もあったので、これについては遺構番号を変更し、調査区毎の通し番号とした。また、複数の調査区に跨がる遺構も同番号に変更した。

遺構記号は平城宮跡で使用され、その後、平成22年に纏められた「発掘調査の手引き」（文化庁文化財記念物課発行）で紹介されている遺構記号に準拠した。

本書で使用した記号は

SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑、貯蔵穴）、SP（ピット、柱穴）、SU（遺物集積）SX（その他、本書では炉跡に使用）、SZ（方形周溝墓）、NR（河川）
などである。

遺構番号は、調査年次、調査区番号、遺構番号、遺構記号の順で、08-8区02NRのように記述した。



第2図 調査区位置図

第2章 立地と環境

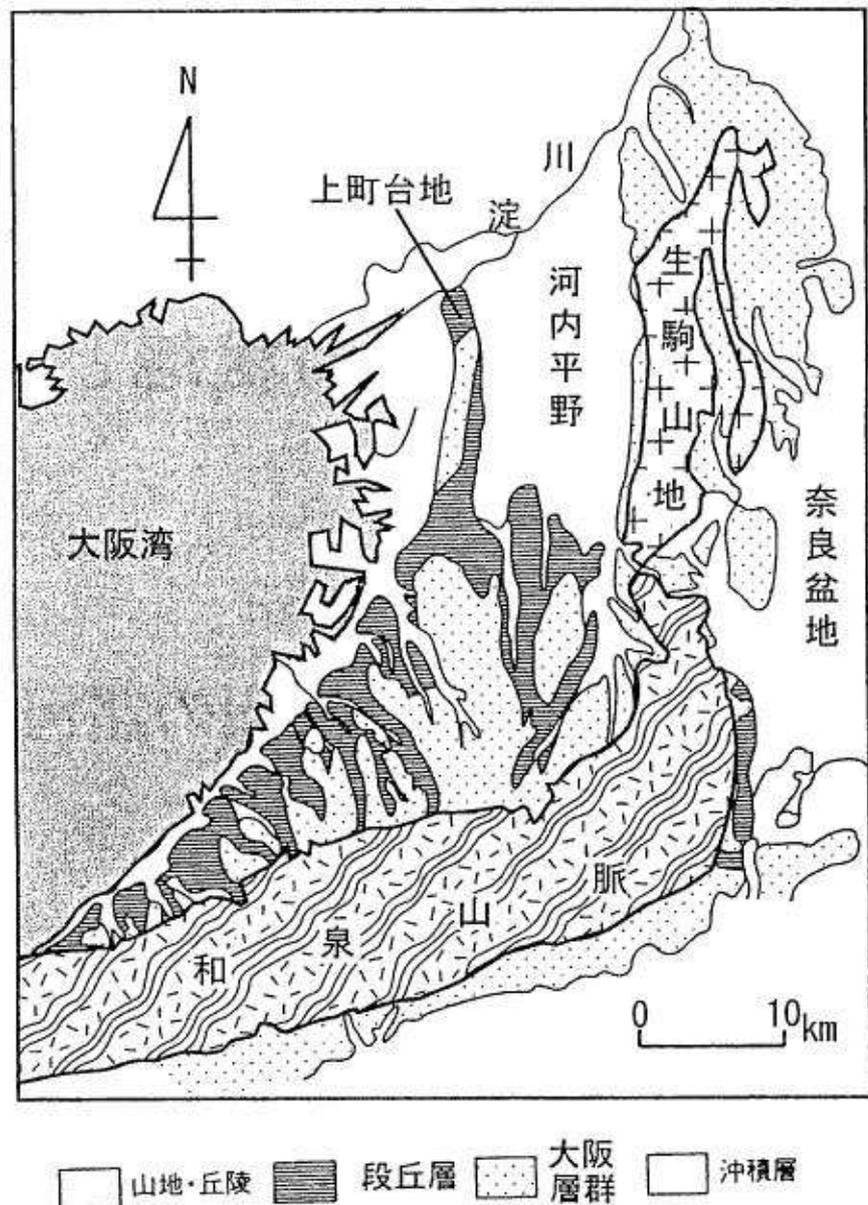
第1節 地理的環境

和泉地域は、標高886mの三国山を最高峰とする和泉山脈が、858mの和泉葛城山、625mの高城山と北東から南西に高度を下げて連なり、大阪府と和歌山県を分ける行政界となっている。この山脈は白亜紀頃に礫岩や砂岩、泥岩等が交互に堆積して形成された堆積岩からなる和泉層群と呼ばれる地層で構成されている。山脈の大阪府側は領家花崗岩からなる標高200～300mの前山を造り出している。前山の大阪湾側は標高50～60mの丘陵地帯で、鮮新統から更新統（約500万～1万年前）に堆積した大阪層群と呼ばれる粘土や砂礫が交互の堆積した地層で構成されており、槇尾川や父鬼川など、和泉山脈に源流を持つ河川が小谷を刻んでいる。

府中遺跡が所在する地域は、標高50m付近を頂部とする低位段丘面で、槇尾川や牛滝川などの河川が形成した扇状地が段丘化したものとされており、和泉山脈や信太山丘陵を供給源とする砂岩や泥岩で構成されている。

低位段丘面の前面にある沖積平野の発達は弱く、槇尾川（大津川）や男里川の河口部にみられる程度である。

沖積平野の前面には上町台地の基部から加太まで約50kmの海岸線に沿って砂堆面が形成されていたが、昭和30年代後半からの沿岸部開発で姿を消してしまった。



第3図 和泉地域の地質図（「泉大津市史」より転載）

第2節 歴史的環境

府中遺跡が立地する標高50～10mまでの中位～低位段丘面は、海岸線に向かってなだらかに傾斜している。和泉山脈やその前庭部の山丘部を源流とする河川は、現代では流路を固定され、段丘を深く浸食しているが、元々は段丘面を縦横に流れて大阪湾に注いでおり、その河川沿いや伏流水が噴出するような所に多くの遺跡が立地している。

和泉地域で旧石器時代の遺跡は少なく、堺市の野々井遺跡で国府型より古い要素を持つ石核が出土しているほか、和泉市の観音寺山遺跡、大床遺跡、高石市の大園遺跡や岸和田市の山直北遺跡、遺跡ではないが和泉葛城山山頂付近で、国府型ナイフが出土している程度である。

旧石器時代末から縄文時代早期にかけてのものとしては、土器を伴っていないが、大園遺跡で12点の有舌尖頭器が出土しているほか、10箇所以上で有舌尖頭器の出土が報告されている。なかでも野々井遺跡ではチャート製のものが出土しており、サヌカイト製以外の石器使用として注目される。

縄文時代早期として、和泉市域では府中遺跡と同じ横尾川水系の低位段丘面上に立地する池田寺遺跡で押形文土器、山間部に近い中位段丘上に立地する仏並遺跡でも条痕調整を施す早期末から前期初めに位置づけられる土器が出土している。堺市域でも小阪遺跡、太平寺遺跡でこの時期の土器が出土している。

縄文時代前期では、北白川下層式の土器が太平寺遺跡や小阪遺跡、大歳山式土器が平井遺跡、小阪遺跡などで出土している。

このように、和泉地域では縄文時代早期から前期の遺物が出土する遺跡は少ないが、中期以降、遺物が出土する遺跡は増加する。泉州北部では、平井遺跡、小阪遺跡、太平寺遺跡で引き続き中期の土器が出土している。泉州中央部の府中遺跡や隣接する板原遺跡、豊中遺跡で中期の土器が出土しているほか、春木川河口近くの砂州上に立地する春木八幡山遺跡は中期から晩期までの土器が出土しており和泉地域の縄文遺跡として著名である。また横尾川水系の牛滝川沿いに立地する箕土路遺跡では鷹鳥式土器、和泉葛城山山頂部でも中期前半の船元式土器が出土している。

中期末以降、土器を出土する遺跡は急激に増加する。府中遺跡では中期末に位置づけられる北白川C式土器が多数出土しているほか、後期や晩期の土器が出土しており、中期以降集落が継続して営まれていた。また、横尾川流域の池田寺遺跡や万町北遺跡、牛滝川流域の軽部池西遺跡、小田遺跡、山ノ内遺跡、山直中遺跡などで後期の土器が出土している。先に挙げた仏並遺跡では中期末から後期にかけて5棟の竪穴住居跡や土坑などの遺構と多数の土器と共に土製仮面が出土している。一方泉南地域でも向田遺跡や淡輪遺跡で竪穴住居跡が検出されているほか、泉州北部の四つ池遺跡でもこの時期の竪穴住居が出土している。

縄文時代晩期前半の土器が出土する遺跡は少ないが、府中遺跡でこの時期の土器を多量に含む河道が検出されている。晩期後半になると府中遺跡をはじめ、万町北遺跡、春木八幡山、四つ池遺跡、小阪遺跡、西浦橋遺跡、鈴の宮遺跡などで突帯文土器が出土しているが、大津川に流入す

る和田川流域の西浦橋遺跡では土坑墓群が検出されている。

弥生時代に入ると、堺市の四ツ池遺跡や泉佐野市の船岡山遺跡など、縄文晩期の突帯文土器と弥生前期の土器が共伴する遺跡が見られる。本遺跡の西に位置する泉大津市の虫取遺跡や泉南市の男里遺跡では晩期の突帯文土器と前期後葉の土器が出土しているが、時期的な隔たりが大きく、評価が難しい。池浦遺跡では前期中葉の溝が確認されており、泉大津市・和泉市域で最初に集落が営まれた所であるが、中期には続かず、短期間で廃絶したと考えられている。この他にも、岸和田市の春木八幡山遺跡でも前期中頃の土器が出土している。前期後葉後頃には池浦遺跡の直ぐ東に池上曾根遺跡が形成され、南北250m、東西180mの環濠で囲まれた面積約30000㎡の集落が形成される。

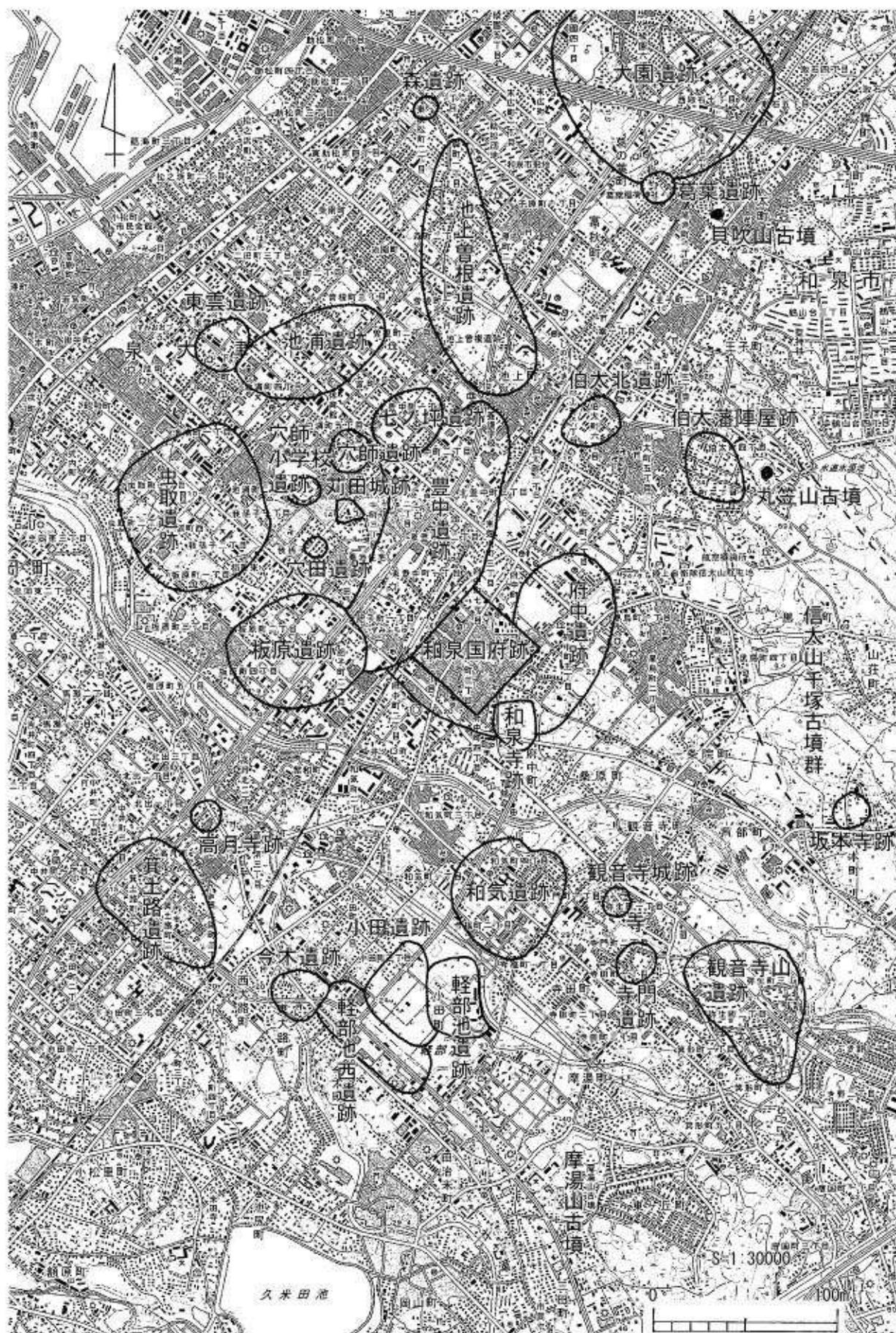
中期にはいると、池上曾根遺跡では、南北約310m、東西約250mの環濠が掘削され、面積約56000㎡の和泉地域中央部の拠点的な集落に発展し、中期後半まで盛行する。池上曾根遺跡の周辺でも、中期には横尾川右岸側に立地する府中遺跡でも集落が成立し、数ヶ所で竪穴住居跡や墓が検出されている。池上曾根遺跡のように、集落を囲む環濠は確認されていないので、集落規模は不明である。府中遺跡の近辺では虫取遺跡、横尾川中流では和気遺跡、池田寺遺跡や万町北遺跡、軽部池遺跡、池田下遺跡などで竪穴住居跡などの遺構が検出されている。一方、北の石津川流域の台地に立地する四ツ池遺跡でも環濠が確認されている。

一方横尾川の支流で南から北西流して横尾川（大津川）に合流する松尾川や牛滝川流域では田治米遺跡や下池田遺跡、大町遺跡のほか、春木八幡山遺跡、栄の池遺跡、田治米菅原神社遺跡、箕土路遺跡、春木八幡山遺跡、軽部池西遺跡等で遺構や遺物が見つかっており、低位段丘面の小河川沿いに多数の集落が立地している。

弥生時代後期に入ると、横尾川を見下ろす標高50～70mの丘陵上に観音寺遺跡などの高地性集落が形成されるが、府中遺跡や万町北遺跡では後期の竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、平地でも中期から継続して集落が営まれていた。しかし、中期の拠点集落である池上曾根遺跡では、環濠は維持されなくなり、大規模な建物も廃絶する。

古墳時代では、前期に本遺跡の南西約3キロ、松尾川の支流である牛滝川を見下ろす久米田丘陵に築造された墳丘長約130mの前方後円墳である久米田貝吹山古墳、北東約4.5キロの信太山丘陵の西北端に墳丘長約94mの和泉黄金塚古墳や丸笠山古墳、牛滝川と松尾川に挟まれた東山丘陵の先端近くに墳丘長約200mの摩湯山古墳や墳長径約43mの方墳である馬子塚が築造される。なかでも和泉黄金塚古墳は3基の粘土槨が検出され、その1基から「景初三年」銘の神獸鏡が出土したことで著名である。

古墳時代中期以降は信太山丘陵には信太貝吹山古墳やカニヤ塚古墳、鍋塚古墳、玉塚古墳、狐塚古墳といった円墳や帆立貝形古墳屋80基以上の古墳からなる信太山古墳群が6世紀まで続いて築造される。一方、牛滝川左岸の久米田丘陵でも久米田古墳群として括られる風吹山古墳や無名塚古墳、光明塚古墳、長坂古墳など10数基の古墳が相次いで築造される。



第4図 府中遺跡周辺の主な遺跡

集落に目を移すと、府中遺跡や北に接する豊中遺跡、板原遺跡、和気遺跡では弥生時代後期から古墳時代を通じて集落が営まれる。本遺跡の北西に接する豊中遺跡では古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物跡、溝が検出されている。

横尾川右岸の低位段丘末端部に立地する七ノ坪遺跡では古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物、木棺墓や水田跡が検出されている。貝吹山古墳に近い大園遺跡は古墳時代中期の掘立柱建物のみで構成される集落として著名である。万町北遺跡では古墳時代の竪穴式住居90棟、掘立柱建物が約30棟見つかり、横尾川中流を支配した豪族の集落と考えられている。

奈良時代に入ると、霊亀2年（716）に和泉監が置かれ、大鳥、和泉、日根の3郡がこの配下にはいるが、天平2年（740）には再び河内国に統合される。その後、天平宝字元年（757）にあらためて和泉国が設置され、国府は国名の謂われとされる「和泉の清水」を祀る泉井上神社を含む和泉府中駅南東に置かれたと考えられている。

古代の寺院は、国分寺建立の詔が發布された時期は河内国に含まれていて国分寺は建立されず、平安時代になって、和泉郡の安楽寺が国分寺に指定される。この他和泉国で約30ヶ寺が知られているが、横尾川流域では、茅渟県主が建立氏族と考えられる和泉寺跡、坂本臣の氏寺とされる坂本郷に所在する坂本寺跡、池田郷に所在し池田首が建立氏族とされる池田寺跡の4か寺が知られている。この他、和泉郡内には、信太郷に所在する信太首の信太寺跡のほか木嶋郷（現貝塚市）の秦廃寺、八木郷（岸和田市）の小松里廃寺、神守郷掃守郷（同）の春木廃寺、別所廃寺、山直郷の田治米廃寺などがある。このほか、行基が関わったとされる49院のうち、和泉国に10院が所在している。また、和泉国では網曳御厨が置かれ、内膳司に魚介類を貢納していた。所在地は詳らかではないが、府中に近い泉大津市の我孫子付近が有力とされている。

和泉地域の条里に目を移すと、大鳥郡内では、石津川の中下流で、河道方向に沿った条里地割りを観察できるが、和泉郡では横尾川（大津川）下流で海岸線を基線とする条里地割りが横尾川や松尾川の中流まで観察できる。

平安時代の永承年間の太政官符では和泉国内に45カ所の庄園があったとされ、和泉郡内でも王家領の宇多庄、摂関家領の大泉庄、春日社領の春木庄、石清水領の蜂田庄などが知られる。また、重源による開発伝承を持つ谷山池や有力名主によって開発された梨子本池など溜池開発も盛んであったが、国衙の膝下にあったためか郡内10郷の大半の郷は平安、鎌倉時代を通じて公領と荘園が混在している。

参考文献

- 泉大津市史第1巻上 本文篇1 泉大津市史篇さん委員会 2004
古代和泉郡の歴史的展開 和泉市史紀要第11集 和泉市史篇さん委員会 2006
弥生創世記 - 検証縄文から弥生へ - 大阪府立弥生文化博物館 2003
和泉黄金塚古墳とその時代展 - 古墳と首長居館のすがた 和泉市いずみの国歴史館2001他

第3章 調査結果

第1節 基本層序

調査は道路の拡幅、アンダーパス化工事に伴うもので、北西から南東へ距離は約250mを測る。アンダーパス化される約200mの現道路部分は長さ約15～50mの間で7回に分けて調査を行ったが、埋管などで攪乱されている所が多かった。また、断面図を作成した北壁で08-8区、08-14区は、河道11NRの縦断面にあたるため割愛した。一方、南西拡幅部は道路に沿って設置されている用水路で攪乱されている所が多く、連続した断面図を作成できなかった。本節では西北端の06-1区に東接し、良好な断面図を作成できた08-4区、調査区横断面を作成した08-8区東壁、東南端の07-5区の3カ所に分けて記述する。

08-4区

0層 盛土

1・2層 旧耕土、床土

3・4・5・16層 灰黄褐色～黄橙色粘質土 古墳時代以降の遺物包含層や遺構埋土で、上面で中近世の遺構や耕作溝が検出される。

17～21層 古墳時代の河道堆積層で、主に粗砂～砂質土が堆積している。

6・7・10層 6層の黄灰色粘質土上面は弥生時代後期から古墳時代の遺構検出面である。

また、量は少ないが層内に縄文時代中期末から後期の土器を含んでいる。この下に堆積する7層以下の各層は縄文時代の遺物包含層で、縄文時代中期末頃の土器片が部分的に数片～10数片、纏まって出土する所と、1、2片ずつ散在して出土するところがある。遺物の出土状態や、土層中に炭や炭化物の細粒を多く含んでいることから、遺構も存在すると思われ、10cm程度掘り下げて精査を繰り返したが、貯蔵穴と08-11区、08-14区のピット、焼土塊を含む浅い土坑を除いて遺構を認識することはできなかった。

8層 灰黄褐色シルト質土で、貯蔵穴04SKはこの面で確認した。この層内でも中期の土器が出土するが、量は少ない。08-11区、08-14区では8層の灰黄褐色シルト質土で柱穴や土坑が検出される。

08-8区

東西約50mの調査区であるが、前述のように北側は11NRの河道堆積層で基本層序とは異なるので、現道路部の南東端の断面を示す。幹線道路で敷設工事の際、鍵層となる旧耕作土は除去されていたが、隣接する02020-3区の耕土層レベルはT.P.18.7m前後であった。

1・2層 黄橙色砂質土、灰白色粘土 弥生時代の遺構検出面である。粘土質のためか方形周溝墓を除いて遺構は見つからなかった。約100m北側と50m南側で実施された和泉市の調査では

竪穴住居跡が検出されており、調査地が埋没河川の影響で周囲よりやや低く、土壤の含水率も高かったため、居住域には適さなかったと考えられる。

3、5層 黄灰色シルト、黄灰色土縄文時代後期から晩期頃に形成された土壤である。出土する土器の量は少なく、細片が多い。

4層から6層へは暫移的に変化しており、4層は6層が酸化した土壤であろうか。土壤もシルト質土から微砂質土に徐々に変化する。遺物は出土しなかった。

07-5区

最も東南の市役所北交差点南西角の調査区である。

耕作土の上に盛土して店舗が建設されていたので、旧耕土以下、良好に残っていた。

現況は地表面がT.P.20.00m前後、旧耕土はT.P.19.4m前後である。

2層 明黄褐色土水田開発時の客土であろう。

7層、13層 褐灰色粘質土でマンガンが沈着する。この上面でピット列が検出されている。遺物は出土していないが古墳時代以降のものである。

12層 砂礫を混じりの褐灰色粘質土でやや暗い。弥生土器を含んでいる。

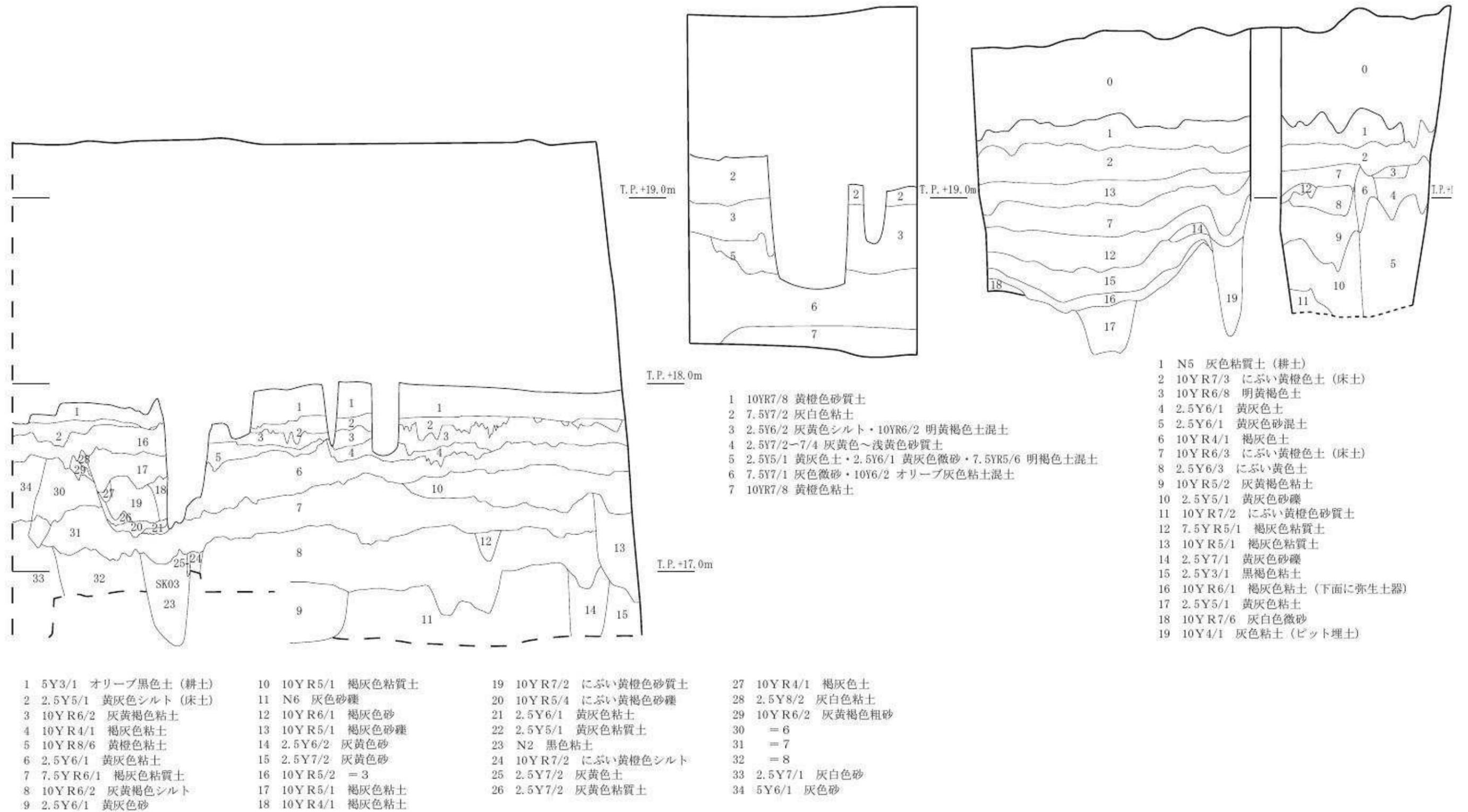
15層 径5cmまでの砂礫を含む黒褐色粘質土で弥生時代の遺物包含層である。

16層 褐灰色粘土はやや明るく、弥生土器を多く含んでいる。

17層 谷状に浅く窪んだ所に堆積した土粘土で、弥生時代中期の土器と縄文時代晩期の土器が出土している。

10層 弥生時代の上面遺構検出面で、砂礫を多く含んでいる。

4層、5層は野井戸埋土で、上流に溜池が開発され、用水路が敷設されたため、廃棄されたのであろう。川砂で遺物は出土しなかった。豊中遺跡でも肥子池築造前の野井戸を数カ所で検出しており近世のものである。この井戸も同時代のものであろう。



第5図 07-21区・08-4区・08-8区・07-5区断面図

第2節 中近世の遺構

今回の調査地は東南端でT.P.20m、約250m離れたJ R線傍の西北端でT.P.18.5mを測り、海岸方向に緩く傾斜している。市街化される前は海岸線を基準とする条里地割りに基づいて方形に区画された耕作地で、道路建設時に耕土から約1m盛土されている。中近世の遺構は耕作土を除去した面で検出されるが、攪乱されているところが多い。検出した調査区は少なく、西端の07-2区、08-14区のみであった。

07-2区はJ R阪和線の南東90mの所で、管路の到達孔部分にあたる約4m×2.5の調査区である。道路南西側の用水路下に敷かれていた碎石層を除去したT.P.17.67mの高さで井戸を確認した。08-14 b区は東西約250mを測る調査地のほぼ中央の現道路部分である。

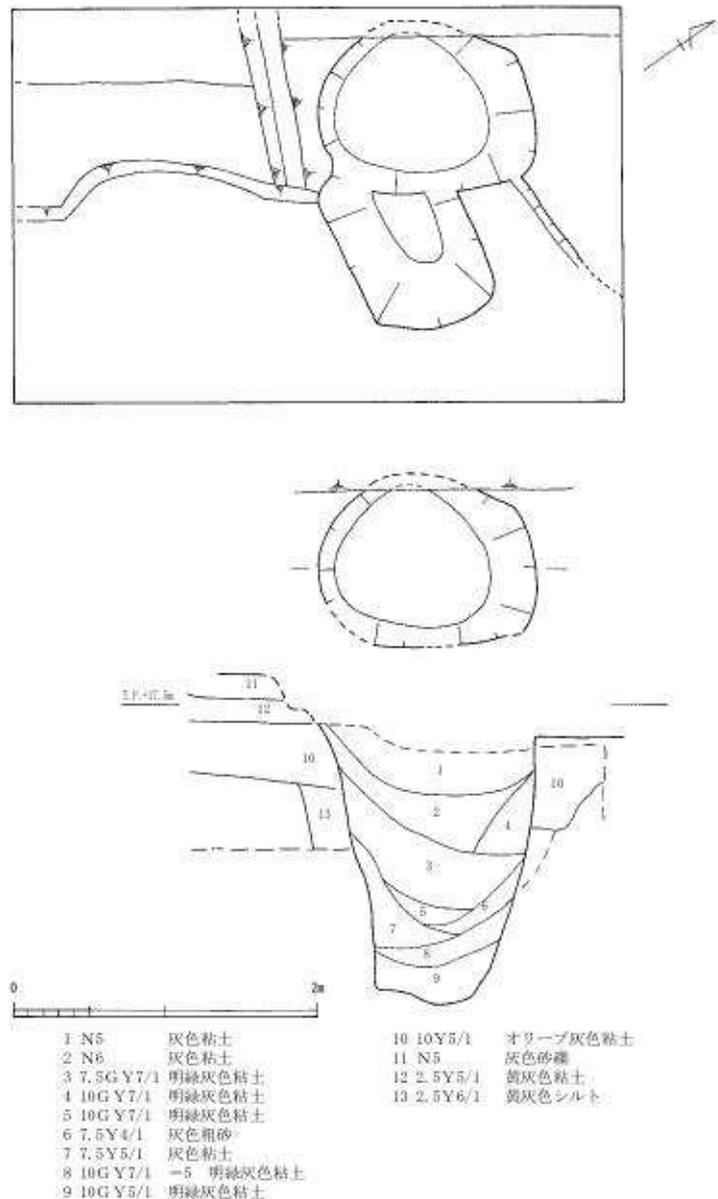
07-2区01 S E

調査区の北側で検出した素掘りの井戸である。北西は調査区外であるが、平面は楕円形で長径1.4m、短径は1.2m前後と考えられる。調査区が小さく、畦を残して井戸内部だけを掘削するのが困難だったため、東側を鋼矢板まで地山も掘削し、遺物を探した。検出面からの深さは約1.95mで、底面は中央のやや北寄り少し深かった。

埋土は上から灰色粗砂混シルト層、灰色砂礫混じり微砂、黄灰色粘土で、下層は、木片が混ざった黄灰色粘質シルトや灰色砂礫であった。6層から瓦器の細片が出土した。図化できなかったが鎌倉時代のものである。府中遺跡や豊中遺跡、板原遺跡では鎌倉時代頃の井戸は羽釜や曲物を井戸枠として利用することが多いが、この井戸は素掘りであった。

08-14区25 S E

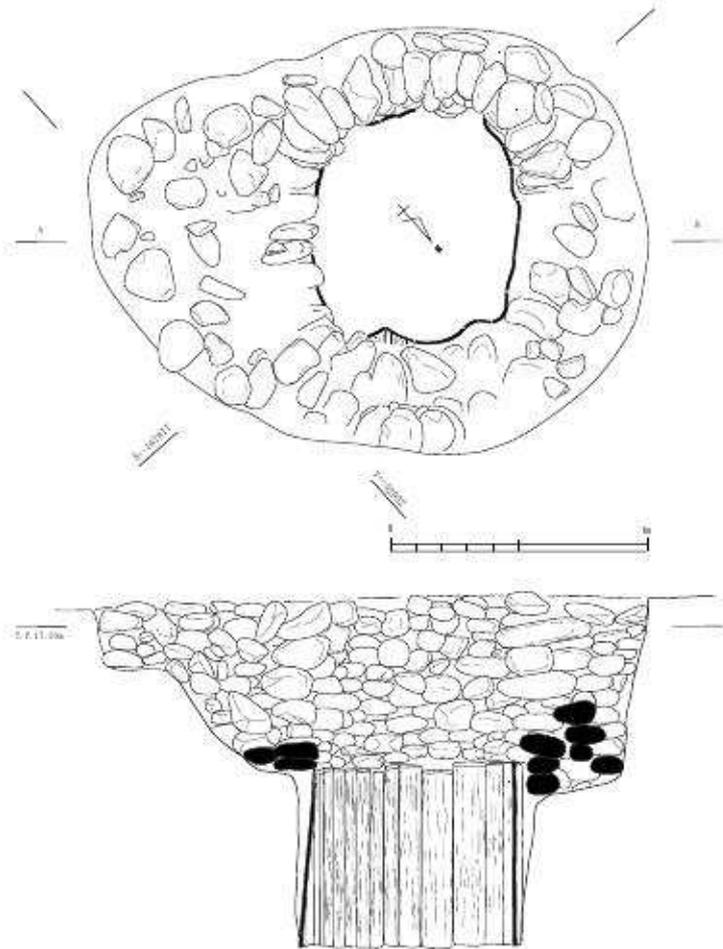
調査区の南東隅、弥生時代の河道11N Rの西側で検出した井戸で



第6図 07-2区01 S E平面図、断面図

ある。井戸の平面は卵形の楕円形で、長径2.14m、短径1.65mを測る。井戸は長さ約60cm（2尺か）、幅10～15cm、厚さ約1.2cmの樽に使用されたと思われる杉か檜板を縦に浅く打ち込み、上面の高さを揃え、その上に10～20cm程度の丸みを持った川原石を6～8段程度積み重ねた石組み井戸である。

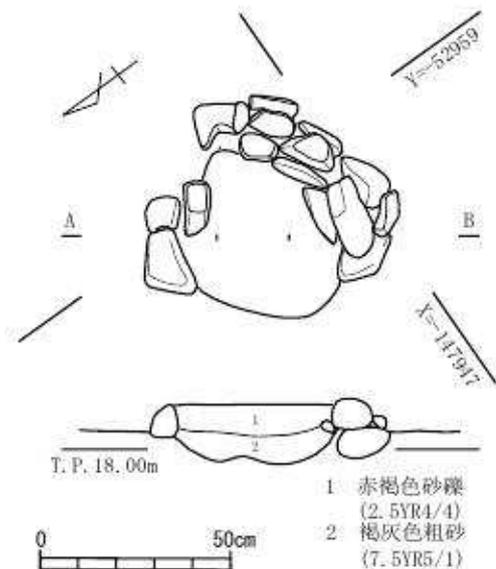
検出時に板材は内側に傾き、腹部がやや迫り出していた。また、積石はおそらく廃棄時に崩して井戸内に投入されたとみられ、枠内から川原石が出土している。井戸の調査時北東側は河道11NRを底まで掘り下げていたので、井戸底は11NRより高かったが、調査時でも湧水があり、一晩で0.3m近く溜まるほどであった。積石や井戸枠内から近世頃の瓦片が出土している。



第7図 08-14b区25SE平断面図

08-14区04SK

調査区の北西端、 $X = -147847\text{m}$ 、 $Y = -52959\text{m}$ で検出した石組み遺構である。直径 $0.4\text{m} \times 0.45\text{m}$ 、深さ 0.1m を測る楕円形土坑の周りに、径 $10 \sim 20\text{cm}$ の川原石を2～3段程度重ねた遺構である。積石は西側しか残っていなかったが、東側は地山の褐灰色粗砂が配石の影響で浅く窪み、泥土が充填していた。土坑の周囲に窪みに合う川原石は見当たらなかった。砂層を浅く掘り窪めており、炭は残存していなかったが石組みの炉使用されたのではないかと考えている。遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、中世以降のものである。



第8図 08-14区04SK平断面図

第3節 古墳時代の遺構

今回の調査区や北東に隣接する和泉国府跡で、平安時代や奈良時代の国府が設置されていたであろう時代の遺構は、泉井上神社の東約100mの御館山と呼ばれる字名が残る地区の調査で、掘立柱建物跡や奈良時代の須恵器、須恵質の土馬が検出されている。しかし、掘立柱建物跡は奈良平安時代の官衙の建物としては貧弱である。この他に国衙に関連する遺構はまだ見つかっていない。中世後半以降、特に近世には全国的にも屈指の密度で溜池を築造し、新田が開発されている。この新田開発時に削平され水田化されたとする説もあるが、奈良、平安時代の纏まった遺構が見つからないことから、国衙所在地も再検討の余地を残している。

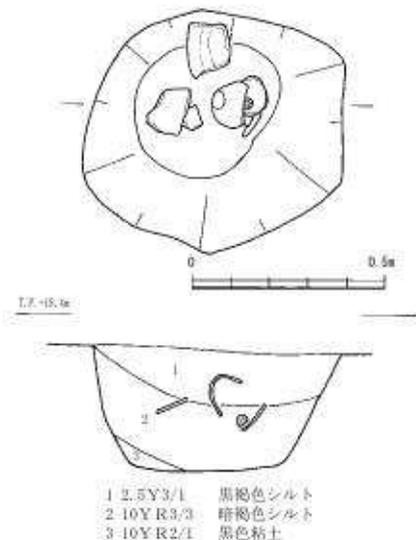
古墳時代の遺構も、須恵器を伴う中・後期のものは確認されなかった。主に古墳時代初頭から前期の遺構が検出された。

07-12区、08-2区

南西拡幅部、用水路下の調査区で、座標値はX = -167870m、Y = -52940mを付近である。この調査区では土坑と河道を検出した。08-2区は民家の出入り口があり、当日中に埋め戻すため約5mずつ4回に分けて調査を実施した。

08-2c区01SK

08-2区の3番目のトレンチ、2c区で検出した土坑である。用水路下面の碎石と泥土を除去したT.P.18.3m前後の高さで検出した03NRに土砂が埋積し、ほぼ平坦になった後に掘られた土坑で、平面は五角形に近い方形である。長径0.65m、短径0.6m、深さ0.3mを測る。埋土は上層が黒褐色砂質シルト、下層が暗褐色粘質シルト、黒色粘土である。土坑の中層から上層で、古墳時代初めの小型丸底壺や甕、高坏が出土している。



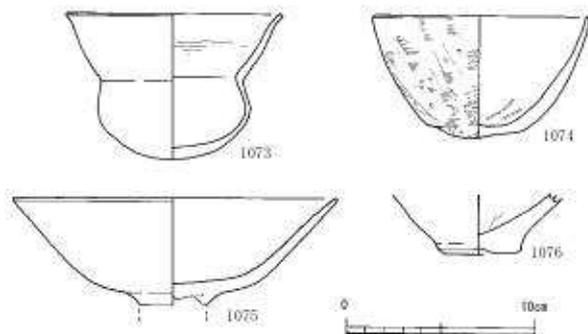
第9図 08-2c区01SK平面・断面図

08-2c区02SP

01SPの東側で検出したピットである。直径0.15m、深さ0.17mを測る。埋土は灰色粘質土であった。

出土土器

1073は小型丸底壺、口縁部はやや屈曲気味に立ち上がる。頸部のナデは弱い。口径11.6cm、腹径8.0cm、器高7.8cm。1075は高坏の杯部、短く水平に開く杯部に斜めに開いて立ち上がる口縁部をつくる。口縁端部は丸く収まる。胎土は赤褐色である。1074は鉢、底部は

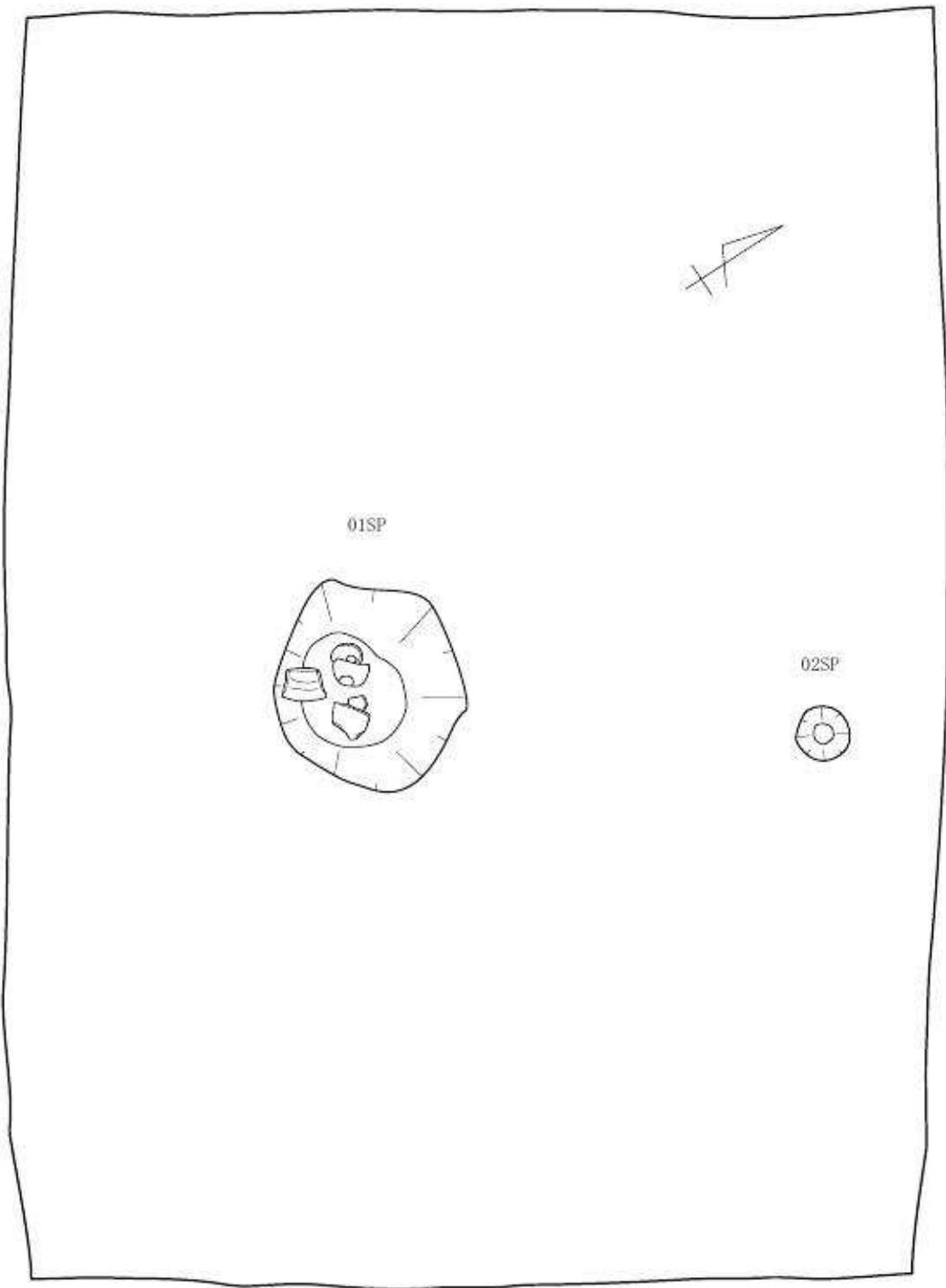


第10図 08-2区01SP出土土器実測図

X=167870

Y=52945

Y=52945



第11图 08-2c区平面图

底面をヘラケズリしており、不安定な平底で、内彎気味に立ち上がる口縁部をつくる。厚みをもった器壁で、外面はタタキで調整する。1076は壺の底部。

08-2区03N R

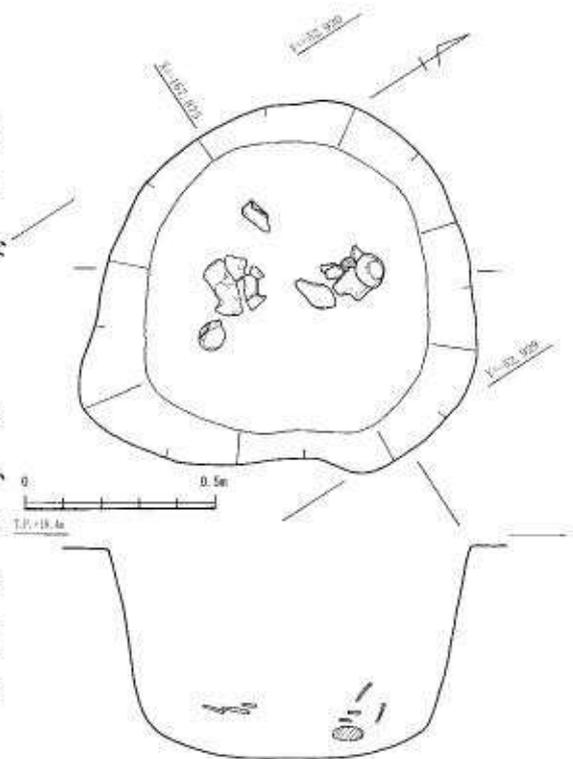
03N Rは調査区を東から西へ流れる、幅約2.1～2.9m、深さ約0.6mを測る流路である。南東側は傾斜が緩やか段状になり地山を削っている。埋土は礫を多く含む灰白色砂で、遺物は出土していないが、隣接する08-11区、08-14区の河川の検出状況から古墳時代前期頃の短期間に流れていた河道であろう。

07-12区01 S P

08-2区01 S Pの約11西で検出したほぼ正方形の土坑で、長さは0.6m、深さは0.4mを測る。埋土は褐灰色シルト質土、灰色シルトで、遺物は出土しなかった。調査区が細長く、隣接する08-2a区では土坑やピットを確認できなかった。

08-11・14b区01 S D (付図)

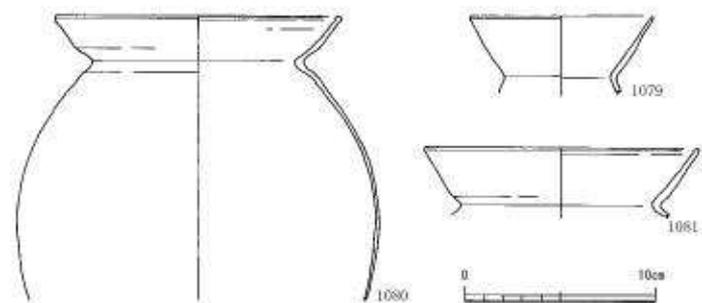
01 S Dは、03-1区調査で、河川11N Rの左岸側で検出した流路に続くものである。03年調査では河道の肩部が浅く扶られ、西側に深くなっていくことを確認していたが、調査範囲内に長さ約1mしか入らなかったため、人工の溝か河道か判断できなかった。08-11区の調査で、この遺構が溝で、等高線に沿ってやや北に振りながら西流することがわかった。溝の幅は、検出面が攪乱され正確さを欠くが、幅2.5m、深さは1.0mを測る。今回、調査区が埋設物で攪乱され、溝に直行する断面は作成できなかったので、北壁断面を掲載した。埋土は黒褐色シルトや砂、粘質土で、埋土内から弥生中期から後期の土器と古墳時代前期の土器が出土した。



第12図 08-14b区03S K平面・断面図

08-14b区03S K

河道11N Rの左岸肩近く、X = -167 875m、Y = -52930m付近で検出した隅丸三角形に近い形状の土坑で、東西径1.0m、南北径1.1m、深さは0.58mを測る。埋土は上から褐灰色砂質シルト、黒褐色シルト、黄灰色粘質シルト、オリーブ黒色粘質シルトであった。土坑の中層で、小型丸底壺や甕の破片が出



第13図 08-14b区03S K出土土器実測図

土した。

1079は小型丸底壺の口縁部。口縁部は高さ1.6cm、口径4.8cmを測る。頸部を強くナデて屈曲させる。1080、1081は甕、口縁端部の内面肥厚は小さい。頸部を強くナデて屈曲させる。1080は胴部が摩耗してハケメが微かにしか観察できない。

08-11区、08-14区の遺構

08-11区08 S Kは08-11区21 N Rの南側、X = -167862m、Y = -52942m付近で検出した浅い楕円形土坑で、長径1.45m、短径0.60m、深さは0.12mを測る。埋土は灰色～黄灰色の砂質土であった。遺物は出土しなかったが古墳時代の遺構であろう。

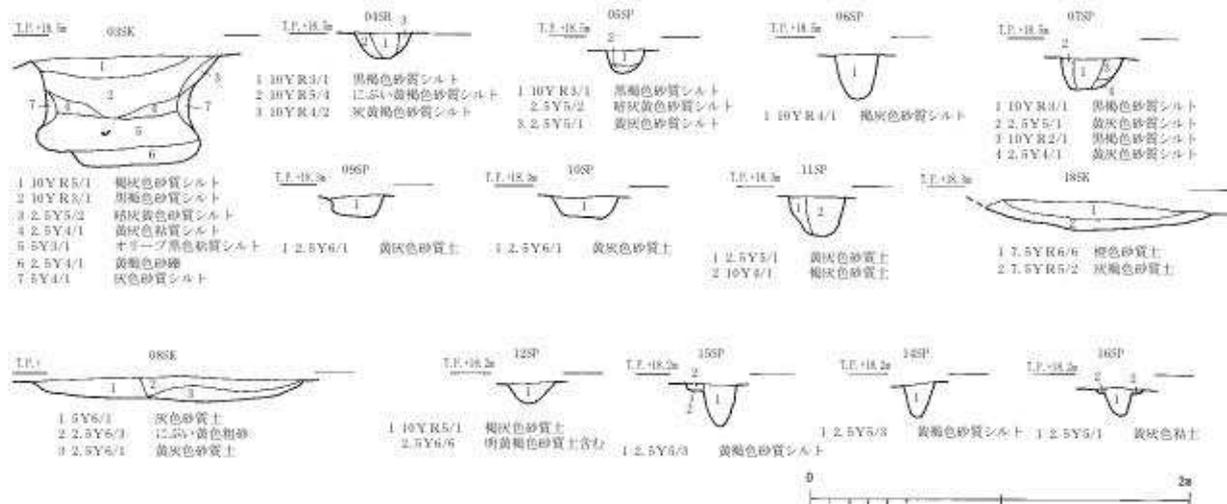
08-14区では03 S Kの南側で6カ所、21 N R周辺で12カ所のピット、土坑を検出した。14～16 S Pは約2m間隔で並び、直径約0.2m、深さ0.1前後を測る。埋土は黄灰色粘土や黄褐色砂質シルトであった。いずれのピットも掘形は歪つな円形で浅く、滲みに近い。

08-14 b 区-21 N Rは調査区北西部で検出した河道で、03年度もこの河道と思われる砂礫層を検出していた。北東-南西から調査区内で、調査区中央、X = -167860m、Y = -52940m付近でほぼ直角に曲がり、海方向に流路を変え、X = -167847m付近で浅くなっている。この河道の海側は粗砂層が0.2m前後の厚さで堆積しており、また、左岸側はさら西南方向に延びて、ヘアーピン状に180°近く屈曲していた。この部分の埋土は締まった粗砂であった。

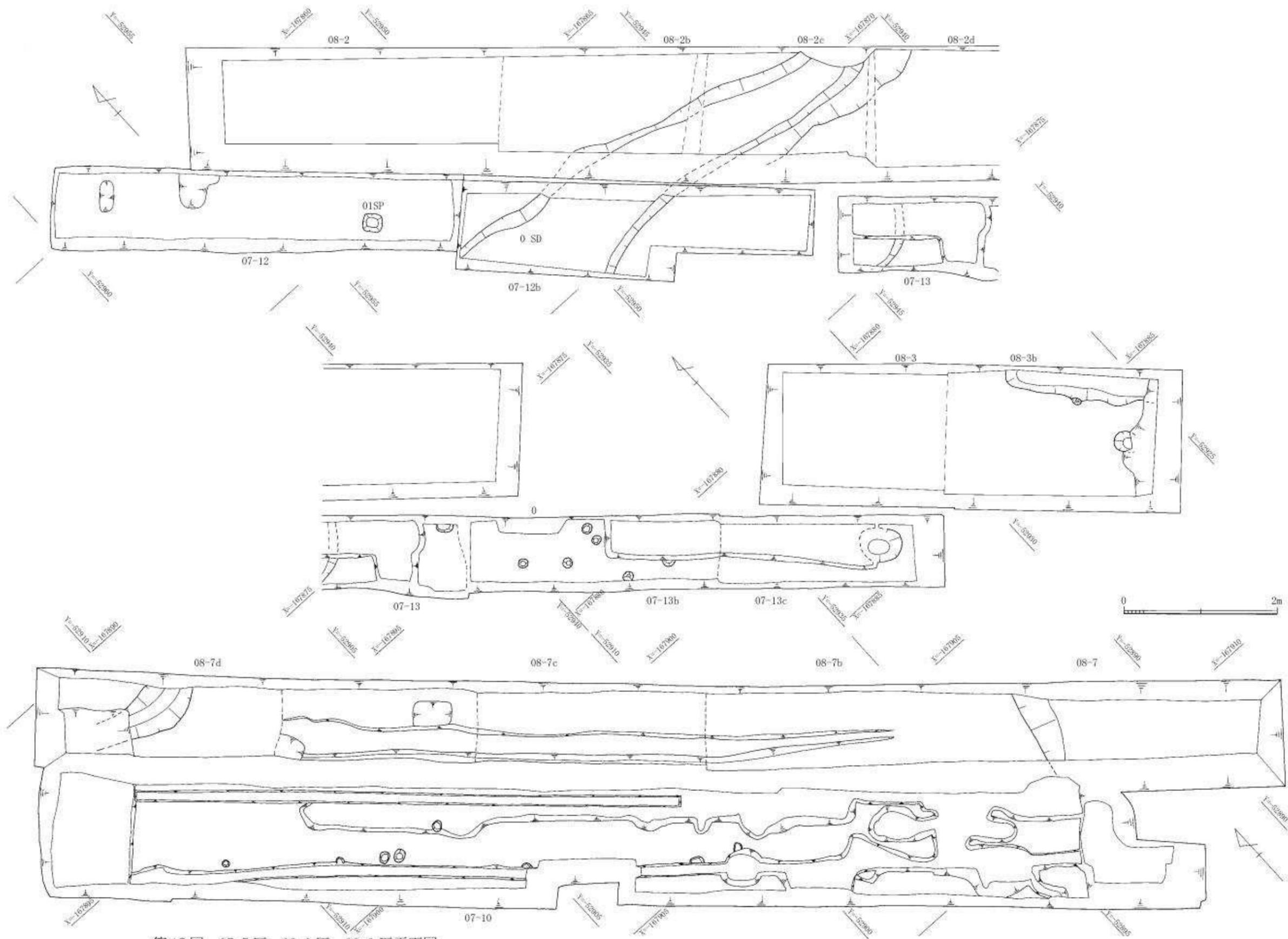
08-11 b 区12 N R

X = -167835m、Y = -52960m付近で検出したシルト～砂層の堆積層である。河道痕跡で、幅は2.5mから7m以上、深さは0.6mを測る。埋土は灰褐色砂質土、黄褐色砂質土、灰色粗砂などである。遺物は検出できなかった。西隣の08-11 b 区X = -167830m、Y = -52975m付近で検出した、長さ約8 m、幅約5.5mの河道も、間に攪乱があり、また大きく屈曲していることになるがこの河道であろう。

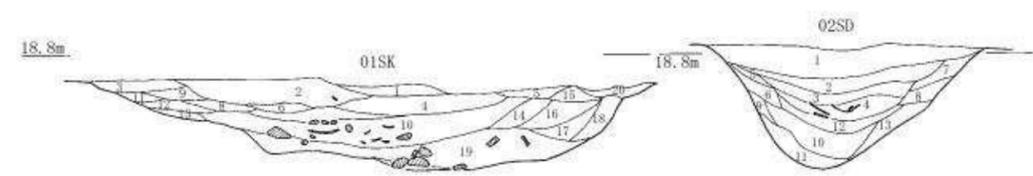
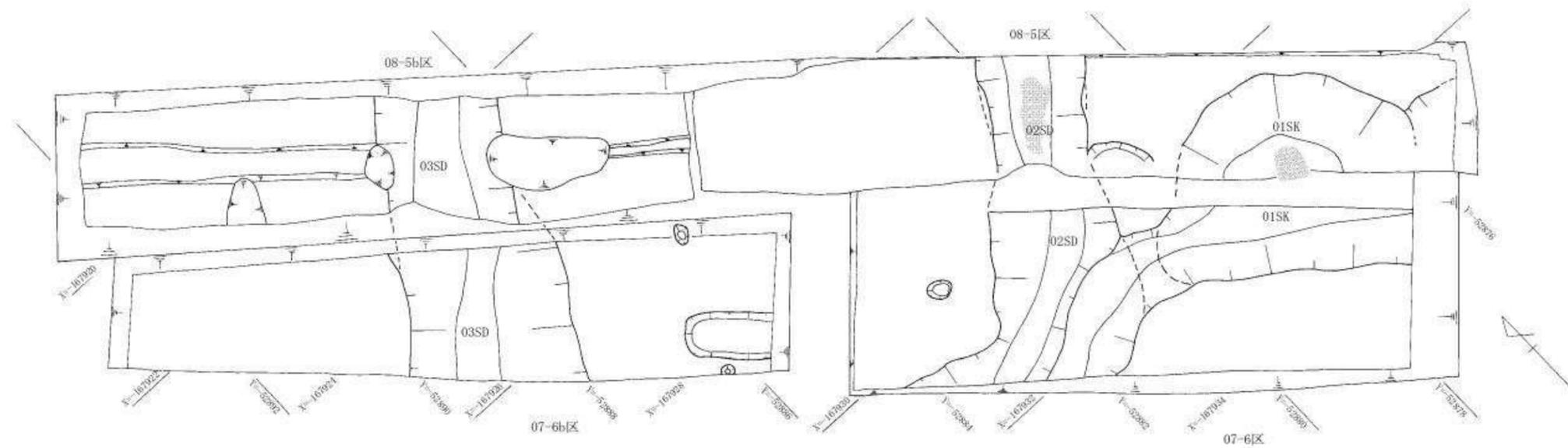
また、02-2区でも調査区南西側で、幅2～6m、長さ約12mの範囲で不定型な砂層堆積が確認されている。この河道12 N Rと考えられる。



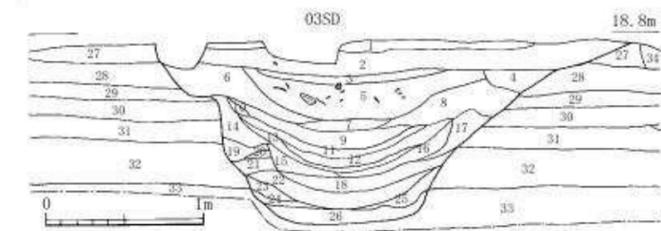
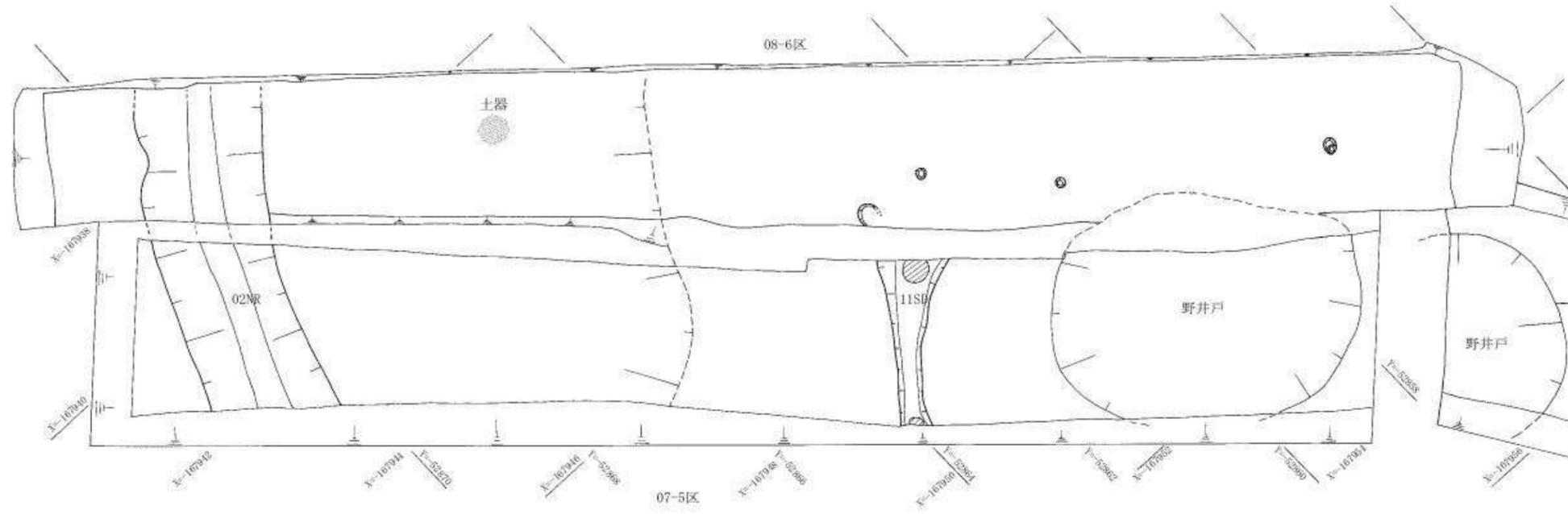
第14図 08-14区ピット断面図



第15图 07-7区、08-2区、08-3区平面图



- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|
| 1 10YR4/6 | 褐色砂質シルト | 1 10YR3/1 | 黒褐色粘質シルト |
| 2 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト | 2 2.5Y3/1 | 黒色粘質シルト |
| 3 10YR4/2 | 褐色粘質シルト | 3 5Y4/1 | 灰色粘質シルト |
| 4 7.5Y4/1 | 灰色粘質シルト | 4 10YR3/1 | 黒色粘質シルト |
| 5 2.5Y3/1 | 黒褐色粘質シルト | 5 5Y3/1 | オリーブ黒色粘質シルト |
| 6 2.5Y4/1 | 黄灰色粘質シルト | 6 10G4/1 | 暗緑灰色粘質シルト |
| 7 10YR4/1 | 褐色粘質シルト | 7 10G3/1 | 暗緑灰色粘質シルト |
| 8 5Y3/1 | オリーブ黒色粘質シルト | 8 7.5G5/1 | 緑灰色粘質シルト |
| 9 10YR5/1 | 褐色粘質シルト | 9 5G4/1 | 暗緑灰色粘土 |
| 10 10YR3/1 | 黒褐色砂質シルト | 10 7.5Y3/1 | オリーブ黒色粘質シルト |
| 11 2.5Y5/1 | 黄褐色粘質シルト | 11 10Y4/1 | 灰色粘土 |
| 12 2.5Y4/1 | 黄灰色粘質シルト | | |
| 13 2.5Y3/1 | 黒褐色粘質シルト | | |
| 14 10YR3/1 | 黒褐色砂混粘質シルト | | |
| 15 10YR5/2 | 灰黄褐色粘質シルト | | |
| 16 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘質シルト | | |
| 17 10YR5/1 | 褐色粘質シルト | | |
| 18 7.5YR5/1 | 灰色粗砂 | | |
| 19 10YR2/1 | 黒色粘質シルト | | |
| 20 2.5Y3/1 | 黒褐色粘質シルト | | |



- | | | | |
|-----------|----------|-------------|------------|
| 1 10YR4/9 | 褐色粘質シルト | 9 2.5Y5/1 | 黄灰色粘土 |
| 2 10YR4/1 | 褐色砂質シルト | 10 2.5Y3/1 | 黒褐色シルト |
| 3 10YR2/1 | 黒色粘質シルト | 11 7.5Y5/1 | 灰色粘土 |
| 4 10YR5/1 | 褐色砂質シルト | 12 2.5Y3/1 | 黒褐色砂質シルト |
| 5 10YR3/1 | 黒褐色砂質シルト | 13 7.5Y2/1 | 黒色粘質シルト |
| 6 2.5Y4/1 | 黄灰色砂質シルト | 14 5Y4/1 | 灰色粘質シルト |
| 7 5Y3/1 | オリーブ黒色粘土 | 15 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 |
| 8 10YR4/1 | 黄灰色粘質シルト | 16 5Y3/1 | オリーブ黒色粘土 |
| | | 17 5GY5/1 | 緑灰色粘質シルト |
| | | 18 5Y4/1 | 灰色粘土 |
| | | 19 10YR4/1 | 褐色粘質シルト |
| | | 20 5Y6/1 | 灰色シルト (砂混) |
| | | 21 7.5Y6/1 | 灰色シルト (砂混) |
| | | 22 7.5Y5/1 | 灰色粘土 |
| | | 23 7.5Y6/1 | 灰色砂質シルト |
| | | 24 5Y4/1 | 灰色粘質シルト |
| | | 25 10Y3/1 | オリーブ黒色粘土 |
| | | 26 7.5GY5/1 | 緑灰色粘質シルト |
| | | 27 10YR5/6 | 黄褐色粘質シルト |
| | | 28 10YR6/6 | 明黄褐色砂質シルト |
| | | 29 2.5Y5/4 | 黄褐色粘質シルト |
| | | 30 10YR5/1 | 褐色粘質シルト |
| | | 31 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘質シルト |
| | | 32 10YR5/2 | 灰黄褐色砂質シルト |
| | | 33 5Y6/2 | 灰オリーブ砂質シルト |

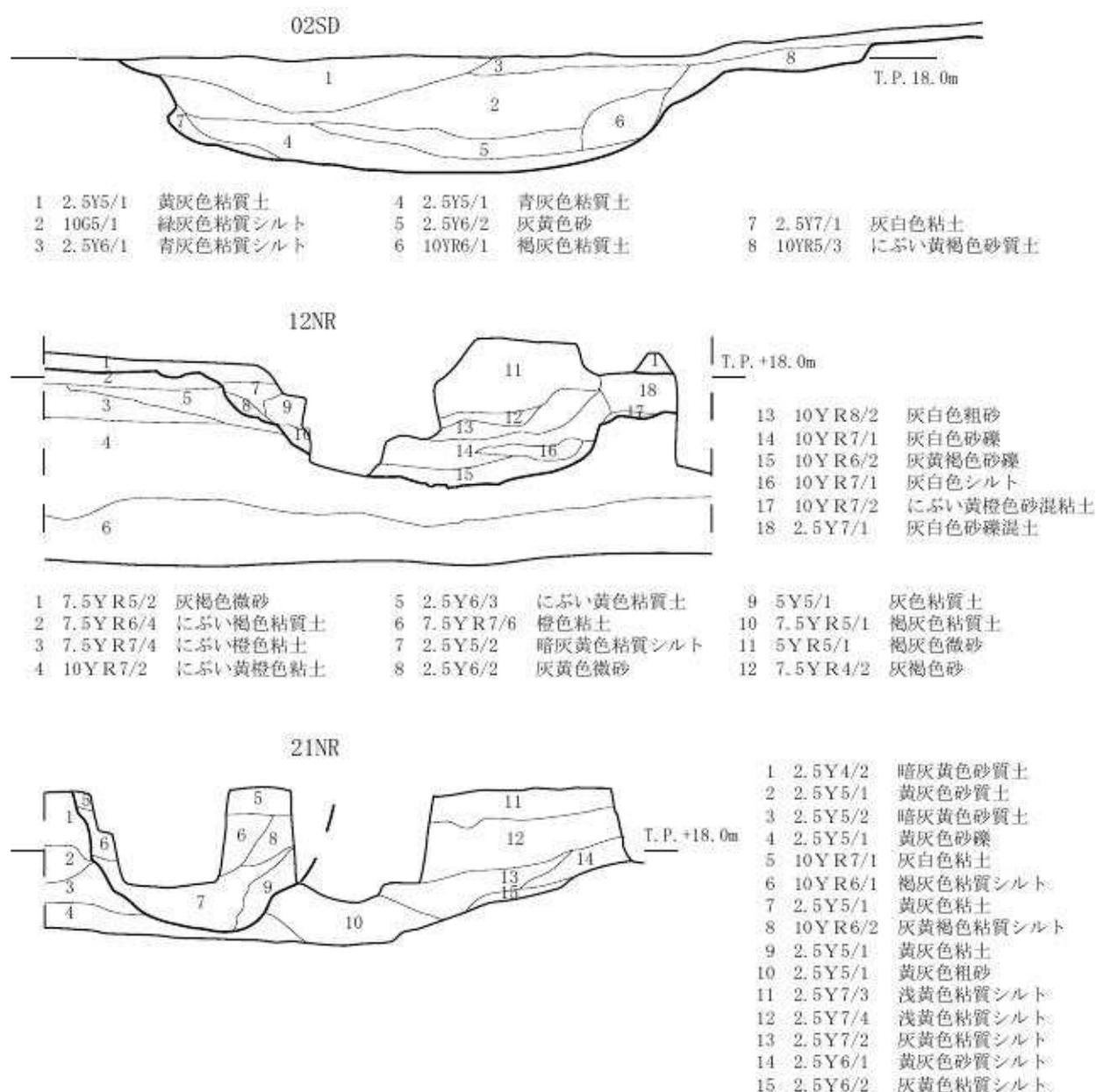
第16図 07-5区、07-6区、08-5区、08-6区平面図

08-4区03N R (第18図)

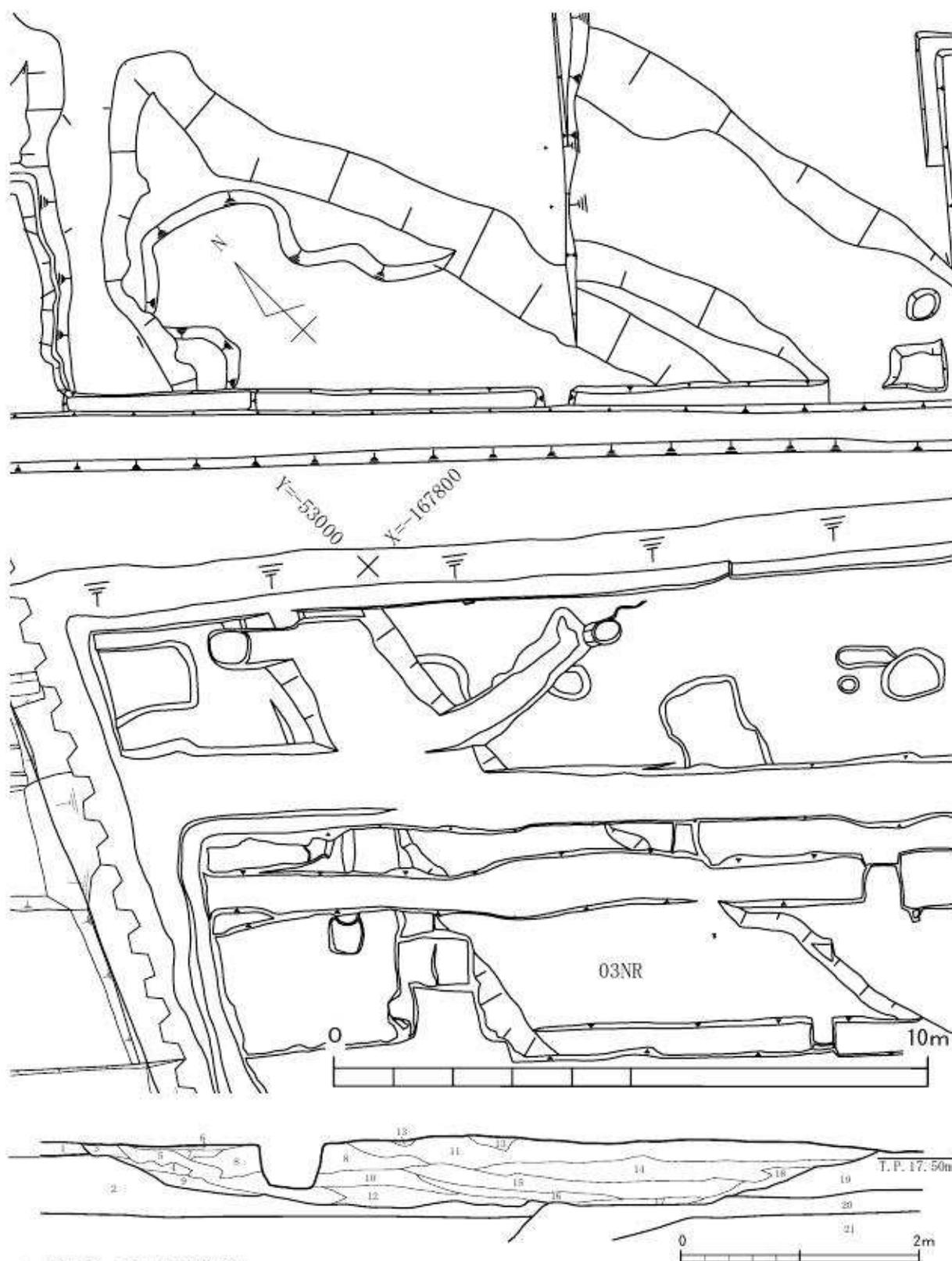
08-4区西部で検出した南北流する河道である。幅は南西部で5.5m、北端では3.0m、深さは0.3mを測る。底面は比較的平坦で、埋土は灰褐色砂質土、褐灰色シルト、灰色粗砂などである。02-1区で河道11N Rと合流している。遺物は出土しなかったが、11N R上層に対応する古墳時代前期の河道であろう。

07-5区、08-6区02N R (第16図)

調査区の西北端で検出した河道である。弥生時代の包含層を挟って南西から北東に流れる。幅は1.5m、深さは1.0mを測る。埋土は灰白色の粗砂である。河道は断面U字形で、短期間の流路と思われ、遺物は出土していない。



第17図 08-11区、08-14区02S D、12N R、21N R断面図



- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質土 | 12 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫 (φ 3cm位まで) |
| 2 10YR5/2 灰黄褐色砂 (φ 2~3cmまでの砂礫を含む) | 13 5Y5/2 灰オリーブ色粘土 |
| 3 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 | 14 10YR7/2 にぶい黄褐色粘質シルト |
| 4 2.5Y7/4 浅黄色微砂~シルト | 15 10YR6/2 灰黄褐色シルト |
| 5 10YR3/1 黒褐色粘質土 | 16 10YR6/1 褐灰色シルト (ラミナーが観察される) |
| 6 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 | 17 10YR7/2 にぶい黄褐色~灰白色砂礫 (φ 4cm位まで やや粗い) |
| 7 2.5Y4/1 黄灰色土 | 18 2.5Y3/1 黒褐色粘土 |
| 8 2.5Y6/2 灰黄色シルト~微砂 (やや粘質) | 19 10YR6/3 にぶい黄褐色砂 (φ 1~2cmまで 全体に細かい) |
| 9 10YR6/1~6/2 褐灰色~灰黄褐色砂~微砂 | 20 5Y7/1 灰白色微砂~シルト |
| 10 2.5Y6/2 灰黄褐色微砂 | 21 2.5Y6/2 灰黄色砂 (φ 5cmまでの礫石を含む) |
| 11 7.5YR6/1 褐灰色粘土 (鉄マンガンが酸化して橙色化) | |

第18図 08-4区 (古墳時代以降) 平面図 08-4区03NR断面図

第4節 弥生時代の遺構

今回の調査では07-1区、07-5、6区、08-5、6区、08-8区で、弥生時代中期から後期の遺物を出土する遺構が検出されている、また、08-1区、14区、8区では弥生時代前期と考えている河道11NR（前回報告11NR）があり、前回の報告でも記したように、最上層に堆積する灰褐色粘質土で弥生時代後期後半頃の土器片が帯状に集積している。

調査区位置図（第2図）で示したように、07-5区と08-6区、07-6区と08-5区は隣接している。この地区では耕作土を除去すると08-5区では明黄褐色～黄褐色、東南端の07-5区では褐灰色からオリーブ灰色を発する砂礫混じりの厚さ約0.1mのシルト質土が堆積する。この層は弥生時代の遺物包含層であるが量は少なく、遺存状態は悪い。この下では、07-5区では褐灰色土から黄橙色土、北西の08-5区では明黄褐色土は弥生時代の遺構検出面で溝や土坑を検出した。他の地区では耕土を除去した面で弥生時代の遺構を確認している。

07-5区、08-6区 第16図

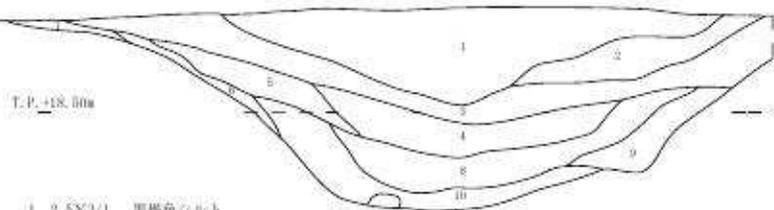
幅20mの道路を挟んだ02-3区、05年区では耕作土を除去した面で、縄文時代後期以降中近世までの遺構が同一面で検出されたが、この地区ではT.P.19.0m前後を測る耕作土下面でピット列が観察される。これに続いて0.1～0.3mの厚さで褐灰色からオリーブ灰色を呈する弥生時代の遺物包含層が残存している。この層を除去した18.5m～18.3mの高さにある砂礫混じりの灰褐色土の面で弥生時代中期から弥生時代後期末頃までの遺構を検出した。

07-5b区では溝やピットを検出した。

07-5b区01SD

X = -167955m、Y = -528

55m付近で検出した東西方向の溝で、幅約2.5m、深さ0.6mを測る掘形は幅の広い「U」字形で、0.3mから急傾斜となり、底面は浅く窪んでいて幅約0.5mを測る。埋土は主に黒褐色～灰色粘質シルトで、上層は炭化物を含んでいた。弥生時代後期の土器が出土したが、図化できる物はなかった。



- | | | | | | |
|---|---------|---------|----|---------|---------|
| 1 | 2.5Y3/1 | 黒褐色シルト | 8 | 10YR3/1 | 黒褐色シルト |
| 2 | 2.5Y3/2 | 黒褐色シルト | 9 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色シルト |
| 3 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色シルト | 10 | 2.5Y4/1 | 灰色シルト |
| 4 | 2.5Y2/1 | 黒色シルト | | | |
| 5 | 5Y4/1 | 灰色シルト | | | |
| 6 | 2.5Y4/1 | 灰色シルト | | | |
| 7 | 10YR6/6 | 明黄褐色シルト | | | |

第19図 07-5b区01SD断面図（S=1/20）

07-5区02SP

07-5区01SDの南西で検出したピットである。調査範囲外に広がっているが0.8m×0.3m以上、深さは0.45mを測る。埋土は黒褐色粘土で、弥生時代後期の土器が出土している。

07-5区11 S D

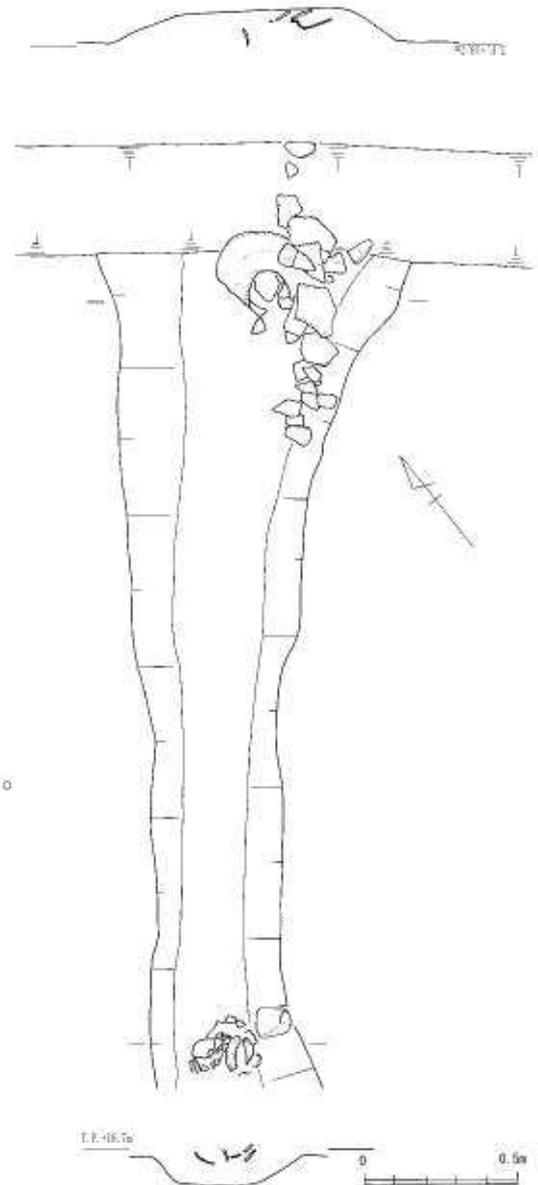
07-5区のほぼ中央 $X = -167950\text{m}$ 、 $Y = -52863\text{m}$ 付近で検出した調査区に直行する浅い溝である。幅は東北側が0.9m、南西側で0.55mを測る。浅いU字形に掘られ、深さは0.1mを測る。埋土は灰色シルト質土で、調査区の東北端で壺、南西端で甕が出土した。南西側で検出した甕は正立していたものが土圧で南東側に押しされ、壊れた様な状態であった。北東側の壺は口縁部が下になり、胴部破片がその上に乗った状態であった。胴部破片は少なかったが、口縁部と底部がほぼ残っていた。全体に摩耗がしているので、完形の状態で置かれていたのであろう。08-6区では壁面に残っていた壺の破片を確認したが、溝は用水路で削平されたのか、続きを確認できなかった。遺物の状況から周溝墓の可能性もあるが、対応する溝や主体部を確認することはできなかった。溝としておく。08-6区では地山から少し浮いた状態で土器が出土している。この地区は $X = -167948\text{m}$ ライン付近から地山が北西に緩く傾斜し、砂礫を多く含んだ褐灰色から黒灰色土が堆積していた。弥生時代中期頃の包含層で、第21図に出土状況を示した土器はこの層内で出土した。

07-6区、08-5区

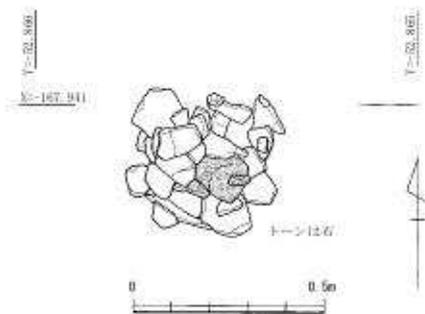
07-5区と里道を挟んで西隣の調査区である。T.P.18.9m前後を底面とする旧耕作土を除去した黄褐色粘質シルトは攪乱されているが弥生時代の遺構検出面である。この面で土坑と溝を検出した。

07-6区12 S K

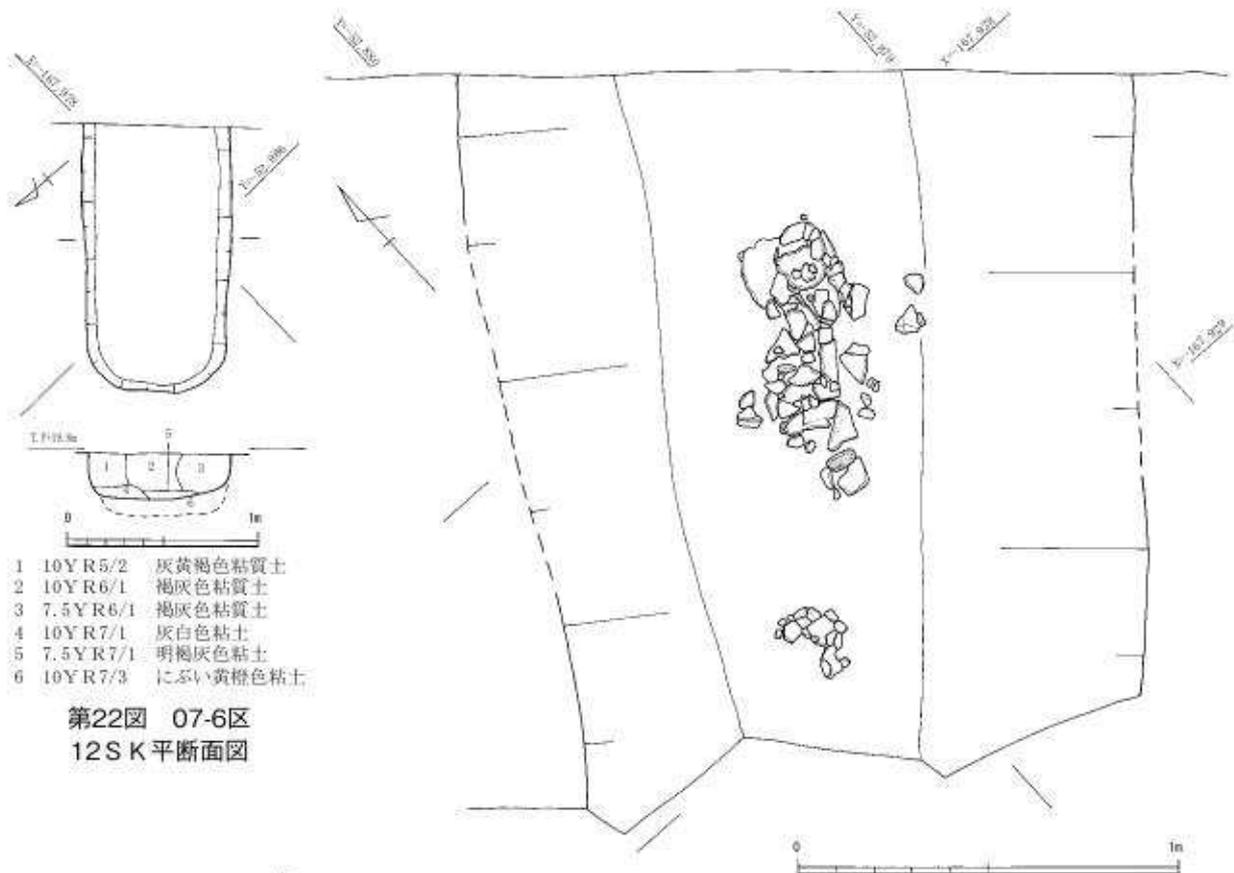
は長径1.4m以上、短径0.75m、深さ0.25mを測る方形の土坑である。埋土は灰黄褐色粘質土、褐灰色粘質土、黄褐色土のブロックを含む褐灰色粘質土で、縦に3層に分かれて観察された。平面形から墓坑の可能性が高かった。注意して掘削し、断面や平面を観察したが木棺等の痕は観察できなかった。しかし、床面の明褐色粘土は木質が土壌化したことも考えられる。



第20図 07-5区11 S D 平断面図



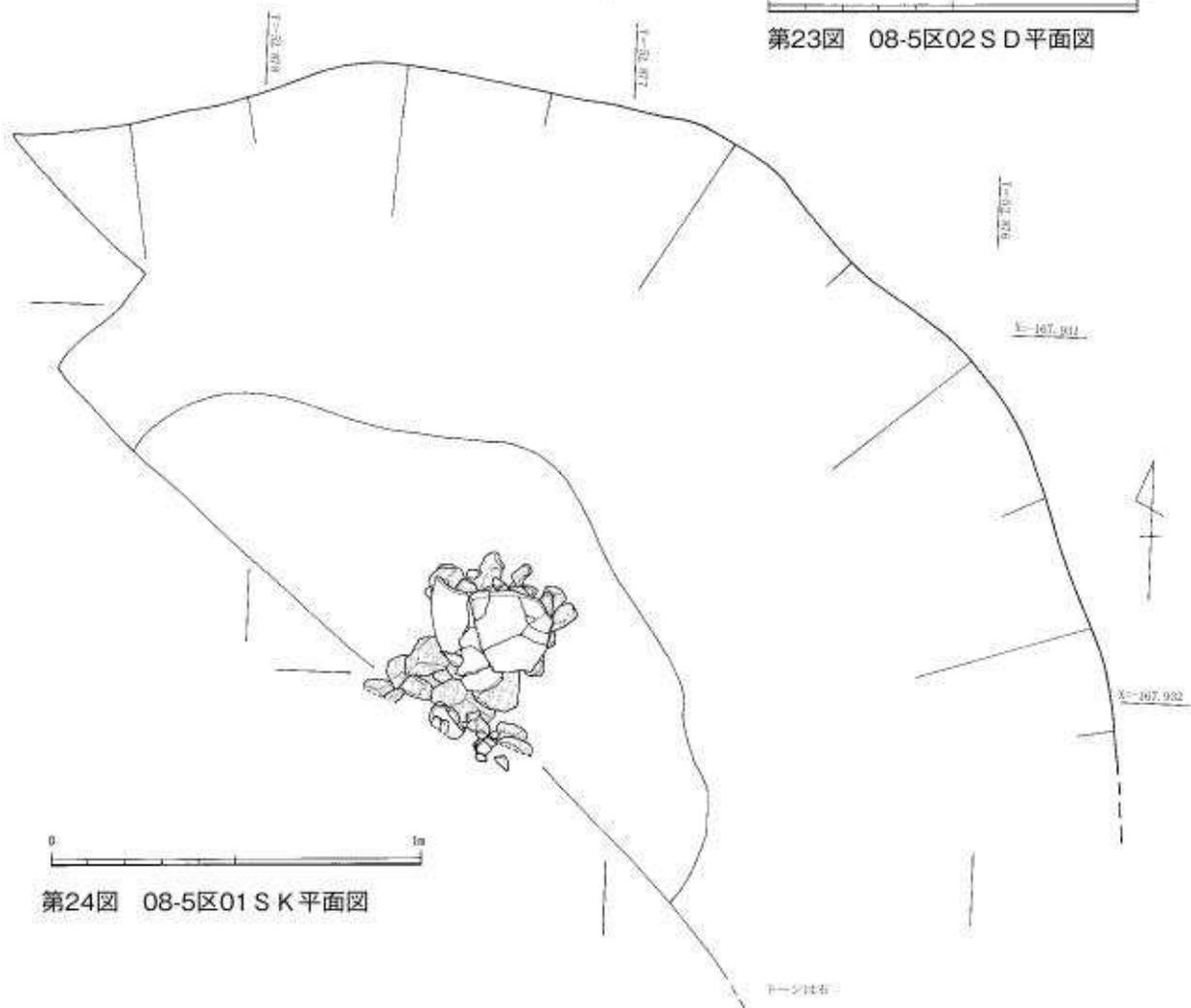
第21図 08-6区包含層図
土器出土状況実測図



- 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
- 2 10YR6/1 褐灰色粘質土
- 3 7.5YR6/1 褐灰色粘質土
- 4 10YR7/1 灰白色粘土
- 5 7.5YR7/1 明褐灰色粘土
- 6 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土

第22図 07-6区
12SK平断面図

第23図 08-5区02SD平面図



第24図 08-5区01SK平面図

07-6区・08-5区01 S K

調査区の南東端で検出した土坑である。07年の調査では地山の黄褐色土が汚れていたため、02 S Dと分岐する溝と思われたが、断面観察から別の遺構と判明した。08-5区調査でも02 S Dとの間も地山の黄褐色土と黒褐色土、灰褐色土のブロック土が堆積しており、両遺構間の地山を浅く削って土坑を掘削したのかもしれない。この土坑は07-6区、08-5区との間に幅0.5m程度調査できなかった所があるが、長径4.4m、短径大きな楕円形で、長径4.5m以上、短径4.8m、深さ0.6mを測る。掘形は底が広く浅い碗状を呈する。埋土は黒褐色～黄灰色の粘質シルトで、掘形に沿って凹レンズ状に堆積する。中期の土器や川原石が主に中・下層で出土している。土器には完形に近い物も多く出土している。土坑の形状から廃棄坑的な物と考えられる。

07-6区・08-5区02 S D

調査区に直行する溝で、幅1.8m、深さ0.85m～1.05mを測る。埋土は暗灰黄色シルトから黒褐色シルト、黄灰色シルトなどで、凹レンズ状に堆積している。埋土は上から黒褐色粘質シルト、黒色粘質シルト、灰色粘質シルト、暗緑灰色粘質シルト、灰色粘土などで、いずれも砂粒を多く含んでいる。上層中層の黒褐色粘質シルトから弥生時代後期、中下層の黒色粘質シルトや暗緑灰色粘質シルトから弥生時代中期の遺物が出土している。

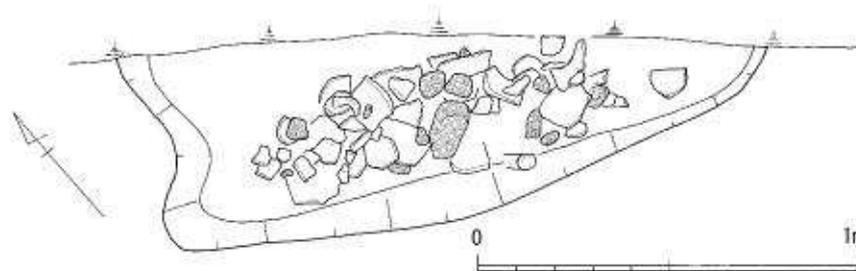
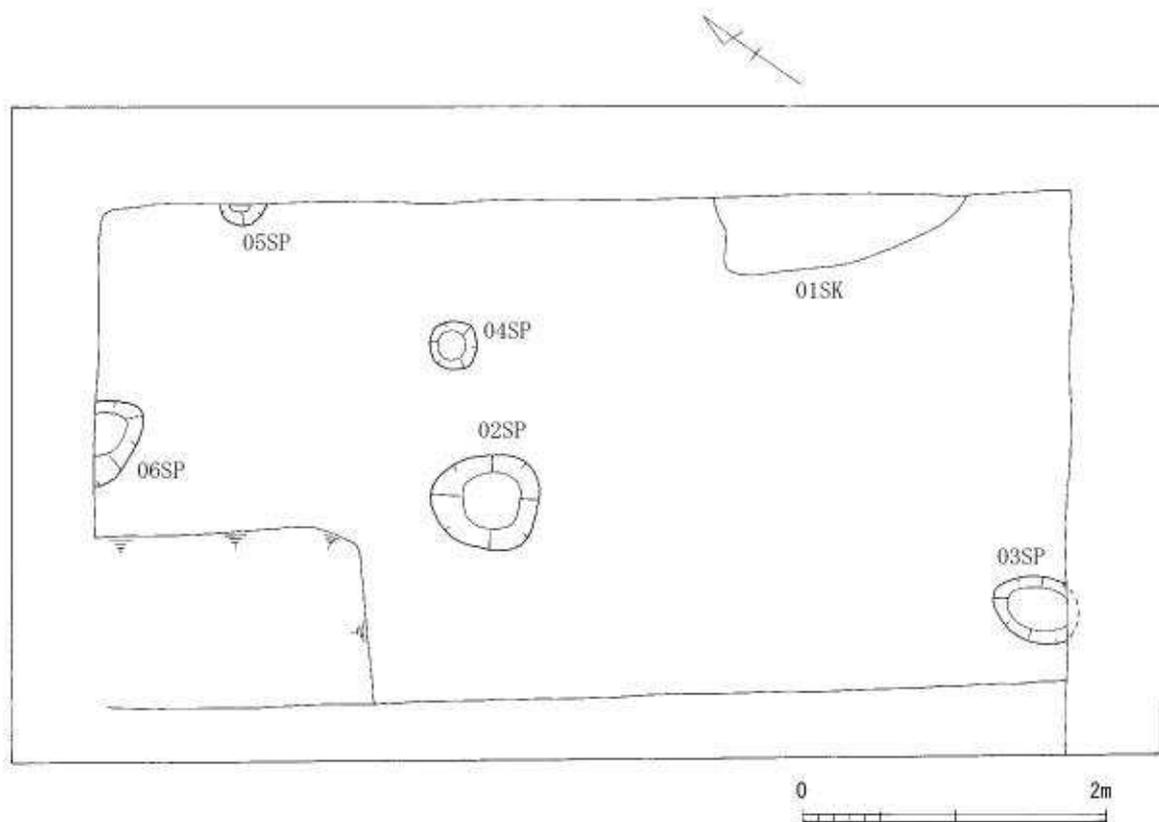
07-6区・08-5区03 S D

02 S Dの西北約9.5mのX = -167924m、Y = -52888m付近で検出した調査区に直行する溝で、幅2.5m、深さ1.1mを測る。掘方は幅の広いU字形である。埋土は上層が褐灰色シルト、中層が黒褐色シルト、オリーブ黒色シルト、下層が灰色からオリーブ黒色シルトで0.1～0.2mの厚さで凹レンズ状に規則的に堆積している。主に上層埋土から中期の土器が出土している。02 S Dと03 S Dはほぼ平行し、長方形の土坑01 S Kを検出しており、方形周溝墓の可能性もあるが、道路を挟んで15m北側で検出した方形周溝墓の溝と掘方が異なって、幅が広く、深い。埋土も規則的で、緩慢な流水堆積である。検出幅が約5mで、02年地区や85、86年調査区でもこれに対応する溝が確認されていないが、集落を画するか用水路的な性格の溝と考えられる。

07-1区01 S K

07-1区はX = -167890m、Y = -52920m付近にある調査区で、下水管のシールド工事のため鋼矢板で仕切った7.5m × 4 mの調査区である。道路の和歌山側に設置されている農業用水路（通称光明池水路）のため、地表から約1.3mまで掘られていた。用水路の底に敷かれていた厚さ5 cm前後の砂利、泥土を除去すると、黄灰色シルト～砂が薄く堆積している。この層を掘削したT.P.18.55m前後の高さにある明黄褐色シルト質粘土～灰色粘土の面で遺構が検出された。

01 S Kは、調査区のトレンチの南東部で検出した土坑である。北側は調査区外に広がっているが、調査区内では1.65m × 0.5mの三角形状で、深さは約0.2mあった。土坑内から弥生時代中期の土器と川原石が出土した。土器は10～30cmの大きさで、完形になる物はなく、石は小児の頭大までの大きさの石と混在しており、土器と川原石を投棄したような状態であった。



第25図 07-1区平面図・07-1区01SK平面図

02SPは0.7×0.6mを測る楕円形のピットで、深さは0.1mであった。03SPは南端にあり、大きさは0.6m×0.4m、深さ0.1mを測る楕円形のピットである。04SPは0.35m×0.3m、深さ0.1mの円形ピット、06SPは北西端にあり、側溝で壊してしまったが、0.6m×0.4m以上、深さ0.1mを測る。埋土はいずれも褐灰色～灰色粘質土で遺物は出土しなかった。土坑と同時期であろう。

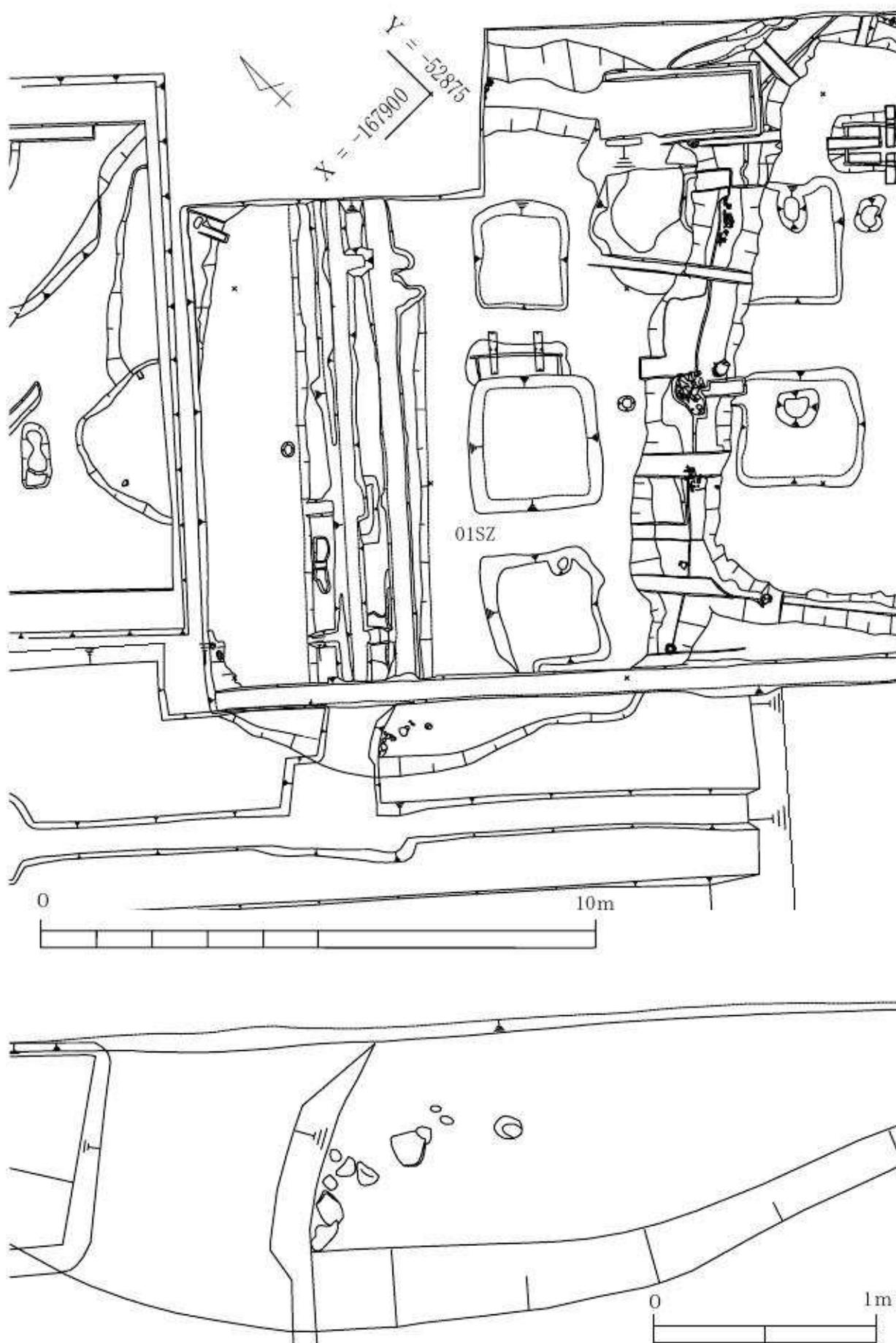
08-8区

現道路部分の最も東南にあたり、幅13m、長さ52mの調査区で、02-3区、05区、03-6区と07-7区と接している。

表土、旧耕作土を除去した面で、03年、05年調査で検出した方形周溝墓SZ01、03年調査で検出した河道11NRの続きを検出した。

08-8区SZ01（1号方形周溝墓 03、05調査区SZ01）

SZ01南西溝は03年調査で西溝、05年調査で方台部と東南溝、南西のコーナーを検出した。



第26图 方形周满墓01SZ平面图、01SZ南西周满土器出土状况平面图

08年調査では南周溝を検出した。05年調査では調査開始時に土層確認と排水に調査区端に側溝を掘削し、方台部側を破壊したため、方台部の正確な大きさは不明である。今回確認したのは南周溝の外側肩である。周溝は検出長約7mで、西に緩く弧を描くように掘削されていた。周溝の検出幅は1.3m、深さは0.25mで、周溝幅は、1.0～1.5mと推定される。埋土は褐灰色シルトであった。02、05調査では溝内から完形の土器が数カ所に分かれて並べられた状態で出土したが、この溝では壺が砕かれたような出土した。1固体であったと見られるが、土器の供献場所が水道管やガス管工事で周溝が攪乱されていたため、残存する破片も少なかった。

08-8区03N Rは、08-8区西北端のX = -167890m、Y = -52915m付近で検出した11N Rにほぼ直行する河道である。11N Rの上層は弥生時代後期末頃の遺物の堆積するが、この層を掘削中に左岸側肩部で、11N Rより砂礫が多く、硬く締まった黒褐色粘質土を確認した。層内で弥生時代後期末から古墳時代前期の土器片が礫に混ざって出土したことから、河道の時期を決定した。土器は11N R同様に細片が多く、図化できるものは無かった。この砂礫混り黒褐色粘質土は南接する07-1区、07-13区、08-7区では確認できなかった。

07-13区、07-10区検出ピット (第15図)

07-13区では07-1区に隣接する北西部で、弥生時代の土坑を1カ所で検出した。07-13区01 S Pは長径0.95m、短径0.8m、深さ0.7mを測る。埋土は黒褐色シルト質土で弥生時代中期の土器片が出土している。

また、Y = -52900mから-52925mにある07-10区では直径0.3m前後のピットを6カ所で検出している。ピット内から遺物は出土しなかったが近接地区の調査で弥生時代中期の遺構が検出されているので同時期のものとしておく。

08-8区・08-14区11N R

11N Rは03017-1区から7区までの全区間で検出した河道である。03017調査では河道底を確認できなかったが、08-1区、08-4区、08-14区、08-8区で左岸から底部を確認した。河道はX = -167895m付近を西北西流し、08-14区南東端のX = -167887m、Y = -52922m付近で90°近く屈曲して北流している。左岸肩は03017-1区で北から調査区に沿った北西方向に向きを変え、調査区西端で再びやや西に振り、08-4区、08-1区では緩くカーブを描いて、北に流路を曲げている。02020-1区ではさらに北北西方向へ流れることが確認されている。

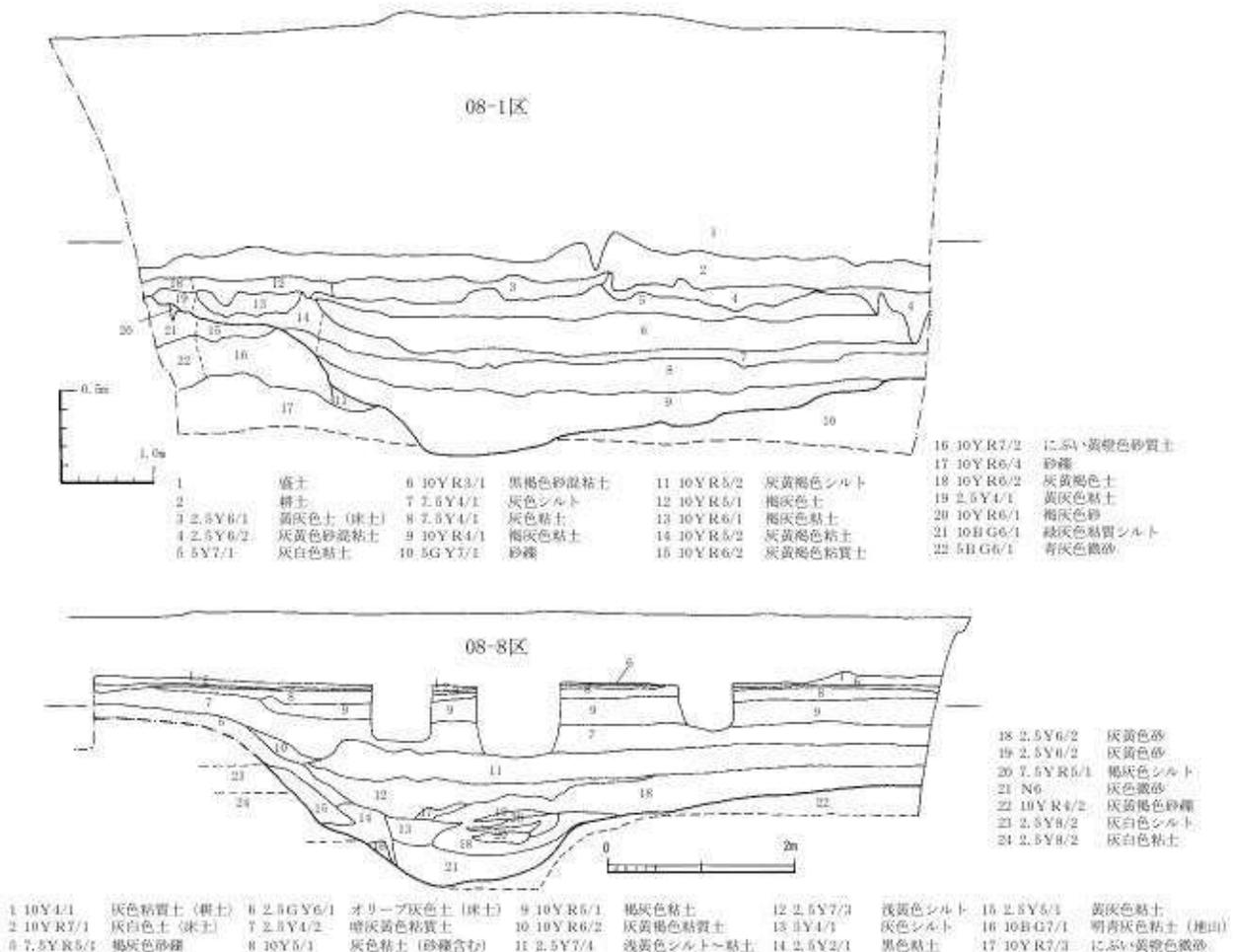
第27図下は08-8区北西端、X = -167880m、Y = -52920m付近で記録した断面図である。地山は桜桃色に近い灰白色を発し、上層はシルト質土、下層は粘質土である。河道上層のT.P.18.5m～18.0mに堆積する砂礫を含んだ灰色粘土、褐灰色粘土の、主に河道中央部で弥生時代後期末頃の土器が出土する。また、この下のT.P.18.0m～17.7mに堆積する浅黄色粘質土層では縄文土器や弥生時代中期頃の土器がごく僅かではあるが出土している。

また、T.P.17.6m以下では褐色系のシルトや黒色系や青灰色、黄灰色を発する粘土がレンズ状に堆積する箇所とブロック状に堆積する箇所があり、堆積環境が複雑に変化したことを想像させる。

一步、左岸肩部をみると、断面作成位置では地山の土砂が法面に沿って流出しているが、この南側のY=-52915m以東では地山を大きく抉って浸食しており、地山が軟質のシルト質層とはいえ流水の激しさを伺わせる。

この断面図作成位置より西側では流路を北に大きく湾曲させており、その結果、激しい流水により押し流されてきた大木が川岸に阻まれてこの位置で滞留していた。根本近くでは直径2mを測る大木もあることから、洪水や強風で倒壊したものであろう。流木にはローリングを受けて樹皮が剥がれたものや、近辺にあったのか、ほとんど傷のないものもあった。

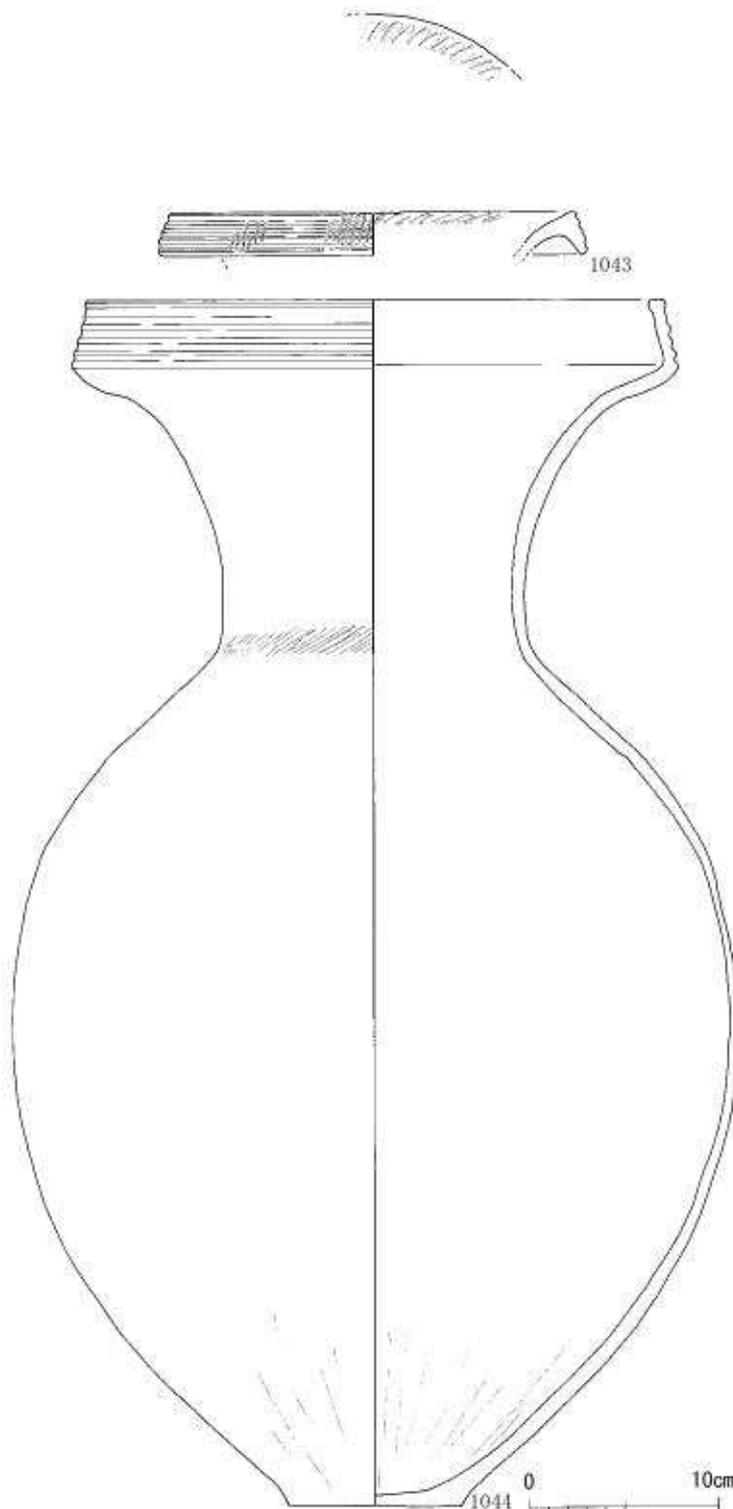
樹皮のないものを現場で水洗し、加工痕の有無を観察したが、樹皮の無いものは腐食の進んでいるものが多く、加工痕は確認できなかった。03年の調査で出土した樹木を年代測定した結果、BP-2420年と-3020年の数字を得ており、縄文時代晩期から弥生時代前期頃にあたる。この流木に貼り付くように土器片が1点出土している。図化できなかったが弥生時代前期頃のものと思われる。また、上層で中期の櫛描文土器も出土しており、中期前半で流水があり、その後、周囲よりやや低くなっていたと考えられる。03-6区、05年区、02-3区で検出した方形周溝墓は、周囲より僅かに低い河道跡に規制されて、北西から南東に築造されたと考えられる。その後、後期末頃に粘質土が堆積するような緩やかな流れが復活するのであろう。



第27図 08-1区11NR断面図(上) 08-8区11NR断面図(下)

07-5区11SD出土土器

1043は外反して開く壺の口縁部破片で、口縁端部は下に拡張して外傾する面をつくり、4条の凹線文を巡らせ、その後にヘラで5～7条の縦線を描く。口縁部内面にも櫛描きの扇形状の列点文を密に施文する。1044は、なだらかなに膨らむ胴部に、外反気味に開いて立ち上がる頸部を大きく外反させ、上に内傾して拡張する口縁部をつくる段状口縁の壺である。口縁部外面に4条の凹線文を巡らせる。頸部下端に、斜めのヘラ書き文を施しているが、凸帯を貼り付けるためかもしれ



第28図 07-5区11SD出土土器実測図

ないが、体部は摩耗していて痕跡が残らない。体部調整も摩耗して残っていない。胎土は黄褐色である。口径30.5cm、器高は64cm、腹径38.4cm前後である。

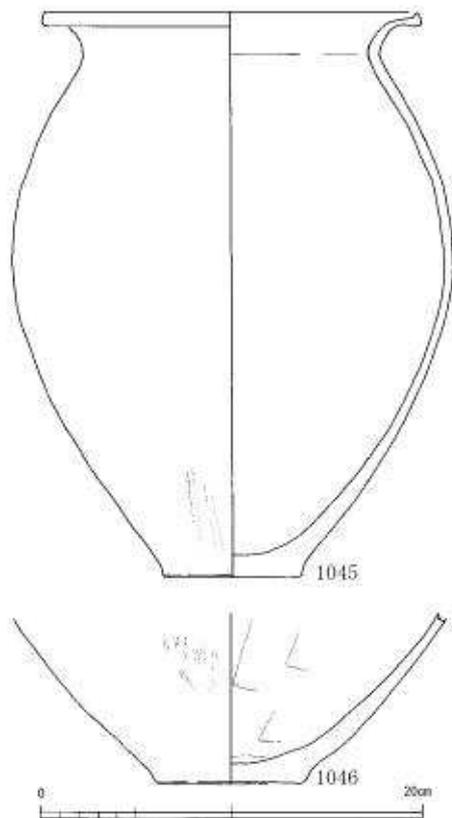
11SD南西端から出土した土器(第20図)は甕であるが、細かく割れていて実測できる程度まで復元できなかった。

08-6区出土土器

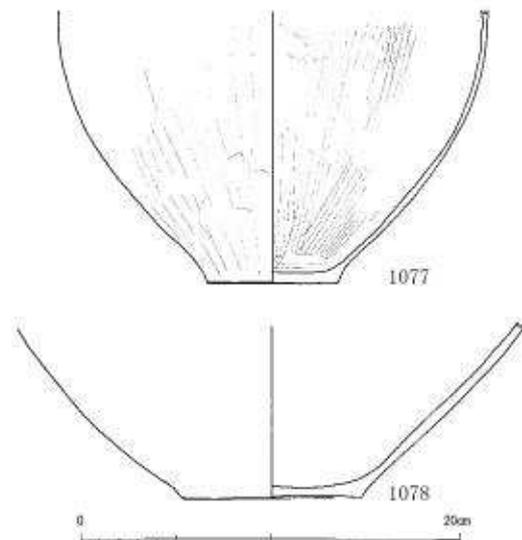
1077は甕の胴底部で外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整である。底面にヘラミガキが観察される。底径6.8cm。1078は壺の底部で、底径9.0cm。体部は摩滅し調整を観察できない。

07-6区01SD出土土器

1045は甕。ラグビーボール状に膨らむ体部から外反する口頸部をつくり、口縁端部は上に摘んで拡張させる。口縁部外面は強くヨコナデする。器壁は摩耗しているが、底部外面にヘラミガキが観察される。口径19.6cm、器高20.0cm。1046は壺の底部で、外面はヘラミガキ、内面は板ナデで調整する。底径7.5cm。



第29図 07-6区出土土器図1



第30図 07-6区出土土器図2

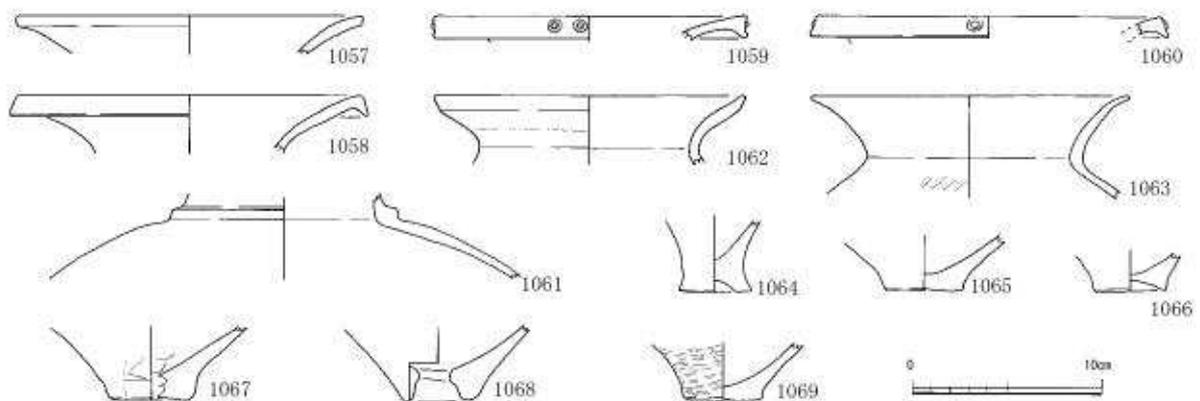
1057～1060は壺の口縁部。1057、1058は外反して開く口縁部で、1058は端部を下に拡張させ面をつくる。1059は口縁端部を下に拡張させ、2条の凹線文を巡らせたのちに竹管の円形浮文を貼り付ける。

1060は口縁端部を下に拡張して強くヨコナデし、竹管円形浮文を貼り付けたもの。1061は壺の頸部で、頸部下端に突帯をつけ、胴部は球形に膨らむ。1062、1063は甕の口縁部。1062は外反する口縁端部を内彎させ、受け口状の口縁をつくる。1063は外反気味に開く口縁部をつくる甕で、端部は丸く収める。1064～1069は底部破片、1065、1066、1068は壺、1064、1069は甕。1068は底部を穿孔する甕。

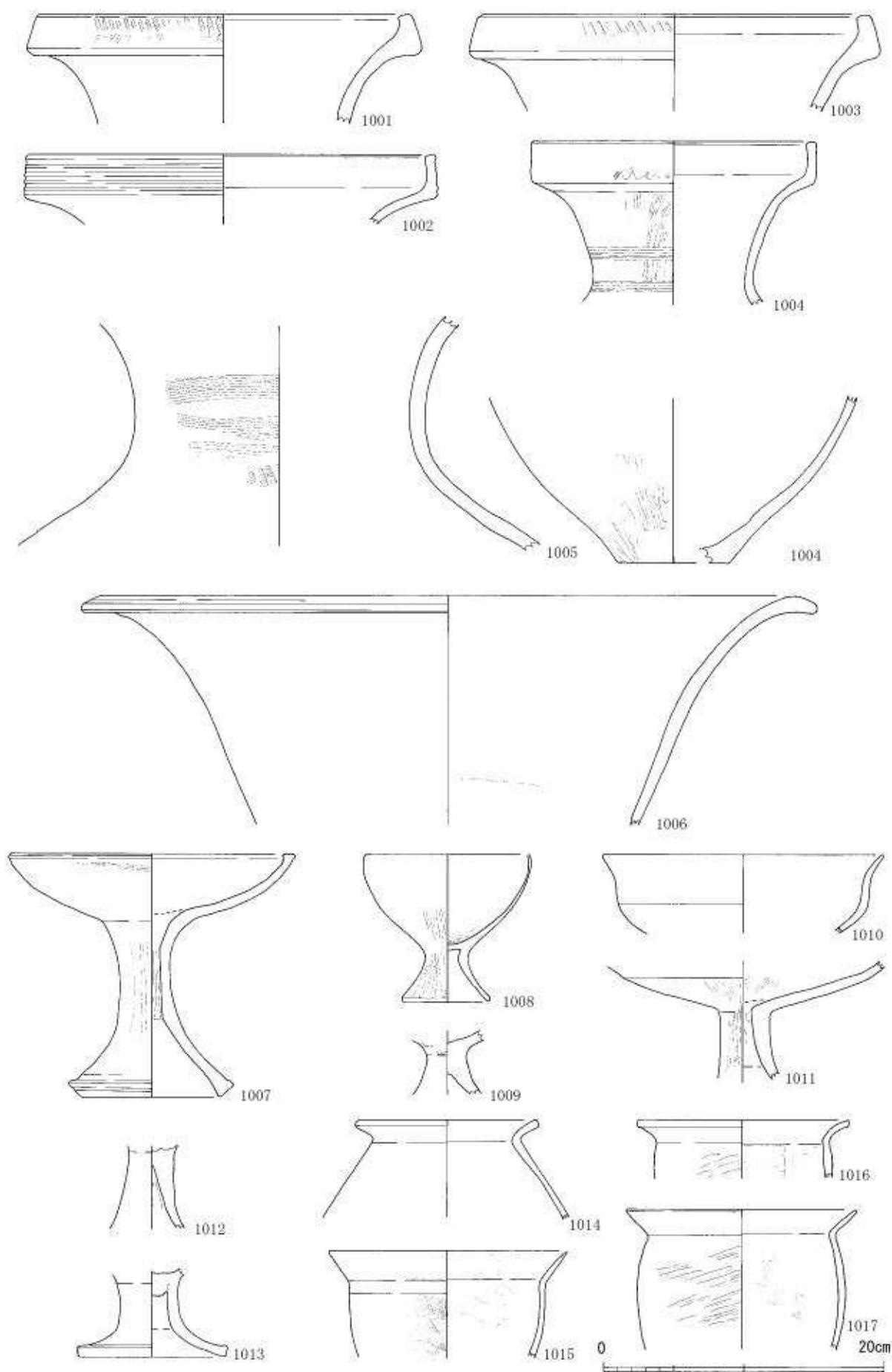
08-5区01 S K 出土土器 (第32図)

中下層で中期、上層で後期の土器が出土している。

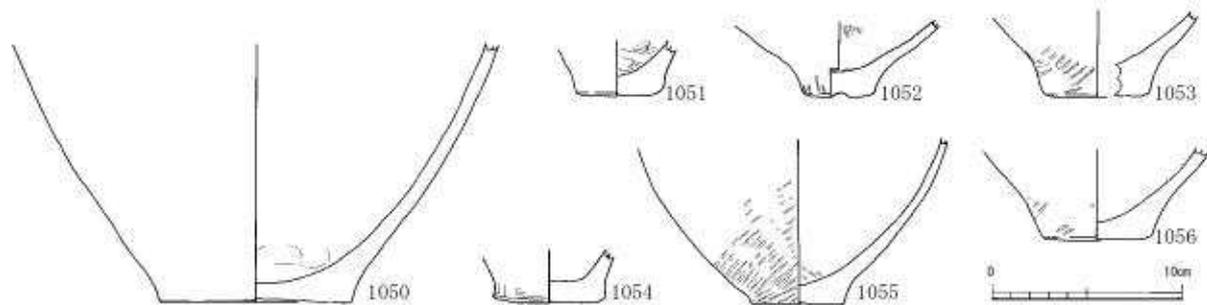
1001～1006は壺。1001～1004は、外反して開く頸部から受け口状の段状口縁のをつくるもの。1001、1002は口縁部を外傾させ、外面に櫛による、1001は綾杉文、1002は列点文を描く。1003、



第31図 07-6区出土土器図3



第32图 08-5区01 S K出土土器实测图



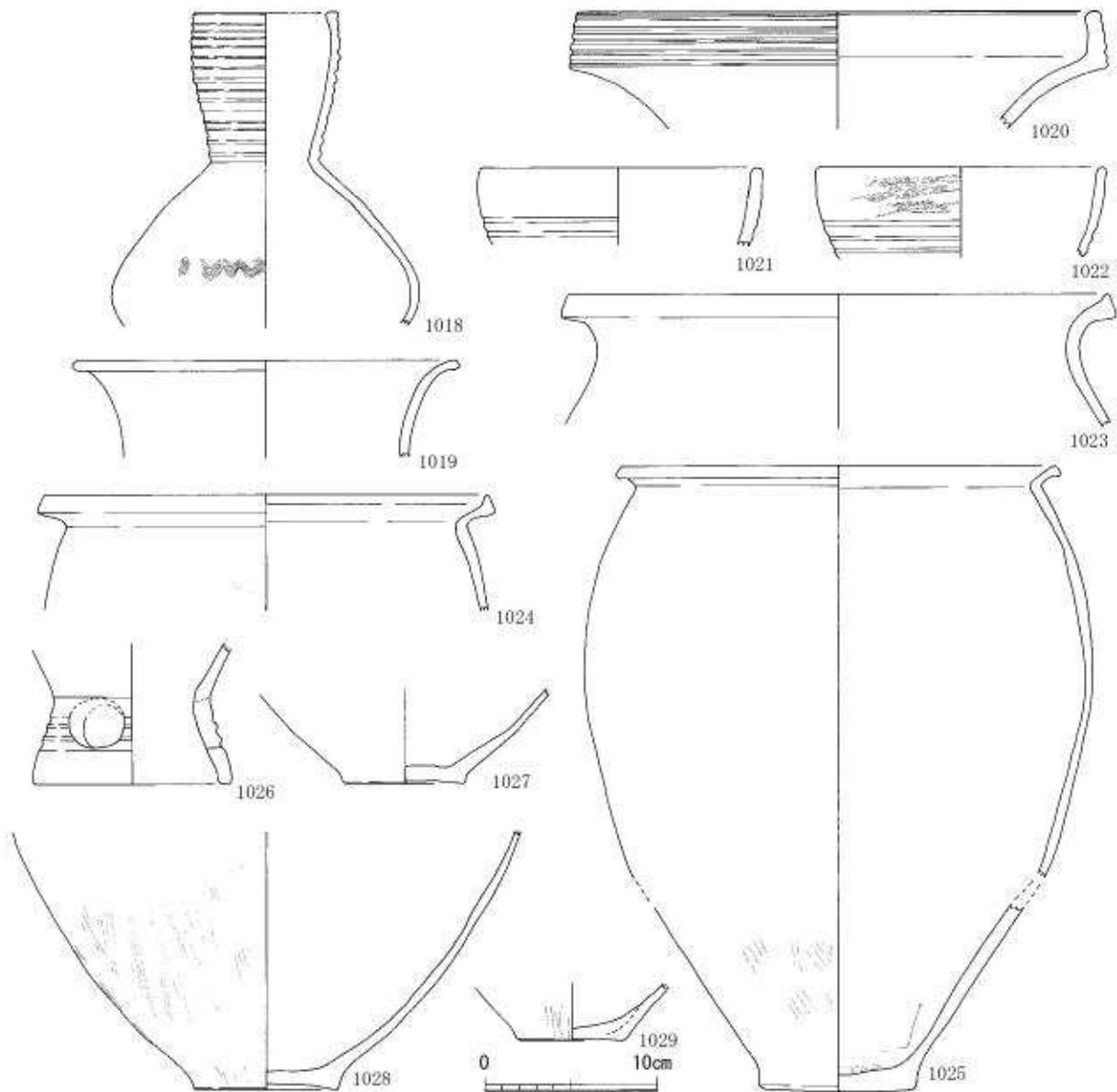
第33図 08-5区01 S K、08-5区03 S D出土土器実測図

1004はほぼ垂直に立ち上がる口縁部をつくるもので、口縁部外面に5条の細い凹線文を巡らせる。1005は頸胴部破片で、器面が摩耗している。頸部に櫛描きの直線文、胴部上端に扇形文を描く。1006は漏斗状に開く頸部から口縁端部をわずかに外反させ、端部に小さな面をつくるもの。頸部は無文である。1004（下）は球形に膨らむ壺底部で、外面はヘラミガキを密に施している。1007～1013は高坏。1007、1008は椀形の杯部をつくるもの。1007は口縁端部に水平な面をつくり、「ハ」字形に開く脚の端部をわずかに肥厚させて、外傾する面をつくり沈線を1条巡らせる。接地面は小さい。口径20.8cm、器高17.0cm。1008は内彎して立ち上がる椀形の杯部をつくるもので、口縁端部を丸く収める。口径11.6cm、器高10.6cm。1010は内彎気味に開く杯部に外反する口縁部をつくるもの。後期前半もの。1011は脚と杯部で、口縁部は欠失する。1012は脚部。1013は短く屈曲気味に大きく開く脚部で、鉢か壺の脚台である。1014は「く」字形に折り曲げる甕で、肥厚気味に厚くなる口縁部をつくり、口縁端部は外傾する面をつくる。体部は大きく膨らむ。1015～1017は膨らみの小さい体部から外傾して開く口縁部をつくるもの。口縁端部は面をつくる 1016と丸くおさめる1015、1018がある。体部は1016、1017はタタキ目、1015はタタキ目の上からハケメ調整する。1050～1056は底部。1050は中期のもの。1051～1056は後期のもので、1052は鉢、1051、1052、1053～1056は甕であろう。

1007～1012、1015～1017、1051～1053、1054、1055は08-5区03 S Dから出土。

08-5区02 S D出土土器（第34図）

1018は細頸壺で、なだらかに膨らむ算盤玉に近い胴部に内彎気味に開いて立ち上がる頸部をつくる。口縁端部をわずかに拡張させ、水平な面をつくる。頸部は上端から肩部まで15条の凹線文が巡る。また、胴部に波状文を巡らせているが、器壁が摩耗しており、条数は不明である。1019は漏斗状に外反して開く壺の口頸部で、口縁端部はわずかに外傾する面をつくる。口径22.4cm。1020は有段口縁の壺で、口縁は内傾気味に立ち上がり、外面に5条の凹線文を巡らせる。口径29.9cm。1021、1022は鉢か壺の口縁部で、1021は2条以上、1022は3条以上の凹線文を巡らせている。1023～1025は甕で、1023は短く外反する口縁の端部を上下に拡張し、外傾する面をつくる。口径31.5cm。1024はわずかに膨らむ体部から「く」字形に外反する口縁の端部を拡張させ、外傾する面をつくる。1025は「く」字形に外反する口縁の端部を摘んで拡張させる。口縁端部は外傾す



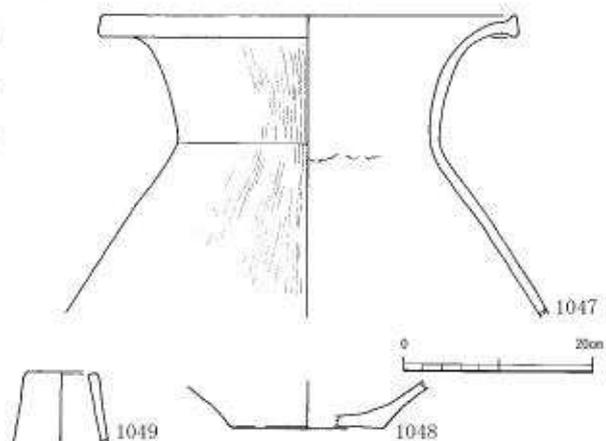
第34図 08-5区02 S D出土土器実測図

る面をつくる。胴部の膨らみは小さく、は口縁部よりわずかに張り出す程度である。口径25.8cm。

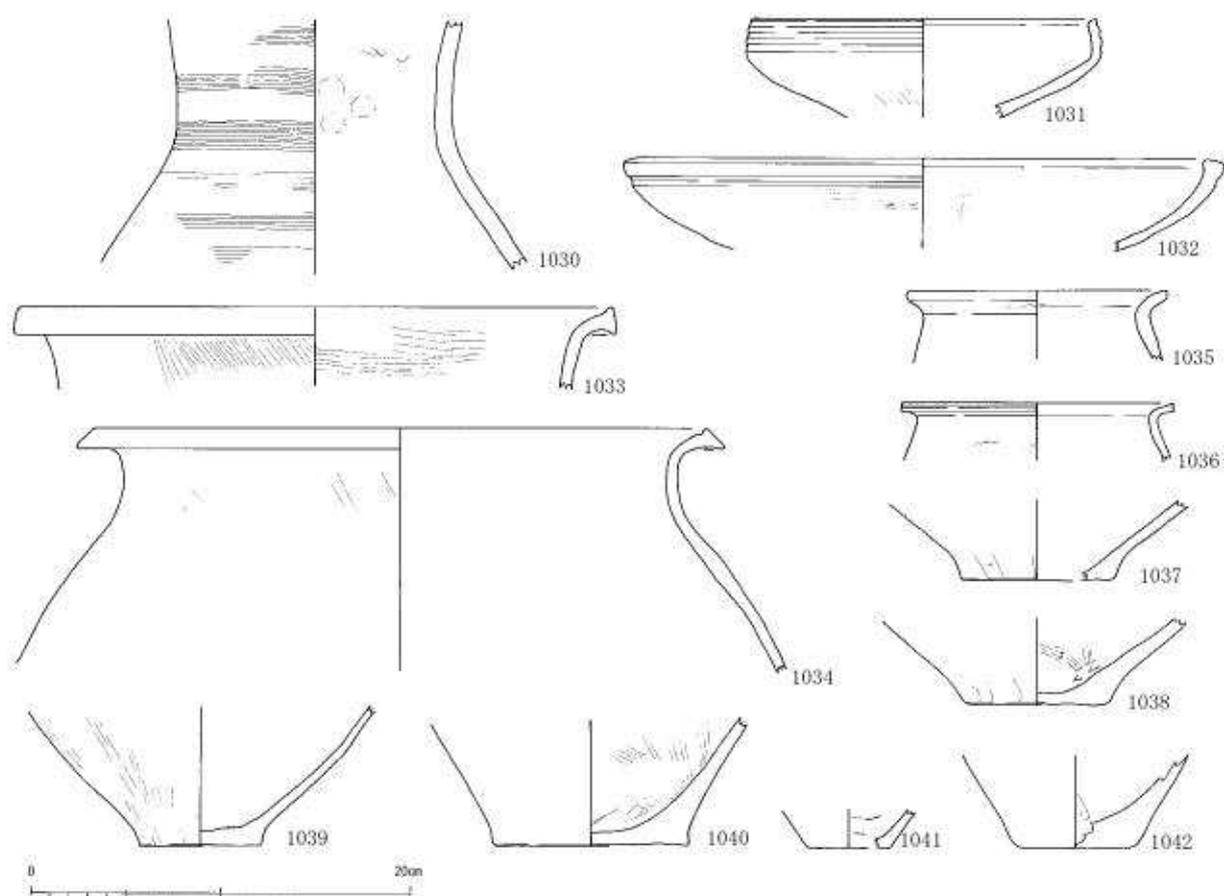
1026は鉢の脚台で、わずかに「ハ」字形に踏ん張る脚である。括れ部に3条の凹線文を巡らせ、その後には円形の透かし孔を開ける。胎土は灰白色である。底径11.6cm。1027～1029は底部で、1027、1029は壺、1028は甕であろう。

08-8区01 S Z (1号方形周溝墓) 出土土器

1047は壺で、外傾して立ち上がる頸部から水平近くまで外反する口縁部をつくり、口縁端部は上下にわずかに拡張させて面をつくる。外面



第35図 08-8区出土土器実測図



第36図 07-1区01 S K出土土器実測図

は無文で全面をヘラミガキする。体部に黒斑がみられる。頸部内面に粘土の継ぎ目が観察される。1048は底部で1047と同一個体である。

08-8区11 N R 出土土器

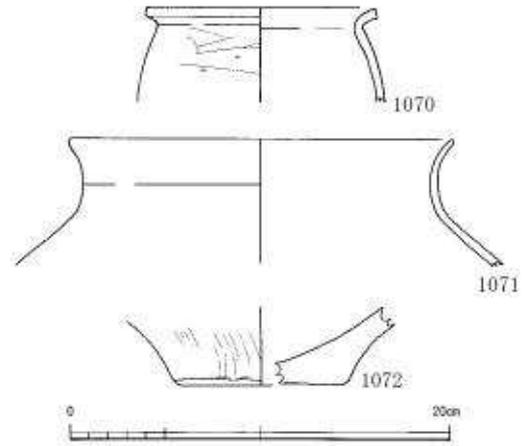
1049は内傾する筒状の口縁部である。細頸壺の口縁部か小型の蜻壺と思われるが、作りは丁寧である。

07-1区01 S K 出土土器

1030は広口壺の頸部で、櫛描き直線文が6条観察される。原体の条数は9本である。1031、1032は高坏の杯部、1031は斜めに開く杯部から内傾気味に立ち上がる口縁部をつくる。口縁端部は内傾する面をつくる。口縁部外面に3条の凹線文を巡らせる。1032は、浅い皿状の杯部から内彎して短く立ち上がる口縁部を持つもので、口縁端部は肥厚して外傾する面をつくる。口縁部外面に1条の凹線文を巡らせる。1031、1032の胎土は黄白色で和泉地方のもの。1033、1034は広口壺の口縁部。1033は短く水平近くまで折り曲げた口縁の端部を上下に拡張させる。頸部は粗いハケメ調整である。1034は短く立ち上がる頸部に水平近くまで外反する口縁部をつけ、口縁端部は肥厚して外傾する面をつくる。器面は摩耗しているが、ナデ調整であろう。1035、1036は甕の口頸部、1035は口縁部を外反させ、端部は丸くおさめている。やや稚拙な作りである。1037、1038は壺の底部、1039～1042は甕の底部か。1100(図版54)は水差しの把手である。

08-1区11NR出土土器

1070はわずかに膨らむ胴部から「く」字形に外反する口縁部をつくる甕で、口縁端部は強くナデて面をつくる。体部外面は横方向のケズリが観察される。内面はナデ。口径12.0cm。1071は球形に膨らむ胴部から短く垂直に立ち上がる頸部から外反する口縁部をつくる壺で、口縁端部は丸くおさめる。体部は摩滅し、調整は観察できない。1073は甕の底部で、外面は粗いハケメが観察される。



第37図 08-1区11NR出土土器
実測図

第5節 縄文時代の遺構

2002年からの調査で、南東端の02-3区で縄文時代後期と晩期の土坑、北西部の02-4区、06-1区で中期末頃の遺構が検出されている。07年は調査範囲が狭く、北西部の07-4区、07-9区、07-21区で縄文時代中期の土器、南東端の07-5区では晩期の土器が出土したが、遺構は確認できなかった。08年調査では08-4区、08-11区、08-14区で中期末の遺構、08-8区で晩期の河道を検出した。また、08-2区、08-4区では遺構を確認することはできなかったが、中期前半に遡る土器が出土している。

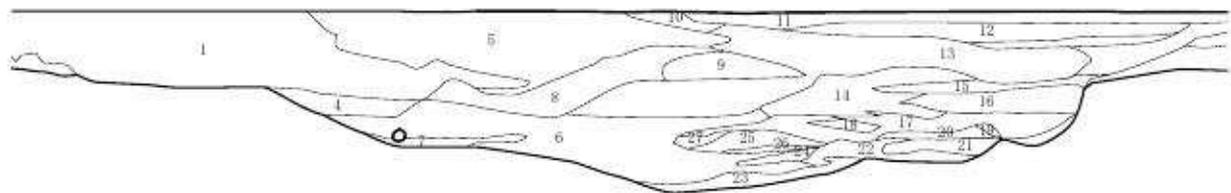
縄文時代中期末の遺物は、西北端の08-4区では弥生時代後期末から古墳時代の生活面であるT.P.17.5m前後に堆積する黄灰色粘質土から16.9mを下面とする灰黄褐色シルトまで、約0.6mの厚さに堆積する各層で縄文時代中期末の時期を中心とした遺物が出土している。

各層間で遺物の時期に変化はなく後期や晩期の土器はほとんど含まない。この時期の土器が出土するのは08-14区のX = -167880mより北西側の地区、07-4区、07-9区、07-20区、07-21区、08-1区、08-4区、08-11区である。08-8区より南東ではほとんど出土していない。

一方、後晩期の土器は08-3区、08-14区以東のT.P.18.5m前後の以下からT.P.17.5mに堆積する灰黄褐色砂質土や褐灰色砂質土から主に出土しているが、特に08-8区で検出した02N Rで大量に出土している。後晩期に属する遺構は、この河道のみであった。

晩期の遺構

08-8区02N R (第38図 付図)



- | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1 10YR6/2 灰黄褐色粘土が混ざった砂礫層 | 15 10YR5/2 灰黄褐色砂-シルト |
| 2 10YR6/3 砂礫混じりにぶい黄橙色土 | 16 5Y5/1-6/1 灰色シルト-微砂 |
| 3 10YR5/6-7/8 明黄褐色-黄橙色粘質土 | 17 5Y4/1 灰色シルト-粘質シルト |
| 4 10YR7/2 にぶい黄橙色土混じりの砂礫層 | 18 10YR7/4 にぶい黄橙色砂 |
| 5 10YR6/2 灰黄褐色砂 | 19 10Y7/1 灰白色シルト |
| 6 7.5YR6/8 橙色砂-砂礫 (鉄分沈着) | 20 7.5Y4/1 灰色シルト |
| 7 10YR5/2 灰黄褐色粘土・N7灰白色微砂-細砂縞層 | 21 5Y7/1 灰白色微砂 |
| 8 10YR6/2 灰黄褐色砂 | 22 7.5Y4/1 灰色粘土 |
| 9 2.5Y6/2 灰黄色砂 | 23 7.5Y4/1 灰色粘土 (植物遺体層) |
| 10 10YR6/3 にぶい黄橙色微砂 | 24 7.5Y4/1 灰色粘土 (植物遺体層) |
| 11 10YR7/6 明黄褐色砂質土 (弥生の地山) | 25 5Y7/1 灰白色微砂-10YR7/6 明黄褐色微砂 |
| 12 10YR8/6 黄橙色砂質土 | 26 10YR4/1 褐灰色腐植土・10YR5/1 褐灰色粘土互層 |
| 13 2.5Y7/3 浅黄色砂 (微砂-細砂) | 27 10YR7/2 にぶい黄橙色微砂-2.5Y5/1黄灰色微砂 |
| 14 10YR6/2 灰黄褐色砂-シルト | |

第38図 08-8区02N R断面図

調査区のほぼ中央、Y = -52900m付近を南から北に流れる河道である。西側肩は灰白色シルト質土を浸食しており、肩部は明確である。しかし、東側肩部は堆積砂が地山の砂層や砂質シルト層を抉って溶け込んでおり、河道と地山を峻別できなかつた。11NRに切られる北端は、地山の明黄褐色シルト質土を浸食して流路を形成している。幅は東肩が判然としないが、8m以上と推定される。埋土は上層が灰黄褐色から浅黄色など、やや酸化して黄色系に変色した砂混じりシルト層や粘質シルト、砂礫層、中層は灰黄色やにぶい黄色を発するシルトや砂層、砂礫層である。下層は拳大までの河原石や礫を含む砂礫層や大量の種子や炭化した植物遺体を含む灰オリーブ色や黒褐色を発するシルト層が堆積している。また、川底で直径0.2m～0.3mの流木も数本観察された。

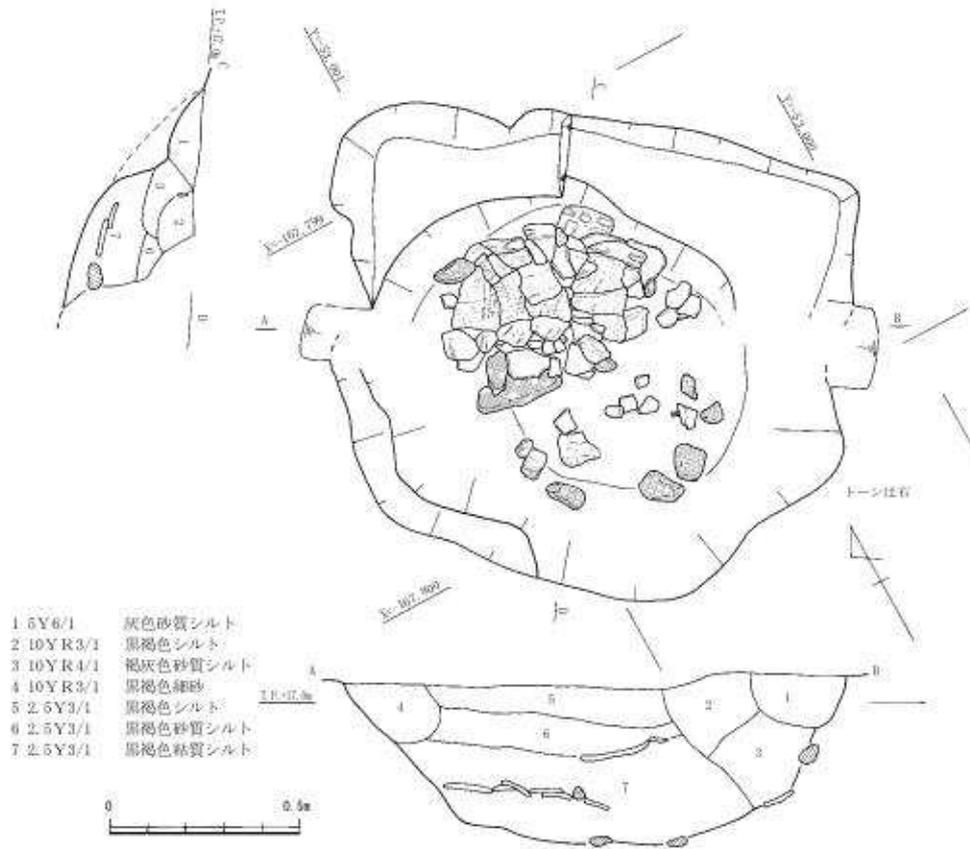
主に砂礫層から縄文時代後期後半から晩期前半までの土器が大量に出土している。河道が一気に地山を浸食し、短期間で流路が埋積されたのか、上層と下層で遺物の時期に変化はないようである。また、土器は大型破片も多く、器壁の摩耗も少ないので、近辺に集落があったことは間違いないであろう。

中期末の遺構

08-1区、08-4区、08-11区、08-14区ではT.P.18mから17.8mで検出される古墳時代の溝や河道、弥生時代の河道掘削後、灰黄褐色粘質土や褐灰色粘土、黄橙色土、黄褐色土を10～15cmずつ掘削し、平面を精査して遺構の有無を確かめながら徐々に調査を進めた。掘削中、灰白色の焼土がまとまって出土する場所もあり、また、ピットや土坑を検出した場所があった。時間的な制約があり、写真撮影や図面作成は遺構周辺だけに限定せざるを得なかつたが、貯蔵穴や柱痕を残すピット、土坑、焼土塊等を検出した。

08-4区03SK

08-4区では縄文層を掘削中、土器が5、6片から10数片程度まとまって観察される場所があり、周囲を精査して写真撮影を行い、検出状況を図化した。遺構と思われる土壌変化の見られる所は無かつた。3度目の掘り下げ中に、古墳時代河道(03NR)下の壁際で、土壌が黒褐色化している所が観察された。側溝により一部壊してしまつたが検出面で精査したところ、歪な楕円形の輪郭が観察され、黒褐色から暗褐色シルト質土で充填されていた。遺構は壁面より北側に広がっていたが、地表面から2m以上掘り下げたため検出した半円部分を調査し、その後に壁面を崩し、遺構全体を検出することとした。土坑埋土は黒褐色シルト質土で、小石や10cm程度までの川原石が混ざっていた。この埋土を約15cm掘り下げたところ、縄文土器が重なって検出された。洗浄して観察したところ、上の土器片に縄文が見え、下の土器は内面が見えていたので、横に寝かせて置かれた土器が押しつぶされたものと判断できた。この土器は出土状況を図化して取り上げ、その後に底まで掘り下げて平面を図化した。次に地表から重機で、3m×1m程度盛土を除去して広げ、土坑全体の輪郭を確認した。土坑の大きさは長径1.35m、短径1.25mの歪な形状で、深さ0.45mを測った。掘形は碗形で、傾斜は50～70°、底面も浅く窪んで



第39図 08-4区03SK平面図・断面図

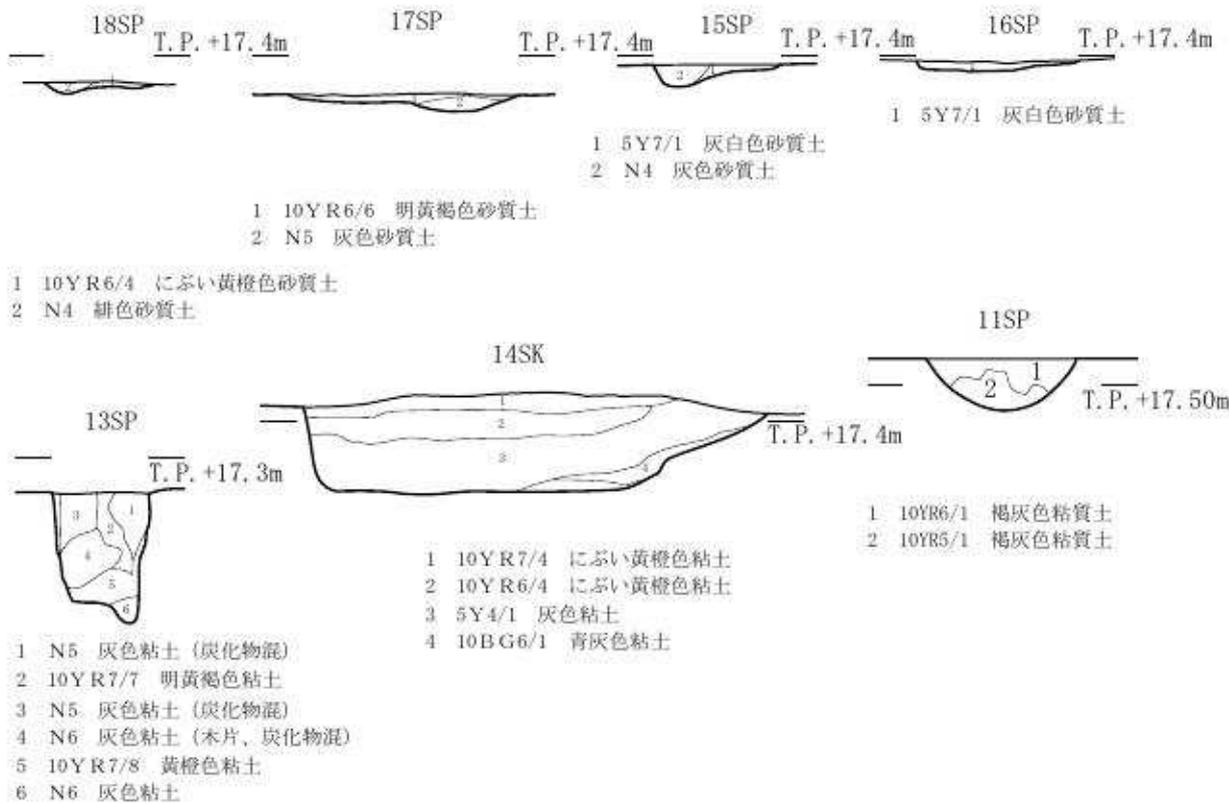
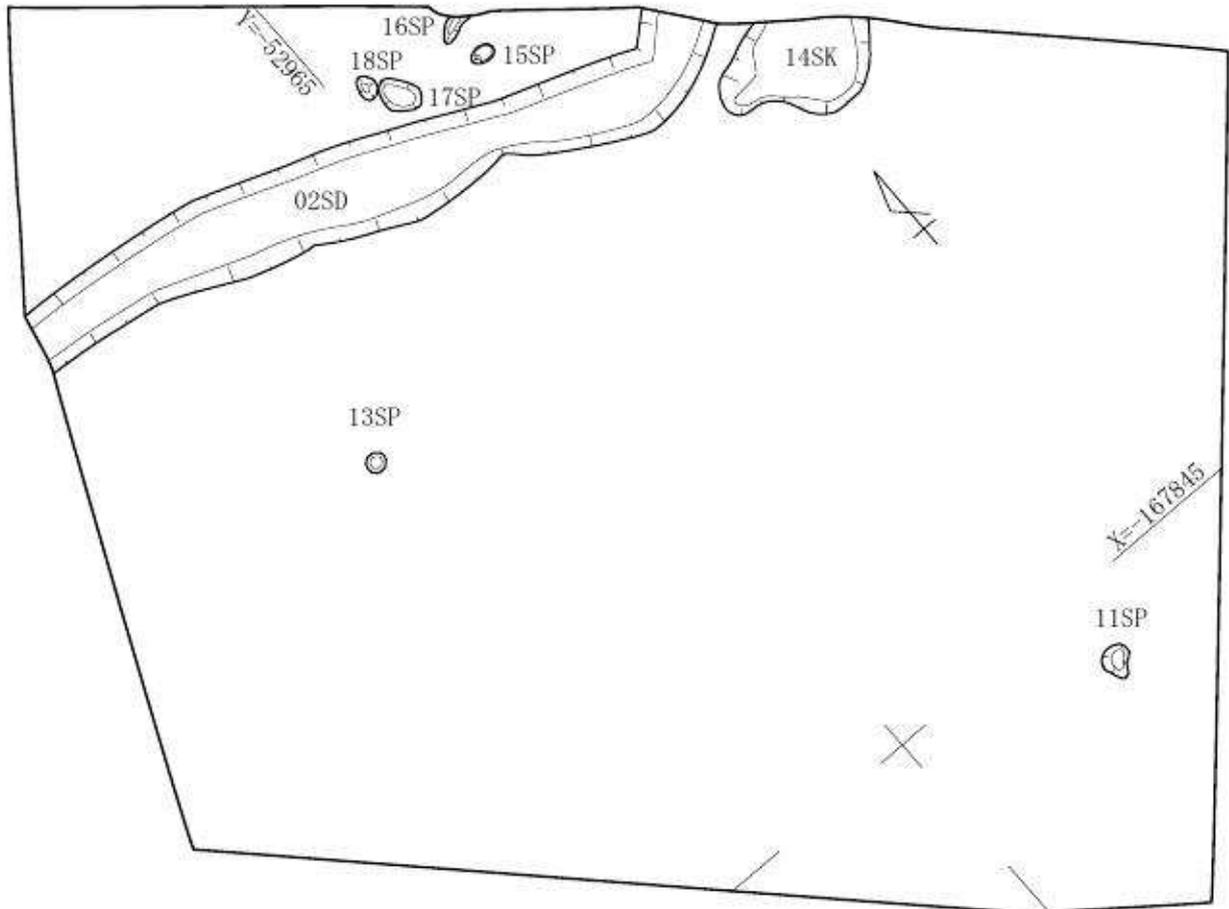
いて、平坦面は狭い。拡幅部で埋土を観察したところ、平面では灰黄色土が円形や方形のブロック状、断面では黄褐色土が掘形に沿ってレンズ状に堆積した後、灰黄色土がブロック状に堆積しているように観察された。土器は完形のもの以外に数個体分の破片が出土した。埋土は黒褐色に近いので有機物を含んでいたと思われ、細かく潰して土以外の物の検出に努めたが、小石以外は認識できなかった。

08-11区の遺構

全長250mを測る調査区の西よりに位置する地区である。耕作土直下のT.P.18.2m前後の高さで古墳時代から中世までの遺構が検出される。この面から下は、主に黄橙色や黄褐色の粘質土やシルト質土で、1m～1.4m近く堆積している。この層内から縄文時代中期末頃の土器が出土しているが、出土土器は出土層位による時期差は殆ど認められない。T.P.16.8mより下は黄灰色から灰白色シルトや砂礫層で、含水率が高くなる。20cm前後掘り下げたが遺物は出土しなかった。

縄文時代の遺構は黄橙色から黄褐色粘質土を掘り下げ、精査を繰り返している中で、主にT.P.17.3m～17.4mの高さで確認され、ピットや土坑を検出した。

11SPは他のピットより高く、T.P.17.60付近で検出した扇形に近い形状の土坑で、大きさは0.45m×0.45m、深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色粘質土であった。この高さでは他に遺構を見つけられなかった。12SPは直径0.25m、深さ0.08mを測る浅い円形ピットで、埋土は灰白



第40図 08-11区平面図 11～13SP、14SK、15～18SP断面図

色粘質土、にぶい褐色粘質土、橙色粘質土であった。13 S Pは長径0.3m、短径0.2mを測る楕円形のピットで、深さ0.35mを測った。埋土は灰色粘土や明黄褐色粘土、黄橙色粘土であった。14 S Kは東西1.9m、南北1.3m以上を測るいびつな円形の土坑で、深さは0.23mを測った。埋土はにぶい黄橙色粘土や灰色粘土であった。土坑内から遺物は出土しなかった。15 S Pは長径0.35m、短径0.25mを測る楕円形のピットで、深さは0.05mを測った。16 S Pは長径0.45m、短径0.20m、深さ0.03mの浅い楕円形の土坑である。17 S K長径0.6m、短径0.3m、深さ0.06mを測る浅い丸みを持った三角形の土坑である。18 S Pは長径0.3m、短径0.15m、深さ0.04mの浅いピットで埋土はにぶい黄褐色砂質土と灰色砂質土である。

08-14区

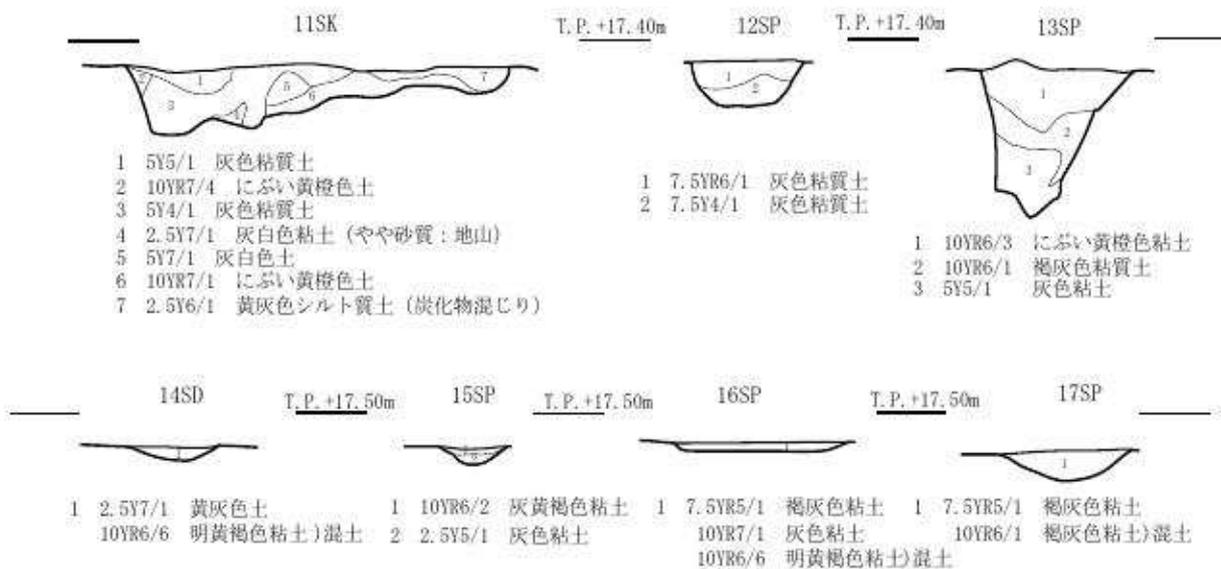
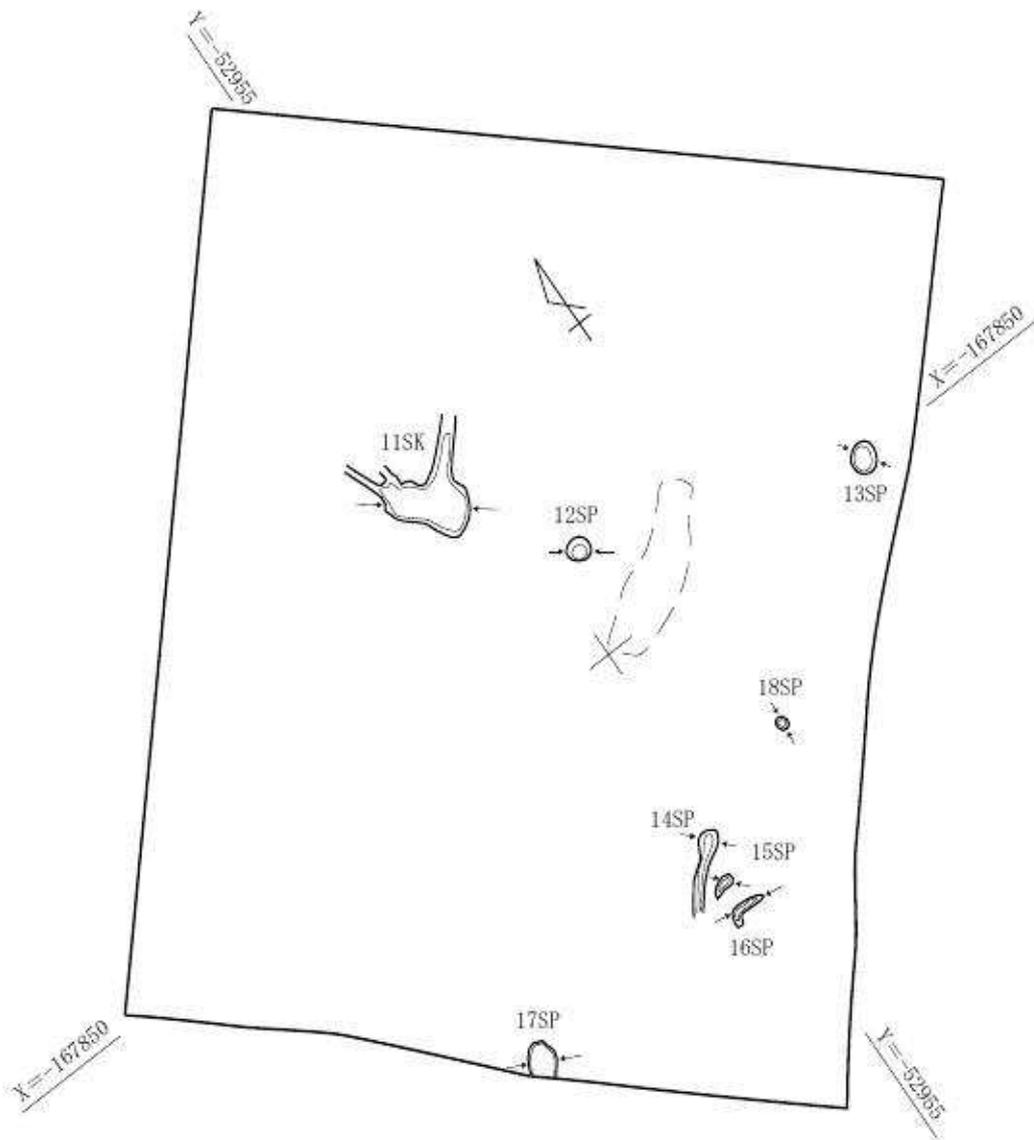
この地区のX=-167850m、Y=-52955mを中心としに8カ所の遺構を検出した。検出面の高さは17.35mから17.40mである。主な遺構は焼土塊や炭化物が集積した土坑や溝状遺構、ピットなどがある。

11 S Kは不定型な土坑で長径1.15m、短径0.7mを測る。2方向に溝が短く伸びる。深さは0.2mである。埋土は灰色粘質土や黄灰色粘質土で、上層は炭化物粒を含んでいた。遺物は出土していない。12 S Pは直径0.35m、深さ0.13mを測る円形のピットである。埋土は濃さの異なる灰色粘質土であった。13 S Pは直径0.45m×0.4mの円形ピットで、深さは0.4mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土、褐灰色粘質土、灰色粘土で、底部中央が窪んでいる。柱跡か。14 S Pは勾玉形の浅い溝で、深さは0.05cmを測った。埋土は黄灰色土と明黄褐色粘土が混ざった土であった。15 S Pは長径0.4m、短径0.2m、深さ0.05mを測る楕円形のピットである。16 S Dは「く」字形に屈折する小さな溝で、全長径0.7m、幅0.15m、深さ0.03mを測る。埋土は褐灰色粘土に灰色粘土、明黄褐色粘土が混ざった土であった。17 S Kは楕円形の土坑で、一部調査区外に伸びている。長径0.5m以上、短径0.35m、深さ0.08mを測る。埋土は褐灰色粘土であった。18 S Pは直径0.2m、深さ0.05mを測る浅いピットである。

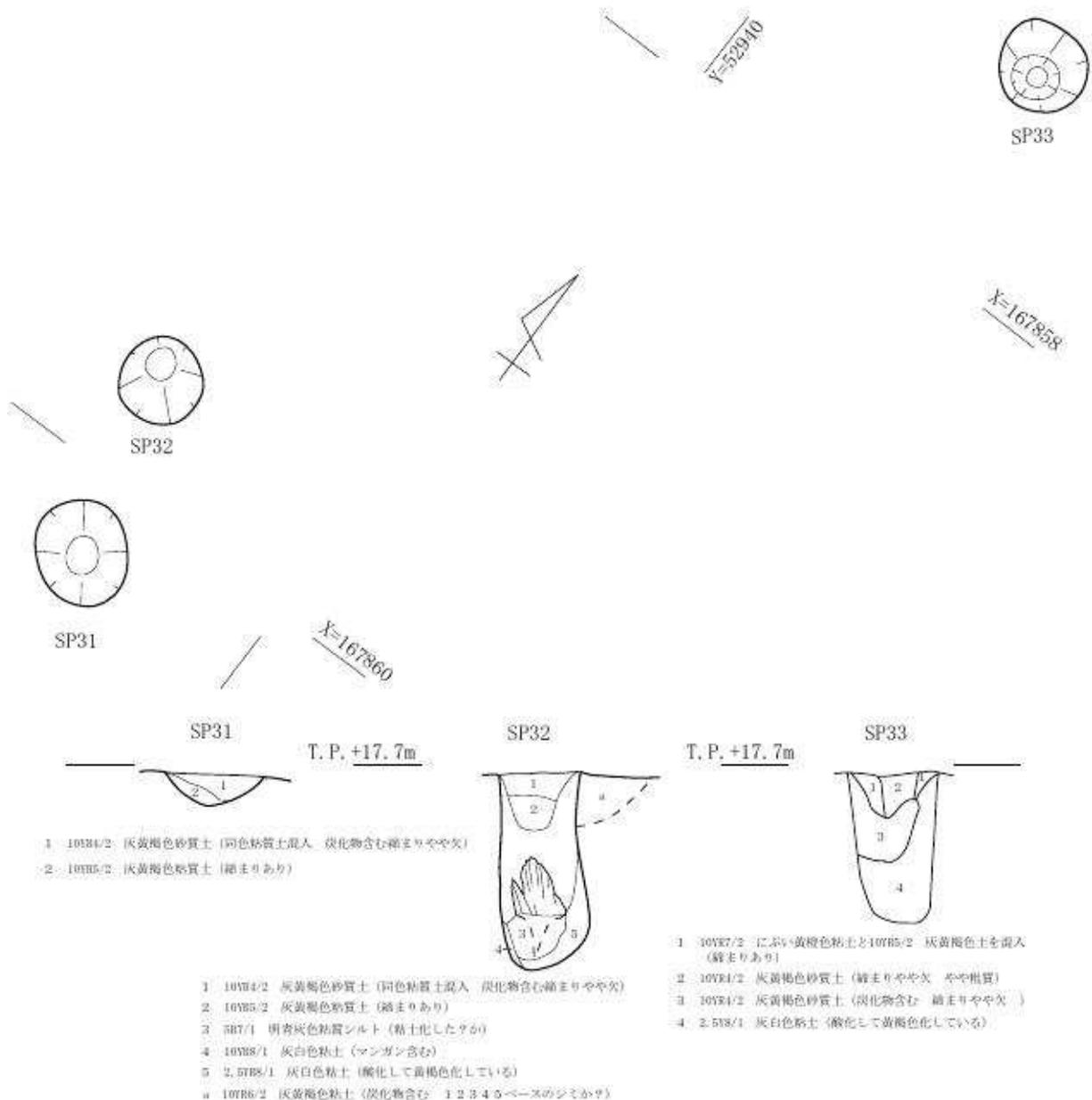
ここで取り上げた各遺構から遺物は出土しなかった。

この地区では主に中期末の土器が出土し、後期以降の土器は出土しなかった。

上記遺構群のやや南東側、X=-167857m～X=-167861m、Y=-52940m付近で検出した31 S P～33 S Pは、T.P.17.7m前後の高さで検出したピットである。31 S Pは直径0.30mの円形ピットで深さは0.1mを測った。埋土はにぶい黄橙色粘土であった。32 S Pは直径0.3mを測る円形のピットで、深さは0.6mを測った。埋土は灰白色粘土やにぶい黄橙色粘土で坑底部に腐食して脆くなっていたが柱痕が残っていた。33 S Pは直径0.25m、深さ0.45mを測る円形のピットで埋土は下層が灰白色粘土、中層が灰黄褐色砂質土、上層は砂礫混じりの灰黄褐色砂質土であった。32 S P、33 S Pの下層に堆積する灰入り粘土は材木が腐食土壌化した物である32 S Pと33 S Pは約2.8m離れており、他に同様の深さを持つピットを確認できなかったが、建物の柱と考えられる。



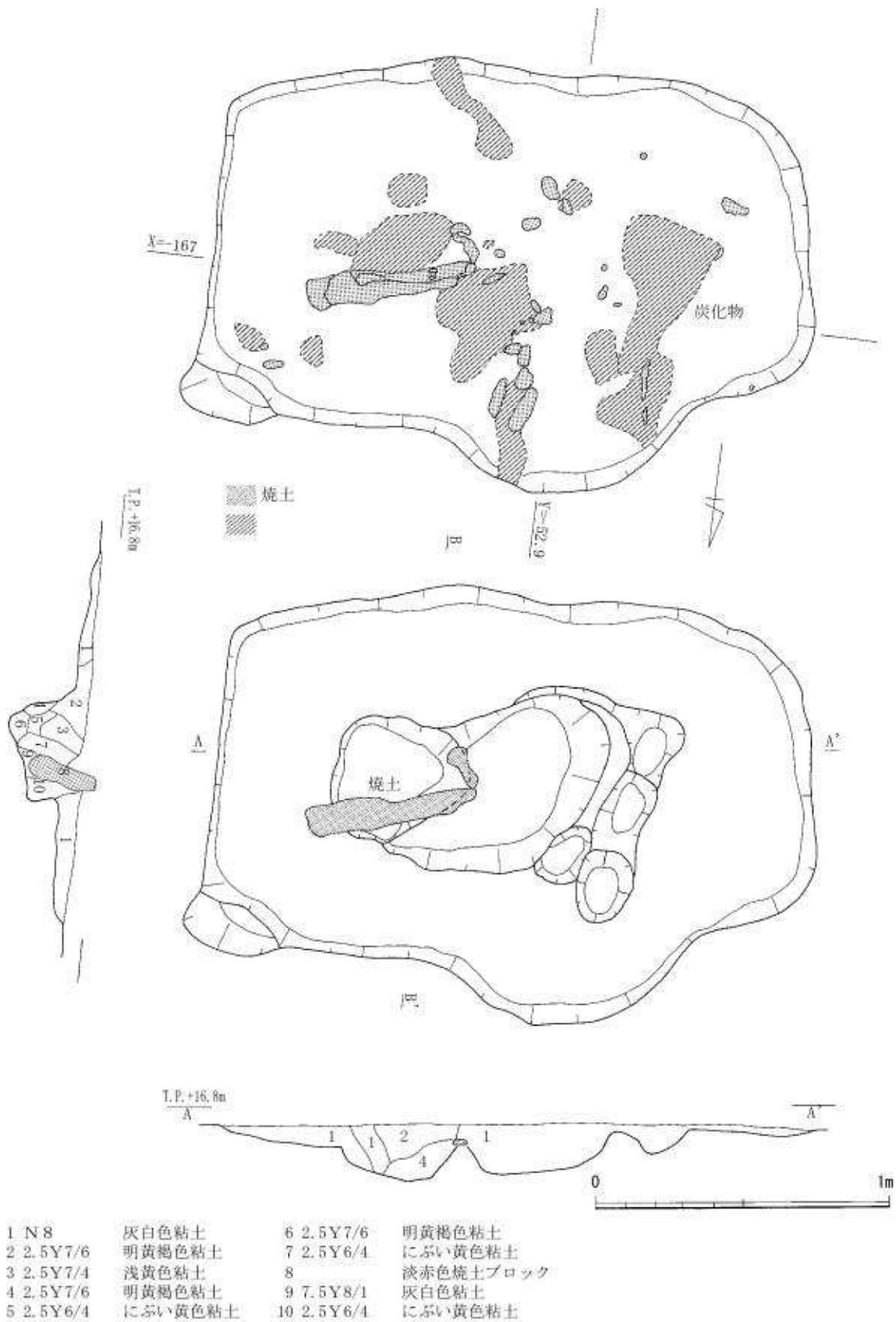
第41図 08-14区11SP~17SP断面図



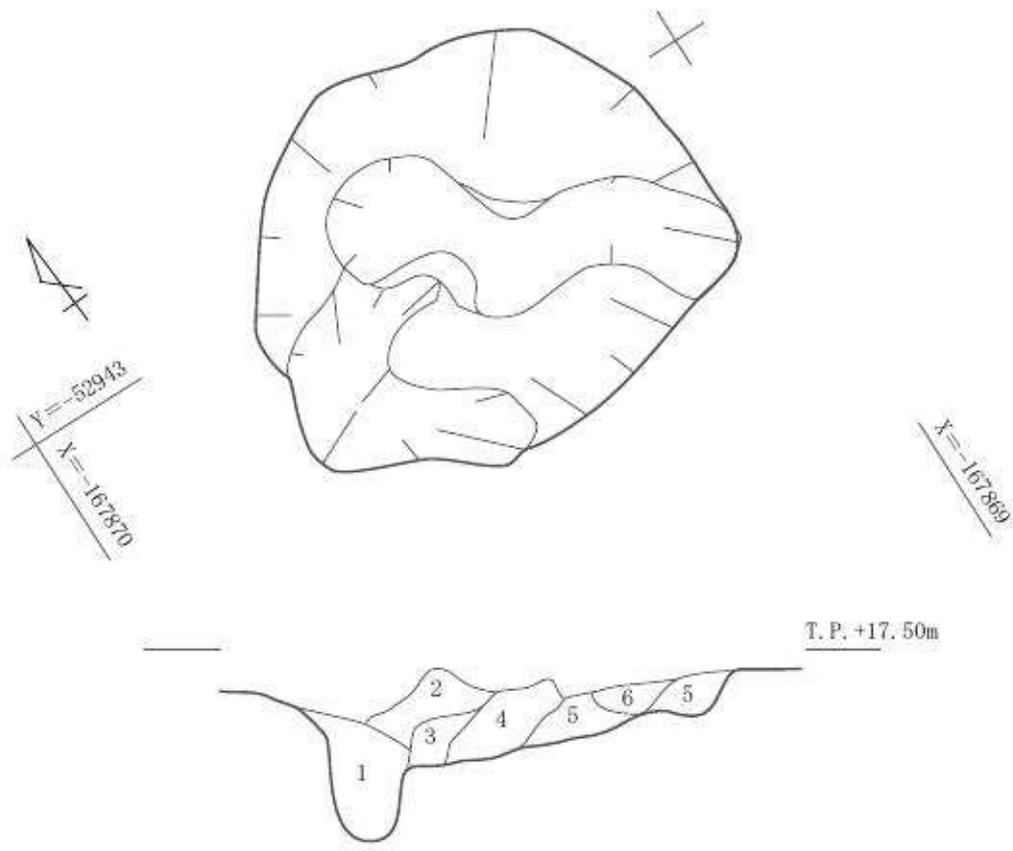
第42図 08-14区31SP～33SP平面図・断面図

08-14区41SX

08-14区の縄文層の最下層、T.P.16.75m前後で検出した。縄文層を掘削し平面精査中に、10～30cm程度の焼土塊が散乱し、土壤中に炭化物粒が混入し、周囲の土壤が少し汚れていたことから、土坑の輪郭を確認した。平面形は楕円と長方形を折衷したような形状で、長辺2.1m、短辺1.45m、深さは約0.1mで、地山のシルト質土を浅く掘り窪めた程度であった。土坑中央からやや東寄り、やや赤みがかかった灰白色焼土塊が長径0.50m、短径約0.40mの歪な方形に掘り窪めて立てたように埋められていた。その周囲に散乱していた焼土は底面からは遊離した状態であった。この焼土塊の西側床面は不定形に浅く掘られていたが、埋土は上層と変化がなかったが、焼土塊や炭化物粒が周囲より多く散乱していた。焼土は出土時から綺麗な灰白色で甕のように二次焼成による炭や煤の付着痕は観察できなかった。



第43図 08-14区41 S X (炉址) 平面図、断面図



- 1 7.5YR7/6 橙色粘土+2.5Y8/1灰白色粘土混合
- 2 5YR5/6 明赤褐色焼土 (やや硬質 炭化物含む)
- 3 7.5YR7/6 橙色粘土+2.5Y8/1灰白色粘土混合 (焼土の混入少なめ)
- 4 5YR5/6 明赤褐色焼土 7.5YR7/6 橙色粘土を若干混入 (上部は黒褐色に変色)
- 5 7.5YR7/6 橙色粘土 焼土・炭化物および灰状の粘質シルト 7.5YR8/2灰色粘土
- 6 5YR7/6 橙色粘土 (炭化物含む)

第44図 08-14区42S K平面図・断面図

08-14区42S K

X = -167869.5m、Y = -52943m付近で検出した焼土塊を立てた土坑である。土坑は長径0.65m、短径0.55m、深さ0.25mを測る。

焼土は長さ0.5m最大幅0.2mで、高さは0.3mで、0.1mほどが検出面より上に出ていた。焼土の北側には炭化物がU字形に幅10～15cmの範囲で固まっていた。焼土は灰白色から淡赤色を發し、非常に精良な、砂を殆ど含まない粘土である。

第6節 縄文土器

府中遺跡からは縄文時代中期～晩期の土器が出土している。

中期前葉～中葉では船元Ⅰ式が08-2区、船元Ⅱ式が08-14区から出土している。両調査区は互いに隣接している。船元Ⅰ式・船元Ⅱ式土器については泉拓良氏の編年案（泉2008）を参考に記述する。つづく船元Ⅲ式～里木Ⅱ式土器は出土していない。

次のまともは中期後葉の北白川C式である。08-1区・08-4区・08-11区でまとまって出土している。これらの3ヶ所の調査区も隣接しており、中期前葉～中葉の土器が出土する地点の北西側（海側）である。北白川C式土器については、泉拓良氏による北白川追分町遺跡出土縄文土器の分類によって記述する（泉1985）。後期前葉の土器は出土していない。

後期中葉元住吉山Ⅰ式土器以降は各型式が出土している。元住吉山Ⅰ式土器～宮滝Ⅱ式土器については千葉豊氏（千葉2008）岡田憲一氏（岡田2008）の編年案を参考に記述する。（大野）後期後葉以降の土器は07-5区・08-5区・08-6区・08-7区・08-8区・08-9区・08-10区・08-14区・08-15区・09-1区から出土した。特に08-8区において集中的に出土している。

各調査区からは元住吉山式～長原式までの各時期の土器が出土しているが、滋賀里編年でのところの滋賀里Ⅲ式（加藤ほか1973）、すなわち秋篠・山稜段階（岡田1998）、篠原式（家根1994）がもっとも量が多く主体であると考えられる。（妹尾）

滋賀里Ⅰ式以降の土器型式

滋賀里Ⅰ式（向出遺跡Ⅲ-4期）

体部に2つの段をもうけ、胴部から頸部にかけて内湾し、頸部が外屈、口縁部が内屈する。器面にみられる描線は沈線を主体とする。器面調整は巻貝が主体である。

滋賀里Ⅱ式

器面にみられる描線は沈線を主体とする。口縁部はナデ、胴部以下は巻貝による調整が主体である。

古相（向出遺跡Ⅲ-5期・西坊城遺跡Ⅰ期） 体部に2つの段をもうけるが、屈曲が弱まる。

新相（西坊城遺跡Ⅱ期） 胴部から頸部にかけて屈曲をもち、外反した頸部をへて口縁部にいたる。口縁部内面に抉りが入る。

滋賀里Ⅲa式（秋篠・山稜段階）

胴部から頸部にかけて屈曲をもち、頸部が内湾し口縁部が外反する。頸部に指による強いナデ痕が残り、口縁部と頸部の区画を意識させる。器面調整は二枚貝条痕を基調とする。古相は口

縁部がナデ調整され、口縁部内面に沈線をもつ資料が見られる。新相になるにしたがい指ナデ痕は不明瞭となり、器面全体に二枚貝による調整がされる傾向をもつ。

篠原式（滋賀里Ⅲb式並行）

胴部から頸部にかけて屈曲をもち、頸部が内湾し口縁部が外反する。胴部調整は削りを主体とし、口縁部は二枚貝によって調整される。古相は口縁端部に刻目を持たない。また新相に向かうほど口縁部の調整は不明瞭となる。

古段階 口縁端部に刻目をもたず器面全体に二枚貝条痕調整の見受けられるもの。

中段階 口縁端部に刻目をもち口縁部に二枚貝条痕調整、胴部にケズリ調整の見受けられるもの。

新段階 口縁端部に刻目をもちに口縁部にナデ調整、胴部にケズリ調整の見受けられるもの。二枚貝条痕調整がみられなくなる。

滋賀里Ⅳ式

胴部から頸部にかけて明瞭な屈曲をもち、頸部が内湾し口縁部が外反する。口縁部よりやや下がった位置に凸帯文を巡らし、口縁端部に刻目を施す。凸帯上の刻目は明確であり、D字状のものが多。

長原式

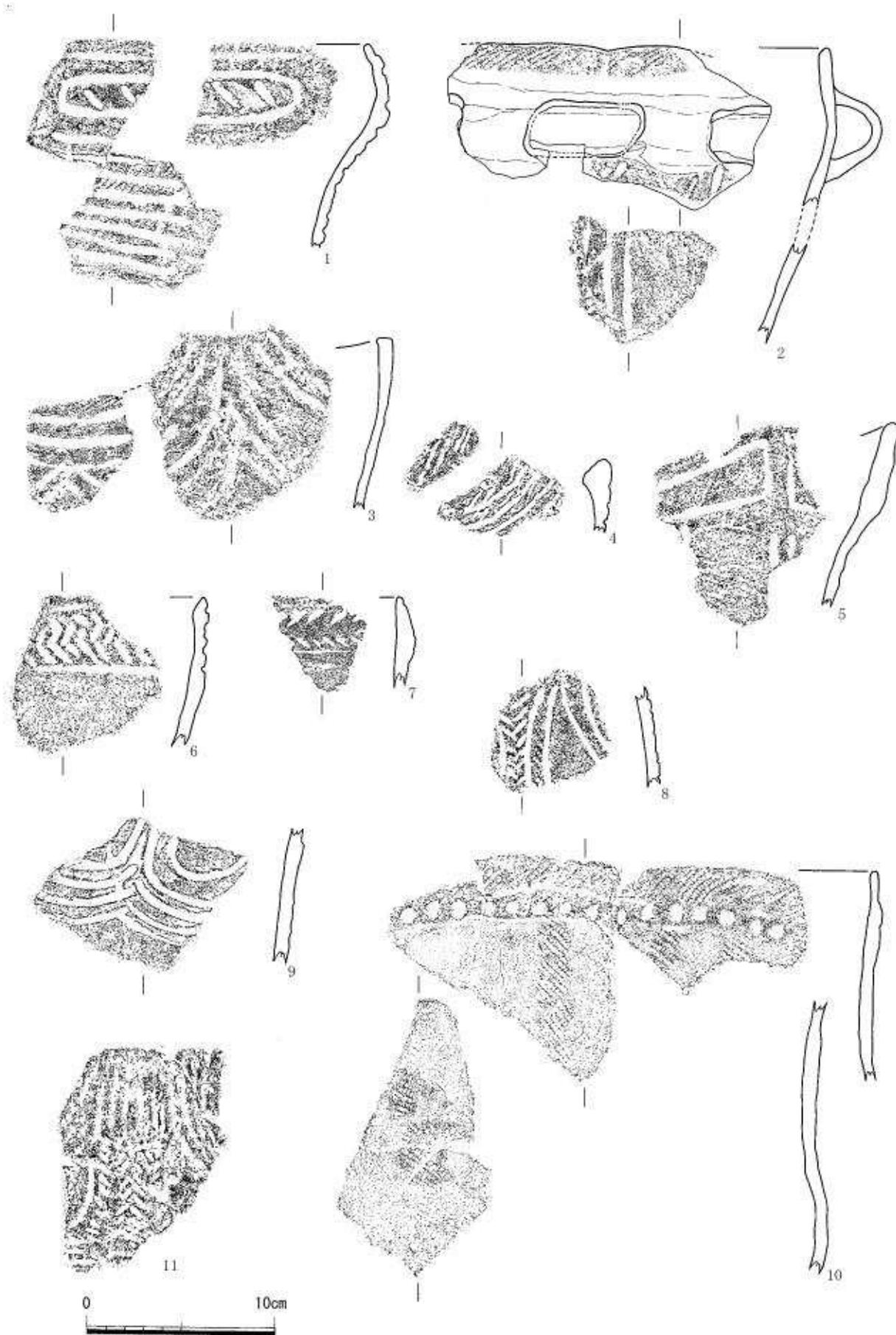
胴部から頸部にかけて屈曲が弱く不明瞭、口縁部の外反も弱まり直行する。口縁部に接する位置に幅の狭い凸帯文を巡らし、口縁端部に刻目は施さない。凸帯上の刻目は軽く小さくなる。（妹尾）

以下、調査区ごとに各時期別出土土器をみていくが、船元式以降、宮滝式までの土器を大野が、滋賀里Ⅰ式以降、長原式までの土器を妹尾が、主として執筆した。

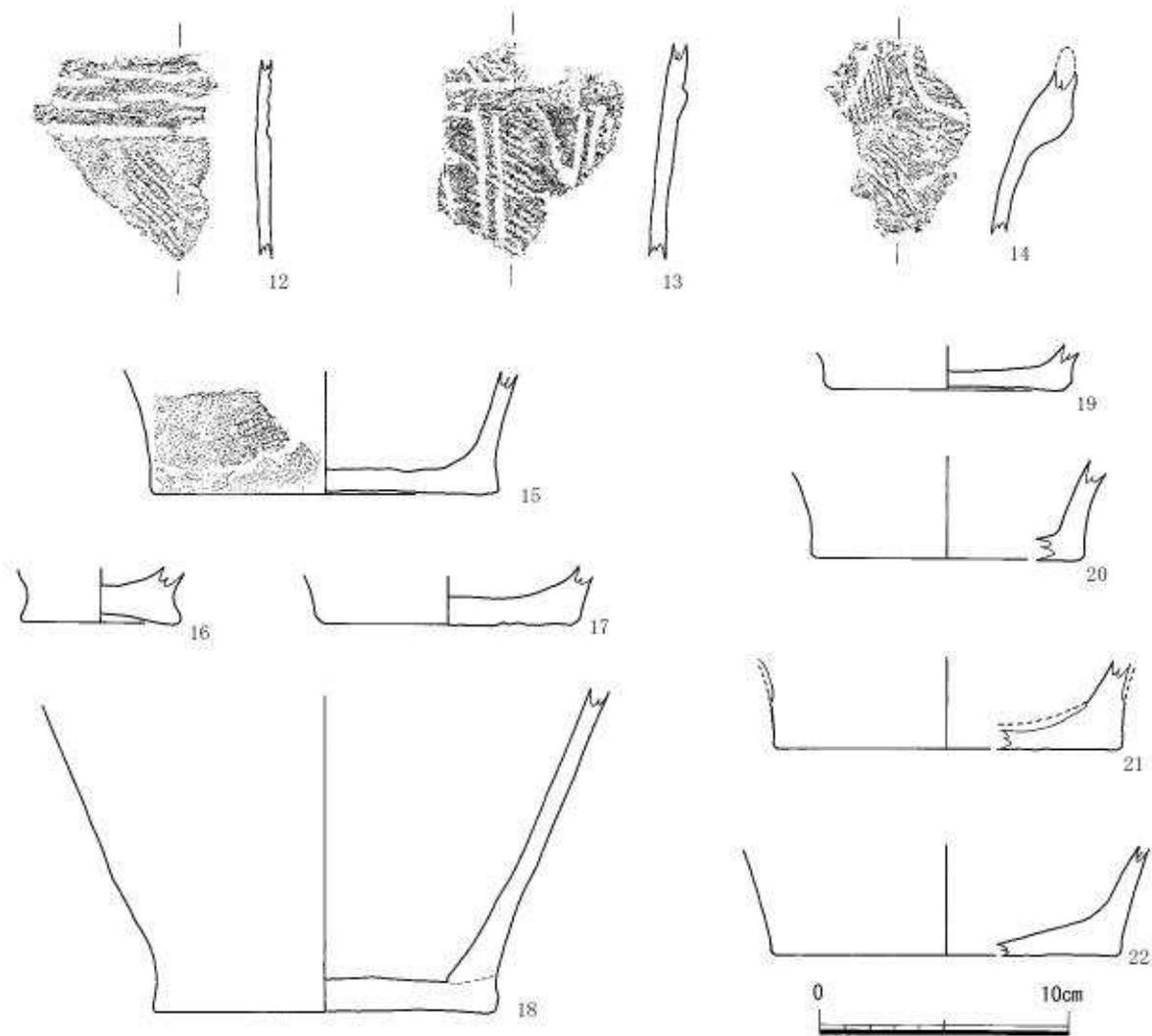
08-1区出土土器（1～22）

北白川C式（1～22）

1・5～7・12～14は深鉢A類である。1は緩やかなキャリパー形を呈する口頸部片である。口縁部文様帯に隆帯とその内側の沈線で横長楕円形区画文をつくり、区画内に左上がりの短沈線を施文する。この区画文の向かって左側にはやや大きめの円形と思われる文様があるようだ。頸部には横方向の太い短沈線を数条施文し、一部にLRの縄文を施文しているようだ。これと同一個体の可能性があるのが12である。12は横方向の太い短沈線の下部に縦方向のLR縄文を間隔をおいて施文している。5は波状口縁深鉢で、口縁部文様帯には隆帯と沈線による横長方形の区画文を施文している。区画文は波頂部から垂下する隆帯で区切られ、その下の頸部には2条の垂下する沈線を入れている。また頸部には縦方向のLRの縄文を施文しているようだが、遺存状況は芳しくない。6・7は口縁部と頸部の境界がやや曖昧になっている。いずれも沈線で口縁部



第45図 08-1区出土縄文土器1



第46図 08-1区出土縄文土器2

に横方向の区画を作り、その内に、6ではジグザグ状の、7では矢羽根状の短沈線を施文している。13は口縁端部を欠失しているが、隆帯と沈線で作った口縁部文様帯の下半が遺存しているものと思われる。頸胴部には垂下する沈線と間隔をおいた縦方向のLR縄文を施文している。14は口縁端部を欠失しているが、波状口縁になるとと思われる。遺存部分は波頂部直下とみられ、厚く肥厚している。肥厚部の両側には沈線による区画文が認められる。口縁部文様帯には区画沈線の内外にかかわらずLRの縄文が施され、波頂下の頸部には縦方向のLR縄文が施される。

2・10は深鉢B類である。2は口頸部が軽く内湾し、全体として屈曲の弱い深鉢である。遺存する範囲では口縁部は水平である。口縁端部外面にはLRの縄文を横走させる。口縁部から一段下がったところに橋状突起を作る。橋状突起は少なくとも8単位あり、しかも突起の長さ（左右）が3.5cmほどあって、連続するトンネル状を呈している。橋状突起間に本来あるべき楕円形区画文は、文様としては施されておらず、単なる楕円形のスペースとして残っているのみである。胴部文様は遺存する範囲では垂下する3条の沈線のみである。10は主文様が口縁部から一段下がったところの隆帯のみの土器である。隆帯上には押し引き状の円形刺突文を施文している。口縁端部には連続性の悪い横方向のLR縄文を施文し、隆帯以下にはやはり連続性の悪い縦

方向のLR縄文を間隔をおいて施文している。

3・4・8・11は深鉢C類である。4・8は突起状山形部に口縁部文様帯を残している土器である。4はLR縄文を施した口縁部文様帯を有し、頸部には口縁部に並行する多重沈線文と縄文を施している。8は山形口縁下部に短沈線の矢羽根状文を有する。3・11は少なくとも突起部では口縁部文様帯と頸部文様帯の区別ができなくなっている。3では口縁部に並行する多重沈線文を施文している。11では突起状山形口縁下部に矢羽根状文様を縦方向に施文している。

9は深鉢胴部下半で、太い沈線で描かれた紡錘状の文様と、その下縁に並行する連弧状文が認められる。

15～22は底部である。中期後葉の土器とみてよいと思われるが、16のみ小型で内底面も平坦でなく、胎土もやや精良で、中期後葉とするには違和感がある。15はLR縄文が底部付近にまで及んでいる。また外底面には人の爪と思われる圧痕が認められる。(大野)

08-2区出土土器 (23～27・39・40)

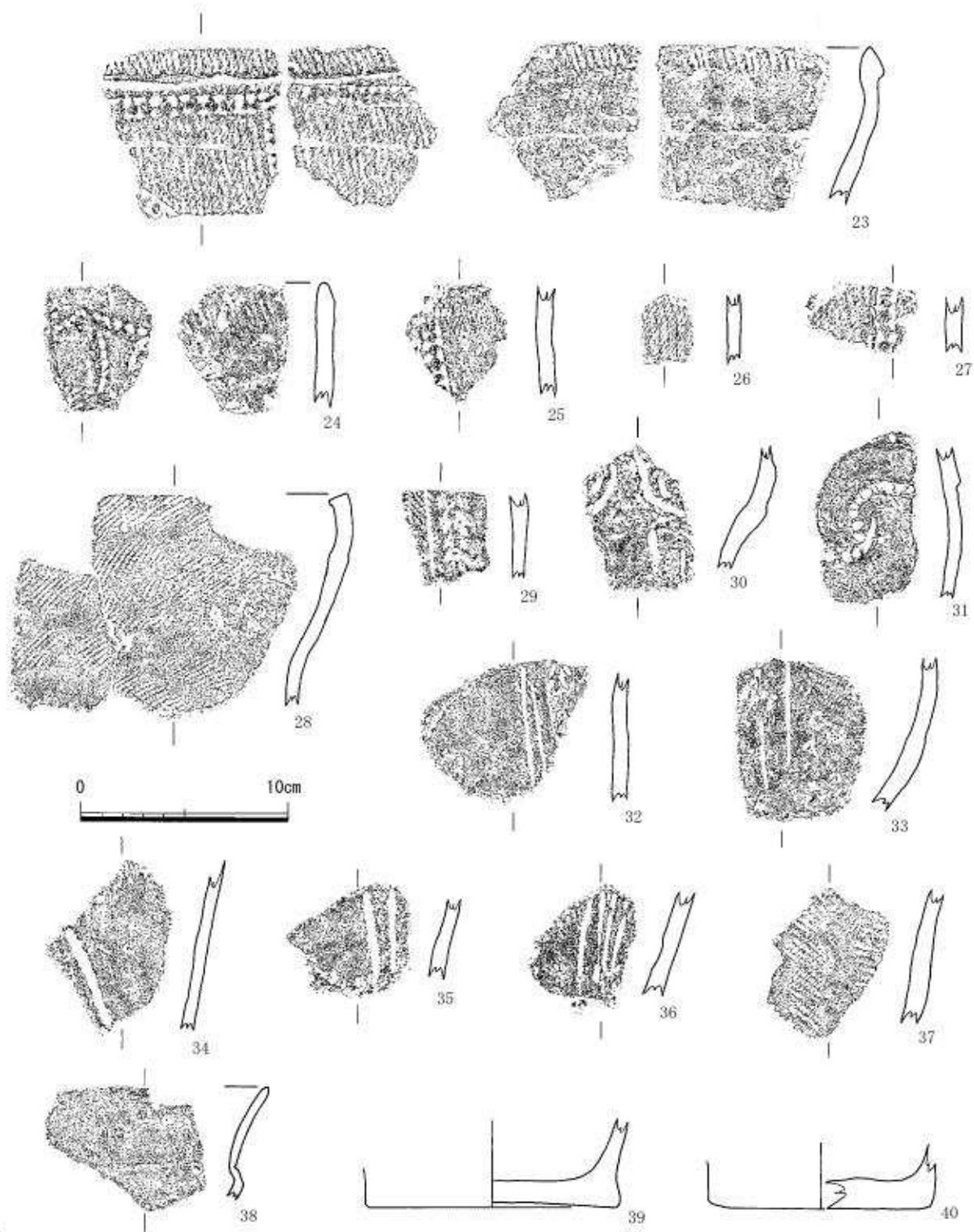
船元I式 (23～27)

中期前葉船元I式土器が少量出土している。

23は口縁部が緩やかなキャリパー状を呈する深鉢で、屈曲がかなり緩やかな形状を示す。口縁部は水平で、口縁部上端外面に平坦な下脹らみの隆帯を貼り付けている。口縁部外面隆帯上、および口縁部内面に、縦長で節の目立つ縄文を施す。同じ縄文が外面にも全体に施される。口縁部直下には、C字形爪形文帯を口縁部に平行にめぐらす。また口縁部のC字形爪形文帯から下に伸びるC字形爪形文帯(左側土器片の右端破断部)、斜行するC字形爪形文帯が認められる。C字形爪形文帯は幅が10mmで、連続した押し引き状に変化している。25・27もC字形爪形文帯が認められ、同一個体の可能性がある。これら土器は押し引き状に変化しているとはいえC字形爪形文帯を有しており、船元I式2期としてよかろう。ただし、口縁部がキャリパー形を呈するとはいえ屈曲が緩やかな点は注意しておきたい。24は屈曲がほとんど認められない口縁部片である。口縁部内面上端には縦長の節の目立つ縄文を施す。外面は遺存状況が思わしくないが、微隆起線で横長菱形と思われる文様を施文し、上下の角を結ぶ微隆起線を入れている。微隆起線には円形刺突文列が伴う。この土器も船元I式2期としてよかろう。26は縦長の節が目立つ縄文が施文されている。船元I～II式とみられる。

北白川C式 (28～37・39・40)

28以下は、38を除いて、中期後葉北白川C式土器である。28は口縁部が弱く内湾する深鉢で、外面にLRの縄文を横位に施文するが、縄文の連続性は悪い。口縁端部は平坦に作り、ここにもLRの縄文を施文する。30は波状口縁深鉢の口縁部付近だが、口縁端部は失われている。口縁部文様帯には沈線による区画文を入れ、頸部には縦方向の沈線を施文する。31は胴部片で、天地左右が不明である。図では破片を縦長においているが逆時計回りに90度回転させて破片を横長に



第47図 08-2区、08-3区出土縄文土器（中期・晩期）

置くほうが適切かもしれない（図版38参照）。文様は幅広（約20mm）で扁平な隆帯を強い弧状に貼り付け、その縁を取り巻くように連続した円形刺突文を入れるものである。隆帯端部は若干盛り上がっている。29・32～36は深鉢胴部片で、縦方向の沈線や縄文・矢羽根状短沈線を施文するものである。37はLRの縄文を縦方向に施文する土器だが、縄文は短い単位で連続的に施文されている。39・40は底部である。いずれも大型で、内底面を広く平坦に作っている。（大野）

08-3区出土土器 (38)

晩期浅鉢 (38)

38は晩期の浅鉢である。(大野)

08-4区出土土器 (41～70)

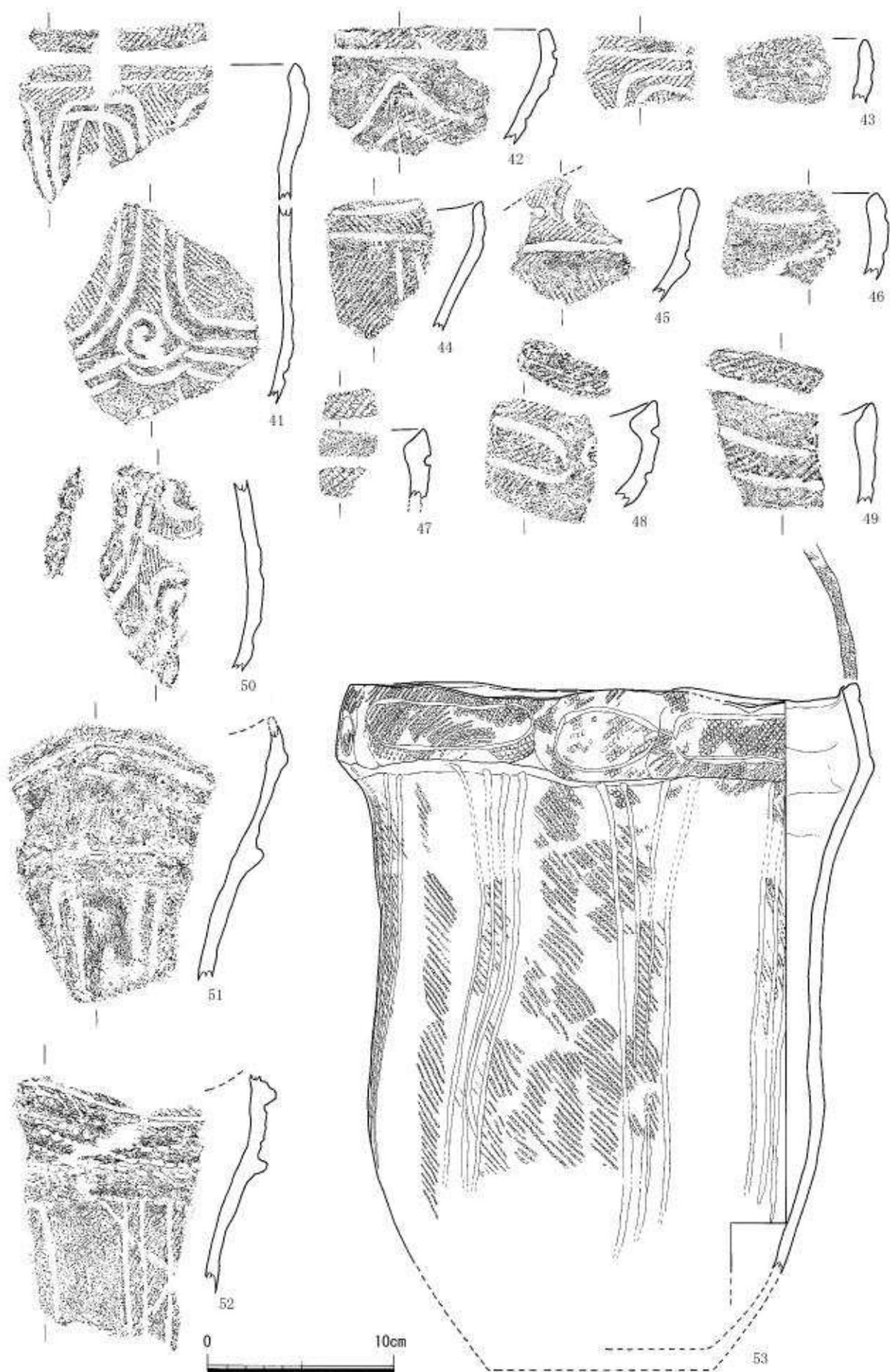
北白川C式 (41～70)

44・45・47～49・51～56・59～65は深鉢A1類～A3類である。

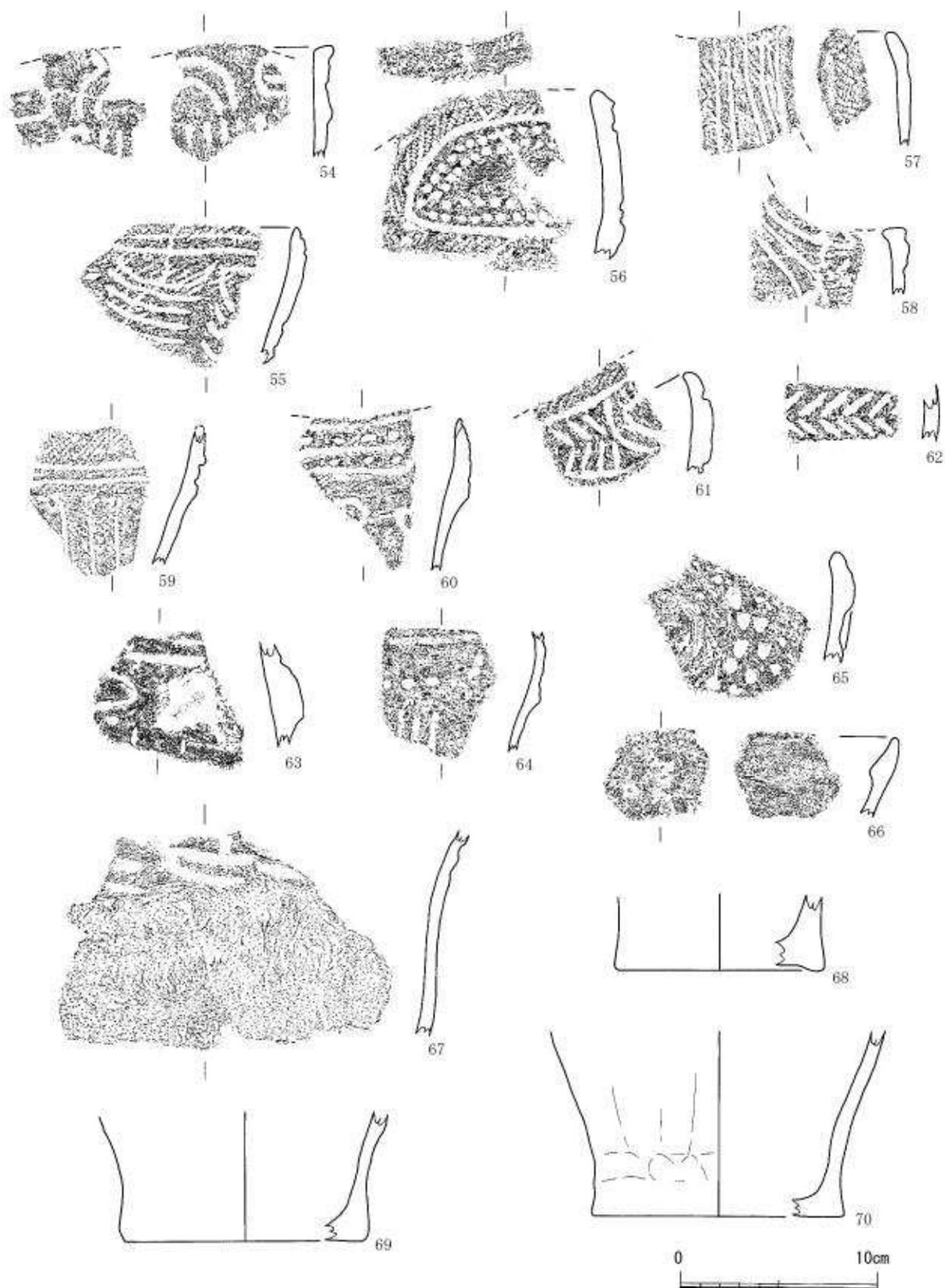
44・45・47～49は波状口縁深鉢で、口縁部が軽く屈曲する土器である。44は口縁部に横長の区画文と縄文を入れ、頸部には垂下する沈線と縦方向の縄文を施文する。縄文はRLである。45は波頂部付近であろう。主文様は円形文もしくは渦巻文とみられる。縄文はLRである。47～49は口縁部と頸部の境界が不明瞭なものである。47と49は同一個体で、口縁端部と沈線間にLR縄文を施す。48は波頂部に横長楕円形文が施されているようだ。

51・52は同一個体とみてよい土器だが、直接は接合しない。口縁部は頸部から軽く屈曲して内折し、口頸部界には隆帯を貼り付けている。また頸胴部界にもしっかりした隆帯をめぐらす、この部分での屈曲はほとんど認められない。口縁部文様帯は波頂部において若干高さを増す。文様はRL縄文とその上から施文した沈線である。頸部文様帯は3条の押し引き状連続刺突文である。刺突文は右側から左側に刺突し、それを連続的に施して左側に進んでいる。3条の連続刺突文のうち2条は口頸部界隆帯に平行に、1条は頸胴部界隆帯に平行に施文されるようだが、遺存状況が悪く断定はできない。頸部には縄文は施されないようだ。胴部は垂下する沈線とRL縄文が施されている。

53は土坑03SK出土の深鉢で、全形がほぼ復元できるものである。口径27.2cm、残存高32.0cm(復元高約37cm)を測る。緩やかに開く頸胴部から口縁部が軽く屈曲して内折する。口縁部文様帯は隆帯と沈線で構成する。口頸部界の隆帯はまだ認められるが、口縁部側の隆帯は痕跡的になっている。主文様は5単位の楕円形文で、この部分は口縁部が小さな波状を呈し、口頸部も頸部側にひろがっている。主文様間は横長楕円形区画文である。楕円形文・横長楕円形区画文とも2～3筆で描かれており、まず上半を右から左に、続いて下半を左から右に、全体として逆時計回りに文様を描いている。口縁部外面には区画の内外を問わずほぼ前面にLR縄文が施されている。口縁端部は平坦に作り、LR縄文が施文されている。頸胴部には垂下する沈線と縦方向のLR縄文が施文される。垂下沈線は4条1単位を基本とし、やや間隔をおいて10単位施文されている。この数は、口縁部文様帯の主文様楕円形文と横長楕円形区画文を合わせた数と同じであるが、必ずしも主文様楕円形文の直下に垂下沈線が配置されているわけではない。頸胴部の縄文は、垂下沈線部分と、垂下沈線間の無文部分に1条ないし2条、施文される。施文順序は縄文ののち沈線である。なお、底部68は同じ土坑03SKから出土しており、また胎土も共通する。直接は接合しないが、同一個体の可能性がある。



第48図 08-4区出土縄文土器1



第49図 08-4区出土縄文土器2

54・56は口縁部文様帯の主文様部分である。ともに半円形隆帯で主文様を区画し、54はその内に2条の沈線で半円形文を、56は隆帯上のLR縄文を施文するとともに隆帯に沿う沈線とその内の2列の円形刺突文を施文する。61・65は、口頸部界は遺存していないが、いずれも主文様を円形の太い隆帯とその内の沈線で作っている。主文様の外側に、61では短沈線で矢羽根状文を。65

では隆帯を取り巻くように連続刺突文を入れている。63も主文様付近の可能性はあるが、隆帯が剥離している。59・60・62・64は口縁部文様帯および頸部である。59は口縁部文様帯の下部に2条の沈線を横走させ、そののち全面にLR縄文を施文する。頸部は4条1単位と思われる沈線を垂下させる。60は口縁部主文様のすぐ横の部分だろう。横長区画文の端部が認められる。区画文は中央に1条の沈線を入れて上下に二分し、それぞれに連続刺突文を施文する。一部にLR縄文が認められる。62は口縁部文様帯の横長区画文部分であろう。短沈線による矢羽根状文のみ遺存する。64は表面の遺存状況が悪いが、隆帯とその内の刺突文、頸部の垂下沈線がみとめられる。

55・67は深鉢A 4類である。55は口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢である。口縁部に2条の沈線を横走させ、その下に半楕円形の区画文を入れ、その左右や下部に連弧文を施文している。縄文は無節のLrであろうか。北白川C式段階でも星田式とされるものだろう。67は緩やかに屈曲する深鉢の頸部で、口縁部は失われている。太い沈線による連弧文が認められる。

41～43・46は深鉢A5類としておく。水平口縁の深鉢で、口縁部に平行にめぐらせた1条の太い沈線によって、口縁部文様帯と頸部以下の文様帯を区分する土器である。41は二重の沈線で縦方向の区画文もしくは紡錘文を施文し、その下部に渦巻き文と連弧文を配している。縄文は口縁部付近が横方向の、頸部以下が縦方向のLR縄文である。43は41と同工であり、同一個体の可能性がある。42は頸部文様が横方向に展開しており、深鉢A4類に分類すべきかもしれない。46は口縁部の沈線が弧状を呈する。これも深鉢A4類に分類すべきかもしれない。

50・57・58は深鉢C類である。50は山形状突起部で、口縁部に沿って2条の太い沈線がはしり、中央部に渦巻状の文様を施文する。突起部外面、口縁端部にLR縄文が施文されている。57は山形状突起の先端付近である。口縁部に沿う沈線と垂下する沈線が施されている。突起部外面、口縁端部にLR縄文が施されている。58は山形状突起の基部付近である。外面には数条の沈線が施文されている。

66は口縁部内面を肥厚させて段状に作る土器である。浅鉢であろうか。

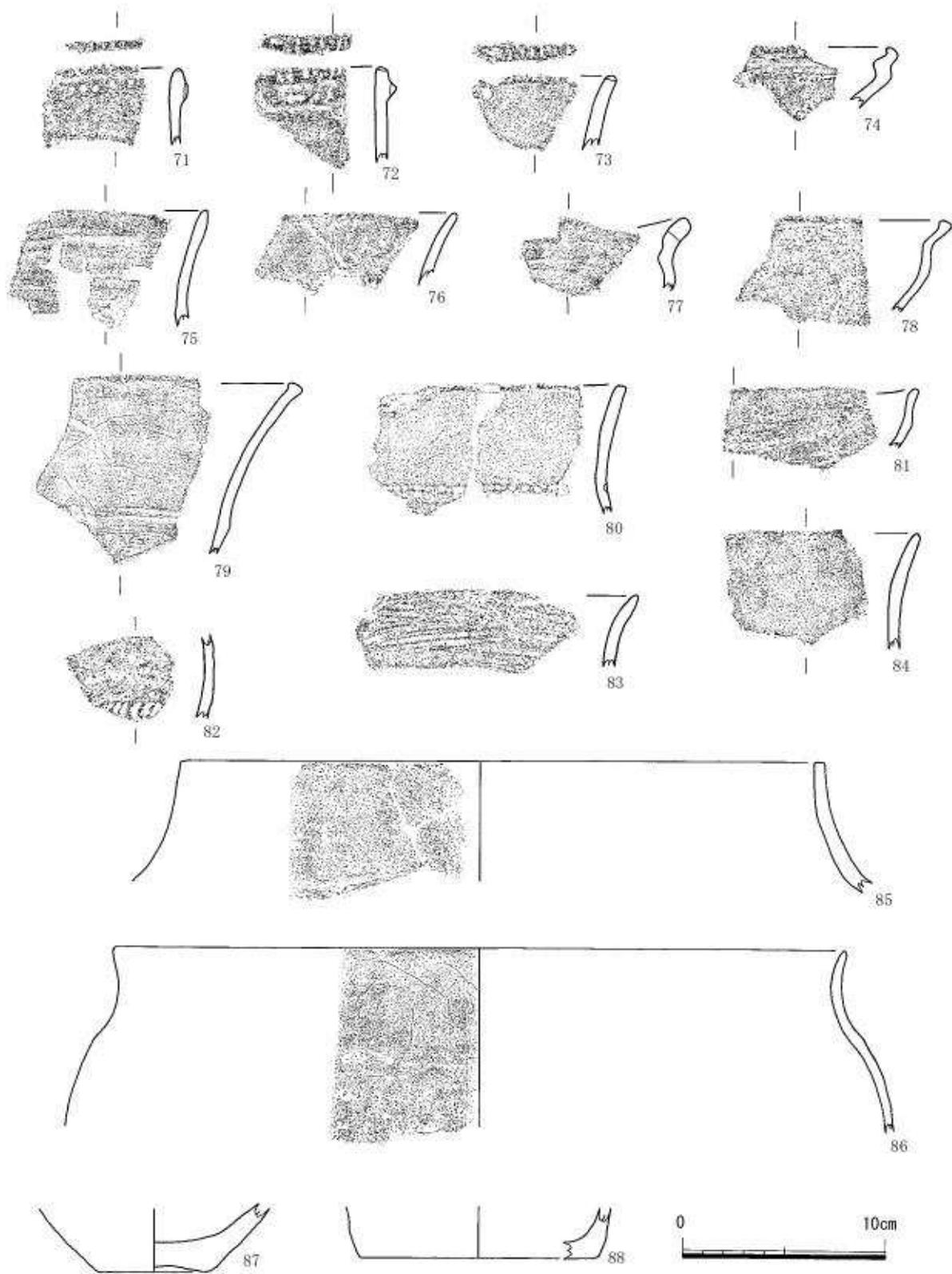
68～70は底部である。いずれも大型で内底面を平坦に作る。68は完形に復元された深鉢53と胎土が共通しており、直接は接合しないが同一個体の可能性がある。

なお、土坑03SK出土土器は完形に復元できた深鉢53以外に、深鉢口縁部～頸部では41・43・45・47・49～52・57・58・63・64・67、浅鉢?では66、底部では68～70がある。(大野)

08-5区出土土器 (71・72)

滋賀里IV式 (71・72)

71・72はともに摩滅が激しく良好な遺存状態ではない。深鉢形土器の口縁部である。71は端部を丸く収め刻みを入れ、凸帯上には摩滅がはげしい為、やや不鮮明であるがD字状の刻目が密に施されている。72は端部を明確な面取りは確認されないが方形に調整し刻む。凸帯上の



第50図 08-5区、08-6区、08-7区出土縄文土器

刻目は楕円状である。ともに滋賀里Ⅳ式で、生駒西麓産胎土。(妹尾)

08-6区出土土器 (74)

篠原式 (74)

74は鍵形口縁の黒色磨研浅鉢形土器である。篠原式に属するものである。(妹尾)

08-7区出土土器 (73・75～88)

滋賀里Ⅲa式 (75・79・84)

75・84は緩やかに外反して立ち上がる頸部に、稜をもって画されて外反した口縁部が取りつく。岡田憲一氏分類の「深鉢AⅠ類」に相当する(岡田1998)。ともに口縁部と頸部のあいだの指ナデがよわく不明瞭。75は端部が細く尖り、84は丸く収める。

79は黒色磨研浅鉢形土器の口縁部である。胴部の屈曲部が弱く、緩やかに外反した比較的長い頸部から口縁部にいたる。口縁端部は方形を呈し、外面がやや突出する。口縁端部内面に1条、外面の頸部と胴部境に2条の沈線をひく。75・84は生駒西麓産胎土。

篠原式(滋賀里Ⅲb式並行) (73・76～78・81・83・85・86)

古段階 (83)

83は外反した口縁部片である。篠原式の器形であるが、口縁端部に刻目を持たない。また外面に明瞭な二枚貝調整時の条痕が残される。生駒西麓産胎土。

中段階 (73)

73は外反した口縁部片で、口縁端部に刻目を施す。内外面にナデ調整を行っている。

新段階 (76・85・86)

76・85・86はいずれも内に入りこむ胴部から頸部が外湾し、口縁部にいたる。76と86は調整が酷似し、ともに生駒西麓産胎土であることから同一個体の可能性が高い。新段階に伴う土器群と考えられる。

浅鉢形土器 (77・78・81)

77・78はいずれも鍵形口縁浅鉢形土器である。篠原式に属する。

77は胴部より屈曲させ、短くつないだ頸部から口縁部にいたる。口端部内面に稜が入り、上端は面取りし、片面に抉りを入れた突起がつく。黒色磨研土器である。中段階資料と考えられる。

78は胴部より屈曲させ、77に対し比較的長い頸部を経て口縁部にいたる。端部は丸くおさめ、内面に抉り状に稜線を入れる。色調はにぶい褐色～橙色をしており、器面はナデにより調整されている。

他系統土器 (80・82)

80・82はいずれも中部瀬戸内地域の影響を受けた土器と考えられる。

80は緩く外反した口縁部で、口縁端部を方形に収める。頸胴部境に竹管による刺突文を施す。82

は胴部破片で、胴部下半に爪形文を施す。ともに篠原式並行と考えられる。

底部 (87・88)

87・88はともに深鉢形土器の底部で、87は凹底で後期末から晩期、88は直線的に立ち上がり、底部は平底である。中期末に属すと考えられる。87は生駒西麓産胎土。(妹尾)

08-8区出土土器 (89～202)

元住吉山Ⅰ式 (89・90)

89は波状口縁深鉢の波頂部である。波頂部突起は上方へ拡張した匙状突起となっている。突起部内面には、末端刺突を伴う沈線を縦方向に入れる。突起部内面端部には右下がりの刻目を密に入れる。波頂部突起の直下には、口縁部下縁から拡張された突起があり、突起の外面に巻貝殻頂部による刺突がある。口縁部外面には、上下に各1条の沈線を横走させ、波頂部下で、末端刺突を伴う短弧線で上下の沈線をつないでいる。沈線の上下はいずれも右下がりの細かい刻目となっており。縄文施文は認められない。調整は丁寧で、内外面ともミガキで仕上げている。遺存している範囲では赤色顔料などは認められない。90は無頸注口土器の口縁部で、肩部に小さな段がある「UFO形」とされるものである。口縁部外面には断面三角形の粘土を貼り足して、肥厚する口縁部を作る。口縁部には1条の沈線を施文する。肩部外面には、末端刺突を伴う弧線・直線などで文様を描き、巻貝擬縄文を施文する。

元住吉山Ⅱ式土器 (97・98)

97は胴部片である。沈線が凹線化していることにより、元住吉山Ⅱ式としたが、凹線間には巻貝擬縄文が施文されている。また一対の刺突が施されているが、巻貝殻頂部ではないようだ。98は深鉢口頸部であろう。口縁部外面に凹線と巻貝殻頂部による刺突がある。遺存状況が悪いが擬縄文が施されている可能性がある。

宮滝Ⅰ式 (94)

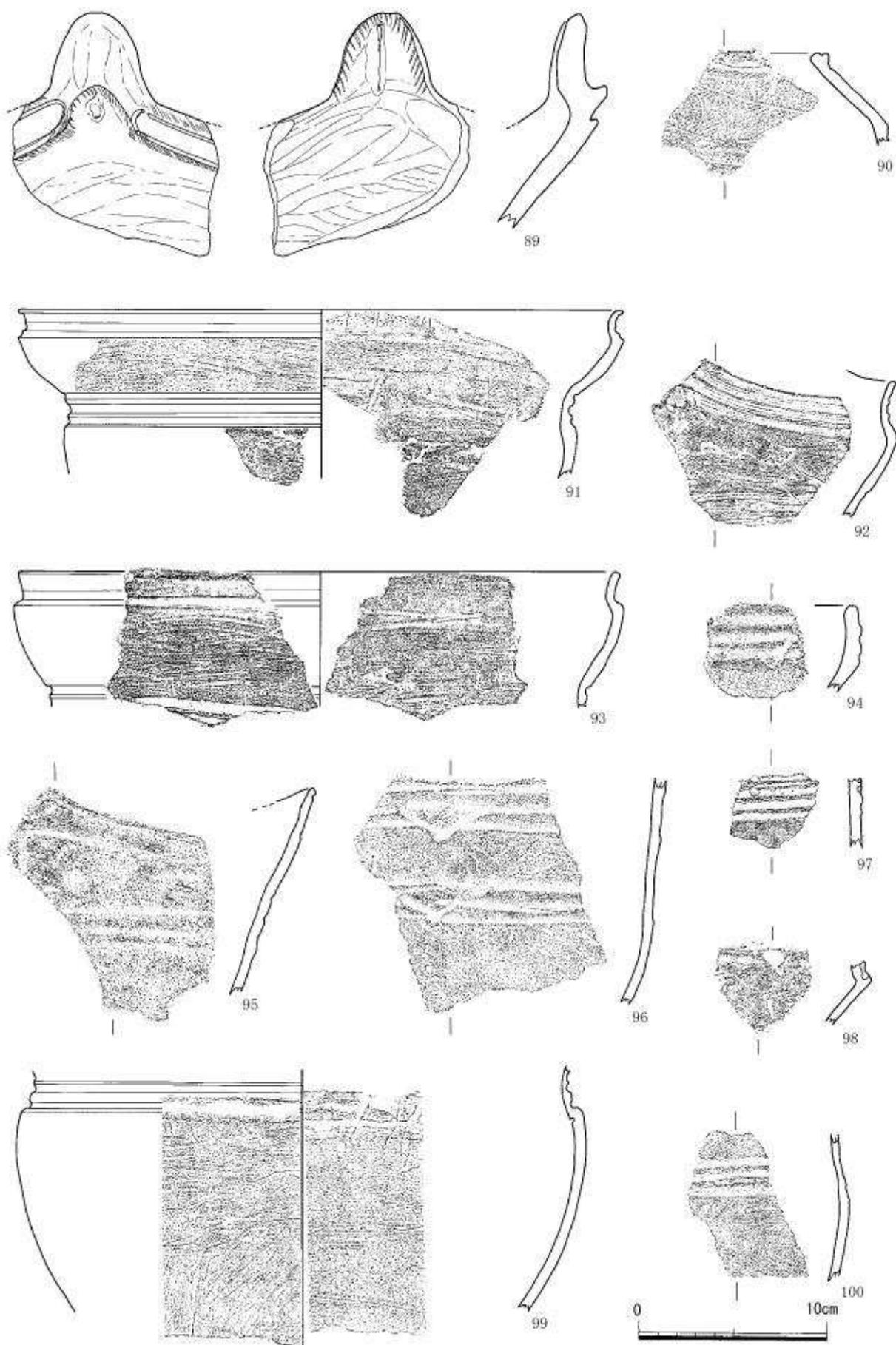
94は口縁部に3条の凹線をいれる。凹線内は磨かれている。

宮滝Ⅱ式 (91～93・99・100)

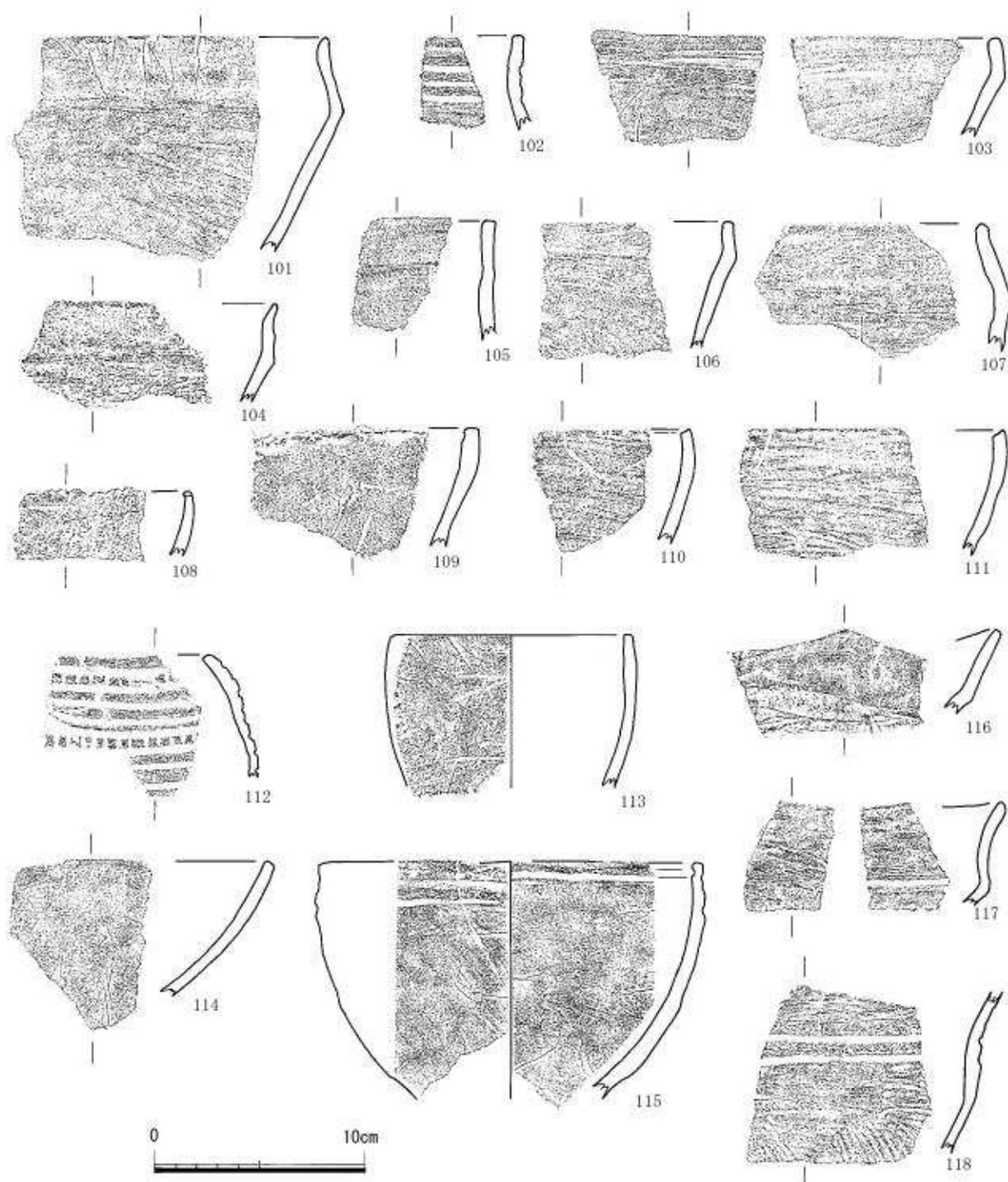
91・93は水平口縁深鉢である。外反する短い口縁部に2条の凹線をいれ、その下で段状に屈曲させる。凹線は条線の残るスジ凹線である。92は波状口縁深鉢である。口縁部に3条のスジ凹線をいれ、波頂部下には巻貝殻頂部による斜め方向の刺突文がある。99・100は深鉢胴部である。いずれも凹線文を施文しているが、99は屈曲の強い器形で、ややしっかりしたスジ凹線をいれる。100は浅いスジ凹線となっている。

滋賀里Ⅰ式 (95・96・101～104・106・107・118)

95は口頸部がほとんど屈曲することなく外に開く。表面の遺存状況は悪い。口縁部に平行に2条の凹線があり、無文帯を挟んで頸部に3条の凹線を入れる。凹線はいずれも幅が狭く、凹線内に条線が残る。波頂部下には下向きの弧状文がある。96は深鉢胴部で、3条の「レ」字状凹



第51図 08-8区出土縄文土器 1



第52図 08-8区出土縄文土器2

線を上下2段にいれ、扇状圧痕文に代わってV字状の凹線文を施文している。(大野)

101・104・107は体部に2つの段をもうけ、口縁部は一度内屈し、外反ぎみに端部を立ち上げ、丸くおさめる。上段部は、屈曲が強く稜をなす。器面調整は巻貝が基調であるが、ナデ調整も見受けられる。101は外面に、104は内外面の口縁部より下にコゲが付着している。101は巻貝による調整がみられるが、外面はミガキに近い調整を行っている。104・107は器面全体に巻貝条痕が観察される。

102は口縁部片。軽く外反しており、口端部を面取りする。外面には3条の沈線を施す。胎土

中に角閃石を多く含む。生駒西麓産胎土。

103・106は内面に明瞭な稜をもって内屈する。内外面を巻貝によって調整する。106は外面全体にコゲが付着している。

118は胴部破片で、体部に2つの段をもつ器形の下段部である。上半に2条の沈線を施す。器面外面は、上半部分は巻貝、下半部分は二枚貝によって調整される。外面にはコゲが付着している。生駒西麓産胎土。

滋賀里Ⅱ式古相 (105・109～117)

105は外湾した頸部を一度緩やかに内屈し、さらに外湾しつつ口縁部を立ち上げ、口端部を面取りする。内面の屈曲部に稜をなす。

109・110・111は胴部から緩やかに内湾しつつ口縁部にいたる。109は口端部を面取りし、その調整時の粘土が内面にはみ出す。110・111は口端部を内そぎ気味に調整し、器面調整の巻貝条痕が明瞭に観察され、またともに生駒西麓産胎土である。

113は砲丸状の胴部からそのまま緩やかに内湾しつつ口縁部にいたる。外面がナデ調整されており、口縁端部を方形に収める。ミニチュア土器の可能性はある。

116は波状口縁をもつ深鉢形土器である。口頸部境に不明瞭な沈線を1条施す。

112・114・115・117は浅鉢形土器である。112は榎原文様が施された有文浅鉢形土器の口縁部である。ボール状の器形を呈しており、2条の沈線間に縦位刻みを施した区画沈線帯を持ち、その間に2条1組の沈線をおくモチーフを多段に配する。また、区画紋様帯は上下を連携させる斜行沈線をもつ。器面外面に赤色顔料が観察される。大塚達郎氏の「榎原式紋様宮滝古段階」に相当する(大塚1995)。114・115はともに単純な碗形を呈している。115の口縁部には外面に2条、内面に1条の沈線が施される。114は内面に付着物がありウルシの可能性はある。115は生駒西麓産胎土。117は黒色磨研浅鉢である。ごく浅い体部に外反する比較的長い口縁部がつく。肩部に稜をなす。口端部は丸く収める。生駒西麓産胎土。

滋賀里Ⅱ式新相 (127・130・131・139・145)

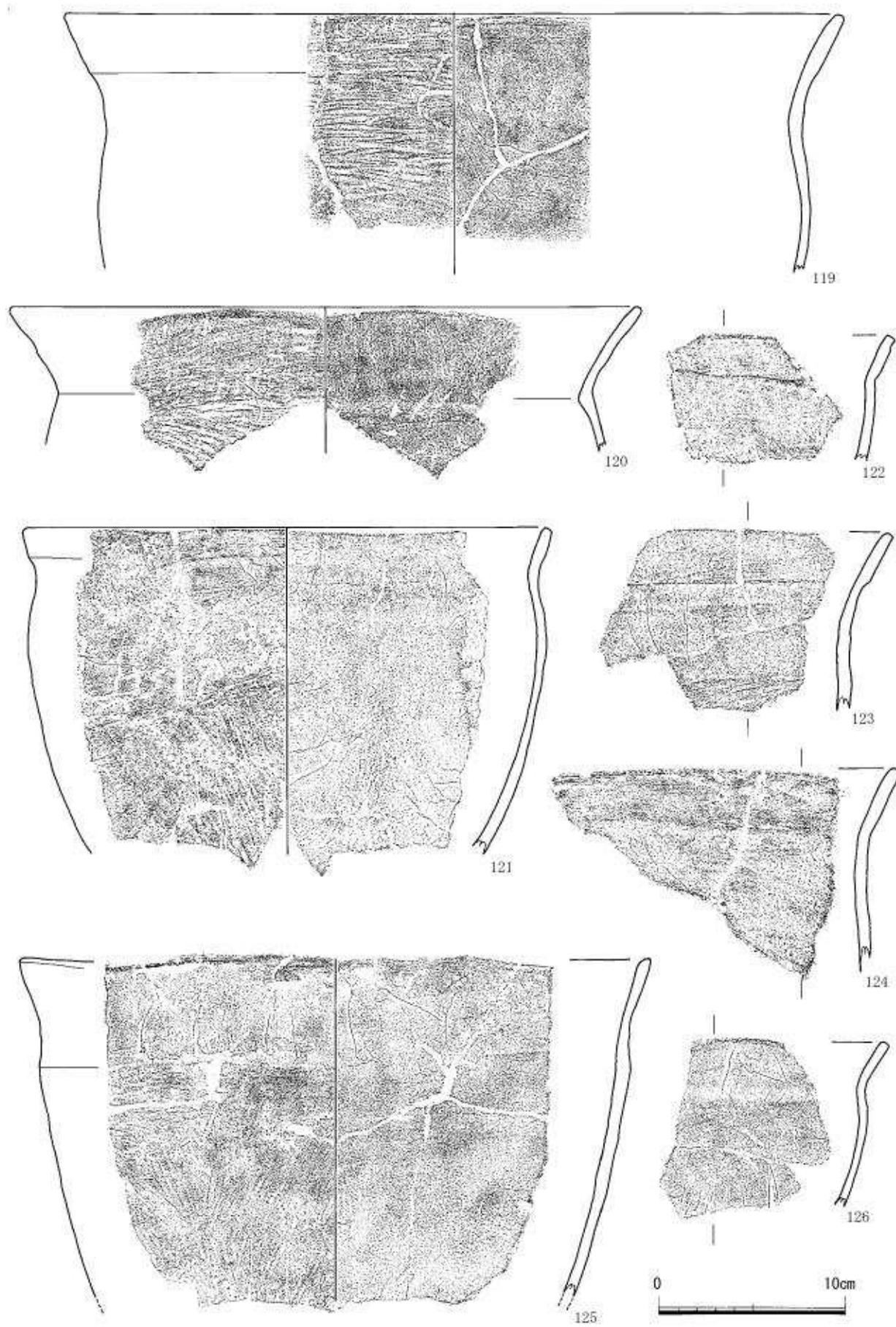
127・130・131・139・145はいずれも内湾した体部から外反した頸部をへて口縁部にいたる。口縁端部を面取りし、口縁部内面に抉りが入る。西部瀬戸内地方の岩田第四類(潮見1960)に系譜を求められる土器群で、岡田氏分類の「深鉢Iw類」に相当する(岡田2003)。127・139は器面を巻貝により調整する。127は外面の頸部を指ナデし、口端部が立ち上がる。139は頸部をミガキ気味にナデ、口縁部との境に稜をなす。

130・131は頸部の外反が弱く、口縁部が立ち上がり気味である。内面の抉りも軽い。時期が下る可能性もある。131は生駒西麓産胎土。

145は器面を二枚貝により調整しており、口縁部が緩く波状をなす。

滋賀里Ⅲa式 (119～124・126・129・134～138・140～142・144・146・148～151・153・156～161)

119・121～124・129・134・136・137は砲弾形の胴部に屈折して内傾する肩部がつき外反した



第53図 08-8区出土縄文土器3

頸部から稜をもって画された口縁部にいたる。頸部に1条の指ナデがされる。岡田氏分類の「深鉢AⅠ類」に相当し（岡田1998）、Ⅲa式の中でも古相と考えられる。119・124・134は器面を二枚貝によって調整する。口端部を119・124は丸くおさめ、134は面取りする。119の外面にはコゲが付着している。121は胴部器面を二枚貝、口縁部はナデ調整する。口端部を丸くおさめる。内外面にコゲが付着している。122は頸胴部境の屈曲が強く、内面の稜が明瞭である。外面はケズリ調整される。口端部を面取りする。123・129は口縁部にみられる稜が明確で段状を呈する。器面はナデ調整である。口端部を123は面取りし、129は丸くおさめる。136は頸部が比較的短く外反し、口縁部を丸くおさめる。器面を巻貝により調整している。また頸胴部境に抉り状の沈線を施す。137は口縁部が外反せず立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。器面摩滅のため調整は不明。

120・126・135・138・142・144・146・149・150は胴部から、内面に稜を持たせながら、口縁部が外反するもので、明瞭な一条のナデがみられる。岡田氏分類の「深鉢AⅡ類・Ⅲ類」に相当する（岡田1998）。126は口端部を丸くおさめる。内外面が丁寧にナデ調整される。144は摩滅が激しく遺存状態が悪い。口端部のナデ残りにより玉縁状を呈する。120・135・138・142・146・149は口縁部が「く」字状に強く外屈する。120は口端部を丸くおさめる。器面は二枚貝によって調整する。口縁部はケズリ気味である。生駒西麓産胎土。135は口端部を丸くおさめる。外面にはコゲが付着している。生駒西麓産胎土。138・146・149・150は口端部に面取りを行う。外面は二枚貝によって調整する。150は外面にはコゲが付着している。142は口縁部を欠く。外面はケズリ調整、内面は二枚貝によって調整される。

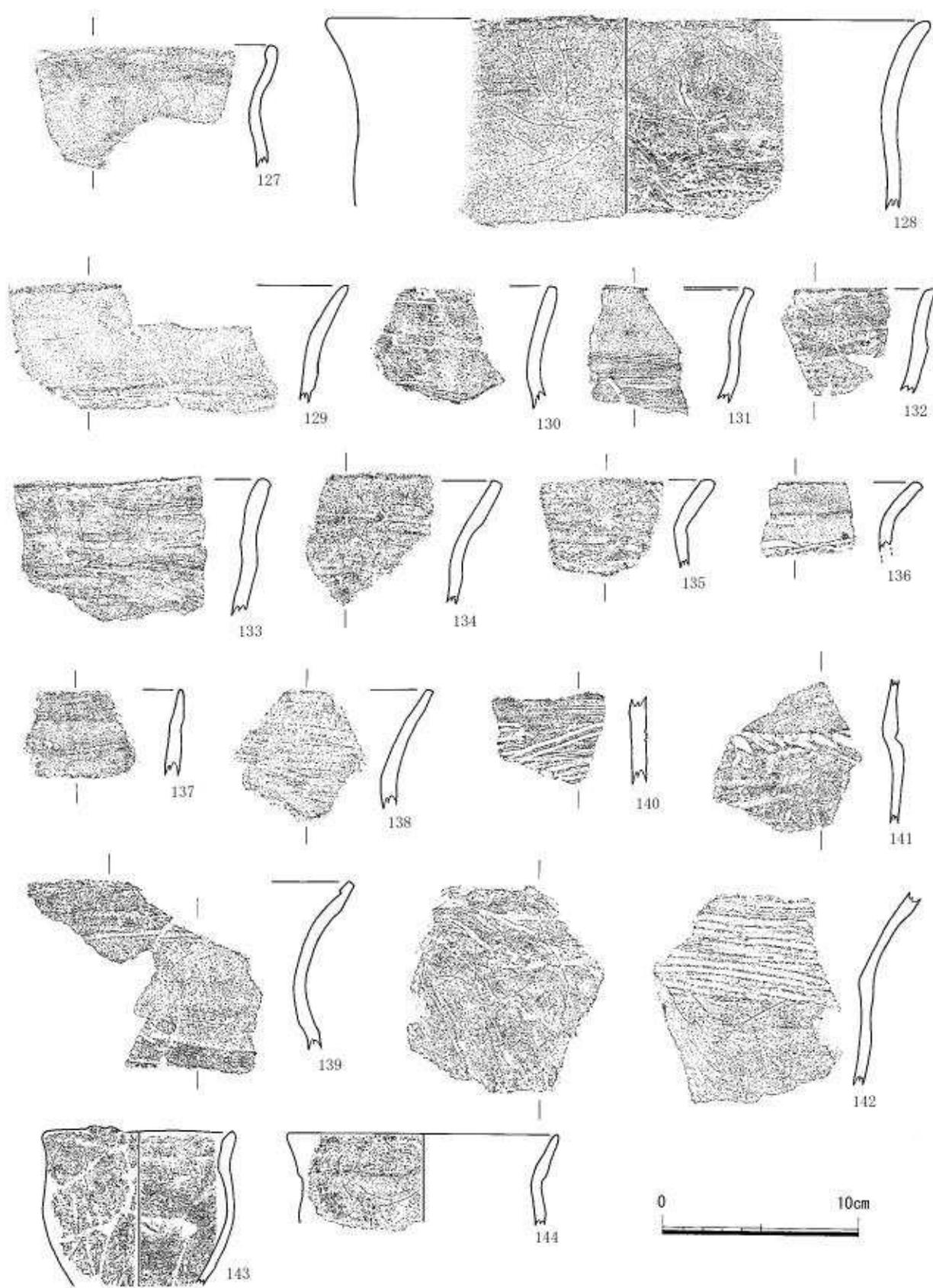
140は胴部片である。外面は二枚貝によって調整される。148は口縁端部のみ外反する。口端部のナデ残りにより玉縁状を呈する。器面は二枚貝によって調整される。

151・153・156～161は浅鉢形土器である。151は球形ないし算盤玉形となる胴部より短い口縁部が立ちあがる浅鉢形土器である。153は皿形の胴部から屈曲をもち外反する口頸部をもつ浅鉢形土器である。外面は二枚貝で調整される。生駒西麓産胎土。158は完形の浅鉢形土器である。丸底の底部から口縁部にかけてひらく。口端部は丸くおさめる。

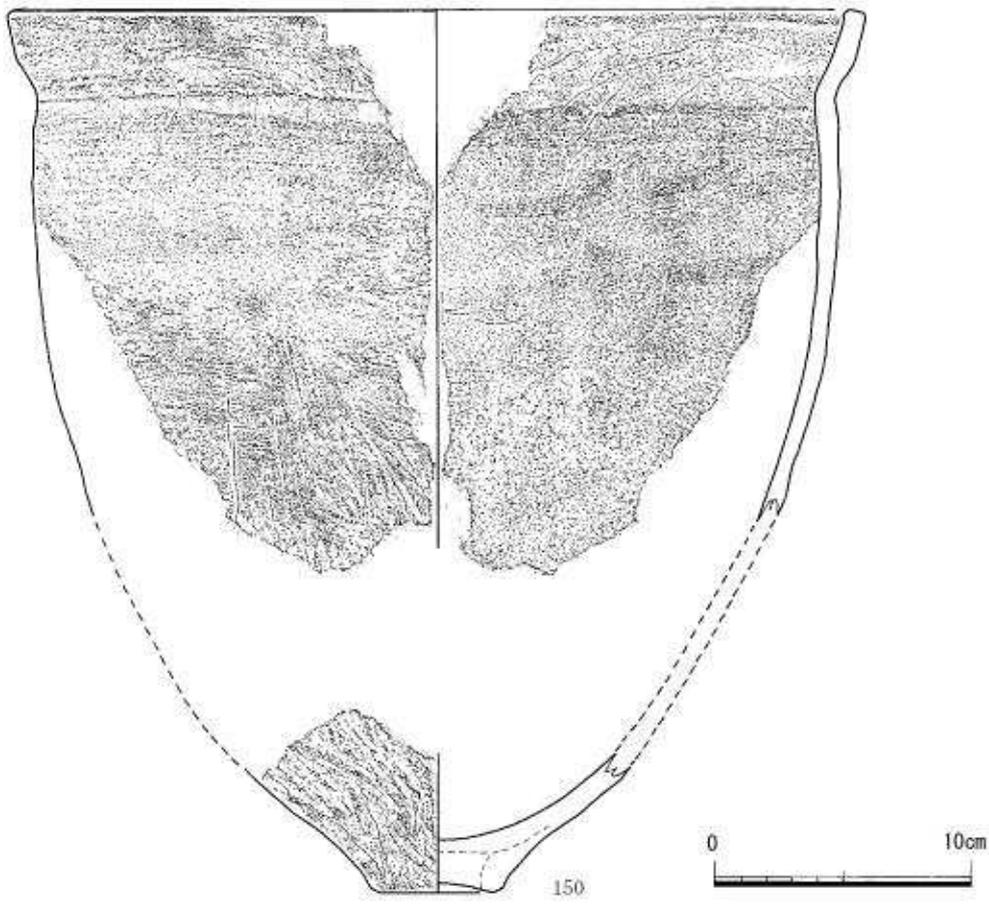
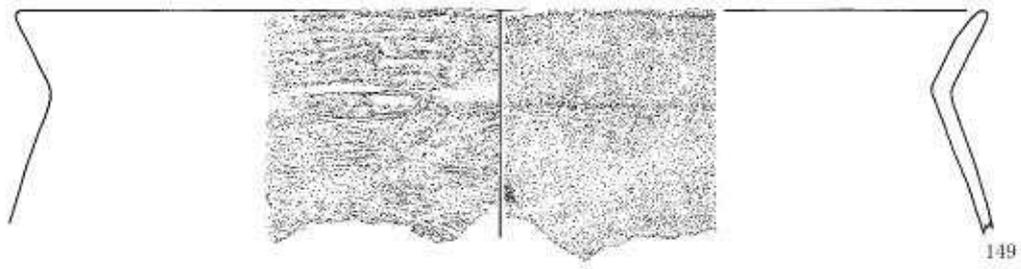
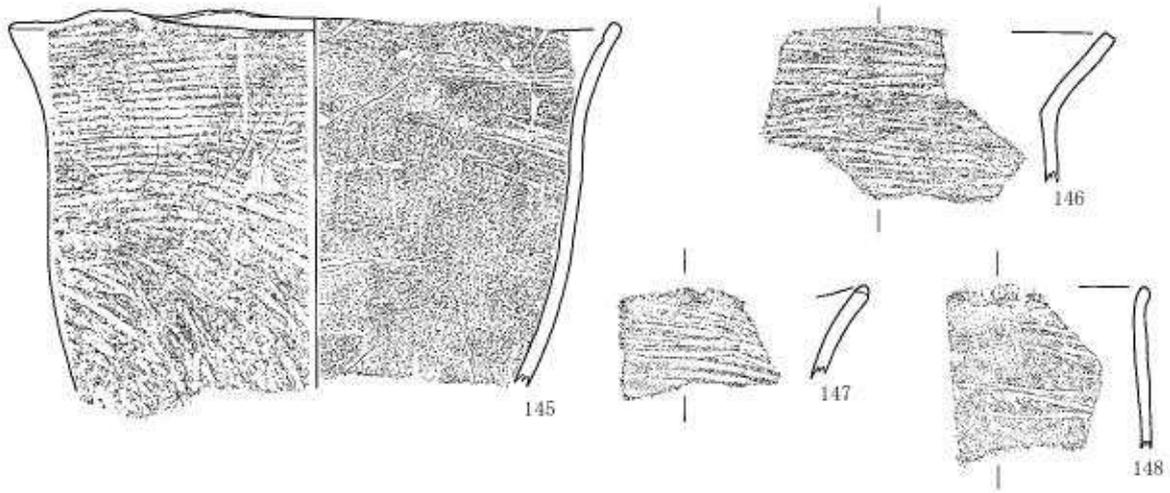
156・157・159～161は黒色磨研浅鉢形土器である。156は口縁部である。胴部の屈曲部が弱く、緩やかに外反した比較的長い頸部から口縁部にいたる。口縁端部は内そぎ気味で、口縁端部内面を軽く抉る。159・160は皿形の胴部から屈曲をもち、強く外反した頸部をへて口縁部が立ちあがる。口縁部外面に1条の沈線をひく。157・161は胴部で屈曲し、緩やかに外反した比較的長い頸部から口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめ、口縁端部内面を軽く抉る。

篠原式古段階（125・128・132・133・147・152）

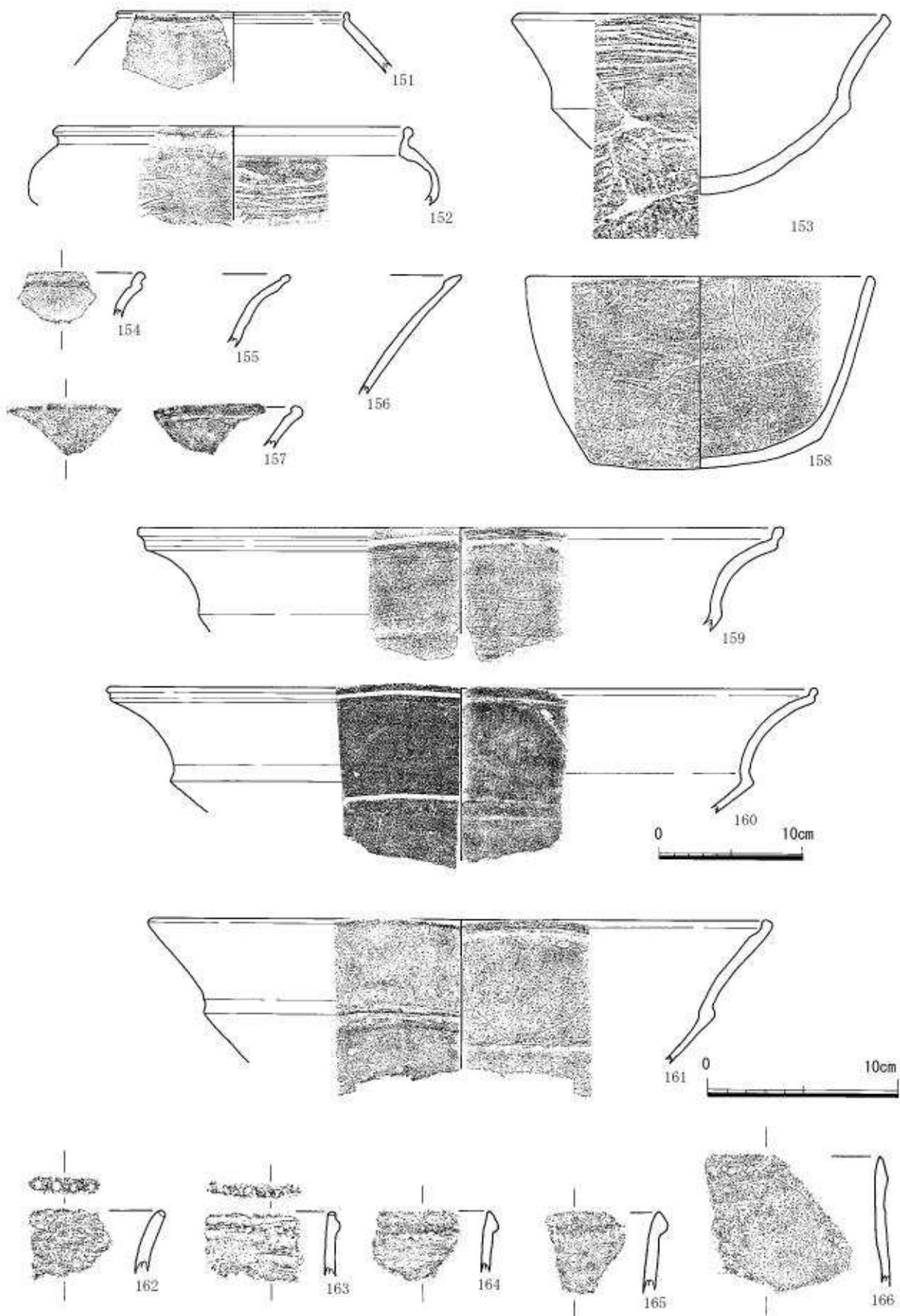
125は胴部から緩く外反した頸部をへて口縁部にいたる。口端部を面取りするが、粗雑で外面側に粘土がはみ出す。口頸部をナデ、胴部以下を二枚貝により調整する。外面にコゲが付着している。生駒西麓産胎土。128は口端部を丸くおさめ、器面を二枚貝で調整する。132・133



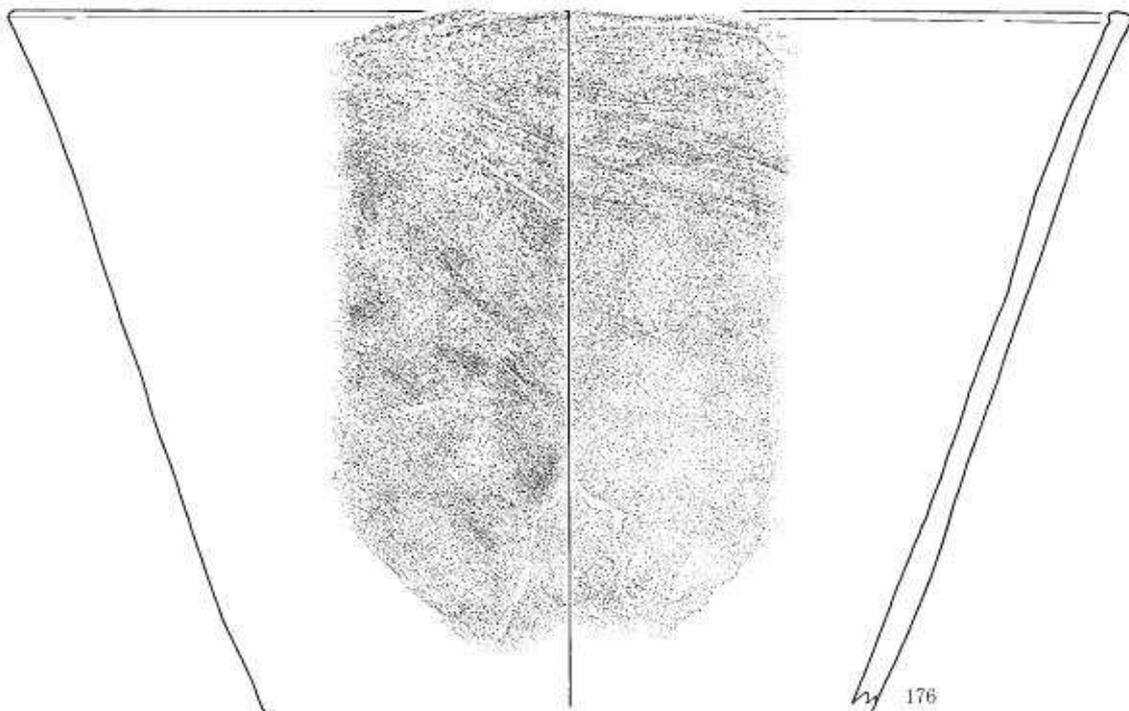
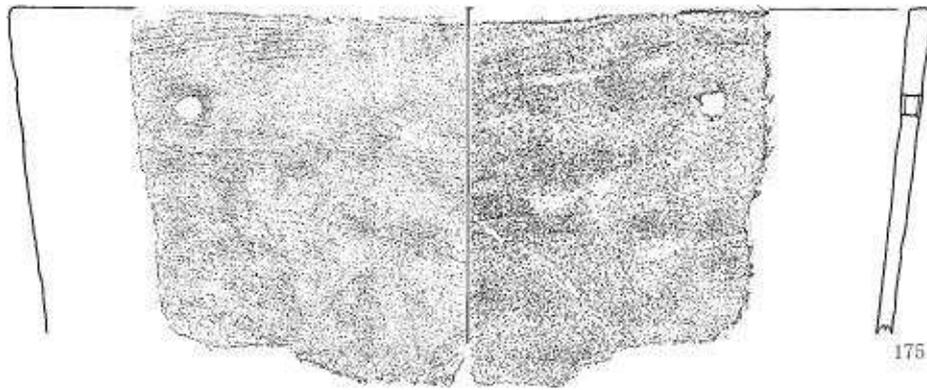
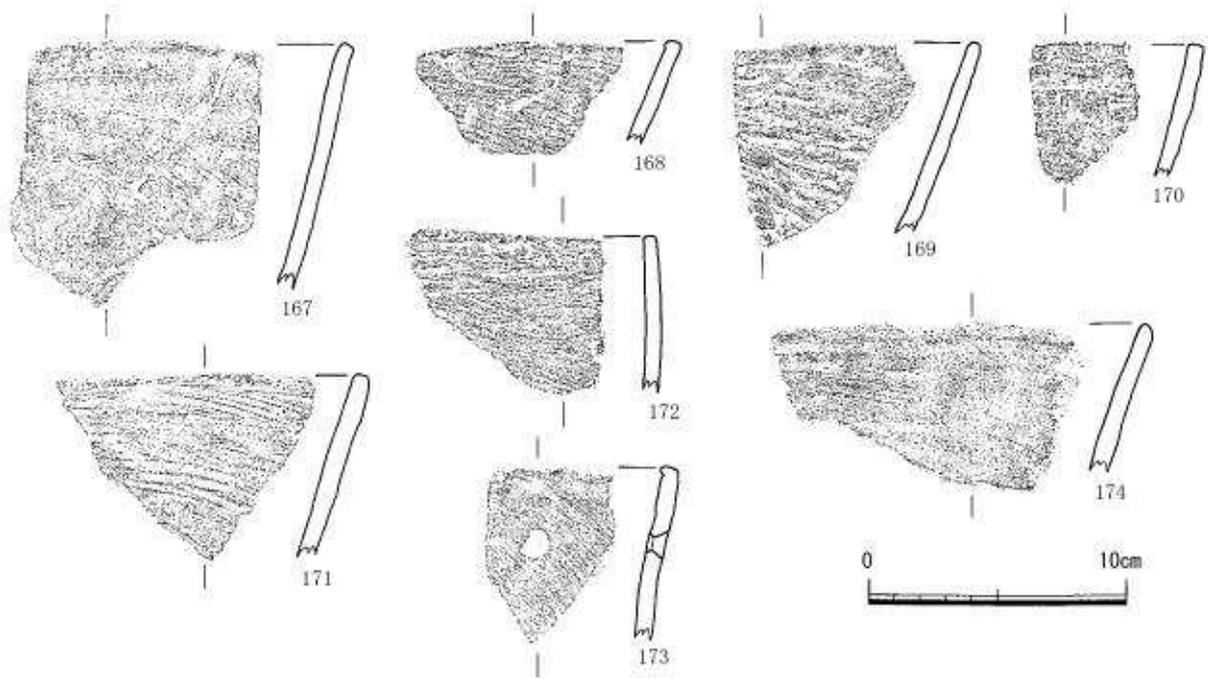
第54図 08-8区出土縄文土器4



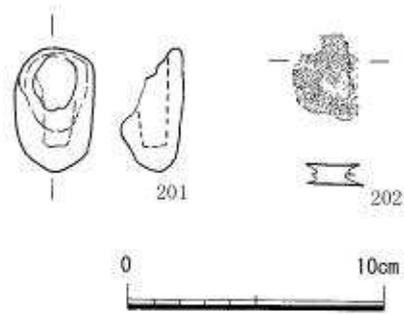
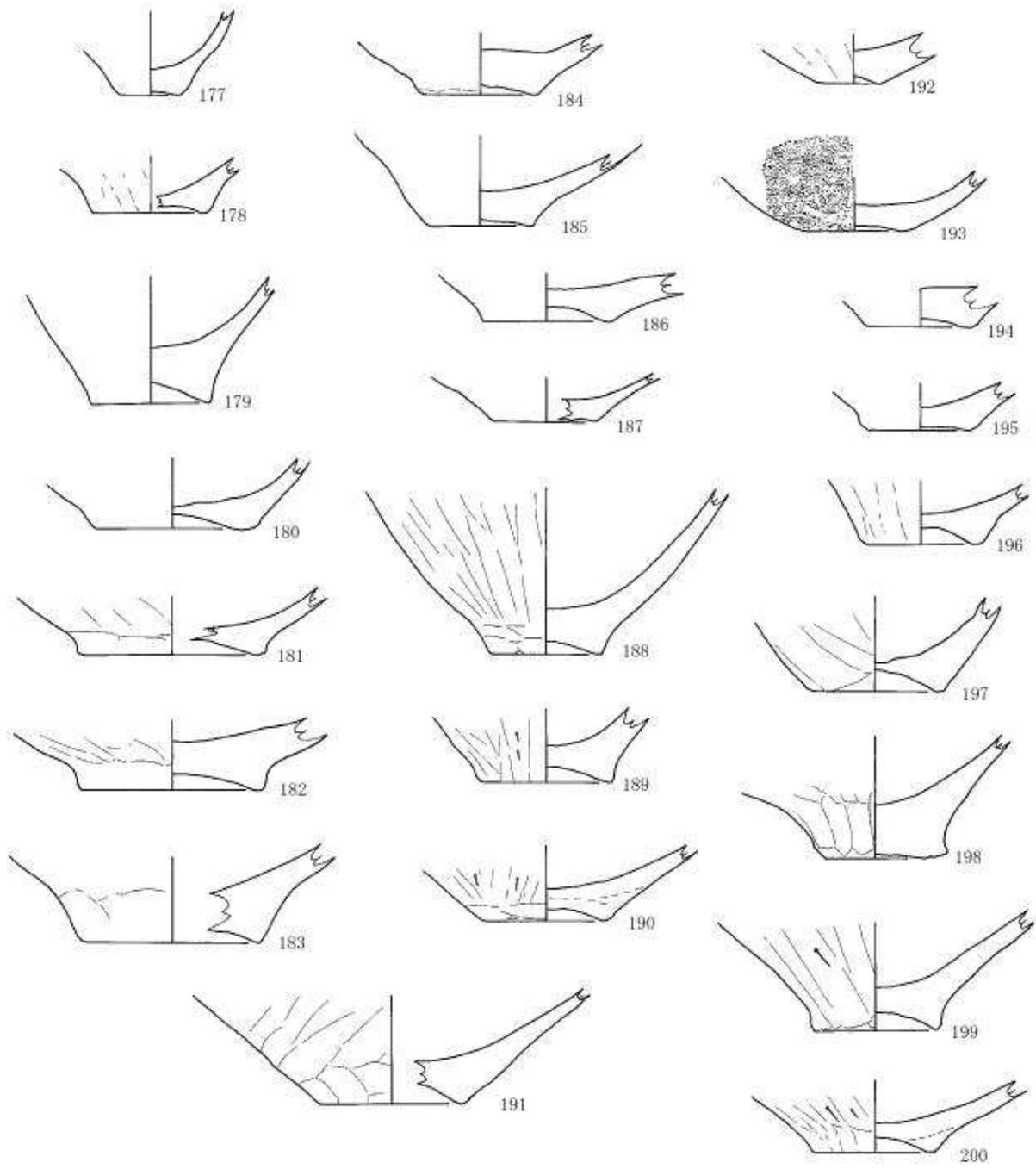
第55図 08-8区出土縄文土器5



第56図 08-8区出土縄文土器6



第57図 08-8区出土縄文土器7



第58図 08-8区出土縄文土器8 土製品

は口縁部が立ち上がり気味に外反する。口端部を面取りし、二枚貝によって器面調整を行う。132の外面にはコゲが付着している。147は外反した口縁部片である。波状口縁であり、波頂部を刺突により刻む。外面を二枚貝で調整する。152は浅鉢形土器である。胴部が強く張って内に入り、短い口縁部が外反する。器面は丁寧に磨かれる。

篠原式中段階 (108・143・154・155・162)

108は内湾した口縁部の端部に刻目を施している。143は内面に稜を持たせながら、口縁部が「く」字状に外屈するが、内面が肥厚している。口端部に突起がつく。ミニチュア土器の可能性がある。154・155はともに鍵形口縁浅鉢形土器である。154は胴部より屈曲させ、短くつないだ頸部から口縁部にいたる。口端部を丸くおさめ、内面に沈線を1条ひく。155は胴部より屈曲させ、比較的長い頸部を経て口縁部にいたる。端部は丸くおさめ、内面に抉り状に稜線を入れる。162は外反した口縁部片である。口縁端部に刻目を施す。

有文胴部片 (141)

141は胴部外面にケズリ調整、頸部はナデ調整を行う。外面には抉り状の施文がされている。篠原式に属すものと考えられる。

滋賀里Ⅳ式 (163)

163は口縁部片である。口縁端部を丸くおさめ刻目を施す。口端部より下がった位置に凸帯文を巡らし、凸帯上にD字状の刻目を密に施す。

長原式 (164～166)

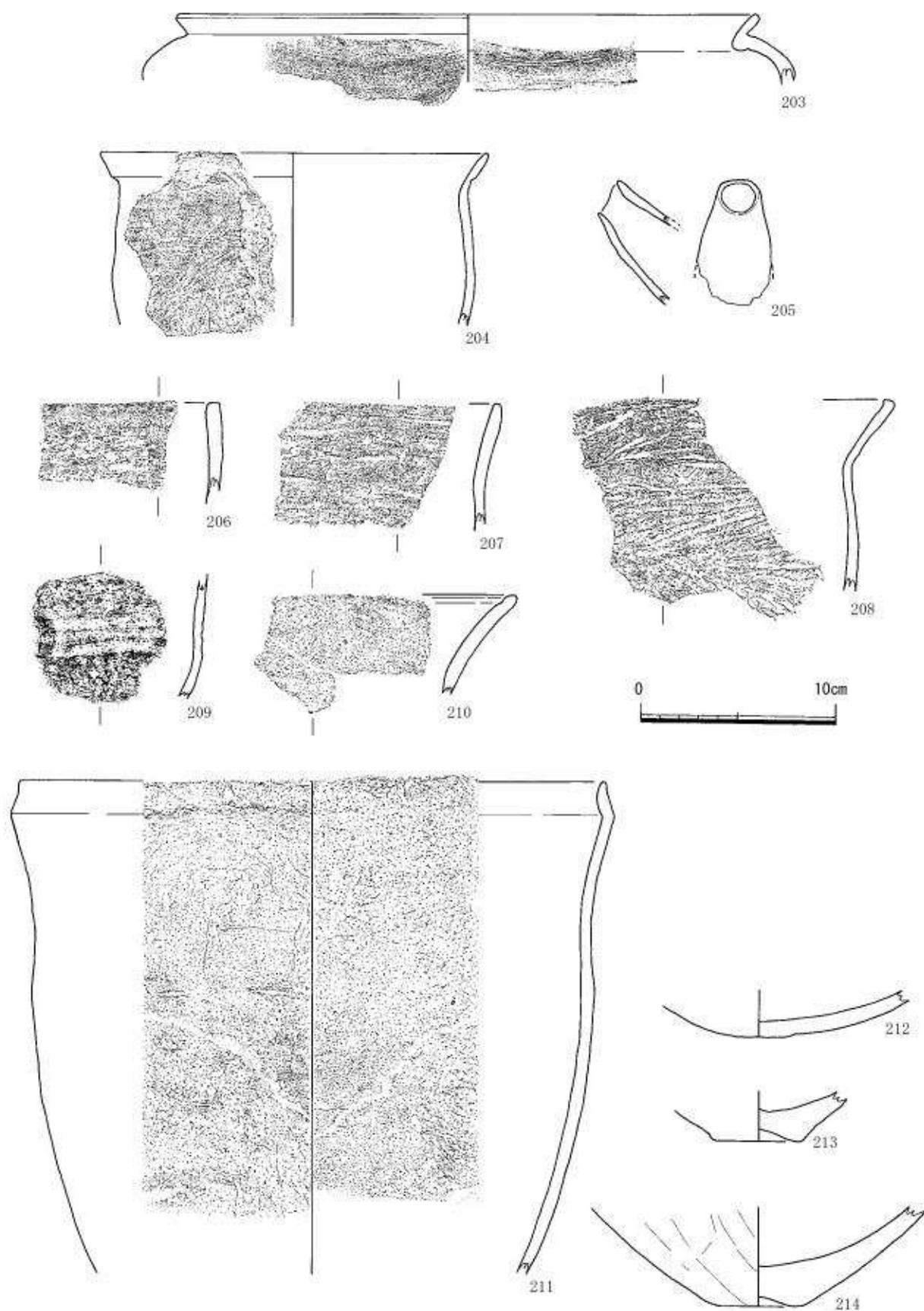
164・165はともに口縁部片であり、口端部に接する位置に凸帯文を巡らす。口端部調整と同時に上面を押さえて凸帯を貼り付けているため、垂れ下がり状を呈す。凸帯上に小さなO字状の刻目を施している。165は生駒西麓産胎土。166は凸帯文を施した壺形土器片。口端部よりやや下がった位置に不明瞭な凸帯文を巡らす。凸帯上は小さなO字状の刻目を散逸的に施す。頸部が細くならない器形であるため、船橋的な要素を残しやや古相を示す。生駒西麓産胎土。(妹尾)

無文深鉢 (167～176)

167～176は口頸部がほぼまっすぐ外に開く深鉢で、無文のものである。口縁端部にしっかり面取りを施して平坦に作るものが目立つ。調整は巻貝条痕、ナデ、ケズリなどがある。時期を特定できないものもあるが、175・176など、口縁端部を平坦につくり、巻貝条痕を施す丁寧なつくりの土器は元住吉山Ⅰ式としてよからう。他のものもおおむね後期中葉～後葉に属するとみておきたい。

底部 (177～200)

177～200は底部である。182のような大型で内底面に平坦部をつくる中期のものから、189・197のような晩期の凹底まで、各時期のものがある。192・193は浅鉢底部であろう。



第59図 07-9区、08-10区出土縄文土器

土製品 (202)

202は土製円盤の破損したような形状だが、胎土からみて、縄文土器ではないと考えられる。

その他 (201)

201は鉄分が付着したもので、人工物ではないと考えられる。(大野)

08-9区・08-10区出土土器 (204～210・212・214)

宮滝式 (209)

209は体部に2つの段をもつ下段部の胴部片である。3条の凹線を施す。巻貝扇状圧痕文を施す際に貼り付けられる粘土剥離痕が残る。摩滅が激しく器面の調整は不明。

滋賀里Ⅱ式古相 (206)

206は外湾した頸部から緩やかに内屈しつつ口縁部を立ち上げ、口端部を面取りする。内面の屈曲部に稜をなす。

滋賀里Ⅱ式新相 (208・210)

208・210は内湾した体部から外反した頸部をへて口縁部にいたる。口縁端部を面取りし、口縁部内面に抉りが入る。内面の抉りは軽く、時期が下る可能性もある。208は外面を二枚貝によって調整している。210は摩滅が激しく器面調整不明、胎土は生駒西麓産である。

滋賀里Ⅲa式 (204・207)

204は「深鉢AⅠ類」に相当し、胴部を二枚貝で調整する。口端部は丸くおさめる。207は「深鉢AⅣ類」に相当し、器面前面を二枚貝で調整する。口端部は面取りしている。

注口土器 (205)

205は注口のみであるため型式は不明だが、後期末～晩期前葉に属するものと考えられる。

底部 (212・214)

212は浅鉢形土器の底部である。丸底を呈する。晩期中葉と考えられる。214は深鉢形土器の底部である。底面が凹む。晩期中葉と考えられる。滋賀里Ⅲa式に属す可能性が高い。(妹尾)

04-1区・07-15区出土土器 (203・211・213)

滋賀里Ⅰ式 (211)

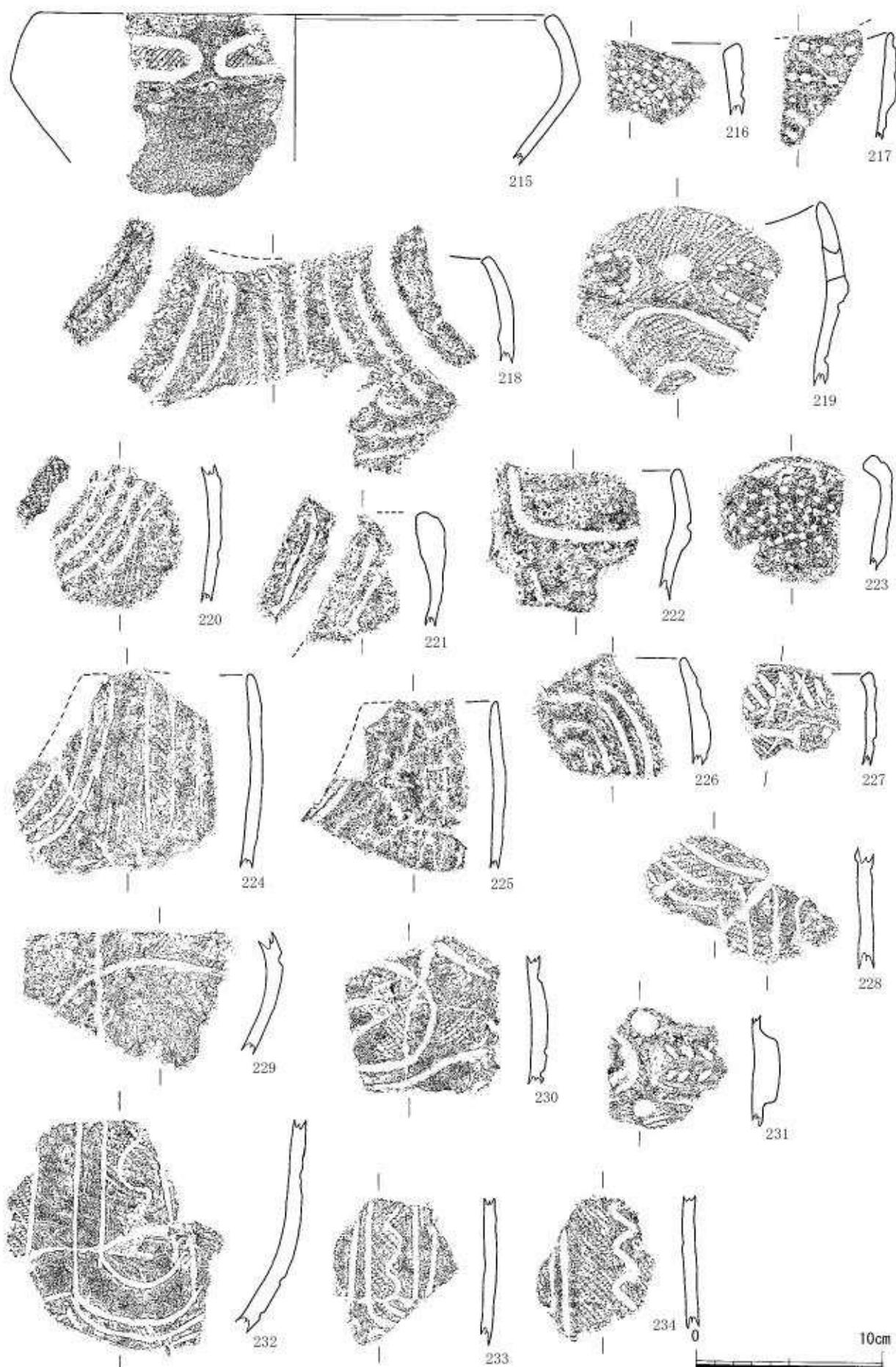
211は体部から、外反した頸部を口縁部で内屈させ、端部を立ち上げ丸くおさめる。口頸部境の屈曲が強く稜をなす。器面調整は巻貝を用いている。

篠原式古段階 (203)

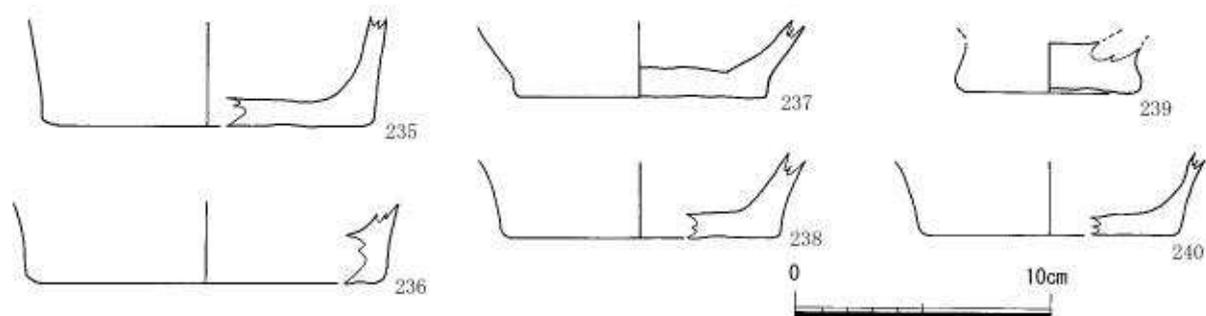
203は浅鉢形土器である。胴部が強く張って内に入り、短い口縁部が外反する。器面は丁寧に磨かれる。

底部 (213)

213は深鉢形土器の底部である。底面が凹む。晩期中葉と考えられる。(妹尾)



第60図 08-11区出土縄文土器1



第61図 08-11区出土縄文土器2

08-11区出土土器 (215 ~ 240)

北白川C式 (215 ~ 240)

215 ~ 217・219・222・223・227・230・231は深鉢A類である。口縁部文様帯と頸胴部が隆帯によって区画される土器であるが、隆帯で区画渦巻文を描くA1類、連弧文を特徴とするA4類は含まれていない。

215は鉢または深鉢である。口縁部は頸胴部から内折し、太い沈線で横長区画文が入る。区画文内にはLR縄文が施文されている。隆帯は認められない。

216・219・223・230は口縁部文様帯の主文様部分であろう。216は小さな波状を呈し、押し引き沈線文で同心円文もしくは渦巻文を描く。219は大きな波状口縁を呈する深鉢で、波頂部の主文様部分には直径1cmほどの円孔をうがつのみで、その両側に押し引き沈線文で横長区画文を作っている。隆帯は口頸部界にのみ認められ、口縁部や文様を区画する隆帯は認められない。横長区画文内を除くほぼ全面にLR縄文が認められる。223は隆帯による楕円形区画の中に円形刺突文を施す。230は波頂部直下であろう。口縁端部に沿う沈線と口頸部を区画する沈線がはしり、その間に円形を基調とした文様を入れる。

217・222・227・231は口縁部文様帯部分である。217は摩滅が著しいが、波頂部から下がってきた部分で、口縁部文様帯に円形刺突文が認められる。222は波状口縁深鉢で、区画隆帯と沈線が口頸部界から上方に伸びている。左側は主文様部分と思われるが失われている。口縁部には隆帯は認められない。227は波状口縁と思われ、口縁部文様帯に縄文ののち、左上がりの短沈線を施文している。231は隆帯による横長区画文をつくり、内に矢羽根状短沈線を施文している。縦方向の隆帯の上下には大きめの凹点がある。

218・220・221・224 ~ 226は突起状山形口縁を有する深鉢C類である。218は山形口縁の大きな突起部である。現状では口縁端部には文様は認められない。口縁部に平行に横長楕円形の区画文をいれる。区画内にはLR縄文を施しているが、向かって右側の区画文の方は遺存状況が悪く現時点では縄文は認められない。山形部外面には垂下する2条ないし3条の沈線が施文されている。また横長区画文下には横送する沈線が認められる。220・221・224 ~ 226はいずれも山形口縁の突起部である。220は口縁端部にLR縄文が、221は口縁端部に沈線文がある。224は口

縁端部が若干厚みを増す程度で口縁部を折り曲げることもなくまっすぐおさめる。山形部外面には口縁部に平行する3条の沈線と、外面中央を垂下する3条あるいは3条以上の沈線、沈線間に部分的に施文されたLR縄文がある。225は遺存状況が悪いが、224と同一個体の可能性がある。226は分類に苦慮するが、ここ深鉢C類として報告する。突起状山形口縁の口頸部界に隆帯を入れる土器である。口縁部には2条の沈線が、山形部外面には隆帯に沿う沈線が認められる。

228・229・232～234は深鉢の胴部である。228は弧状の沈線が屈曲して垂下する部分に当たる。LR縄文が沈線間に施文されるが、弧状部と垂下部では異なる区画に沈線を越えて一連の縄文が施文されている。229は胴部下半と思われる。弧状の沈線が1条はしり、その上部にLR縄文がわずかに残る。破片左上の角に、弧状沈線と平行する沈線があるようだ。232は平行する2条の沈線で紡錘文を描き、その内に垂下する波状沈線文と縦方向のLR縄文を施文する。紡錘文の横には間隔をおいて垂下する沈線と縦方向のLR縄文がある。紡錘文の下部には、紡錘文下縁に沿う連弧文が施文される。233・234は232と同じ文様構成の胴部片である。

235～240は底部である。内底面が広い平坦面を有するものが多い。(大野)

08-14区出土土器 (241～257)

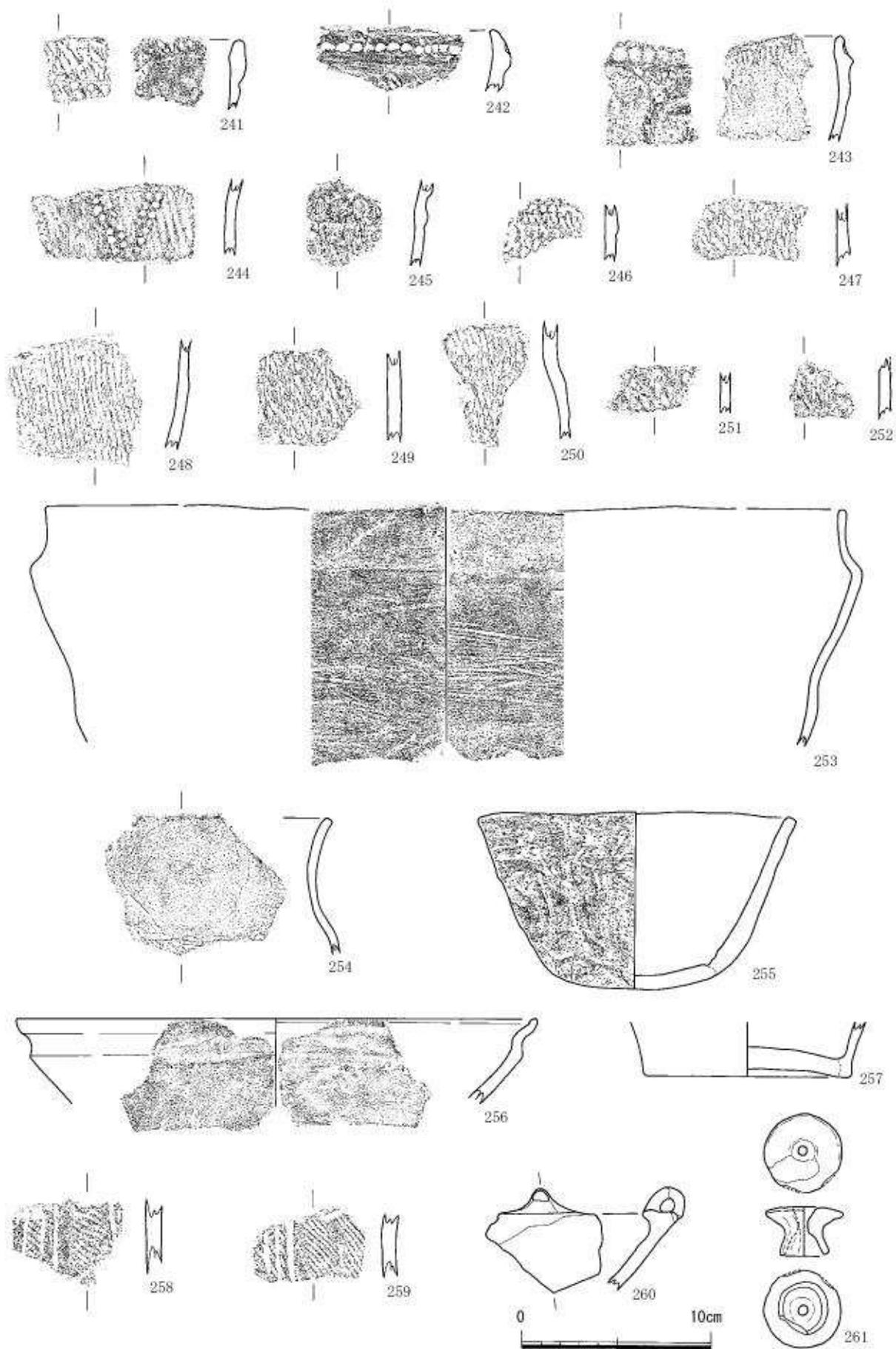
船元Ⅱ式 (241～252)

08-14区は08-2区の東側に接する調査区であり、ここでは中期中葉船元Ⅱ式が出土している。

241～244は口縁部である。241は口縁端部外面を若干肥厚させ、肥厚部に節の目立つ縦長の縄文を施す。肥厚部より下部にも同様の節の目立つ縦長の縄文を入れているようだ。また肥厚部直下には円形刺突文列がみられる。242は口縁部外面に凸帯を貼り付け、その凸帯の直上に円形刺突文列を施文する。凸帯より下部には縄文が認められるが遺存部分は少ない。ここでは中期前中葉の土器に含めているが、口縁端部内面には縄文がなく、胎土も他の中期前中葉土器とは若干異なるので、中期末に含める方が良いのかもしれない。243は口縁部外面に1条の凸帯をめぐらせ、凸帯直上に円形刺突文列を施文する。凸帯より下には弧状の凸帯を貼り付け凸帯上は斜めの刻み目を入れているようだ。凸帯部以外は縄文を施文しているとみられるが遺存状況は悪い。244～252はいずれも胴部片である。縄文は節の目立つ縦長の縄文である。244は爪形文帯や凸帯を伴わず、円形刺突文列がV字状に施文されている。245は小さな波頂部をもつ口縁部の可能性があるが、遺存状況が悪く断定できない。二枚貝殻頂部による連続圧痕文、その下部に凸帯、その下部に縄文が施文される。246も口縁部付近か。小さな円形刺突文列が認められる。250は中央に無文帯があり、縄文帯が上下に分かれている。上の縄文帯の下端、下の縄文帯の上端に、小さな連続刺突が認められる。これらの土器はおおむね船元Ⅱ式1期のものと見てよからう。(大野)

滋賀里Ⅰ式 (253)

253は体部に2つの段をもうけ、口縁部は一度内屈し端部を立ち上げ、面取りを行う。上段部



第62図 08-14区、07-21区出土縄文土器1

は、屈曲が強く稜をなす。器面調整は胴部に巻貝、口縁部はナデ調整される。

篠原式 (254 ~ 256)

254は胴部から張った肩部より外反する頸部、口縁部へといたる。口縁端部は丸くおさめる。古段階資料と考えられる。255は浅鉢形土器の完形品である。丸底の底部から直行して口縁部が開く。256は鍵形口縁浅鉢形土器である。胴部より屈曲させ、短くつないだ頸部から口縁部にいたる。

底部 (257)

257は深鉢形土器の底部である。直線的に立ち上がり底面が凹む。中期末に属すと考えられる。生駒西麓産胎土。(妹尾)

07-21区出土土器 (258 ~ 261)

08-4区の南側に位置する調査区で、T.P.17m前後の粘質土から縄文土器が出土した。

北白川C式 (258 ~ 260)

258・259は深鉢胴部である。ともに垂下する沈線と縦方向のLR縄文が施文される。260は浅鉢口縁部である。口縁部内面に粘土を貼り足し、小さな橋状取手をつけている。

土製耳飾 (261)

261は土製耳飾と考えられる。円盤状の本体の下部に脚台を取り付けたような形態である。円盤状の本体は直径4.1cmで、いったん細くくびれて、そこから脚台状にひろがる。くびれ部は直径2.0cm、脚台部は直径2.6cmである。高さは2.6cmとなる。円盤前面から脚台部にかけて貫通孔があるが、くびれ部付近が最も孔径が小さく、円盤前面に向かって大きくなる。脚台部は孔ではなく脚状の作りである。上記の258 ~ 260の中期後葉土器と共に出土している。(大野)

参考文献 (50音順)

- 泉 拓良1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ 京都大学埋蔵文化財調査センター
- 泉 拓良2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』
- 伊藤 雅和・岡田 憲一2003「西坊城遺跡」Ⅱ 奈良県文化財調査報告書90集
- 大塚 達朗1995「榎原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第13号 東京大学文学部
- 岡田 憲一1998「第4章調査のまとめ 第2節遺物のまとめ 1. 1期縄文時代(滋賀里Ⅲa式段階)の遺物」『秋篠・山稜遺跡』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書17集
- 岡田 憲一2000「西日本縄文後期後葉土器編年序論—向出遺跡出土土器の研究—」『向出遺跡』財大阪府文化財調査研究報告書55集 財大阪府文化財調査研究センター
- 岡田 憲一2003「滋賀里式再考—西日本縄文晩期土器様式の構造転換—」『立命館大学考古学論集』Ⅲ 立命館大学考古学論集刊行会

- 岡田 憲一2008「凹線文系土器（宮滝式・元住吉山Ⅱ式土器）」『総覧縄文土器』
- 加藤 修・丹羽 祐一1973「第1章縄文時代 1 滋賀里遺跡の調査（4）遺物の検討 A土器」『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会
- 潮見 浩1960「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号 広島大学文学部
- 千葉 豊2008「縁帯文土器」『総覧縄文土器』
- 中村 豊2008「西日本磨研土器（滋賀里1～3式土器）」『総覧縄文土器』
- 花田 勝弘1984「83-1次調査区（法善寺・平野線）」『大県・大県南遺跡』柏原市教育委員会
- 家根 祥多1981「晩期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 家根 祥多1994「篠原式の提唱」『縄紋晩期前葉-中葉の広域編年』北海道大学文学部

表2 縄文土器観察表 1

遺物 No.	採 取 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
1	45	37	17	17	08-1	緑灰色 シルト	深鉢口縁部					内：7.5YR5/2灰褐・ 7.5YR3/1黒褐 外・断：10YR7/3にぶい 黄橙	長石・石英・ク サリ礫	12は同一個体の可 能性あり。 LR。
2	45	37	27	17	08-1	緑灰色 シルト	深鉢口縁部					内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・雲 母	橋状突起が横に長 くなってトシネル 状を呈する。LR。
3	45	37	16	22	08-1	緑灰色 シルト	深鉢口縁部					内：7.5YR5/3にぶい橙 外：7.5YR6/3にぶい 橙・7.5YR3/1黒褐 断：7.5YR3/1黒褐	長石・石英	山形口縁。
4	45		11	38	08-1	灰黄褐色～ 緑灰色シル ト粘土	深鉢口縁部					内・断：10YR6/2灰黄褐 外：10YR3/2黒褐	長石・石英・ チャート	山形口縁。 口縁端部にLR縄 文。
5	45	37	4	35	08-1b	黄灰色～ 灰黄色シル ト質土	深鉢口縁部					内：2.5Y5/2暗灰黄 外：10YR4/2灰黄褐 断：2.5Y3/1黒褐	長石・石英・ チャート	波状口縁。
6	45	37	3	22	08-1	緑灰色シル ト	深鉢口縁部					内・断：10YR8/2灰白 外：10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英・ チャート・ クサリ礫 2～5mmの粗粒	
7	45	37	5	33	08-1b	南西側掘溝 灰黄色～ 緑灰色シル ト～粘質土	深鉢口縁部					内：7.5YR3/1黒褐 外：7.5YR4/2褐灰 断：7.5YR6/3にぶい褐	長石・石英	波状口縁？
8	45		6	44	08-1b	緑灰色（～ 青灰色） シルト～微 砂	深鉢口縁部					内：10YR6/2灰黄褐 外：7.5YR4/2灰褐 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	山形口縁。 口縁端部に文様。 LR。
9	45		8	38	08-1b	灰黄褐色～ 緑灰色 シルト粘土	深鉢胴部					内：10YR7/2にぶい黄橙 ～10YR1.7/1黒 外・断：10YR6/3にぶい 黄橙	長石・石英・雲 母	
10	45	37	18	17	08-1	緑灰色シル ト	深鉢					内：2.5Y6/2灰黄 外：7.5YR4/2灰褐 断：2.5Y3/1黒褐	長石・石英・角 閃石 2～5mmの粗粒礫 含む	内内。LR。
11	45	37	15	17	08-1	緑灰色シル ト	深鉢口縁部					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：7.5YR6/4にぶい 橙・10YR5/2灰黄褐 断：10YR5/2灰黄褐	長石・石英 2～5mmの粗粒	山形口縁。
12	46		2	22	08-1	緑灰色シル ト	深鉢頸部 ～胴部					内：10YR8/3淡黄橙 外・断：10YR6/3にぶい 黄橙	長石・石英・ク サリ礫	1と同一個体の可 能性あり。LR。
13	46	37	1	21	08-1	緑灰色粘土 混シルト	深鉢頸部 ～胴部					内：10YR8/3淡黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・ チャート	LR。
14	46	37	10	17	08-1	緑灰色シル ト	深鉢口縁部					内・断：10YR7/2にぶい 黄橙 外：7.5YR4/2灰褐	長石・石英・ チャート 2～5mmの粗粒	波状口縁。 LR。

表2 縄文土器観察表2

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
15	46		21	23	08-1	緑灰色シルト ～ 黒灰色粘土	底部			14.0		内・外・断：2.5Y5/1黄 灰	長石・石英・ チャート・角閃 石	河内。 爪痕あり。 LR。
16	46		19	13	08-1	黄褐色土～ 緑灰色土	底部			6.3		内：10YR4/1褐灰 外・断：7.5YR7/4にぶ い橙	長石・石英・ク サリ礫	
17	46		22	44	08-1b	緑灰色 (青灰色) シルト～ 微砂	底部			(10.1)		内・外・断：10YR7/4に ぶい黄橙	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	
18	46		26	41	08-1b	緑灰色 (青灰色) シルト	底部			13.7		内・外・断：10YR7/3に ぶい黄橙	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	
19	46		23	17	08-1	緑灰色シル ト	底部			9.6		内・断：10YR3/1黒褐 外：10YR6/2灰黄褐	長石・石英・雲 母	河内？
20	46		24	24	08-1	緑灰色シル ト	底部			(11.0)		内：10YR8/2灰白 外：10YR5/3にぶい黄 褐・10YR3/1黒褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英	
21	46		20	26	08-2b	灰黄褐色土	底部			(14.0)		内・外・断：10YR7/4に ぶい黄橙	長石・石英・ク サリ礫	
22	46		25	14	08-1	緑灰色粘質 シルト	底部			(14.0)		内・断：7.5YR4/1褐灰 外：7.5YR4/3褐	長石・石英	
23	47	38	13	49	08-2b	黄灰色粘土	深鉢口縁部					内：10YR5/3にぶい黄褐 外：7.5YR4/2灰褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・ チャート	25、27は同一個体 と考えられる。 縦長の節の目立つ RL縄文。
24	47	38	12	58	08-2c	緑灰色～ オリーブ 灰色粘土	深鉢口縁部					内：10YR3/1黒褐 外・断：10YR5/2灰黄褐	長石・石英・ チャート	縦長の節の目立つ RL縄文。
25	47	38	14	47	08-2b	褐灰色粘土	深鉢胴部					内：10YR5/3にぶい黄褐 外：10YR4/2灰黄褐 断：10YR3/1黒褐		23と同一個体と考 えられる。
26	47	38	7	47	08-2b	褐灰色粘土	胴部片					内：10YR4/2灰黄褐 外：10YR3/2黒褐 断：10YR4/2灰黄褐		ベース層GL- 150cm。縦長の節 の目立つRL縄文。
27	47	38	9	47	08-2b	褐灰色粘土	深鉢胴部					内・外：10YR7/4にぶい 黄橙 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・ チャート	23と同一個体と考 えられる。
28	47	38	252	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ 灰色粘土	深鉢口縁部					内・断：10YR5/3にぶい 黄褐 外：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・ チャート	LR。
29	47		247	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ 灰色粘土	深鉢胴部					内：7.5YR7/3にぶい橙 外：10YR6/2灰黄褐・ 10YR2/1黒 断：10YR6/2灰黄褐	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	LR。

表2 縄文土器観察表3

遺物 No.	挿 図 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
30	47	38	244	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	深鉢口縁部					内・外・断：10YR7/3に ぶい黄橙・7.5YR7/4に ぶい黄橙	長石・石英・ チャート	波状口縁。
31	47	38	246	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	鉢?胴部					内：10YR5/1褐灰・ 10YR4/1褐灰 外：10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR7/2にぶい黄橙		
32	47		242	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	深鉢胴部					内：7.5YR6/6橙 外：5YR6/6橙・ 7.5YR4/1褐灰 断：10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英	
33	47		243	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	深鉢胴部					内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR3/1黒褐・ 10YR5/3にぶい黄褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・ チャート	LR。
34	47		245	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	深鉢胴部					内：10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR4/2灰褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・胎 土中に炭化物含 む	
35	47		241	60	08-3d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	深鉢胴部					内・断：10YR6/3にぶい 黄橙 外：7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英・ク サリ礫	
36	47		240	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	深鉢胴部					内：10YR5/3にぶい黄 褐・10YR3/3暗褐 外・断：10YR5/3にぶい 黄褐	長石・石英・ク サリ礫・チャ ート	
37	47		248	60	08-2d	緑灰色～ オリーブ灰色 粘土	深鉢胴部					内：7.5YR6/4にぶい橙 外・断：7.5YR4/2灰褐	長石・石英・ チャート	LR。
38	47		230	62	08-3a	02SD 灰色砂層	浅鉢口頸部					内：2.5Y7/1灰白 外：10YR7/2にぶい黄橙 断：2.5Y5/3黄褐	長石・石英・ チャート	
39	47		250	60	08-3a	緑灰色～オ リーブ灰色 粘土	底部			12.2		内：10YR8/2灰白 外：10YR8/3浅黄橙 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート・ク サリ礫	
40	47		249	60	08-2d	緑灰色～オ リーブ灰色 粘土	底部			(10.8)		内：10YR8/2灰白 外：10YR8/3浅黄橙 断：2.5Y6/1黄灰	長石・石英 2～5mmのチャ ート含む	
41	48	39	143	203	08-4	03SK	深鉢口縁部 ～胴部					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR5/1褐灰・ 10YR3/1黒褐 断：10YR6/1褐灰	長石・石英・ チャート	43は同一個体か。 LR。
42	48	39	141	201	08-4	山銅 灰黄褐色土	深鉢口縁部					内・断：7.5YR4/2灰褐 外：7.5YR4/3褐	長石・石英・ チャート	LR。
43	48	39	132	215	08-4	03SK 2.3層	深鉢口縁部					内：10YR6/2灰黄褐・ 10YR4/1褐灰 外：2.5Y2/1黒 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	41と同一個体か。 LR。
44	48	39	233	72	08-4	茶褐色粘質 土	深鉢口縁部					内：10YR5/3にぶい黄褐 外：10YR3/2黒褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・ チャート	波状口縁。LR。

表2 縄文土器観察表4

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
45	48	39	133	204	08-4	03SK	深鉢口縁部					内：10YR6/1褐灰・ 10YR3/1黒褐 外：10YR4/1褐灰 断：10YR6/1褐灰	長石・石英・ チャート	波状口縁。LR。
46	48		227	175	08-4	黄灰褐色土	深鉢口縁部					内・外・断：10YR5/3に ぶい黄褐。	長石・石英・ チャート?・雲 母?	縄文層下層。 T.P.17mより下へ 砂礫層まで。LR。
47	48		136	206	08-4	03SK	深鉢口縁部					内：2.5Y6/2灰黄 外：2.5Y7/3浅黄 断：2.5Y5/1黄灰	長石・石英・ チャート	49と同一個体。 LR。
48	48		238	159	08-4	黄灰褐色土 (海側)	深鉢口縁部					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR8/2灰白 断：10YR7/1灰白	長石・石英・ク サリ礫	縄文層。波状口 縁。LR。
49	48	39	255	197	08-4	03SK	深鉢口縁部					内：2.5Y6/1黄灰 外：10YR4/1褐灰 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	47と同一個体。波 状口縁。LR。
50	48	39	129	235	08-4	03SK	深鉢口縁部					内・断：10YR7/2にぶい 黄橙 外：10YR6/1褐灰・ 10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	山形口縁。LR。
51 ・ 52	48	39	225	164・ 182・ 185・ 186	08-4	03SK 褐色土・黒 灰色土	深鉢口縁部					内・断：10YR6/2灰黄褐 外：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・ チャート・雲母	一個体。波状口 縁。LR。
53	48		265	232・ 235・ 205・ 197	08-4	03SK	深鉢	27.2	32.0			内・外：5Y5/2灰オリ ブ～5Y2/1黒	長石・石英・角 閃石	河内。埋設土器。
54	49		228	172	08-4	黄灰褐色土	深鉢口縁部					内：7.5YR7/4にぶい橙 外：7.5YR6/4にぶい褐 断：5YR5/6明赤褐	長石・石英・ク サリ礫	波状口縁。
55	49	39	254	192	08-4	黄灰褐色土	深鉢口縁部					内：10YR8/3浅黄橙 外・断：10YR6/3にぶい 黄橙	長石・石英	無節縄文(Lr)?。
56	49	39	235	159	08-4	黄灰褐色土 (海側)	深鉢口縁部					内：10YR6/3にぶい黄橙 外：7.5YR6/3にぶい褐 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート 2～5mmの粗粒礫	縄文層。波状口 縁。LR。
57	49	39	128	224	08-4	03SK	深鉢口縁部					内：7.5YR4/1褐灰・ 10YR8/3浅黄橙 外・断：10YR7/1灰白	長石・石英	山形口縁。波頂 部。LR。
58	49		130	215	08-4	03SK 2.3層	深鉢口縁部					内・断：10YR1.7/1黒 外：10YR3/1黒褐	長石・石英 2～5mmの礫	山形口縁。
59	49	39	140	200	08-4	山側黄灰褐 色土	深鉢口縁部					内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR5/3にぶい黄褐 断：10YR6/3にぶい黄褐	長石・石英	LR。
60	49	39	257	192	08-4	黄灰褐色土	深鉢口縁部					内：5YR6/6橙・ 7.5YR7/3にぶい橙 外・断：7.5YR5/3にぶい 褐	長石・石英・ク サリ礫 2～3mmの粗粒礫	波状口縁。LR。

表2 縄文土器観察表5

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
61	49	39	236	159	08-4	黄灰褐色土 (海側)	深鉢口縁部					内：10YR8/1灰白 外・断：7.5YR7/3に ぶい橙	長石・石英・ チャート	縄文層。波状口 縁。LR。
62	49		256	193	08-4	黄灰褐色土	深鉢口縁部					内：10YR5/1褐灰 外：7.5YR4/1褐灰 断：10YR6/1褐灰・ 10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	
63	49	39	237	164	08-4	03SK 褐色土・ 黒灰色土	深鉢口縁部					内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR5/2灰黄褐・ 10YR4/1褐灰 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ク サリ礫	
64	49		259	189	08-4	03SK	深鉢口縁部					内・断：7.5YR2/1黒 外：7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英・ チャート	
65	49	39	258	192	08-4	黄灰褐色土	深鉢口縁部					内・外・断：10YR7/3に ぶい黄橙	長石・石英	波状口縁。
66	49		239	164	08-4	03SK 褐色土・ 黒灰色土	浅鉢口縁 部?					内：10YR6/3にぶい黄 橙・10YR4/1褐灰 外：10YR4/1褐灰・ 10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ク サリ礫 2~3mmの粗粒礫	
67	49		226	180	08-4	03SK	深鉢胴部					内・断：10YR7/2にぶい 黄橙 外：10YR7/2にぶい黄 橙・10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート・クサ リ礫 2~3mmの粗粒礫 多	
68	49		142	202	08-4	03SK	底部			(10.7)		内：7.5YR5/3にぶい褐 外：7.5YR7/4にぶい褐 断：7.5YR5/1褐灰	長石・石英・角 閃石 2~3mmの粗粒礫	53と同一個体の可 能性。河内。
69	49		125	214	08-4	03SK	底部			(12.0)		内・外・断：10YR7/2に ぶい黄橙・10YR5/6黄 褐・10YR3/2黒褐		断面中。
70	49		126	232・ 235	08-4	03SK 下層	底部			(12.8)		内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y6/1黄灰 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート(多)	
71	50	40	232	191	08-5	01SD 下層黒褐色 粘質土	深鉢口縁部					内：10YR4/3にぶい黄褐 外：10YR5/3にぶい黄 褐・10YR2/1黒 断：10YR2/1黒	長石・石英・角 閃石	河内。
72	50	40	231	191	08-5	01SD 下層黒褐色 粘質土	深鉢口縁部					内・外・断：10YR2/1黒		河内。
73	50	40	121	211	08-7	暗灰色粘土	深鉢口縁部					内：10YR3/2黒褐・ 10YR5/2灰黄褐 外：7.5YR5/3にぶい褐 断：10YR6/1褐灰	長石・石英	
74	50		234	155	08-6	青灰色粘土	浅鉢口縁部					内：10YR4/1褐灰 外：10YR4/1褐灰・ 10YR6/2灰黄褐 断：10YR6/2灰黄褐	長石・石英	鋸形口縁。
75	50		138	207	08-7	第1面 青灰色砂シ ルト	深鉢口縁部					内：2.5Y3/1黒褐 外：10YR5/3にぶい黄橙 断：2.5Y5/1黄灰	長石・石英・角 閃石	河内?。

表2 縄文土器観察表6

遺物 No	種 別 No	図 版 No	実 測 No	登 録 No	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ の 他			
76	50	40	154	210	08-7	01SD 黒灰色粘土 (上層)	深鉢口縁部					内・外・断：10YR4/3に ぶい黄褐	長石・石英・角 閃石	上層。河内。口縁 部に刻目？
77	50	40	131	211	08-7	暗灰色粘土	浅鉢口縁部					内：7.5YR4/3褐 外：7.5YR4/2灰褐 断：7.5YR5/1褐灰	長石・石英	
78	50	40	127	210	08-7	01SD 黒灰色粘土	浅鉢口縁部					内：2.5Y6/1黄灰 外：7.5YR6/3にぶい 褐・5YR6/6橙 断：2.5Y6/1黄灰	長石・石英	上層。
79	50	40	135	210	08-7	01SD 黒灰色粘土	深鉢口縁部					内：2.5Y3/2黒褐 外：2.5Y2/1黒 断：2.5Y4/1黄灰	長石・石英・雲 母	上層。河内？
80	50	40	139	210	08-7	01SD 黒灰色粘土	浅鉢口縁部					内：10YR3/1黒褐 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	上層。
81	50	40	124	211	08-7	暗灰色粘土	浅鉢口縁部					内・断：10YR3/1黒褐 外：7.5YR3/2黒褐	長石・石英・角 閃石	河内。波状口縁方 形浅鉢。
82	50		134	210	08-7	01SD 黒灰色粘土	深鉢胴部					内：10YR4/1褐灰 外：10YR7/3にぶい黄 橙・10YR3/1黒褐 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	上層。
83	50		253	199	08-7	第1面内青 灰色シルト	深鉢口縁部					内・外：10YR4/2灰黄褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英	外面に条痕。
84	50		137	210	08-7	01sd 黒灰色粘土	深鉢口縁部					内：10YR3/2黒褐 外：7.5YR4/4褐 断：7.5YR4/2灰褐	長石・石英・角 閃石	上層。河内。
85	50	40	152	210	08-7	01SD 黒灰色粘土	深鉢口縁部	(31.6)				内・断：10YR4/1褐灰 外：7.5YR4/2灰褐・ 10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・ チャート	上層。
86	50	40	151	210	08-7	01SD 黒灰色粘土	深鉢口縁部	(36.0)				内・外・断：7.5YR4/3 褐	長石・石英・ チャート	河内。
87	50		122	211	08-7	暗灰色粘土	底部			(5.6)		内：10YR4/2灰黄褐 外：7.5YR4/3褐 断：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・ チャート	河内。
88	50		251		08-5	01SD	底部			(11.6)		内：10YR5/2灰黄褐 外・断：10YR6/3にぶい 黄橙	長石・石英・ チャート	図面番号14の層。 取上番号169。
89	51	41	191	586	08-8	02NR 砂礫層・最 下層	深鉢口縁部					内：10YR4/2灰黄褐 外：10YR3/2黒褐 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ク サリ礫	波状口縁。
90	51	41	61	605	08-8	02NR 灰色シルト 中層海側黄 灰色砂～砂 礫	注口土器					内・断：2.5Y5/1黄灰 外：2.5Y6/1黄灰・ 2.5Y5/1黄灰	長石・石英・ チャート	UFO形。

表2 縄文土器観察表7

遺物 No.	種 図 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ の 他			
91	51	41	60	634	08-8	02NR 灰色シルト ～砂・灰色 粘土	深鉢口縁部	(32.2)				内・断：2.5Y3/1黒褐 外：2.5Y2/1黒	長石・石英	
92	51	41	180	585	08-8	02NR 砂礫～ 腐植土	深鉢口縁部					内・外：10YR3/2黒褐・ 10YR2/1黒 断：10YR3/2黒褐	長石・石英・角 閃石	波状口縁。
93	51	41	56	604	08-8	02NR 山側中央灰 色シルト	深鉢口縁部	(32.0)				内：10YR3/1黒褐・ 10YR5/3にぶい黄褐 外：10YR4/2灰黄褐・ 10YR3/1黒褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・雲 母・角閃石	
94	51	41	209	488	08-8	02NR 灰黄色砂～ 茶色砂	深鉢口縁部					内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR5/2灰黄褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英	
95	51	41	171	579	08-8	02NR 灰色シルト (山側下層 部)	深鉢口縁部					内・外・断：10YR2/1黒	長石・石英・雲 母・チャート	波状口縁。
96	51	41	120	634	08-8	02NR 灰色シルト ～砂・灰色 粘土	深鉢胴部					内：10YR2/1黒・ 10YR4/2灰黄褐 外：10YR1.7/1黒 断：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・角 閃石	河内。
97	51	41	115	634	08-8	02NR (山側) 灰 色シルト～ 灰色粘土腐 植土	深鉢胴部					内・断：2.5Y2/1黒 外：2.5Y3/1黒褐・ 10YR4/2灰黄褐	梅精良・長石・ 石英・微粒若干	腕縄文。
98	51	41	90	656	08-8	02NR	深鉢口縁部					内・外：10YR3/2黒褐・ 5YR4/4にぶい赤褐 断：10YR3/2黒褐	長英・石英	外面赤色顔料。
99	51	41	58	634	08-8	02NR 灰色シル ト・砂・粘 土	深鉢胴部					内：10YR2/1黒 外・断：10YR3/1黒褐	長石・石英・雲 母・角閃石	
100	51	41	89	656	08-8	02NR 褐色砂礫層	深鉢胴部					内：10YR3/2黒褐 外：10YR1.7/1黒・ 10YR3/2黒褐 断：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・ チャート	ウルシ？。
101	52	42	76	570	08-8	02NR 砂礫～青灰 色シルト	深鉢口縁部					内・外・断：10YR3/1黒 褐・10YR5/3にぶい黄褐	長石・石英	
102	52		72	570	08-8	02NR 砂礫～青灰 色シルト	深鉢口縁部					内・断：10YR4/2灰黄褐 外：10YR6/2灰黄褐	長石・石英・角 閃石 2～5mmの粗粒礫	河内。
103	52	42	86	656	08-8	02NR 褐色砂礫層	深鉢口縁部					内・外：10YR8/3浅黄 橙・2.5Y3/1黒褐 断：2.5Y7/2灰黄	長石・石英・ チャート	
104	52	42	186	586	08-8	02NR 砂礫層・最 下層	深鉢口縁部					内：10YR4/2灰黄褐 外：10YR4/1褐灰・ 10YR3/1黒褐 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	
105	52		51	604	08-8	02NR 山側灰色シ ルト	深鉢口縁部					内：10YR3/1黒褐 外：10YR6/3にぶい黄 橙・N2/黒 断：10YR3/1黒褐	長石・石英	

表2 縄文土器観察表8

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
106	52	42	87	657	08-8	02NR 褐色砂礫層	深鉢口縁部					内・外・断：10YR3/3暗 褐・10YR2/1黒	長石・石英	
107	52	42	73	570	08-8	02NR 砂礫～青灰 色シルト	深鉢口縁部					内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR4/2灰黄褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・ チャート	
108	52		160	495	08-8	02NR 中央下層・ 礫層	深鉢口縁部					内：10YR5/2灰黄褐・ 10YR3/1黒褐 外：10YR3/1黒褐・ 7.5YR4/2灰褐 断：10YR5/2灰黄褐	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	
109	52		103	658	08-8	02NR 黒褐色粘質 土	深鉢口縁部					内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR5/2灰黄褐 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	
110	52		54	604	08-8	02NR 山側中央灰 色シルト	深鉢口縁部					内：10YR4/2灰黄褐 外：10YR3/1黒褐・ 10YR1.7/1黒 断：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・雲 母・角閃石	
111	52		118	634	08-8	02NR 灰色シルト ～砂・灰色 粘土	深鉢口縁部					内：10YR4/2灰黄褐 外：10YR2/1黒 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・角 閃石・雲母	河内。
112	52	42	112	640	08-8	02NR	深鉢口縁部					内：2.5Y3/1黒褐 外：2.5Y4/1黄灰 断：10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英	ボウル形。縄原式 文様。赤色顔料。
113	52		93	655	08-8	02NR 褐色砂礫層	鉢	(11.4)				内・外：2.5Y6/2灰白 断：2.5Y6/1黄灰	砂粒こまかい	
114	52		173	571	08-8	02NR 砂礫層	浅鉢					内：10YR3/1黒褐 外：10YR5/1褐灰 断：10YR3/1黒褐・ 10YR5/1褐灰	長石・石英	内面付着物質。ウ ルシク。
115	52	42	63	634	08-8	02NR 灰色シルト ～砂・灰色 粘土	鉢	(18.4)				内・断：10YR1.7/1黒 外：10YR1.7/1黒・ 10YR5/2灰黄褐	長石・石英・角 閃石	河内。
116	52	42	174	571	08-8	02NR 砂礫層	深鉢口縁部					内・外：2.5Y3/1黒褐 断：2.5Y5/1黄灰	長石・石英・雲 母・クサリ礫	波状口縁。
117	52		99	643	08-8	02NR 砂礫～シル ト（山側）	浅鉢					内・外：2.5Y2/1黒 断：2.5Y4/1黄灰	長石・石英・角 閃石	
118	52		177	581	08-8	02NR 砂礫層・最 下層	深鉢胴部					内：10YR2/2黒褐 外：10YR2/1黒 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・角 閃石	
119	53	43	190	579	08-8	02NR 山側下層部 灰色シルト	深鉢口縁部	(42.0)				内：10YR2/1黒 外：10YR6/3にぶい黄 橙・10YR2/1黒 断：10YR4/1褐灰	長石・石英	
120	53	43	57	605	08-8	02NR 海側黄灰色 砂～砂礫	深鉢口縁部	(34.0)				内：7.5YR3/3暗褐 外：10YR3/2黒褐・ 10YR1.7/1黒 断：10YR5/2灰黄褐	長石・石英・角 閃石	

表2 縄文土器観察表9

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量				色調	胎土	備考
								口径	器高	底径	その他			
121	53	43	59	634	08-8	02NR 山側灰色シルト～砂・灰色粘土	深鉢	(28.5)				内：10YR1.7/1黒・10YR3/2黒褐 外・断：10YR1.7/1黒	長石・石英・チャート	
122	53		49	605	08-8	02NR 海側黄灰色砂～砂礫	深鉢 口縁部					内：10YR7/3にぶい黄橙・10YR4/1褐灰 外・断：10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英・チャート	
123	53	43	170	579	08-8	02NR 山側下層部 灰色シルト	深鉢 口縁部					内：10YR4/1褐灰 外：10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR6/2灰黄褐	長石・石英・チャート	
124	53	43	175	579	08-8	02NR 灰色シルト (山側下層部)	深鉢 口縁部					内・断：10YR2/1黒 外：10YR7/2にぶい黄橙・10YR5/2灰黄褐	長石・石英・角閃石	河内。
125	53	43	66	604	08-8	02NR (山側) 中層・灰色シルト	深鉢	(34.0)				内：10YR3/2黒褐 外：10YR3/1黒褐・10YR1.7/1黒 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・角閃石	河内。小波状？。炭化物付着。
126	53		159	492	08-8	02NR 礫層～砂層	深鉢 口縁部					内：10YR6/1褐灰・10YR1.7/1黒 外：10YR5/2灰黄褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英	
127	54		96	642	08-8	02NR 砂礫層最下層	深鉢 口縁部					内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR6/2灰黄褐・N3/橙灰 断：N6/灰	長石・石英・チャート	
128	54		187	593	08-8	02NR 灰黄色砂上層	深鉢 口縁部	(31.0)				内・断：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR8/2灰白	長石・石英・チャート	
129	54		74	552	08-8	黄灰色砂(シルト)～青灰色粘土	深鉢 口縁部					内・断：10YR4/1褐灰 外：10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英・チャート	
130	54		172	579	08-8	02NR 山側下層部 灰色シルト	深鉢 口縁部					内：10YR2/1黒 外：10YR2/1黒・10YR5/3にぶい黄褐 断：10YR6/1褐灰	長石・石英・チャート	
131	54		53	604	08-8	02NR 山側中央 灰色シルト	鉢 口縁部					内：10YR2/1黒・10YR3/1黒褐 外：10YR2/1黒・10YR4/2灰黄褐 断：10YR4/2灰黄褐	長石・石英	
132	54		50	604	08-8	02NR 山側中央 灰色シルト	深鉢 口縁部					内：2.5Y7/2灰黄・2.5Y3/1黒褐 外：2.5Y4/1黄灰・2.5Y3/1黒褐 断：2.5Y4/1黄灰	長石・石英・チャート	
133	54		179	585	08-8	02NR 砂礫～腐植土	深鉢 口縁部					内：10YR4/1褐灰 外：10YR5/2灰黄褐・10YR3/1黒褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英	
134	54		157	495	08-8	02NR 下層・砂礫層	深鉢 口縁部					内：5Y2/1黒 外：5Y2/1黒・2.5Y3/1黒褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・チャート	
135	54		77	570	08-8	02NR 砂礫～青灰色シルト	深鉢 口縁部					内・外・断：10YR2/1黒・10YR3/2黒褐	長石・石英・角閃石	河内。

表2 縄文土器観察表10

遺物 No.	挿 図 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ の 他			
136	54		71	570	08-8	02NR 砂礫～青灰色シルト	深鉢口縁部					内：10YR5/6赤・ 10YR6/2灰黄褐 外：5YR6/4にぶい橙 断：5YR5/4にぶい赤褐	長石・石英・ チャート	
137	54		155	496	08-8	02NR 黄灰色砂 (シルト) ～砂礫	深鉢口縁部					内：2.5Y5/1黄灰 外：5YR6/6橙・10YR8/2 灰白 断：10YR8/2灰白	長石・石英・ チャート	
138	54		91	655	08-8	02NR 褐色砂礫層	深鉢口縁部					内：10YR2/1黒 外：5YR5/4にぶい赤褐 断：10YR4/2R灰黄褐	長石・石英・ チャート	
139	54		176	571	08-8	02NR 砂礫～青灰色シルト	深鉢口縁部					内：7.5YR7/3にぶい橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR6/1褐灰	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	
140	54		147	327	08-8	02NR 中央部砂礫層	深鉢胴部					内・断：10YR7/3にぶい 黄橙 外：10YR6/2灰黄褐	チャート・クサ リ礫	
141	54		88	656	08-8	02NR 褐色砂礫層	深鉢胴部					内：7.5YR8/3浅黄橙・ 5YR7/6橙 外：10YR7/3にぶい黄 橙・5YR6/6橙 断：10YR6/1褐灰	長石・石英・ チャート	
142	54		114	635	08-8	02NR (海側) 灰 黄色砂礫腐 植土	深鉢頸部					内：10YR4/1褐灰・ 10YR3/1黒褐 外：10YR6/2灰黄褐・ 10YR4/1褐灰 断：10YR6/2灰黄褐	長石・石英・ チャート	
143	54	42	3・1	497	08-8	黄灰色砂 (シルト) ～青灰色粘 土	深鉢	(10.0)				内：10YR7/2にぶい黄 橙・10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄 橙・10YR5/2灰黄褐・ 10YR3/1黒褐 断：10YR7/3にぶい黄 橙・10YR5/1褐灰	長石・石英	ミニチュア？。B 突起。
144	54		219	424	08-8	02NR 灰色砂礫	深鉢口縁部			(14.0)		内・外：7.5YR5/3にぶ い褐 断：7.5YR5/2灰褐	長石・石英・ チャート	
145	55	42	189	593	08-8	02NR 灰黄色砂上 層	深鉢	24.0				内：10YR3/1黒褐・ 10YR4/1褐灰 外・断：10YR3/1黒褐	長石・石英・ チャート	3突起小波状。
146	55	44	55	604	08-8	02NR 山側中央灰 色シルト	深鉢口縁部					内：10YR1.7/1黒 外：10YR1.7/1黒・ 10YR5/2灰黄褐 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	
147	55	44	113	635	08-8	02NR 灰黄色砂礫 ～腐植土層	深鉢口縁部					内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR5/3にぶい黄褐 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	波状口縁。
148	55	44	67	554	08-8	02NR	深鉢口縁部					内・断：10YR6/3にぶい 黄橙 外：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・ チャート	視乱部分。
149	55	44	100	655	08-8	02NR 褐色砂礫層	深鉢口縁部	(38.0)				内：2.5Y5/2暗灰黄・ 2.5Y3/1黒褐 外：2.5Y5/3黄褐 断：2.5Y3/1黒褐	長石・石英・雲 母・チャート	
150	55	44	83	570	08-8	02NR 砂礫～ 青灰色シル ト	深鉢	(33.6)				内：2.5Y3/1黒褐・ 10YR6/3にぶい黄褐・ 10YR2/1黒 外：10YR5/3にぶい黄 褐・10YR6/3にぶい黄 褐・10YR2/1黒 断：10YR3/1黒褐・ 10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	

表2 縄文土器観察表11

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
151	56	44	69	552	08-08	黄灰色砂 (シルト) ～ 青灰色粘土	浅鉢	(12.3)				内: 2.5Y4/1黄灰 外: 2.5Y3/2黒褐 断: 2.5Y7/1灰白	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	
152	56	44	92	655	08-8	02NR 褐色砂礫層	浅鉢	(18.3)				内・外: 10YR3/1黒褐 断: 10YR6/1褐灰	長石・石英・ チャート	
153	56	44	188	577	08-8	02NR 山側下部 灰色シルト	浅鉢	(20.0)	9.6			内: 10YR5/2灰黄褐 外: 2.5Y6/6橙・ 10YR5/3にぶい黄褐 断: 10YR5/1褐灰	長石・石英・雲 母・角閃石	
154	56		97	643	08-8	02NR 砂礫～シル ト(山側)	浅鉢					内: 2.5Y2/1黒 外: 10YR4/1褐灰・ 7.5YR7/4にぶい橙 断: 2.5Y2/1黒	長石・石英	
155	56		149	316	08-8	11NR下層 (上面から 約12m) 砂 礫層	浅鉢					内: 7.5YR7/6橙 外: 10YR7/3にぶい黄 橙・2.5Y5/1黄灰 断: 7.5YR7/6橙・ 10YR7/2にぶい黄橙	長石・チャ一 ト・クサリ礫	
156	56		39	705	08-8	茶褐色砂礫	浅鉢					内: 10YR2/1黒 外・断: 10YR4/1褐灰	長石・石英・角 閃石	河内。
157	56		148	304	08-8	11NR 中下層黄灰 色粘土	浅鉢					内・外・断: 10YR3/1黒 褐	長石・石英・角 閃石	
158	56	42	166	492	08-8	02NR 礫層～砂層	鉢	18.4	10.3			内: 10YR5/1褐灰・ 10YR6/2灰黄褐 外: 10YR6/2灰黄褐・ 10YR4/1褐灰 断: 10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	
159	56	44	95	642	08-8	02NR 砂礫層最下 層	浅鉢	(34.0)				内: 7.5YR2/1黒 外: 7.5YR2/1黒・ 7.5YR3/1黒褐 断: 7.5YR6/1褐灰	長石・石英・ チャート	
160	56	44	153	321	08-8	02NR 灰色～褐色 砂礫	浅鉢	(50.0)				内・断: 10YR3/1黒褐 外: 10YR4/2灰黄褐	長石・石英・雲 母	
161	56		161	492	08-8	02NR 礫層～砂層	浅鉢	(33.0)				内: 10YR2/1黒 外: 10YR4/1褐灰・ 10YR5/2灰黄褐 断: 10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	
162	56	44	44	570	08-8	02NR 砂礫～青灰 色シルト	深鉢口縁部					内・外・断: 10YR5/3に ぶい黄褐	長石・石英	
163	56	44	145	306	08-8	11NR 中層灰白色 微砂～シル ト	深鉢口縁部					内: 10YR4/1褐灰 外: 10YR5/1褐灰・ 10YR4/1褐灰 断: 10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	
164	56	44	144	272	08-8	11NR 中層海側0 ～10m黄灰 色粘土(20 ～30cm)	深鉢口縁部					内・断: 10YR4/3にぶい 黄褐 外: 10YR4/3にぶい黄 褐・10YR3/1黒褐	長石・石英・角 閃石・クサリ礫	
165	56		123	272	08-8	11NR 中層(20～ 30cm)黄灰 色粘土	深鉢口縁部					内・外: 10YR4/2灰黄褐 断: N2/黒	長石・石英・雲 母・角閃石	河内。

表2 縄文土器観察表12

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
166	56	44	94	654	08-8	02NR 褐色砂礫層	壺口縁部					内：5Y6/1灰・5Y3/1オ リーブ黒 外：7.5YR5/4にぶい褐 断：5Y3/1オリーブ黒	長石・石英・角 閃石	河内。
167	57	45	68	552	08-8	黄灰色砂 (シルト) ～青灰色粘 土	深鉢口縁部					内：10YR7/2にぶい黄 橙・7.5YR5/6明褐 外：10YR3/2黒褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・ チャート	
168	57		185	586	08-8	02NR 砂礫層・最 下層	深鉢口縁部					内・断：10YR3/3暗褐 外：10YR3/3暗褐・ 10YR3/1黒褐	長石・石英・角 閃石	河内。
169	57	45	178	585	08-8	02NR 砂礫～腐植 土	深鉢口縁部					内：7.5YR2/1黒 外：7.5YR5/4にぶい褐 断：7.5YR2/1黒・ 7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英・ チャート	
170	57		111	635	08-8	02NR 灰黄色砂礫 ～腐植土層	深鉢口縁部					内：10YR1.7/1黒 外：10YR1.7/1黒・ 10YR5/3にぶい黄褐 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	
171	57	45	102	658	08-8	02NR 黒褐色粘質 土	深鉢口縁部					内：10YR5/2灰黄褐・ 10YR3/1黒褐 外：10YR1.7/1黒・ 10YR4/3にぶい黄褐 断：10YR6/2灰黄褐	長石・石英	
172	57	45	70	552	08-8	黄灰色砂 (シルト) ～青灰色粘 土	深鉢口縁部					内・断：10YR7/3にぶい 黄橙 外：10YR3/1黒褐	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	
173	57		85	657	08-8	02NR 褐色砂礫層	深鉢口縁部					内：2.5Y2/1黒 外：10YR4/2灰黄褐 断：2.5Y2/1黒・ 10YR4/2灰黄褐	長石・石英・角 閃石	河内。焼成後穿 孔。
174	57	45	101	658	08-8	02NR 黒褐色粘質 土	深鉢口縁部					内・外：10YR5/2灰黄 褐・10YR3/1黒褐 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	
175	57	45	84	570	08-8	02NR 砂礫～青灰 色シルト	深鉢口縁部	(36.0)				内・外：10YR4/3にぶい 黄褐・10YR3/1黒褐 断：10YR5/3にぶい黄褐	長石・石英・ チャート	焼成後穿孔。
176	57	45	44	658	08-8	02NR 黒褐色粘質 土	深鉢口縁部	(44.0)				内・外：2.5Y2/1黒 断：2.5Y4/1黄灰	長石・石英	
177	58		167	497	08-8	黄灰色砂 (シルト) ～青灰色粘 土	底部			2.6		内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR7/3にぶい黄 褐 断：10YR5/2灰黄褐	長石・石英・ チャート	底部小さい。
178	58		146	321	08-8	02NR 灰色・褐色 砂礫	底部			(4.3)		内・断：10YR3/1黒褐 外：10YR4/4褐	長石・石英・角 閃石	河内。
179	58	46	184	580	08-8	02NR 山側上層部 黄灰色シル ト質土	底部			5.4		内：2.5Y2/1黒 外：10YR7/2にぶい黄 橙 断：2.5Y5/1黄灰	長石・石英・ チャート 2～3mmの粗粒礫 多	河内。
180	58		82	553	08-8	02NR 黄灰色砂シ ルト～砂礫 層	底部			6.8		内：2.5Y8/2灰白 外：2.5YR5/6明赤褐 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	河内。

表2 縄文土器観察表13

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ の 他			
181	58		105	658	08-8	02NR 黒褐色粘質土	底部			(8.0)		内: 7.5YR5/6明褐 外: 10YR7/3にぶい黄橙 断: 10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	凹底。
182	58	46	168	496	08-8	02NR 山銅屑部黄 灰色砂(シルト)～砂礫	底部			7.8		内: 10YR3/1黒褐 外: 10YR4/2灰黄褐 断: 10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	
183	58		62	605	08-8	02NR灰色シルト 中層海側黄 灰色砂～砂礫	底部			18.0		内: 10YR4/1褐灰 外: 10YR6/3にぶい黄橙 断: 10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・ チャート 10mm程度の礫あり	凹底。
184	58		183	585	08-8	02NR 砂礫～腐植土	底部			5.2		内: 2.5Y3/1黒褐 外・断: 7.5YR6/6橙	長石・石英・ チャート	凹底。
185	58		162	497	08-8	黄灰色砂 (シルト) ～青灰色粘 土	底部			4.6		内: 2.5Y3/1黒褐 外・断: 2.5Y7/3浅黄	長石・石英・ チャート	凹底。
186	58		181	592	08-8	土層灰黄色 砂	底部			5.8		内: 2.5Y3/1黒褐 外: 10YR7/2にぶい黄橙 断: 5YR5/6明赤褐	長石・石英・ チャート	凹底。
187	58		208	475	08-8	03SD 灰色砂礫	底部			4.7		内: 7.5YR5/4にぶい褐 外: 2.5YR4/6赤褐・ 7.5YR5/2灰褐 断: 7.5YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	
188	58		104	650	08-8	02NR 黒褐色粘質土	底部			(5.0)		内: 7.5YR5/6明褐・ 10YR6/3にぶい黄橙 外: 10YR7/3にぶい黄 橙・10YR3/1黒褐 断: 10YR7/3にぶい黄 橙・10YR4/1褐灰	長石・石英	凹底。
189	58	46	119	634	08-8	02NR 灰色シルト ～砂・灰色 粘土	底部			5.8		内: 10YR3/1黒褐 外: 10YR4/1褐灰 断: 10YR3/1黒褐・ 10YR5/3にぶい黄褐	長石・石英・ チャート	凹底。
190	58		65	605	08-8	02NR 灰色シルト 中層海側黄 灰色砂～砂礫	底部			5.5		内: 10YR2/1黒 外: 10YR6/3にぶい黄 橙・10YR5/3にぶい黄褐 断: 10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	凹底。
191	58		117	635	08-8	02NR 灰黄色砂礫 ～腐植土層	底部			(6.4)		内: 10YR5/3にぶい黄褐 外: 10YR5/3にぶい黄 褐・5YR5/4にぶい赤褐 断: 10YR5/3にぶい黄褐	長石・石英・角 閃石	凹内。凹底。
192	58		98	642	08-8	砂礫層最下 層	底部			2.4		内: 10YR6/2灰黄褐 外: 10YR6/3にぶい黄橙 断: 10YR6/2灰黄褐・ 10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英	浅鉢底部?
193	58		81	570	08-8	02sd 砂礫～青灰 色シルト	底部			5.2		内: 10YR1.7/1黒・ 10YR5/3にぶい黄褐 外: 10YR4/1褐灰 断: 10YR1.7/1黒	長石・石英	浅鉢底部?
194	58		158	492	08-8	02NR 礫層～砂層	底部			4.6		内: 10YR7/2にぶい黄 橙・10YR5/1褐灰 外: 7.5YR6/6橙 断: 10YR7/2にぶい黄 橙・7.5YR6/6橙	長石・石英	凹底。
195	58		211	480	08-8	03SD 灰色礫層・ 褐灰色土 (礫の上の 層)	底部			4.5		内: 2.5Y2/1黒 外: 10YR5/2灰黄褐 断: 10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	いびつ。

表2 縄文土器観察表14

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
196	58		182	581	08-8	02NR 砂礫層・最 下層	底部			4.9		内・断：10YR6/3にぶい 黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・ チャート 2~5mmの粗粒混 含む	
197	58	46	156	492	08-8	02NR 礫層～砂層	底部			5.6		内・外：10YR8/2灰白 断：2.5Y5/1黄灰	長石・石英・ チャート	凹底。
198	58	46	79	570	08-8	02NR 砂礫～青灰 色シルト	底部			(5.0)		内：7.5YR4/1褐灰・ 7.5YR1.7/1黒 外：10YR6/3にぶい黄橙 断：7.5YR1.7/1黒	長石・石英・ チャート	
199	58		116	635	08-8	02NR 灰黄色砂礫 ～腐植土	底部			5.6		内：10YR2/1黒 外：10YR6/2灰黄褐・ 10YR3/1黒褐 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート	凹底。
200	58		64	604	08-8	02NR 山側中層灰 色シルト	底部			5.5		内：10YR4/2灰黄褐 外：2.5YR5/4にぶい赤 褐 断：10YR4/2灰黄褐	長石・石英	凹底。
201	58	46	150	323	08-8	02NR 中央部砂礫 層						内・外・断：10YR6/4に ぶい黄橙		人工物ではない。
202	58	46	165	497	08-8	黄灰色砂 (シルト) ～青灰色粘 土	土器片					内・外・断：10YR7/3に ぶい黄橙		縄文土器ではな い。
203	59	46	29	722	08-15	9SSD 砂礫層	浅鉢口縁部	(29.8)				内・外：10YR7/1黒 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・雲 母	<字屈曲。
204	59	46	201	469	08-9	丁寒0～ 9.7m第5層 黄褐色粘土	深鉢口縁部	(19.8)				内・断：10YR3/2黒褐 外：10YR4/2灰黄褐	長石・石英	
205	59	46	223	420	08-9	第5層黄褐 色粘土	注口土器					内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR8/2灰白・ 10YR4/1褐灰	長石・石英	和歌山側樹溝。
206	59	46	110	640	08-10	02sd (河道)	深鉢口縁部					内：2.5Y4/1黄灰・ 2.5Y2/1黒 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：2.5Y4/1黄灰	長石・石英・ チャート	
207	59	46	109	640	08-10	02sd (河道)	深鉢口縁部					内：N2/黒 外：10YR4/2灰黄褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・ チャート	
208	59	46	108	640	08-10	02SD (河道)	深鉢口縁部					内：10YR6/3にぶい黄 橙・10YR3/1黒褐 外：10YR3/2黒褐 断：10YR6/3にぶい黄橙	長石・チャート	
209	59	46	218	452	08-9	第5層黄褐 色粘土	深鉢胴部					内：10YR3/2黒褐 外：2.5YR6/6橙 断：10YR3/2黒褐	長石・石英・ チャート・結晶 片岩	豊中遺跡。
210	59	46	52	602	08-9	第5層黄褐 色粘土	深鉢口縁部					内：10YR3/4暗褐 外：10YR4/3にぶい黄 褐・10YR3/1黒褐 断：10YR3/1黒褐	長石・石英・角 閃石	

表2 縄文土器観察表15

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
211	59	40	264	24	09-01	西端 褐色粘土	深鉢	(30.0)				内・断：10YR8/2灰白 外：7.5YR7/4にぶい 橙・7.5YR3/1黒褐	長石・石英・ チャート	
212	59		106	640	08-10	02NR (河道)	底部(丸 底)					内：7.5YR4/3にぶい 褐・7.5YR5/6明褐 外：7.5YR4/4褐 断：7.5YR5/6明褐	長石・石英・雲 母・角閃石	河内。
213	59		47	724	08-15 4面	95SD 灰色砂礫層	底部(凹 底)					内：10YR6/1褐灰 外：5YR7/6橙 断：10YR6/1褐灰	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	
214	59		107	640	08-10	02SD (河道)	底部(凹 底)			(4.2)		内・外：10YR7/2にぶい 黄橙 断：2.5Y4/1黄灰	長石・石英・ チャート	
215	60	47	200	457	08-11	第2層2回目 (10~15mま で)褐色土	深鉢口縁部	(27.8)				内・断：10YR8/2灰白 外：10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	LR
216	60		204	463	08-11	縄文土器群	深鉢口縁部					内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR5/1褐灰	長石・石英	波状口縁波頂部。
217	60	47	210	466	08-11	縄文土器溜 灰白色土 (砂質土)	深鉢口縁部					内・断：7.5YR7/4にぶ い橙 外：10YR6/3にぶい黄 橙・10YR5/3にぶい黄橙	長石・石英・ク サリ礫	波状口縁。
218	60	47	207	479	08-11	褐色土 (下層)	深鉢口縁部					内・断：10YR5/2灰黄褐 外：7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英 2~5mmの粗粒礫	北部土器群周辺。 山形口縁。LR縄 文。
219	60	47	214	455	08-11	第2層褐色土	深鉢口縁部					内・断：10YR7/3にぶい 黄橙 外：7.5YR5/3にぶい褐	長石・石英・ク サリ礫	波状口縁。LR
220	60	47	192	448	08-11	褐色土 (砂質土)	深鉢口縁部					内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR8/2灰白 断：10YR7/4にぶい黄橙	長石・石英・ チャート	山形口縁。LR
221	60		199	455	08-11	第2層褐色土	深鉢口縁部					内・断：10YR5/2灰黄褐 外：10YR3/2黒褐	長石・石英・ チャート	山形口縁。
222	60	47	213	466	08-11	縄文土器溜 灰白色土 (砂質土)	深鉢口縁部					内：10YR8/3淡黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・ チャート 2~3mmの粗粒礫	波状口縁。
223	60	47	193	447・ 448・ 449	08-11	褐色土 (砂質土)	深鉢口縁部					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	波状口縁？
224	60	47	196	447・ 448・ 449	08-11	褐色土 (砂質土)	深鉢口縁部					内：7.5YR7/3にぶい橙 外・断：5YR5/6明赤褐	長石・石英・ク サリ礫	口縁部薄い。山 形口縁。胎土中に 炭化物含む。LR。
225	60		197	461	08-11	縄文土器群	深鉢口縁部					内：10YR7/3にぶい黄橙 外：2.5YR5/6明赤褐 断：7.5YR5/2灰褐	長石・石英・ク サリ礫	224と同一個体の 可能性。山形口 縁。胎土中に炭化 物含む。

表2 縄文土器観察表16

遺物 No	採 取 No	図 版 No	実 測 No	登 録 No	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量				色調	胎土	備考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
226	60	47	205	462	08-11	縄文土器群	深鉢口縁部					内：10YR7/2にぶい黄橙・10YR5/2灰黄褐 外：7.5YR4/2灰褐・7.5YR6/3にぶい褐 断：7.5YR4/2灰褐	長石・石英・クサリ礫	取上番号2。山形口縁。
227	60	47	217	454	08-11	第2層褐灰色土	深鉢口縁部					内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR5/3にぶい黄橙 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・チャート	波状口縁。LR。
228	60	47	215	455	08-11	第2層褐灰色包土	深鉢胴部					内：7.5YR6/6橙 外・断：7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英	LR。
229	60	47	216	455	08-11	第2層褐灰色包土	深鉢胴部					内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR5/1褐灰	長石・石英・チャート	LR。
230	60	47	194	447・448・449	08-11	褐灰色土(砂質土)	深鉢口縁部					内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙 断：10YR4/1褐灰	長石・石英	波状口縁。LR。
231	60	47	206	458	08-11	褐灰色砂質土(3回目)	深鉢口縁部					内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR3/1黒褐・10YR7/4にぶい黄褐 断：2.5Y3/1黒褐	長石・石英	波状口縁。RL?。
232	60	47	195	447・448	08-11	褐灰色土(砂質土)	深鉢胴部					内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR3/2黒褐 断：7.5YR4/3褐	長石・石英 5~8mm大の礫あり	LR。
233	60	47	224	447・448・449	08-11	褐灰色土(砂質土)	深鉢胴部					内：10YR6/3にぶい黄橙 外：7.5YR4/2灰褐 断：5Y4/4にぶい赤褐	長石・石英	中央部和歌山側。LR縄文。
234	60	47	212	466	08-11	縄文土器溜灰白色土(砂質土)	深鉢胴部					内・断：7.5YR5/4にぶい褐 外：7.5YR3/2黒褐	長石・石英・角閃石	河内。LR縄文。
235	61		220	433	08-11	第2層灰色土(還元土)	底部			(13.0)		内・外・断：2.5Y6/3にぶい黄	長石・石英 2~5mmの粗粒礫	縄文層。
236	61		221	447・448・449	08-11	褐灰色土(砂質土)	底部			(14.1)		内・外：7.5YR6/4にぶい橙 断：5YR4/4にぶい赤褐	長石・石英・クサリ礫	中央部和歌山側。
237	61		222	448	08-11	褐灰色土(砂質土)	底部			9.8		内：2.5Y7/2灰黄・2.5Y4/1黄灰 外：10YR7/3にぶい黄橙・10YR7/4褐灰 断：10YR5/1褐灰	長石・石英 2~5mmの粗粒礫	中央部。
238	61		203	465	08-11	褐灰色粘土	底部			(11.0)		内・外・断：10YR6/4にぶい黄橙・10YR3/1黒褐	長石・石英	
239	61		198	457	08-11	第2層2回目(10~15mまで)褐灰色土	底部			7.2		内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR7/4にぶい黄橙・2.5YR6.6橙 断：10YR6/1褐灰	長石・石英・クサリ礫	
240	61		202	465	08-11	褐灰色土	底部			(10.1)		内・外・断：2.5YR4/6赤褐	長石・石英・クサリ礫	

表2 縄文土器観察表17

遺物 No.	種 別 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺 構 層 位	器 種	法 量				色 調	胎 土	備 考
								口 径	器 高	底 径	そ 他			
241	62	48	36	899	08-14b	黄褐色土～ 褐灰色土 (砂質土)	深鉢口縁部					内：10YR4/2灰黄褐 外・断：10YR6/2灰黄褐	長石・石英・ チャート・クサ リ礫	RL。
242	62	48	43	726	08-14	T. P. 17m前 後灰黄色粘 土	深鉢口縁部					内：10YR6/1褐灰 外・断：2.5Y3/1黒褐	長石・石英・ チャート	
243	62	48	40	790	08-14b	下層砂礫～ シルト01sd	深鉢口縁部					内・断：10YR6/3にぶい 黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・ク サリ礫	RL？。
244	62	48	32	897	08-14b	褐灰色土	深鉢頸部					内：N6/灰 外：7.5YR6/4にぶい橙 断：N5/灰		RL。
245	62	48	41	726	08-14	T. P. 17m前 後灰黄色粘 土	深鉢口縁部					内・外・断：10YR8/2灰 白	長石・石英・ チャート	RL。
246	62	48	37	898	08-14b	褐灰色粘土	深鉢口縁部 付近？					内：2.5Y3/1黒褐 外：10YR5/1褐灰 断：10YR4/1褐灰	長石・石英・ チャート	RL。
247	62	48	34	899	08-14b	黄褐色土～ 褐灰色土 (砂質土)	深鉢胴部					内：7.5Y6/1灰 外：2.5Y5/2暗灰黄 断：7.5Y5/1灰	石英・チャート	
248	62	48	38	900	08-14b	褐灰色粘土	深鉢胴部					内：N3/暗灰 外：10YR3/1暗褐 断：N3/暗灰・10YR3/1 暗褐	長石・石英・ チャート	RL。
249	62	48	30	899	08-14b	黄褐色土～ 褐灰色土 (砂質土)	深鉢胴部					内：2.5Y6/2灰黄 外：10YR3/2黒褐 断：2.5Y5/1黄灰	チャート	RL。
250	62	48	35	900	08-14b	褐灰色粘土	深鉢頸胴部					内・断：N4/1灰 外：7.5YR6/3にぶい褐	長石・石英・ チャート	RL。
251	62	48	31	899	08-14b	黄褐色土～ 褐灰色土 (砂質土)	深鉢胴部					内：7.5YR5/1灰 外：2.5Y6/3にぶい黄 断：2.5Y5/1黄灰	チャート	RL。
252	62	48	33	899	08-14b	黄褐色土～ 褐灰色土 (砂質土)	深鉢胴部					内：10YR6/2灰黄褐 外：5Y5/2灰オリーブ 断：5Y4/1灰	チャート	RL。
253	62	48	45	870	08-14b	02SD褐灰色 砂～砂質土	深鉢	(42.4)				内・外・断：10YR4/3に ぶい黄褐	長石・石英・角 閃石	同内。
254	62	48	42	763	08-14b	暗褐色粘土	深鉢口縁部					内：10YR4/2灰黄褐 外：7.5YR4/3褐 断：10YR4/2灰黄褐	長石・石英・角 閃石	同内。
255	62	42	46	836	08-14b	21NR砂礫土	鉢	16.8	9.6			内：10YR3/3暗褐・ 10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR6/4にぶい橙 断：10YR3/3暗褐	長石・石英・ チャート	

表2 縄文土器観察表18

遺物 No.	挿図 No.	図版 No.	実測 No.	登録 No.	地区 名	遺構 層位	器種	法 量				色調	粘土	備考
								口径	器高	底径	その他			
256	62	48	28	847	08-14b	218R 褐灰色砂礫	浅鉢	(27.5)				内：10YR3/1黒褐 外：10YR3/2黒褐 断：10YR5/3にぶい黄褐	長石・石英・角 閃石	河内。
257	62		48	737	08-14	緑灰色粘土 (T. P. 17m 付近)	底部			11.0		内・断：10YR5/4にぶい 黄褐 外：7.5YR4/3褐	長石・石英・角 閃石？	河内？。
258	62	48	261	256	08-21d	GL-120～ 150cm 緑灰色粘土	深鉢胴部					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR6/1灰黄褐	長石・石英・ チャート	
259	62	48	260	255	08-21d	GL-120～ 150cm 緑灰色粘土	深鉢胴部					内・断：10YR3/1黒褐 外：10YR5/2灰黄褐	長石・石英・ チャート・黒色 粒 2～3mmの礫	
260	62		263	255	08-21d	GL-120～ 150cm 緑灰色粘土	浅鉢口縁部					内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR5/3にぶい黄褐 断：10YR5/1褐灰	長石・石英	
261	62	48	262	254	08-21d	GL-120～ 150cm 緑灰色粘土	土製耳飾	4.1	2.6	2.6		内：10YR4/1褐灰・ 10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR4/1褐灰 断：10YR2/1黒	長石・石英・ チャート	

注 08-7区-01 S Dは08-8区02 N Rと同じ河道か。

08-7区、08-9区、08-10区、08-15区、08-21区、09-1区は豊中遺跡の調査区。(次回報告予定)

第7節 石器

今回の調査では08-8区02N Rや08-1区～4区、08-11区、08-14区等で縄文時代層を掘削中に多くの石器が出土した。しかし、時間的制約からやや荒い掘削となっており、石鏃のように数cm程度の物は見つけることができなかつた可能性が高く、本来は数倍する石器があつたと思われる。

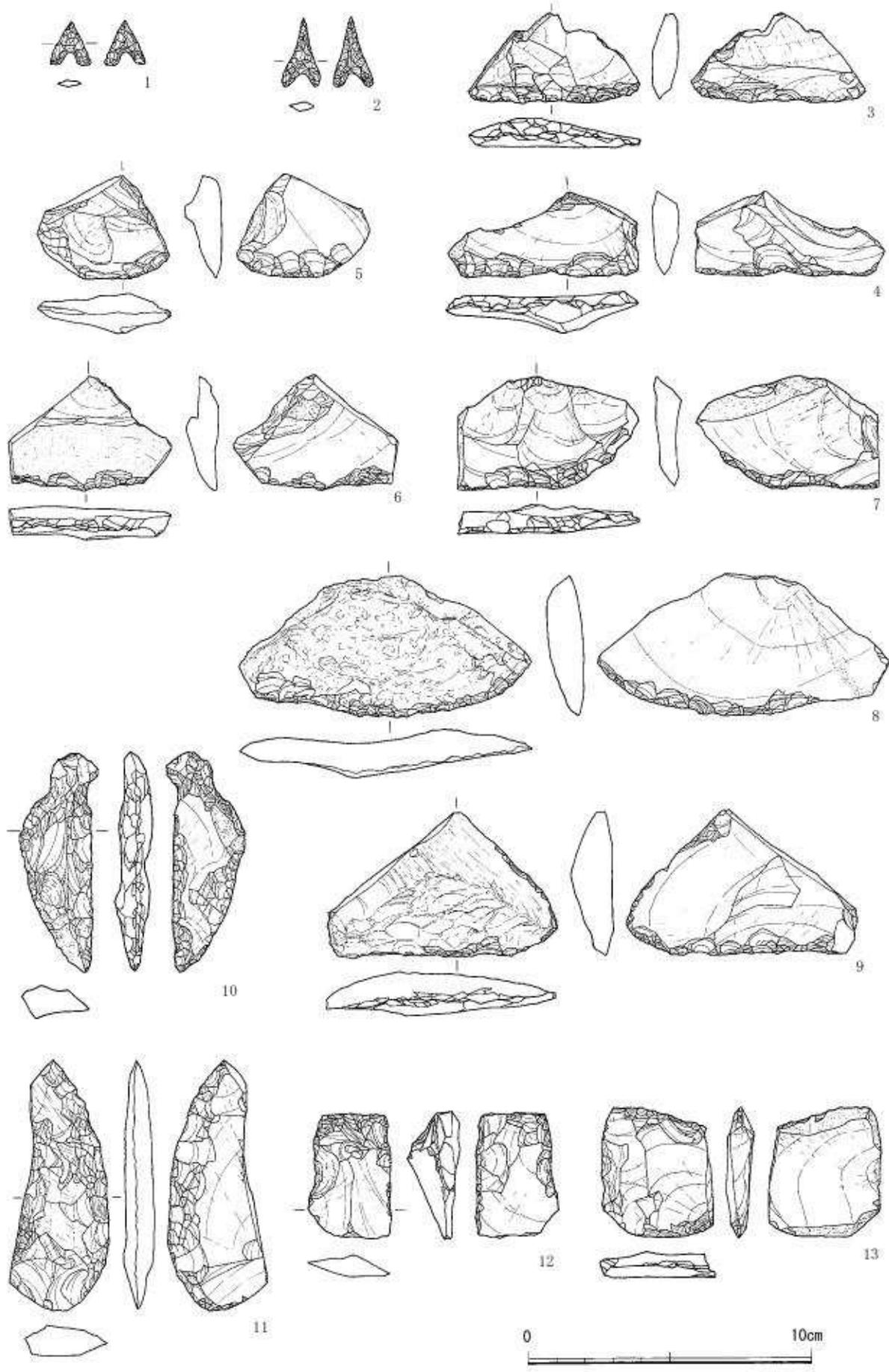
1、2は凹基無茎石鏃である。1は側縁に丸みをもたせ、基部を平坦に作る。抉りは幅、深さとも0.5cm長さ1.6cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。2は側縁をやや反らせ、裾部を鋭角的に調整して深い抉りを作る。長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。

3～9、11、16はスクレイパーである。3、4、8、11は横長薄片を素材とする。3は刃部を両面から剥離調整して作り出す。側縁は自然面を残す。長さ6.1cm、幅3.2cm。4は側面に僅かに自然面を残す。刃部幅6.7cm。5は折損しており、扇形に残る。また、背面の左側刃部も欠損する。現存刃部幅4.7cm。6は背面と左側縁は自然面を残す。刃部は両面から剥離調整する。長さ5.8cm、幅4.1cm。7は側縁の2カ所に自然面を残し、刃部の右半分は欠損する。長さ6.4cm。8は背面に広く自然面を残す。刃部の剥離調整は、右側2cmを調整剥離していない。全幅10.3cm。9は断面三角形の背面に広い自然面を残す。右側縁の中央まで両面から剥離調整して刃部を作る。長さ8.1cm、幅5.1cm。11はナイフ形のスクレイパーで、湾曲する側縁に刃部を両面から剥離調整して作出する。長さ8.9cm、幅3.2cm。16もナイフ形のもので、横長薄片を使用する。刃部先端を欠損する。腹部側面に自然面を残す。全長8.1cm、幅3.0cm。10は石匙で横長剥片を素材とする。両側縁を剥離してつまみを作り出す。背面に自然面を残し、刃部は細かく剥離調整して作る。全長7.8cm、幅2.6cm。12、13、は楔形石器。12はの刃部の調整剥離が見られない。全長4.4cm。全幅2.9cm。13は背面の刃部を調整剥離しているが、腹面の刃部は自然面のまま残す。全長4.5cm、幅4.0cm。14、15は打製石斧か。側面を細かく剥離調整している。全長5.5cm、全幅4.9cm。15腹面に自然面を残し、側面を細かく剥離調整する。

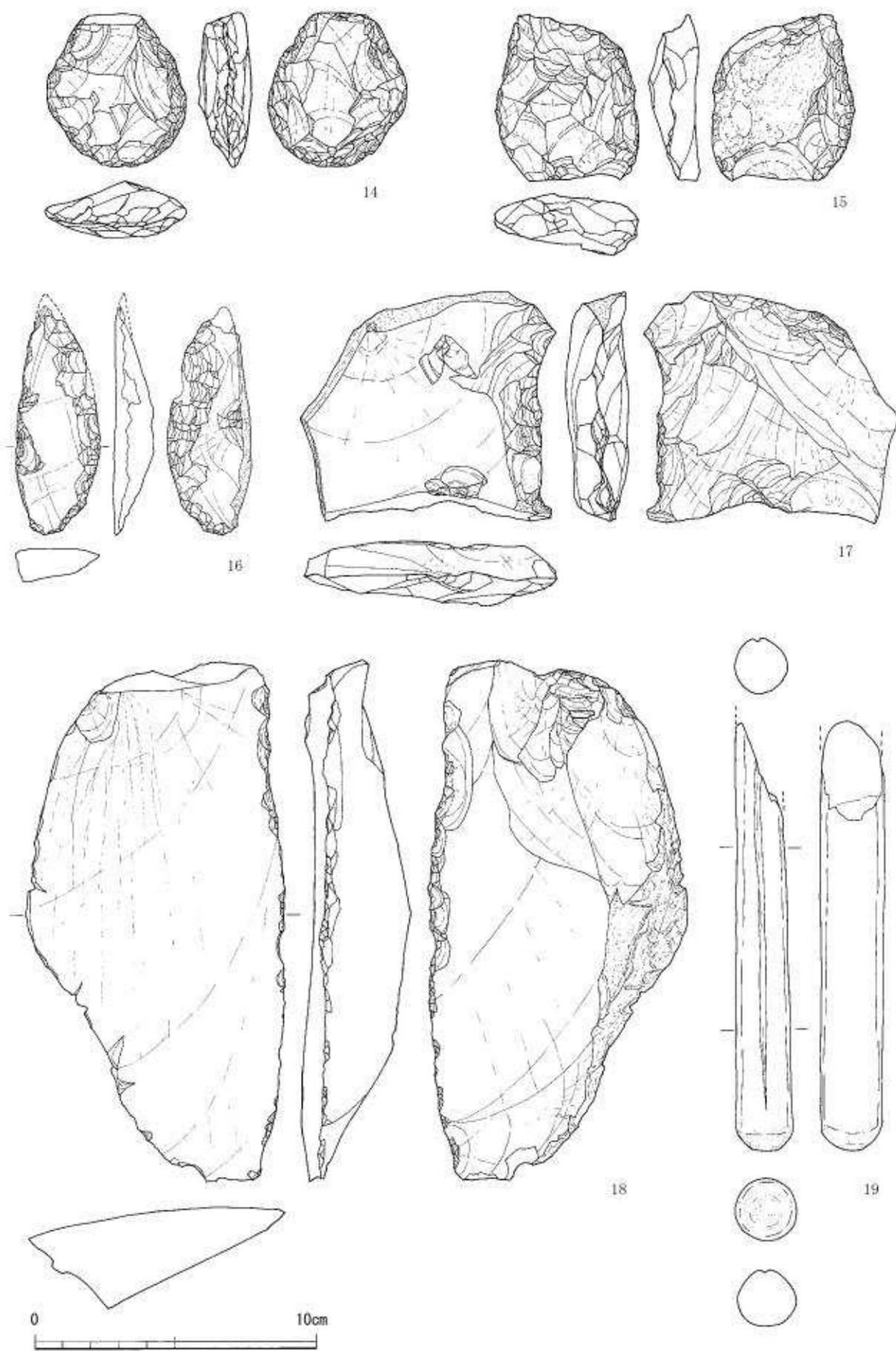
17、18は素材石か。1側縁を剥離調整して刃部をつくり、3側面に自然面を残す。全長8.1cm、幅8.9cm、厚さ2.3cm。17は1側縁を剥離調整する。全長18.5cm、幅9.2cm

19は石棒の先端部である。浅い溝を彫り込むものは珍しい。現存長15.3cm、径2.2cm。石材は不明。20、21は磨製石斧。20は被熱によるものか、表面は脆く、細かく剥離している。基部を欠損しているが、現存長9.5cm、幅6.0cm、厚さ2.8cm。21も基部を欠損しているが、両側面を丁寧に磨いて刃部を造り出している。現存長8.5cm、幅6.6cm、厚さ3.9cm。

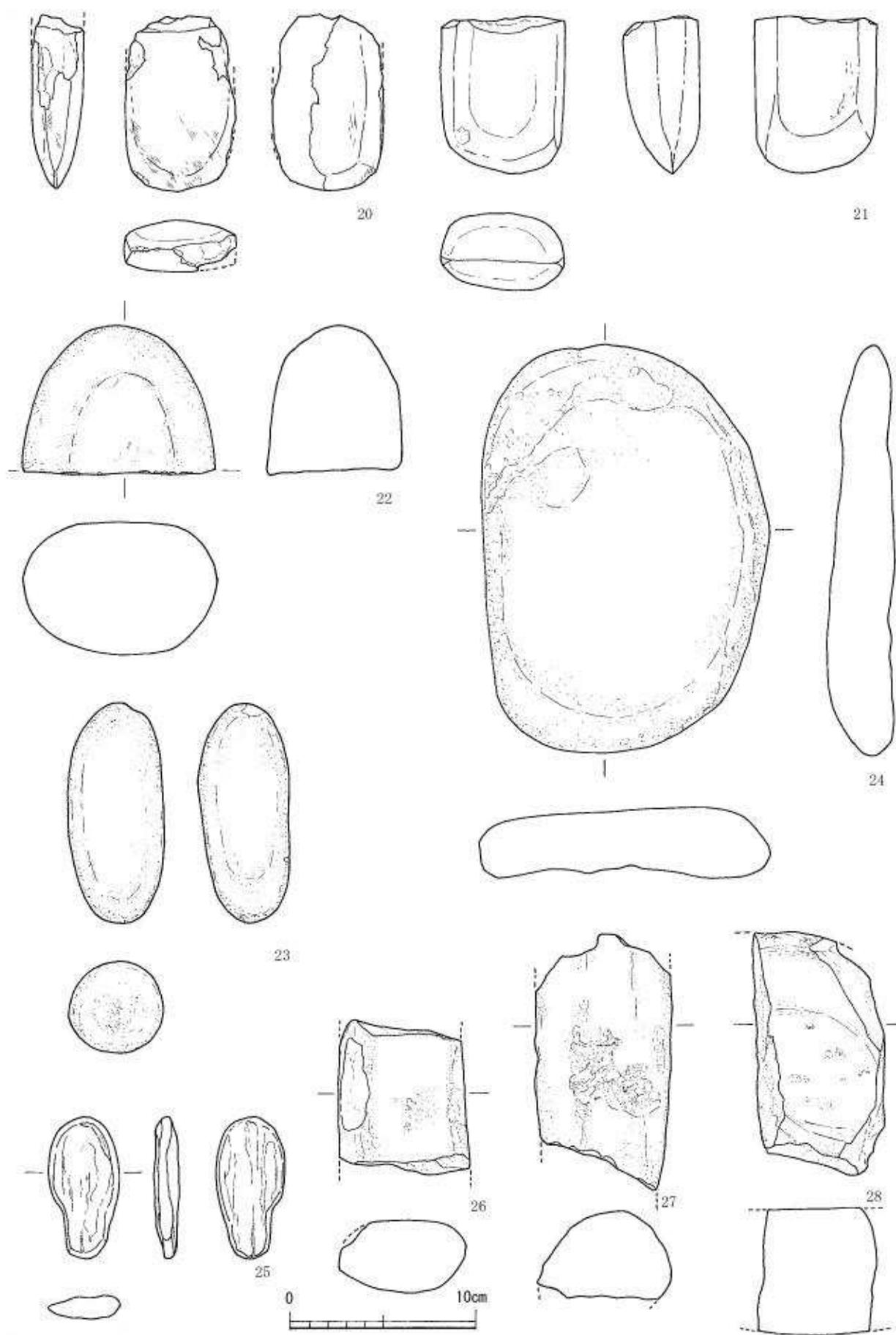
22、23は敲石か。22は明瞭な使用痕は観察されないが敲き石であろう。現存長8.0cm、幅10.5cm、厚さ7.3cm。23は楕円形の敲石で先端部に欠損が観察される。全長12.0cm、長径5.1cm、短径4.8cm。砂岩か。24は石皿。上面に緩く凹凸がある。全長22.2cm、幅15.5cm、厚さ3.1cm。27、28は敲台。表面に敲打による浅い窪みが観察される。29は砥石。現存長13.1cm、幅7.0cm、厚さ7.0cm。25は人形形の石製品か。括れのある楕円形の川原石の表面に浅い線刻が観察される。長さ7.7cm、幅3.8cm。



第63图 出土石器实测图1



第64图 出土石器实测图2



第65图 出土石器实测图3

第4章 理化学分析

第1節 03-1区の花粉分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

辻本裕也 齊藤崇人 辻 康男

目次

はじめに	103
1. 試料	103
2. 分析方法	103
3. 結果	104
4. 考察	105
第66図 主要花粉化石群集の層位分布	107
第67図 検出花粉写真	113
表3 分析試料一覧	104
表4 花粉分析結果	106

はじめに

今回分析調査では、調査区で検出された河道を埋積する堆積物形成期の古植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析を実施する。

本稿では、花粉分析結果について述べる。分析対象とする試料は、河道底部で採取された材化石の放射性炭素年代測定値（第2節）から、弥生時代前期～弥生時代中期後半頃に相当する。

1. 試料

試料は03-1区NR11（本書では08-8区、08-14区の11NR）セクションより採取した試料番号0、1、3、4、7、10、12、15、17、19、21、23、25、27、28の計15点である。模式柱状図および試料採取位置を第66図に、分析試料の一覧を表3に示す。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9:濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集す

表3 分析試料一覧

試料番号	土色	岩質	試料番号	土色	岩質
0	10YR 4/1 褐灰色	砂混じりシルト	17	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト
1	10YR 4/1 褐灰色	砂混じりシルト	19	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト
3	2.5Y 3/1 黒褐色	砂質シルト	21	2.5Y 4/1 黄灰色	シルト
4	2.5Y 4/1 黄灰色	砂質シルト	23	10YR 3/1 黒褐色	砂質シルト
7	2.5Y 4/1 黄灰色	砂質シルト	25	10YR 4/1 褐灰色	砂質シルト
10	2.5Y 4/2 暗黄灰色	砂質シルト	27	10YR 3/1 黒褐色	砂混じりシルト
12	10YR 4/1 褐灰色	砂混じりシルト	28	5Y 3/1 オリーブ黒色	砂混じりシルト
15	2.5Y 4/1 黄灰色	シルト			

る。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 結果

結果を表4、第66図に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

試料番号28～21では花粉化石が豊富に算出し、保存状態も良好である。木本花粉ではコナラ亜属アカガシ亜属が多産し、エノキ属-ムクノキ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、ニレ属-ケヤキ属などが産出する。草本花粉は試料分析により多産する種類が異なるものの、イネ科、バラ科が多く産出し、クワ科、マメ科、ヨモギ属などを伴う。

試料番号19になると、草本花粉の算出が少なくなり、シダ類胞子が多産するようになる。木本花粉では、アカガシ亜属の割合が減少し、マツ属の割合が高くなる。その他では、モミ属、ツガ属などが算出する。草本花粉では、イネ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節などが認められる。

試料番号17、15ではシダ類胞子の占める割合が高くなるが、検出される花粉化石の保存状態は良好である。木本花粉では、マツ属、ツガ属が多く産出し、モミ属、ブナ属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属などが認められる。草本花粉ではイネ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属などが検出される。

試料番号12～0にかけては花粉化石の産出は少なく、木本花粉ではマツ属、モミ属、ツガ属などが、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などがわずかに認められるのみである。花粉化石の保存状態は良好とはいえ、花粉化石の産出に対し、シダ類胞子の割合が高い。なお、試料番号4においてイボタノキ属が多く産出するが、花粉塊も多く含まれる。

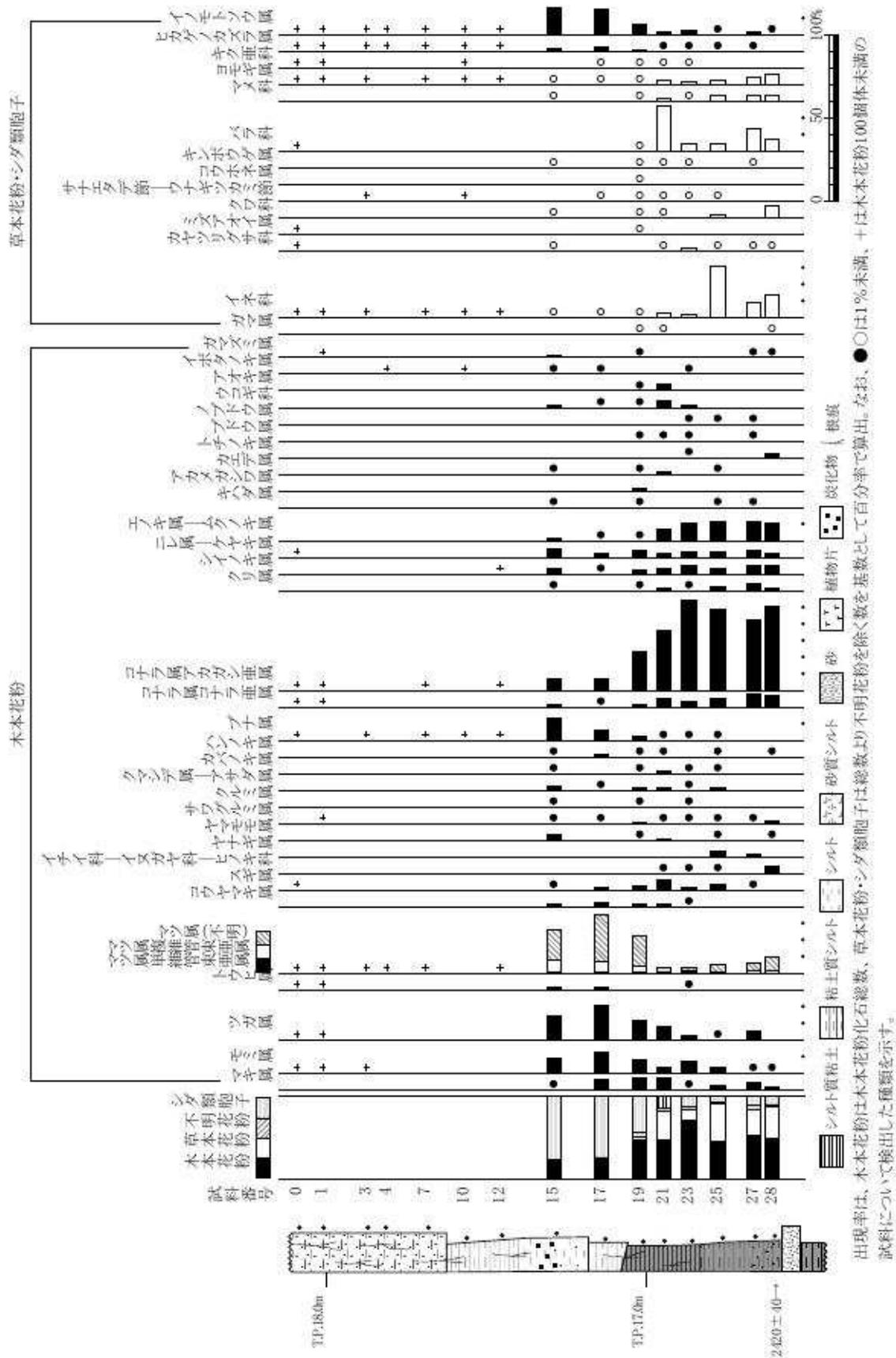
4. 考察

今回の花粉分析では、試料番号15より下位の試料で統計的に扱える数の花粉化石の産出をみた。これらの試料では、試料28～21と19～15で花粉化石群集の傾向が異なっていることが読みとれる。試料28付近で採取された材化石から、 2420 ± 40 BPと弥生時代前期と考えられる ^{14}C 年代値が得られている。試料28～21は ^{14}C 年代値および堆積物の層相を考慮すると、弥生時代前期頃に属すると考えられる。本試料の花粉化石群集からは、遺跡周辺の氾濫原や台地・丘陵上にアカガシ亜属を中心とした照葉樹林が成立しており、さらに標高の高い山地斜面などにモミ属、ツガ属などの温帯性針葉樹が生育していたことが推測される。これらの植生からなる林分には、コナラ亜属、トチノキ属などの落葉広葉樹や、ブドウ属、ノブドウ属などの蔓性植物などもその構成要素の一つとなっていたことが推定される。比較的多く産出された落葉広葉樹のエノキ属－ムクノキ属やニレ属－ケヤキ属は、河川沿いや低湿地を好む種群を含む分類群である。西日本の扇状地や沖積低地の氾濫原では特に自然堤防上に、ムクノキ－エノキ林が成立するとされる（菊池、2001）。滋賀県の湖東平野の扇状地上では、ムクノキ・エノキやケヤキなどのニレ科植物が河畔林（崎尾、2001の定義による）として林分を形成している事例が報告されている（布谷、1981；坂本、1987；吉田ほか、1991）。本遺跡で認められたエノキ属－ムクノキ属やニレ属－ケヤキ属の花 pollen 群集は、遺跡をとりまく台地・丘陵や山地斜面ではなく、ヤナギ属、サワグルミ属などとともに調査区周辺の河畔や氾濫原上に生育していた林分に由来する可能性がある。

信太山丘陵を挟み本遺跡の北東約6kmに位置する泉北台地・丘陵を刻む開析谷内の沖積段丘に立地する小阪遺跡では、縄文時代後晩期の河川埋積物の花粉分析結果が得られている。分析結果では木本類が90%前後と高率に検出され、そのほとんどがアカガシ亜属とクリ属－シイノキ属－マテバシイ属により占められていた（パリーノ・サーヴェイ株式会社、1992；鈴木、1992）。縄文時代晩期～弥生時代前期頃には、小阪遺跡の周辺に立地する伏尾遺跡や西浦橋遺跡などでも、同様の花粉化石群集となる分析結果が得られている（パリーノ・サーヴェイ、1984；渡邊、1996）。今回の分析結果は、同時期の分析試料で比較できないものの、陶邑北部地域と同様にアカガシ亜属が多産する点は同様であるが、エノキ属－ムクノキ属や草本類も比較的多く検出される点で花粉化石群集の特徴が異なっている。府中遺跡の近くに位置する池上曾根遺跡では、弥生時代中期の溝内堆積物からエノキ－ムクノキ属やニレ属－ケヤキ属が高率に検出されており、溝周辺や周辺の河川沿いにこれらの樹木からなる河畔林が存在していたと考えられている（渡辺・古谷、1990）。また、池上遺跡では弥生時代中期前半・中半の溝堆積物から多量のエノキ・ムクノキの種実が検出されており（粉川、1980）、花粉化石の産状と調和する。池上曾根遺跡の南に隣接する七ノ坪遺跡の泥質堆積物からなる古墳時代前期の遺構検出面やそれ以下の層準では、エノキ属－ムクノキ属やニレ属－ケヤキ属の産出が高率ではない（渡辺、2001）。府中遺跡や池上曾根遺跡、七ノ坪遺跡は段丘化した扇状地面上に立地していると考えられる（日下、1990）。この地形面は、最終氷期に形成された低位段丘面相当層の上部に5m、谷部で8～10mの流路や氾濫原堆積物から

表4 花粉分析結果

種 類	試料番号														
	0	1	3	4	7	10	12	15	17	19	21	23	25	27	28
木本花粉															
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	2	14	20	20	1	7	5	2
モミ属	2	3	2	-	-	-	-	19	31	23	10	16	8	1	1
ツガ属	3	3	-	-	-	-	-	32	51	33	23	6	2	6	-
トウヒ属	1	1	-	-	-	-	-	3	4	-	-	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	1	1	-	-
マツ属複維管束亜属	3	2	5	-	-	-	2	15	17	11	1	3	-	2	2
マツ属(不明)	7	10	2	2	1	-	3	41	67	52	8	5	11	5	8
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	4	5	4	4	1	-	-	-
スギ属	2	-	-	-	-	-	-	1	3	6	17	4	9	1	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	4
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	2	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	7	-	1	3	-	1	-	1
サワグルミ属	-	1	-	-	-	-	-	2	1	3	1	2	1	1	2
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-
クマシダ属-アサダ属	-	-	-	-	-	-	-	5	2	5	3	1	3	-	-
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	4	2	1	-	-
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	4	2	2	-	2	-	1
ブナ属	1	-	2	-	1	1	1	29	14	8	1	1	2	-	-
コナラ属コナラ亜属	2	1	-	-	-	-	3	1	4	14	8	12	9	7	-
コナラ属アカガシ亜属	2	1	-	-	1	-	1	16	16	66	102	130	113	47	52
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	3	1	5	5	2
シイノキ属	-	-	-	-	-	-	1	8	2	6	10	12	7	6	5
ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	-	-	-	-	12	6	12	7	7	8	5	2
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	3	1	2	20	25	27	13	11
ヤドリギ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
キハダ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	1	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	5	-	1	-	-
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	-	1	-
ツタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	3	2	1	12	3	-	-	-
アオキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	11	-	-	-	-
イボタノキ属	-	-	-	44	-	3	-	1	1	-	-	1	-	-	-
クサキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属	-	1	-	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	1	1
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-
草本花粉															
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1
イネ科	13	7	2	-	1	3	3	4	4	5	15	7	154	18	28
カヤツリグサ科	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	6	3	1	1
ミズアオイ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4	1	-	10	-	14
サナエタ節-ウナギツカミ節	-	-	1	-	-	1	-	-	6	3	1	1	1	-	-
アザミ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
コウホネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
キンポウゲ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	-	1	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウメハチソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
バラ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	156	15	24	28	14
マメ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	9	3	20	8	8
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
シソ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	11	2	5	-	2	2	4	7	1	1	15	7	15	9	13
キク亜科	4	2	-	-	-	1	-	-	3	1	1	1	-	-	-
タンポポ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
不明花粉	6	3	-	-	2	-	1	14	8	24	13	8	8	10	5
シダ類胞子															
ヒカゲノカズラ属	5	1	2	4	5	2	6	21	23	6	1	3	2	1	-
コケスギラン	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	1	1	2	-	-
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イノモトソウ属	45	44	20	24	46	38	59	166	155	33	9	9	4	4	2
他のシダ類胞子	205	128	82	28	60	75	136	573	549	218	75	30	30	18	18
合 計															
木本花粉	25	23	11	46	3	4	8	220	243	281	283	239	234	112	103
草本花粉	34	41	8	0	3	7	7	17	16	23	204	43	228	65	81
不明花粉	6	3	0	0	2	0	1	14	8	24	13	8	8	10	5
シダ類胞子	255	173	104	56	111	115	202	762	728	258	86	43	38	23	20
総計(不明を除く)	314	207	123	102	117	126	217	999	987	562	570	325	500	200	204
その他															
鳥糞毛藻類	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-



第66図 主要花粉化石群集の層位分布

なる完新統が累重していることが確認されている（古田、1980）。泉北台地の開析谷内に位置する小阪遺跡・伏尾遺跡・西浦橋遺跡と府中遺跡・池上曾根遺跡などで認められた花粉化石群集との差異は、遺跡が立地する地形面の河川堆積作用や周辺の地形の違いに起因している可能性が想起され興味深い。また、同じ時代での比較検討ではないが、府中遺跡・池上曾根遺跡と七ノ坪遺跡でのエノキ属－ムクノキ属とニレ属－ケヤキ属の産状の違いも、川辺林が一定の立地条件、とくに洪水時の水位と物理的な土壌条件にきわめてよく対応することから、地形などの影響が関与していることが考えられる。このような可能性については、今後、より詳細な遺跡レベルでの地質・地形と古植物学的な調査（大型植物化石の検討）を行い検証していく必要がある。

試料19～15は、発掘調査結果や、¹⁴C年代値と堆積物の層相を考慮すると、弥生時代前期～中期前半にかけて形成されたと考えられる。本試料ではマツ属（複維管束亜属を含む）、モミ属、ツガ属、マキ属などの針葉樹に由来する花粉化石が多く検出された。アカガシ亜属は上位に向かい急速に減少する傾向を示すのに対し、ブナ属は上位に向かい僅かながら増加する傾向を示す。また、総花粉・胞子における木本花粉の占める割合が低く、シダ類胞子が卓越する特徴を示した。

このような針葉樹花粉・シダ類胞子が多産し、広葉樹花粉・草本花粉が低率である群集は、しばしば堆積時・後の風化作用の影響が及んでいる堆積物で認められる。しかし、今回の場合、花粉化石の保存状態が良好であり、風化作用の影響を強く受けた群集とは考えにくい。堆積環境変化や周辺植生変化に伴い形成された群集であると考えられる。増加する種類には亜寒帯針葉樹のトウヒ属や冷温帯の主要構成種であるブナ属が認められるが、これらの種類の弥生時代における増加は周辺の池上遺跡や七ノ坪遺跡の調査では確認されていない。おそらく、上流域に分布する古い時代の地層からの誘導化石（再堆積した化石）に由来するものと判断され、検出された寒冷要素には当該期の周辺植生変化を反映していないものが含まれる可能性が高い。

以上のことから、本層堆積時には、アカガシ亜属、シイノキ属などを主体とする照葉樹林はそのまま規模を縮小し、モミ属、ツガ属などの温帯性針葉樹やマツ属などの落葉広葉樹が増加していたことが推測される。池上曾根遺跡での弥生時代中期の花分析結果は、局地的な植生を反映している花粉化石群集を除外した結果、マツ属（複維管束亜属）、スギ属とアカガシ亜属が高率を示すことで特徴づけられるとされる（渡辺、2001）。七ノ坪遺跡の古墳時代前期と考えられる層準でも、池上遺跡の弥生時代中期の花分析結果と同様の傾向であることを指摘している（渡辺、2001）。今回の試料19～15の花分析結果は弥生時代前期～中期前半と推定され、池上曾根遺跡や七ノ坪遺跡の分析結果よりもやや古い時代の層準の分析結果である。同じ水系に位置することから連続する変化として捉えた場合、試料19～15の群集は、池上曾根遺跡の弥生時代中期後半の組成に近似していることが伺える。

大阪平野における完新世の植生変遷は、大きく7500～6000年前にナラ類からなる落葉広葉樹林から、シイ、カシなどの照葉樹林へと変遷し、6000年前以降照葉樹林の安定時代にはいる。そして、約3000～2000年前にスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加する

(古谷、1979；前田、1984；那須、1989など)。河内平野で実施された花粉分析において、針葉樹が顕著に増加するのは、縄文時代晩期以降であると考えられている。これらの針葉樹は、照葉樹林帯とそれより高い（あるいは北方の）山地にあるブナ帯の間を埋める温帯針葉樹林の構成要素であり、これらの要素が大阪平野の周辺山地に増加したことは、気候が悪化したこと、とりわけ多雨化したことを意味しているとされる（那須、1989）。本層準における温帯性針葉樹の増加は、上記のような堆積盆レベルでの空間スケールの水文環境変遷と連動している可能性も考えられる。一方、マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育する特徴を持っている。府中遺跡の近くに位置する池上・曾根遺跡では、弥生時代に活発な流路形成があったようである（広瀬、1999）。これらのことから、本層準におけるマツ属の増加は、多雨化などの堆積盆レベルでの水文環境もしくは遺跡周辺の河川環境の変遷による土砂流出で新たに形成された場所に先駆的にマツ属が進入したことを示している可能性も考えられる。また、マツ属は伐採された土地に最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。そのため、マツ属の増加は、しばしば人間による植生干渉による二次林化で引き起こされる。今回認められたマツ属の増加については、遺跡周辺の河川環境の変化や人間活動を視野に入れ、地域的な地形変遷をさらに検討していく必要がある。また、試料19-15の分析結果が本遺跡レベルや今回の調査区レベルといった空間スケールの局地的な現象であるかについても、今後周辺調査の分析などから追証していければと思う。

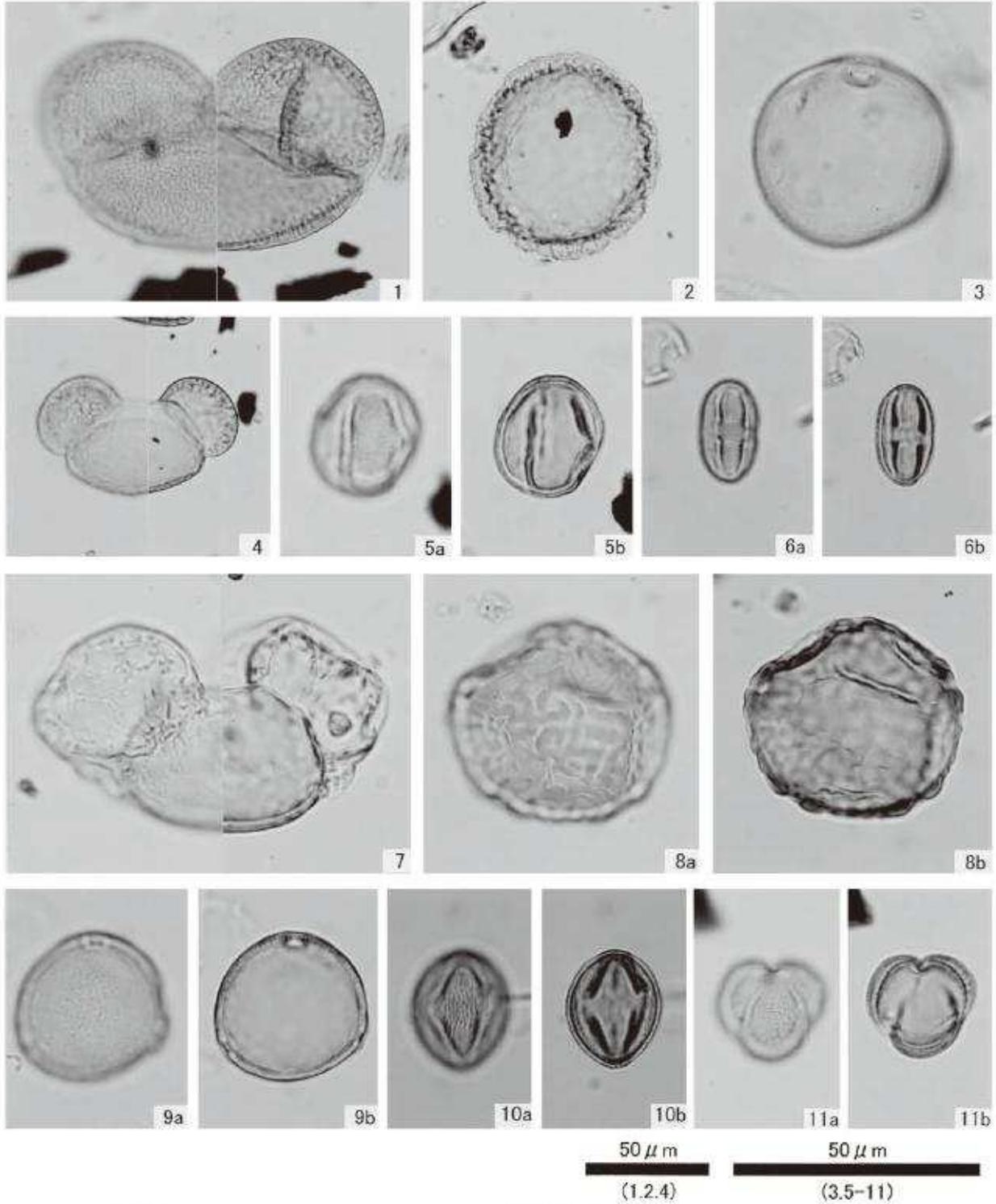
その上位に当たる試料12～0にかけては、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。試料12～0は、発掘調査結果や¹⁴C年代値と堆積物の層相を考慮すると、弥生時代中期前半頃～中期後半頃にかけて形成されたと考えられる。花粉化石、シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。本層準は、下位層準ほど有機質ではなく、粒度もより砂質であることから、堆積速度が速く下位層準に比べると花粉が取り込まれにくかった可能性がある。また、一般的に花粉、シダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村、1976；徳永・山内、1971）。よって、試料12～0の時期は、堆積速度の関係で花粉化石が取り込まれにくかったことに加え、花粉、シダ類胞子が分解・消失しやすい酸化的環境に何度もさらされることにより、大部分が消失した可能性がある。これらのことから、試料12～0の形成時期には下位の層準に比べ、谷内の堆積・土壌環境が大きく変化したことが推測される。試料12～0のサンプルでは、草本植物の根に由来すると思われる管状の酸化鉄の斑紋が顕著に形成されているのが観察された。上方粗粒化する粒度組成の傾向を合わせて考えると、試料12～0の時期は、それ以前に比べ谷内が相対的に乾燥し土壌発達が進むような環境であった可能性が示唆される。なお、試料4においてイボタノキ属が多産し、花粉塊も多く認められている。一般に、散布前の花粉を持つ

植物体（いわゆる雄蕊）が土壤中に堆積した場合、花粉塊が多く検出される。このことから、検出されたイボタノキ属は現地性が高いといえ、河道のごく近傍に個体が生育していたと推測される。イボタノキ属には、常緑広葉樹のネズミモチ、落葉広葉樹のイボタノキなどがあり、いずれも山野に分布している。ネズミモチは、ヤブツバキクラス域（いわゆる暖温帯常緑広葉樹林帯）の標徴種でもある。上述の池上曾根遺跡では、弥生時代中期後半になり、エノキ・ムクノキの河畔林や周辺の照葉樹林が減少し、マツ属が増加する傾向が捉えられている（渡辺・古谷、1990）。また、池上遺跡の弥生時代中期中半の溝堆積物からは、イチイガシ・アラカシ・クスノキ・ツブラジイ・スダイジイ・ムクロジ・ヤマモモなどの照葉樹林要素、エノキ・ムクノキなどの落葉広葉樹、アカマツなどの針葉樹が確認されている（粉川、1980）。これらのことから、弥生時代中期中半には池上遺跡周辺では人間活動により、二次林的な林分が成立するなどの植生変化が起こっている可能性がある。

引用文献

- 古田 昇 1990 「榎尾川（大津川）右岸の地形環境」（『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要－松ノ浜曾根線建設に伴う発掘調査－』3－24 p 大阪府教育委員会）
- 古谷 正和 1979 「大阪平野周辺域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」（『第四紀研究18』121－141 p）
- 広瀬 雅信 1999 「まとめ－素描池上曾根遺跡－」（『池上曾根遺跡－拠点集落東方の墓域の調査』126－133 p 大阪府教育委員会）
- 菊池 多賀夫 2001 （『地形植生誌』220p 東京大学出版会）
- 日下 雅義 1980 『歴史時代の地形環境』392 p 古今書院
- 粉川 昭平 1980 「種子類について」（『池上・四ツ池遺跡 第6分冊 自然遺物編』33－60 p 財団法人大阪文化財センター）
- 前田 保夫 1984 「花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世以降の植生変遷」（宮脇 昭（編著）『日本植生誌 近畿』87－99 至文堂）
- 中村 純 1967 『花粉分析』232p 古今書院
- 那須 孝悌 1989 「活動の舞台：概論」（永井 昌文・那須 孝悌・金関 恕・佐原 真（編著）『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』119－130p 雄山閣出版）
- 布谷 知夫 1998 「琵琶湖湖東のケヤキ河辺林について」（『大阪市立博物館研究報告35』27－36 p）
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1984 「西浦橋遺跡花粉分析結果」（抄）（『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 西浦橋遺跡－本文編－』146－156 p 財団法人大阪文化財センター）
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1992 「小阪遺跡における珪藻・花粉・植物珪酸体からみた古環境」（『小阪遺跡－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設にともなう発掘調査報告書－自然科学・考察編－』561－582 p 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター、）
- 崎尾 均 2002 「水辺林とは何か」（崎尾 均・山本 福寿編、『水辺林の生態学』1－19 p 東京大学出版会、）
- 坂本圭児 1987 「滋賀県愛知川川辺におけるニレ科樹林の構造」（『緑化研究9』50－67 p）
- 鈴木 茂 1992 「小阪遺跡15Fトレンチの花粉分析」（『小阪遺跡－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－自然科学・考察編』、525－533 p 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター）
- 徳永 重元・山内 輝子 1971 『花粉・胞子の研究法』50－73 p 共立出版株式会社
- 渡辺 正巳、1996、「陶邑北部における縄文時代以降の植生変遷」（『野々井遺跡Ⅱ－近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書』353－366 p 財団法人大阪府文化財調査研究センター）
- 渡辺 正巳 2001 「七ノ坪遺跡発掘調査に係る花粉・プラントオパール分析」（『七ノ坪遺跡』11－15 p 大阪府教育委員会）

- 渡辺 正巳・古谷 正和 1990「花粉・珪藻・火山灰分析」(『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要－松ノ浜曾根線建設に伴う発掘調査－』71-82 p 大阪府教育委員会)
- 吉田 博宣・坂本 圭児・柴田昌三 1991「滋賀県湖東地域における河辺林の変遷と林分構造」(『日本緑化学会誌17』37-46 p)



- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1. モミ属(試料番号19) | 2. ツガ属(試料番号19) |
| 3. イネ科(試料番号25) | 4. マツ属(試料番号19) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属(試料番号19) | 6. シイノキ属(試料番号21) |
| 7. マキ属(試料番号19) | 8. ニレ属-ケヤキ属(試料番号21) |
| 9. エノキ属-ムクノキ属(試料番号21) | 10. バラ科(試料番号21) |
| 11. ヨモギ属(試料番号21) | |

第67図 検出花粉化石写真

第2節 03-1区出土材化石の放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

辻本裕也 辻 康男

目次

はじめに	115
1. 試料	115
2. 分析方法	115
3. 結果	115
表5 放射性年代測定結果	116
表6 暦年較正結果	116

はじめに

河道堆積物の形成年代についての情報を得るために、河道最下部近くから出土した材化石について、放射性炭素年代測定を行った。

1. 試料

試料は木材2点 (^{14}C サンプル1、2) である。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALBREV44 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いている。また、北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与え、計算させている。

3. 結果

結果を表1・較正年代を表2に示す。炭素年代は測定法自体が持つ誤差や、測定の前提条件である大気中の ^{14}C の濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。このため暦年代がはっきりしている時代においては、放射性炭素年代測定値を暦年代へと較正する必要が指摘されている(中村2000)。

表5. 放射性炭素年代測定結果

番号	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
^{14}C サンプル1	木材片	コナラ亜属コナラ節	2420 \pm 40	-26.43 \pm 0.58	2440 \pm 40	IAAA-31275
^{14}C サンプル2	木材片	タブノキ	3020 \pm 40	-24.62 \pm 0.61	3010 \pm 40	IAAA-31276

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表6 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)				Code No.		
		誤差	cal BC		cal BP		相対比	
^{14}C サンプル1	2417 \pm 37	σ	cal BC 745	- cal BC 723	cal BP 2,695	- 2,673	0.111	IAAA-31275
			cal BC 538	- cal BC 530	cal BP 2,488	- 2,480	0.045	
			cal BC 522	- cal BC 404	cal BP 2,472	- 2,354	0.844	
^{14}C サンプル2	3019 \pm 38	2σ	cal BC 1,372	- cal BC 1,356	cal BP 3,322	- 3,306	0.109	IAAA-31276
			cal BC 1,353	- cal BC 1,340	cal BP 3,303	- 3,290	0.084	
			cal BC 1,318	- cal BC 1,256	cal BP 3,268	- 3,206	0.526	
			cal BC 1,242	- cal BC 1,213	cal BP 3,192	- 3,163	0.232	
			cal BC 1,197	- cal BC 1,193	cal BP 3,147	- 3,143	0.024	
			cal BC 1,137	- cal BC 1,133	cal BP 3,087	- 3,083	0.024	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

計算には表に示した丸める前の値を使用している。

付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

^{14}C サンプル1は、花粉分析実施地点の河道底部付近から採取された。 ^{14}C サンプル2は、サンプル1採取地点周辺に位置する河道内より採取された。分析の結果、 ^{14}C サンプル1は、同位体補正を行った年代値が約2400年前、暦年較正を行った結果が、2350-2700年前を示した。一方 ^{14}C サンプル2は、同位体補正を行った年代値が約3000年前、暦年較正を行った結果が、3100-3300年前を示す。最近発表された北九州地域の弥生時代前期の ^{14}C 年代値は、2500-2700年前を示すとされる(今村、2003)。大阪湾岸地域では、小阪遺跡において長原式土器から弥生時代前期第I様式の土器を含む層準から採取された試料の ^{14}C 年代値が2300-2600年前頃に集中する(今村、2001)。池島・福万寺遺跡では、弥生時代前期の土器と供伴する試料の年代値が2500年前頃を示す(地球科学研究所・岸本、2002)。これら弥生時代前期と考えられる ^{14}C 年代値の暦年較正年代値は、BC 800-400年前後である。また、縄文時代晩期の ^{14}C 年代値は、3000年前頃とされる(谷口、2001)。同位体補正を行っていない土器を包含する土壌試料では、兵庫県伊丹市口酒井遺跡の弥生時代前期で、2750 \pm 40BP、縄文時代晩期の船橋式~長原式で2530 \pm 70BP、滋賀里IV式~船橋式で2690 \pm 35BP、2790 \pm 30BPの年代値が得られている(山田・小橋川、1991)。

以上これまで報告されてきた縄文時代晩期~弥生時代前期の年代値から、 ^{14}C サンプル1は弥生時代前期、 ^{14}C サンプル2は縄文時代晩期頃に属するものと考えられる。府中遺跡の北西に位置する古池遺跡では、開析谷を埋積する泥炭から2490 \pm 85BPの ^{14}C 年代値が得られたことが報

告されている（日下、1980）。河内平野では縄文時代晩期頃に顕著な開析谷の形成があることが報告されており、この要因については侵食基準面である海水準や湖水準の低下によるものと考えられている（別所・松田、1998・松田、2001）。

本遺跡で開析谷底部から得られた¹⁴C年代値から、これらの谷地形は縄文時代晩期頃の基準面の低下に伴って形成された可能性が想定される。この点については、今後より詳細な地球科学的な調査を行い、検討して行ければと思う。

なお、サンプルの樹種は、¹⁴Cサンプル1がコナラ亜属コナラ節、¹⁴Cサンプル2がタブノキであった。コナラ亜属コナラ節には、現在日本にカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワが認められる。タブノキは暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成要素であり、主に海岸沿いに分布する。本時期の花粉分析結果からはアカガシ亜属を主とした照葉樹林が周辺に存在したことが推定されており、いずれの樹種も当時の周辺植生を構成していたとして矛盾しない要素である。

引用文献

- 別所秀高・松田順一郎、1998、「大阪平野完新統中・上部の堆積相と相対的海水準変動に関する予察」『日本第四紀学会講演会要旨集』28、160-161
- 地球科学研究所・岸本広樹、2002、「放射性炭素年代測定」『池島・福万寺遺跡発掘調査外洋X XⅧ-98-1調査区（1998年度）の調査概要』大阪府文化財調査研究センター、108-111
- 今村峰雄、2001「縄文～弥生時代移行期の年代を考える－問題と展望－」『第四紀研究』40、509-516
- 今村峰雄、2003「AMS-¹⁴C法と弥生開始時代の暦年代」『歴博116 国立歴史民俗学博物館』11-15
- 日下雅義、1980『歴史時代の地形環境』古今書院 392p
- 松田順一郎、2001、「河内平野沖積低地南部における完新世後半の旧大和川分流発達と人間活動」『環境と人間社会－適応、開発から共生へ－』39-51 埋蔵文化財研究会
- 中村俊夫、2000、「¹⁴C年代から暦年代への較正」『日本先史時代の¹⁴C年代』21-24 日本第四紀学会
- 山田 治・小橋川明、1991「口酒井遺跡第（12・15次調査の液体シンチレーション ¹⁴C年代測定）」『口酒井遺跡－自然遺物編－』六甲山麓遺跡調査会、75-79
- 谷口康浩、2001「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学77 17-21』

第3節 出土縄文土器の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

杉山 真二

目次

1. はじめに	118
2. 試料	118
3. 分析法	118
4. 分析結果	119
5. 考察	120
第68図 出土土器の植物珪酸体分析結果	121
第69図 府中遺跡の土器試料	123
第70図 府中遺跡出土土器の植物珪酸体	125
表7 府中遺跡における植物珪酸体分析結果	122

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌や土器胎土などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

2. 試料

試料は、縄文時代中期後半～中期末とされる10点の土器片（試料1～試料10）である。第69図に土器試料の写真を示す。

3. 分析法

各土器片について、コア（中心部分）を抽出して超音波で十分に洗浄し、7日間水浸の後にメノウ乳鉢を用いて細粒化したものを試料として用いた。植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 4) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 5) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表7および第68図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

ヨシ属、ウシクサ族A（チガヤ属など）、Bタイプ

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) 試料1

イネ科（その他-未分類）や樹木起源のブナ科（シイ属）が検出されたが、いずれも少量である。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山, 1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬, 1986）。

2) 試料2

ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。

3) 試料3

ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。また、海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか, 1979）が比較的多く検出された。

4) 試料4

ミヤコザサ節型、樹木（その他）などが検出されたが、いずれも少量である。

5) 試料5

植物珪酸体は検出されなかった。

6) 試料6

タケ亜科（その他）などが検出されたが、いずれも少量である。

7) 試料7

ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。

8) 試料8

ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。また、海綿骨針も認められた。

9) 試料9

ヨシ属、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。また、海綿骨針も認められた。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢となっている。

10) 試料10

ヨシ属、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。また、海綿骨針も認められた。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢となっている。

5. 考察

縄文時代中期後半～中期末とされる10点の土器片（試料1～試料10）について植物珪酸体分析を行った。その結果、各試料とも植物珪酸体の密度が低く、植物珪酸体が検出されない試料も認められた。このことから、これらの土器の胎土に意図的にイネ科植物が混入されていた可能性は低いと考えられる。

試料9と試料10については、ヨシ属が生育するような湿地的な環境で堆積した土壌（粘土）がおもな素材となっていると考えられ、メダケ属（メダケ節、ネザサ節）やササ属（ミヤコザサ節）などの竹笹類が生育するような比較的乾燥した環境で堆積した土壌が混在している可能性も考えられる。

試料3、試料7、試料8については、メダケ属やササ属などの竹笹類が生育するような比較的乾燥した環境で堆積した土壌がおもな素材となっていると考えられる。試料1については、シイ属などの樹木が生育するところで堆積した土壌がおもな素材となっていると考えられる。シイ属は照葉樹林を構成する主要な要素である。

試料3では海綿骨針が比較的多く検出され、試料8、試料9、試料10でも海綿骨針が認められた。海綿骨針については、土器胎土の素材となった土壌に含まれていた可能性が考えられるが、

土器で煮炊きされた海産物や食塩に由来する可能性も想定されることから、分析事例を増やすなどさらに詳細な検討が必要と考えられる。

なお、イネ、ムギ類、ヒエ属（ヒエが含まれる）、キビ属（キビが含まれる）などのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。

文献

宇津川徹・細野衛・杉原重夫（1979）テフラ中の動物珪酸体 "Opal Sponge Spicules" について。ペドロジスト, 23(2), p.134-144.

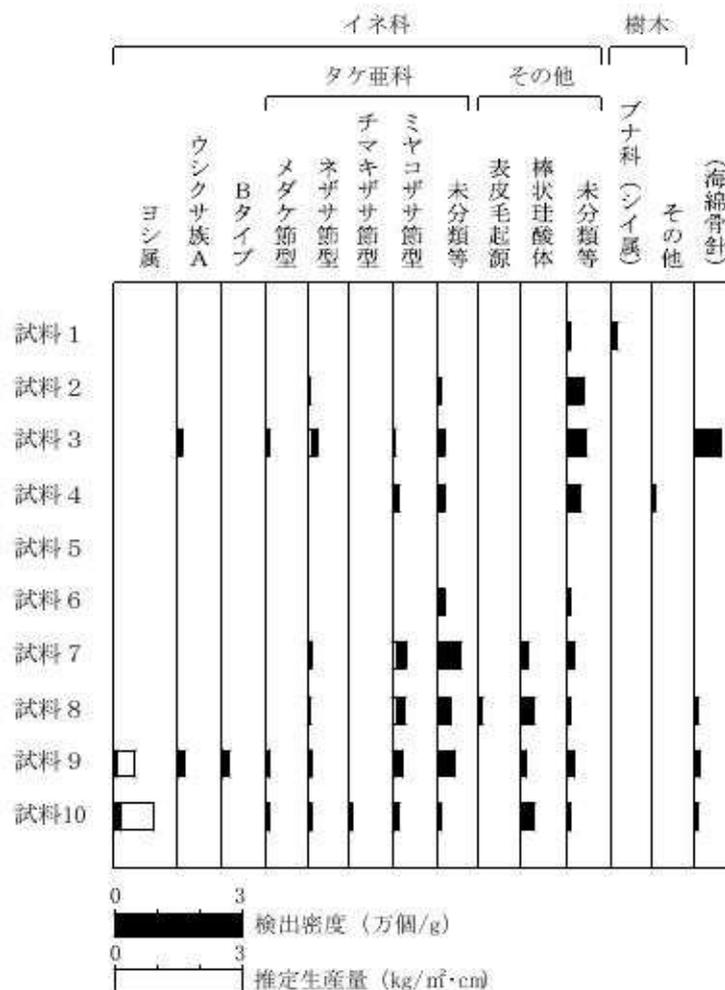
近藤鍊三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体, その特性と応用。第四紀研究, 25, p.31-63.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

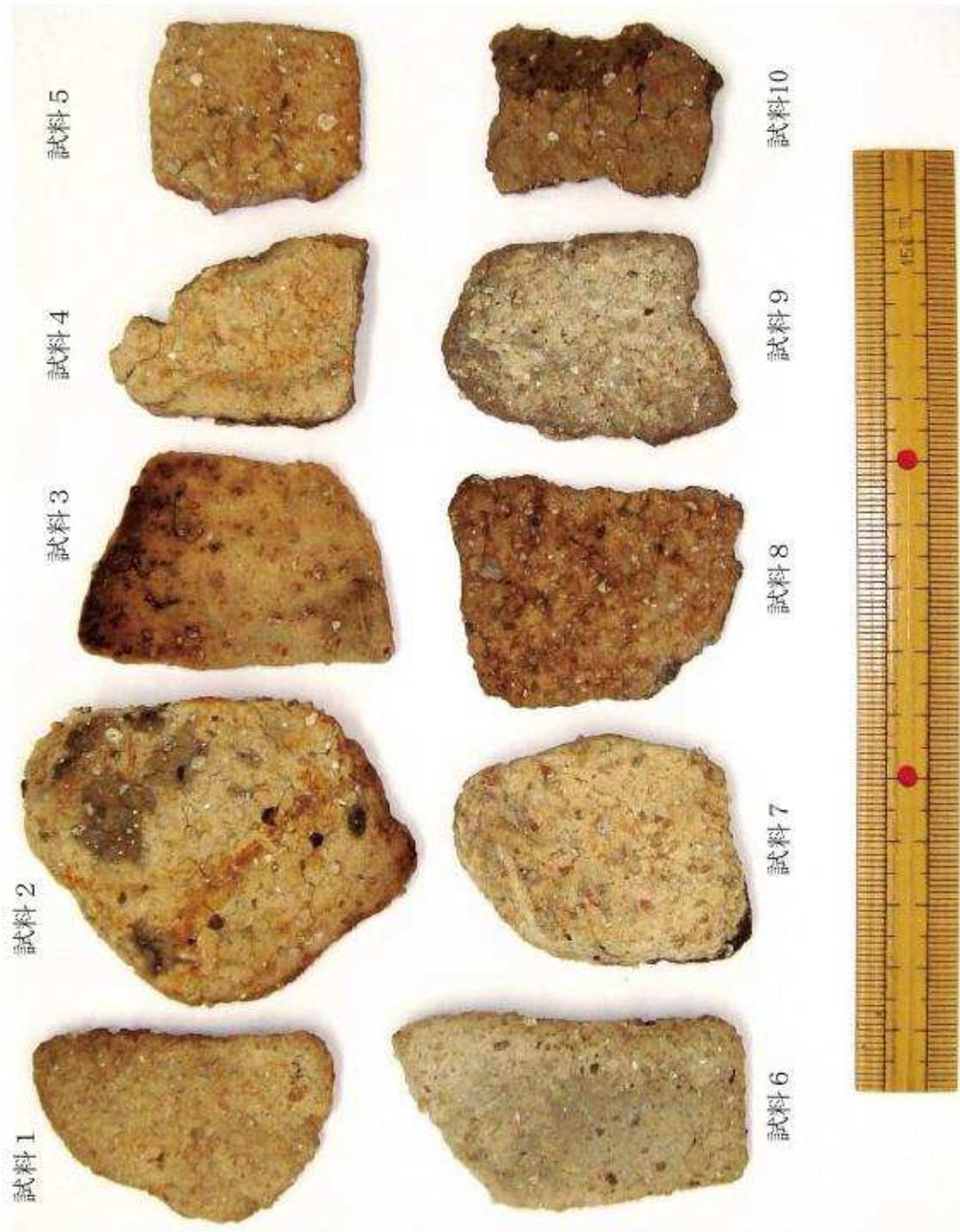
藤原宏志（1982）プラント・オパール分析法の基礎的研究(4)－熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出－。考古学と自然科学, 14, p.55-65.



第68図 出土土器（胎土）の植物珪酸体分析結果

表7 府中遺跡における植物珪酸体分析結果
 検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料																						
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10													
イネ科	Gramineae																							
ヨシ属	<i>Phragmites</i>																			8	15			
ウシクサ族A	Andropogoneae A type			7																15				
Bタイプ	B type																			15				
タケ亜科	Bambusoideae																							
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			7																8	7			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		7	22												8	7			8	7			
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.																				7			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>			7	15															23	15			
未分類等	Others		7	15	15					15										29	38			
その他のイネ科	Others																				7			
表皮毛起源	Husk hair origin																				7			
棒状珪酸体	Rod-shaped																			15	29	8	29	
未分類等	Others		7	37	44	30				7										15	7	15	7	
樹木起源	Arboreal																							
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>		15																					
その他	Others																					7		
(海綿骨針)	Sponge							59														7	8	7
植物珪酸体総数	Total		22	52	102	67	0	22	123	109	135	88												
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出																								
ヨシ属	<i>Phragmites</i>																			0.47	0.92			
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			0.08																0.09	0.08			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		0.04	0.11					0.04	0.03	0.04	0.04												
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.																				0.05			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>			0.02	0.04					0.09	0.09	0.07	0.04											



第69図 土器試料



第70図 出土土器の植物珪酸体 (プラント・オパール)

第4節 放射性炭素年代測定2

株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林絃一
Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

目次

1. はじめに	127
2. 試料と方法	127
3. 結果	127
4. 考察	128
第71図 暦年較正結果1	131
第72図 暦年較正結果2	132
表8 測定結果試料及び処理	129
表9 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	130

1. はじめに

府中遺跡は大阪府和泉市肥子町および府中町に所在する。発掘調査では縄文時代中期～晩期、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期などの遺構、遺物が検出されている。府中遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtadidze、Jorjoliani、測定は伊藤、丹生、小林が行い、報告文は伊藤、中村が作成した。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表8のとおりである。

試料は06-1区と06-2区から採取された木材である。06-1 区の試料は、炭化材6点と生材4点の計10点である。これらのうち、登録番号455（PLD-9782）の炭化材は04 S Kから検出された。土器溜りから出土した土器は縄文時代中期末の深鉢（波状口縁）で、複数個体が出土している。また、登録番号284・323・285（PLD-9783～9785）は炭集積1とその直下、179（PLD-9781）は炭集積2から検出された。炭集積1と2は縄文時代中期末ころの遺構と考えられている。

06-2区の試料は、炭化材4点である。登録番号286（PLD-9790）が検出された2区の5層からは庄内～布留式土器が出土している。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 L5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表9に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第71図と第72図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用

いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal3.10 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。

これまでに明らかにされている ^{14}C 年代および暦年較正結果と考古学的編年との対応関係 (キーリ・武藤, 1982; 小林・春成, 2006; Kudo, 2007) を参照して、今回の測定結果と考古学的編年との対応関係について整理する。

06-1区では、7層の登録番号110 (PLD-9780) が縄文時代後期末～晩期、炭集積2の179 (PLD-9781) が縄文時代後期末～晩期、土器溜りの455 (PLD-9782) が縄文時代中期後半、炭集積1の284と323 (PLD-9783・9784) および炭集積1直下の285 (PLD-9785) が縄文時代後期末～晩期、477 (PLD-9786) が縄文時代中期後半、10層の453 (PLD-9787) が縄文時代後期後半、砂礫層の470-1 (PLD-9788) が縄文時代中期後半、同じく砂礫層の470-2 (PLD-9789) が縄文時代前期中頃に相当する。

06-1区の土器溜りから出土した土器の型式 (縄文時代中期末) と試料の測定結果 (縄文時代中期後半相当) は整合的である。また、炭集積1と2から検出された試料の年代は、いずれも縄文時代後期末～晩期の年代を示し、炭集積1と2は土器溜りよりも新しい時期に形成されたと考えられる。

06-2区では、5層の登録番号286 (PLD-9790) が弥生時代前期～中期、474と476 (PLD-9791・9792) が縄文時代後期後半、475 (PLD-9793) が縄文時代前期中頃に相当する。

06-2区の5層からは庄内～布留式土器が出土しており、同層から検出された試料の測定結果 (弥生時代前期～中期相当) とは時期が異なる。出土土器と測定試料の時間差は、5層の堆積がある程度の時間幅の中で起きた可能性を示唆している。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- キーリ C.T.・武藤康弘 (1982) 縄文時代の年代. 縄文文化の研究第1巻, 246-275.
- 小林謙一・春成秀爾 (2006) 近畿地方における年代測定の結果. 新弥生時代のはじまり第1巻 弥生時代の新年代, 96-97, 雄山閣.
- Kudo, Y. (2007) The Temporal Correspondences between the Archaeological Chronology and Environmental Changes from 11,500 to 2,800 cal BP on the Kanto Plain, Eastern Japan. 第四紀研究, 46 (3), 187-194.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

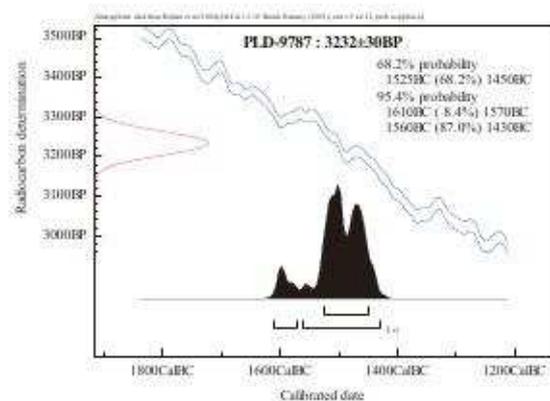
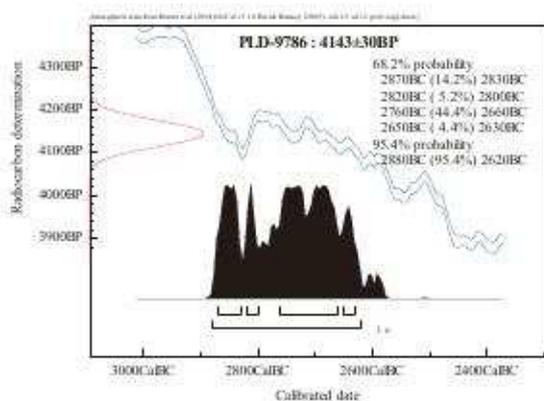
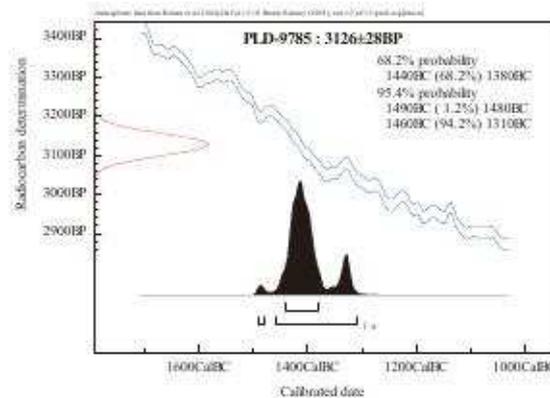
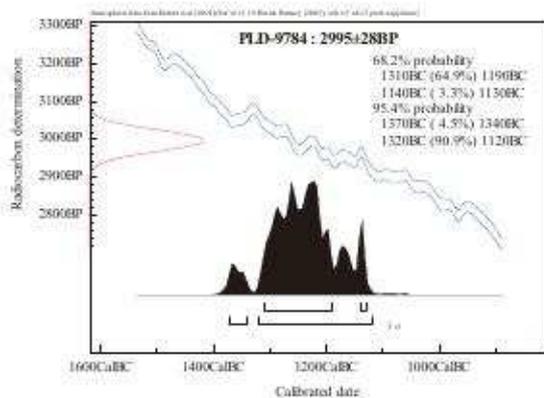
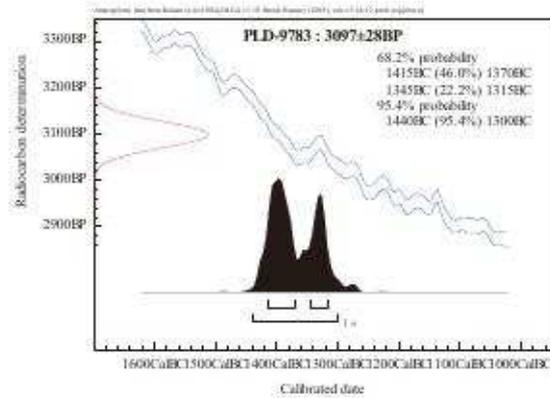
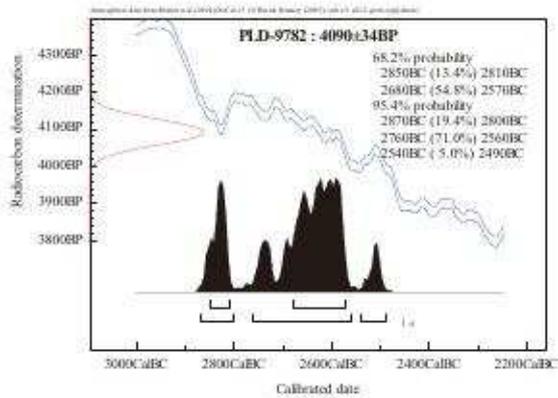
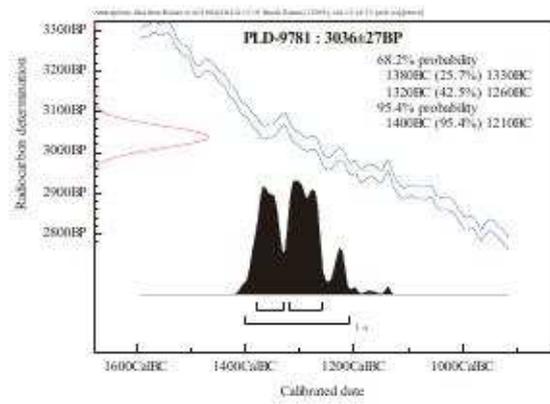
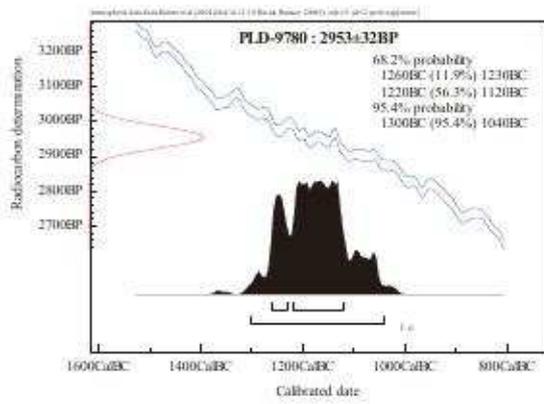
表8 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-9780	調査区: 1区 層位: 7層 登録番号: 110	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9781	調査区: 1区 遺構: 炭集積2 登録番号: 179	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9782	調査区: 1区 遺構: 土器溜まり 層位: 深鉢口縁内土 登録番号: 455	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9783	調査区: 1区 遺構: 炭集積1 登録番号: 284	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9784	調査区: 1区 遺構: 炭集積1 登録番号: 323	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9785	調査区: 1区 遺構: 炭集積1直下 層位: 9層(灰黄褐色砂質土) 登録番号: 285 備考: サンプル炭	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9786	調査区: 1区 層位: 9層? 登録番号: 477	試料の種類: 生材 試料の性状: 部位不明 状態: wet その他: 材表面に石膏と見られる結晶	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9787	調査区: 1区 層位: 10層 登録番号: 453	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9788	調査区: 1区 層位: 砂礫層(河川) 登録番号: 470 備考: 470-1, T.P.=15, 559	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪(2年輪分) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9789	調査区: 1区 層位: 砂礫層(河川) 登録番号: 470 備考: 470-2, T.P.=15, 559	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪? 状態: dry カビ: 有	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

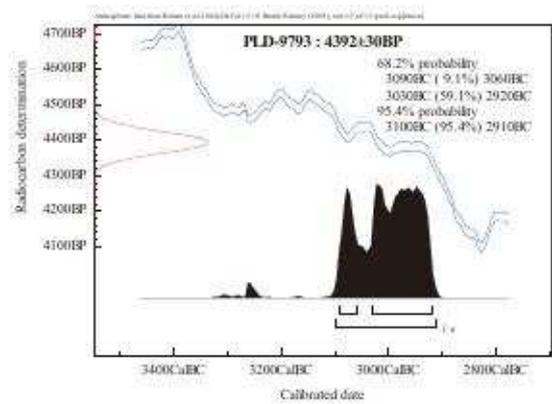
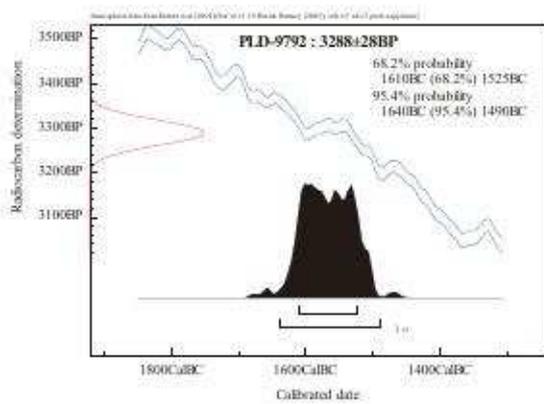
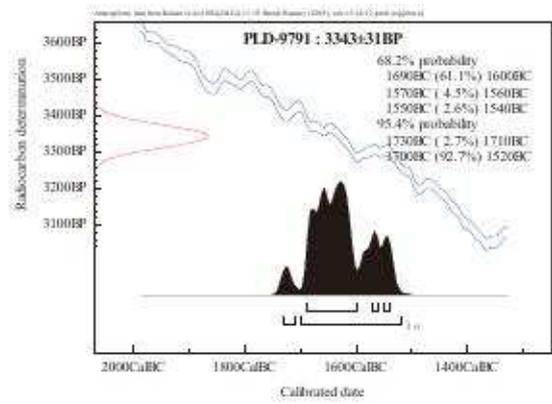
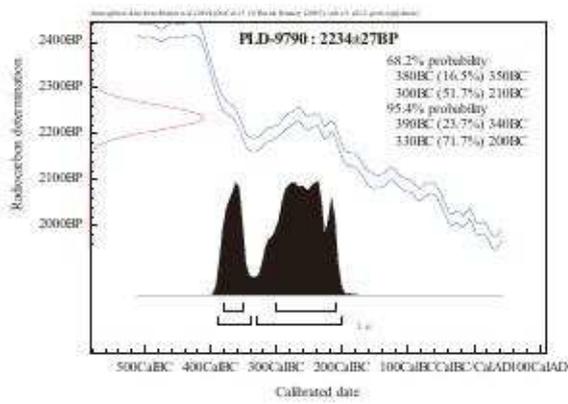
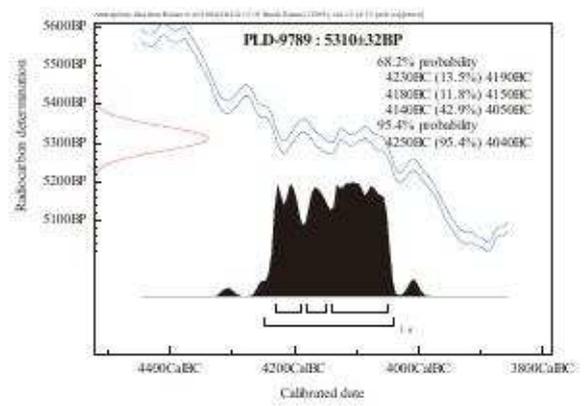
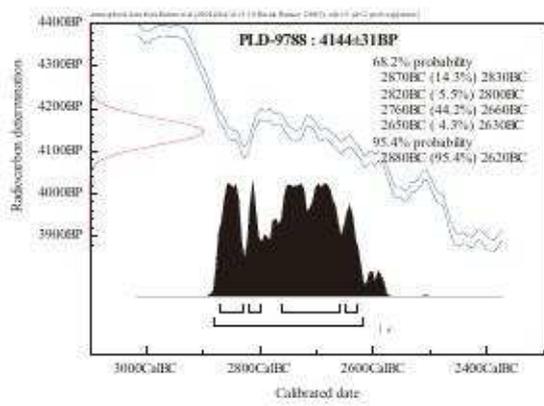
PLD-9790	調査区：2区 層位：5層 登録番号：286	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9791	調査区：2区 層位：8層? 登録番号：474 備考：北カベ断面、図面62にあり	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9792	調査区：2区 登録番号：476 層位：8層? 備考：矢板10付近、焼土塊、 T.P.=16.316m	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9793	調査区：2区 層位：8層? 登録番号：475 備考：深掘	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

表9 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-9780 登録番号：110	-23.86 \pm 0.28	2953 \pm 32	2955 \pm 30	1260BC (11.9%) 1230BC 1220BC (56.3%) 1120BC	1300BC (95.4%) 1040BC
PLD-9781 登録番号：179	-26.30 \pm 0.21	3036 \pm 27	3035 \pm 25	1380BC (25.7%) 1330BC 1320BC (42.5%) 1260BC	1400BC (95.4%) 1210BC
PLD-9782 登録番号：455	-26.92 \pm 0.19	4090 \pm 34	4090 \pm 35	2850BC (13.4%) 2810BC 2680BC (54.8%) 2570BC	2870BC (19.4%) 2800BC 2760BC (71.0%) 2560BC 2540BC (5.0%) 2490BC
PLD-9783 登録番号：284	-28.79 \pm 0.17	3097 \pm 28	3095 \pm 30	1415BC (46.0%) 1370BC 1345BC (22.2%) 1315BC	1440BC (95.4%) 1300BC
PLD-9784 登録番号：323	-28.74 \pm 0.17	2995 \pm 28	2995 \pm 30	1310BC (64.9%) 1190BC 1140BC (3.3%) 1130BC	1370BC (4.5%) 1340BC 1320BC (90.9%) 1120BC
PLD-9785 登録番号：285	-28.38 \pm 0.21	3126 \pm 28	3125 \pm 30	1440BC (68.2%) 1380BC	1490BC (1.2%) 1480BC 1460BC (94.2%) 1310BC
PLD-9786 登録番号：477	-28.92 \pm 0.19	4143 \pm 30	4145 \pm 30	2870BC (14.2%) 2830BC 2820BC (5.2%) 2800BC 2760BC (44.4%) 2660BC 2650BC (4.4%) 2630BC	2880BC (95.4%) 2620BC
PLD-9787 登録番号：453	-28.10 \pm 0.22	3232 \pm 30	3230 \pm 30	1525BC (68.2%) 1450BC	1610BC (8.4%) 1570BC 1560BC (87.0%) 1430BC
PLD-9788 登録番号： 470(470-1)	-32.23 \pm 0.20	4144 \pm 31	4145 \pm 30	2870BC (14.3%) 2830BC 2820BC (5.5%) 2800BC 2760BC (44.2%) 2660BC 2650BC (4.3%) 2630BC	2880BC (95.4%) 2620BC
PLD-9789 登録番号： 470(470-2)	-27.00 \pm 0.20	5310 \pm 32	5310 \pm 30	4230BC (13.5%) 4190BC 4180BC (11.8%) 4150BC 4140BC (42.9%) 4050BC	4250BC (95.4%) 4040BC
PLD-9790 登録番号：286	-28.28 \pm 0.18	2234 \pm 27	2235 \pm 25	380BC (16.5%) 350BC 300BC (51.7%) 210BC	390BC (23.7%) 340BC 330BC (71.7%) 200BC
PLD-9791 登録番号：474	-28.34 \pm 0.29	3343 \pm 31	3345 \pm 30	1690BC (61.1%) 1600BC 1570BC (4.5%) 1560BC 1550BC (2.6%) 1540BC	1730BC (2.7%) 1710BC 1700BC (92.7%) 1520BC
PLD-9792 登録番号：476	-26.75 \pm 0.19	3288 \pm 28	3290 \pm 30	1610BC (68.2%) 1525BC	1640BC (95.4%) 1490BC
PLD-9793 登録番号：475	-26.42 \pm 0.20	4392 \pm 30	4390 \pm 30	3090BC (9.1%) 3060BC 3030BC (59.1%) 2920BC	3100BC (95.4%) 2910BC



第71図 暦年校正結果 (1)



第72図 暦年較正結果 (2)

第7章 まとめ

調査は、都市計画道路和泉中央線の穴田交差点から市役所北交差点まで約630mを対象として実施したが、本書では前書（『府中遺跡』）に続き、JR府中第2踏切から市役所北交差点まで、約250m区間の2007、2008年（平成19、20）年度の成果をまとめた。

縄文時代では今回、和泉府中駅に近い北西部の08-2区、08-14区で中期前葉から中葉に位置づけられる船元Ⅰ式、船元Ⅱ式の土器が出土し、海岸線まで約3kmの低位段丘面への進出がこの時期まで遡ることが明らかとなった。遺物の量は少ないので、狩猟場や食料の採集場所の域を出ないかもしれない。

中期末の北白川C式期では調査地北西部の02-1区、02-2区、06-1区で土器が出土し、06-1区で炉址と見られる炭化物集積や土器集積が検出されていたが、今回06-1区に隣接する08-4区で貯蔵穴、08-11区、08-14区で柱痕を残すピット焼土塊を含む浅い土坑が検出された。時間的な制約で土壌の色や質の変化を殆ど認識できなかった調査技術の問題もあり、住居跡は検出できなかったが、柱痕を残すピットもあり、調査地に集落が営まれたのは間違いのないであろう。

ところで、縄文時代の住居内からしばしば埋められた土器が出土し、底部を欠く例が多いとされる。埋甕として報告され、民族例から子供の成長を願い、胎盤を土器に入れて埋められたと考えられている。貯蔵穴08-4区03SKから出土した深鉢も土圧で砕かれていたが、底部が割れており、横に寝かせた状態で出土した。欠け方から底部を意図的に打ち欠いて埋めた可能性が高い。貯蔵穴でも埋甕をする例があるのか調べてみたい。

弥生時代では、前回報告した河道の続きを検出した。03-6区で東南東から西流し、08-8区で大きく北に屈曲し、03-1区で北西に緩く蛇行している。豊中遺跡、板原遺跡の調査ではこの河道を検出していないので、北か北東方向に流下するのであろう。08-8区の流木溜りで出土した土器片や年代測定結果から時期は縄文時代晩期から弥生時代前期初頭と考えられる。

この河川は弥生時代中期には埋没しているが、周囲より低くなっていたと思われる。方形周溝墓はこの地形に規制され、北西から南東に中心軸を微妙に変えて築造されているが、方形周溝墓は直列に並ぶのみで空間のある南側や西側には広がらない。府中遺跡や西側の豊中遺跡では中期から後期の方形周溝墓が複数検出されている。この調査を含め、広い面的な調査は少なく、確実ではないが、溝を共有して並ぶ周溝墓は少なく、隣接していても単独で築造される例が多いようである。

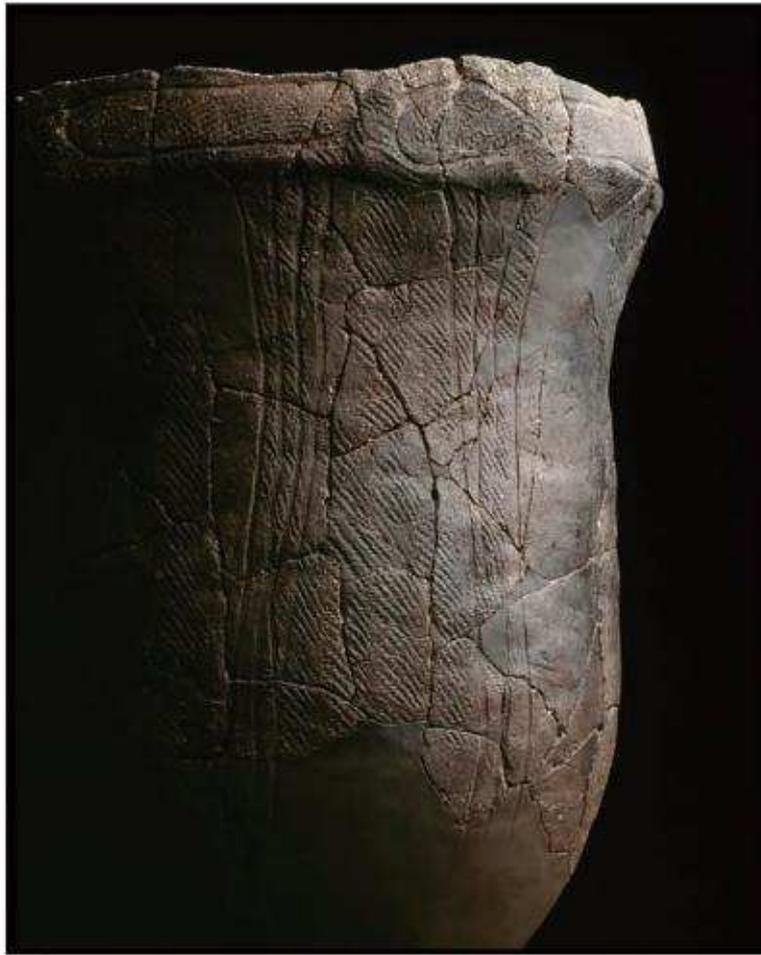
また、住居跡も調査地周辺では市役所北交差点の南東側で実施された和泉中央線整備事業に伴う調査で弥生時代中期の住居跡が2基、08-8区、08-14区の南約30m地点で弥生時代中期の竪穴住居跡が5基検出されている。また、詳細は明らかではないが、約100m北で実施された調査でも中期の竪穴住居跡が10基以上検出されている。弥生時代中期の集落は、600m四方の範囲に複数の集団がそれぞれ住居域と墓地を占有していたのであろうか。

弥生時代後期から古墳時代では、東の国府小学校前で古墳時代の堅穴住居跡が検出されているが、今回の調査区では埋没河川が湿地化し、遺物の廃棄場所になっていたようである。また水流が復活していたようで、08-8区、08-14区、08-11区、08-4区で浅い河川跡を数条検出した。

08-11区では古墳時代前期の溝を検出しているが遺物は殆ど出土していない。08-14区、08-2区では前期の遺物を伴う土坑やピットを検出している。J R 阪和線西側の豊中遺跡、板原遺跡では古墳時代前期から中期の掘立柱建物跡や土坑が多数検出されている。86年調査地と豊中遺跡は約400m離れている。この時期、J R 線の東側は古墳時代府中集落内の耕作地や広場のような場所になっていたのかもしれない。

奈良時代以降、調査地は和泉国衙推定地のI 条南の里道に当たるが遺構・遺物共に極端に減少することから、室町時代に国衙機能が堺に移って以降、熊野街道沿いの和泉郡の代官所に縮小し、大規模開発で土壌が削られたとする考えもある。今回の調査でも中世の遺構は遺物が少なく時期を絞れないが、07-2区の素掘りの井戸、08-14区で検出した石組み遺構のみである。西側の板原遺跡中世以降耕作地化していたのであろう。国衙の所在については今後も注意深い調査が必要であろう。

版 圖





08-4区 03SK全景 (西から)



08-4区 03SK北西側
(北から)



08-4区 03SK北側土器
検出状況 (南東から)



07-1区全径（南東から）



07-1区 01SK（南西から）



07-1区 01SK（西から）



07-2区全景 (南東から)



07-2区全景 (南から)



07-2区 01 S E (南東から)



07-5区 11SD (北東から)



07-5区 11SD北東側土器出土状況
(北東から)



07-5区 11SD南西側土器出土状況
(東から)



07-5区全景（南東から）



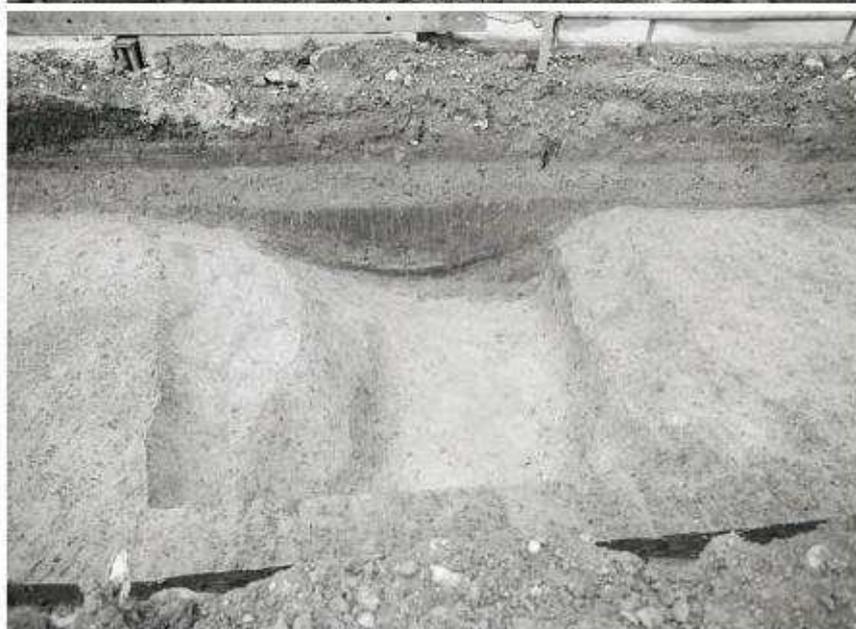
07-5区全景（北から）



07-6区全景 (南東から)



07-6b区全景 (南東から)



07-6b区 03SD (南西から)



07-10区全景（南東から）



07-10区ピット検出状況（北西から）



07-12区全景（南東から）



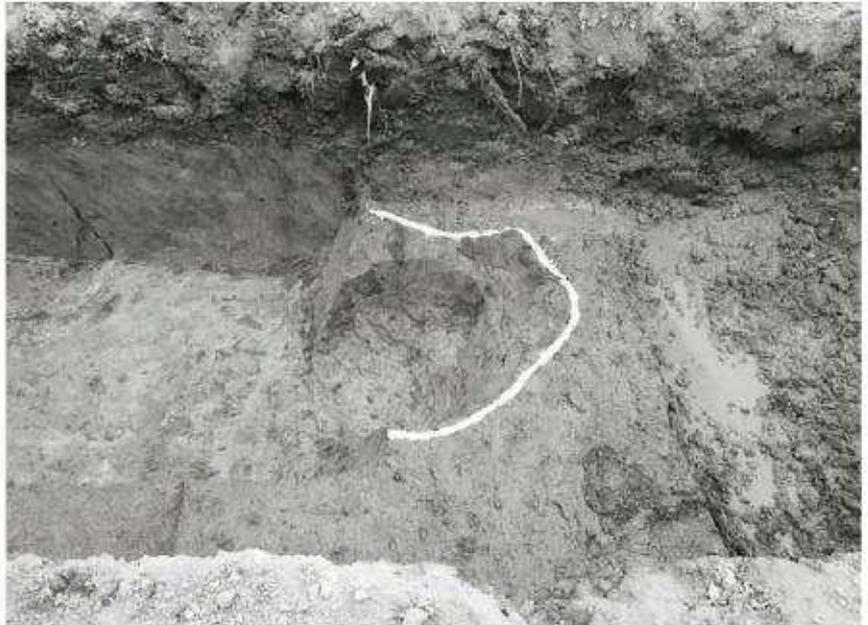
07-13区全景（南東から）



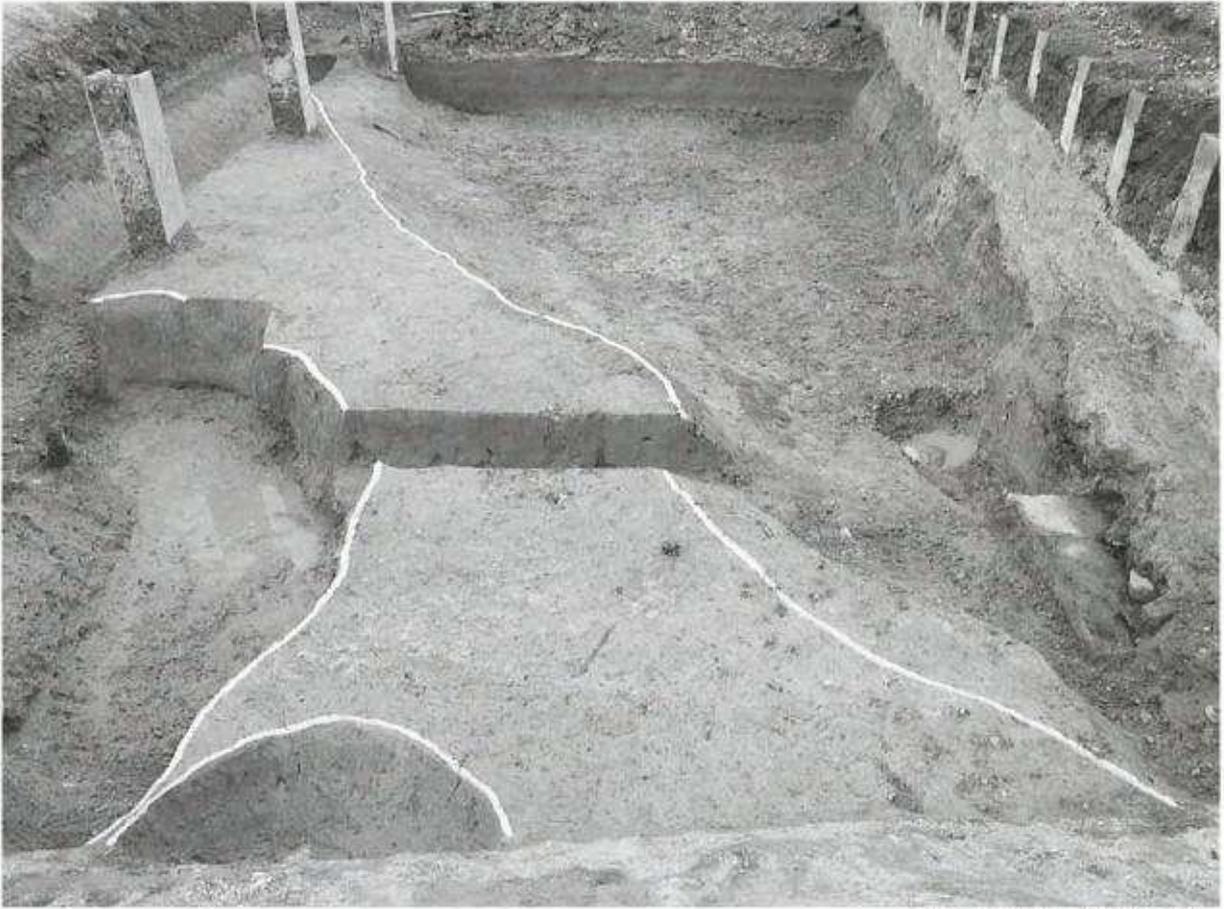
07-13b区(南東から)



07-13c区全景(南東から)



07-13c区土坑(南西から)



08-1区全景（南東から）



08-1区遺物出土状況



08-1b区11NR (南東から)



08-1b区遺物検出状況 (南西から)



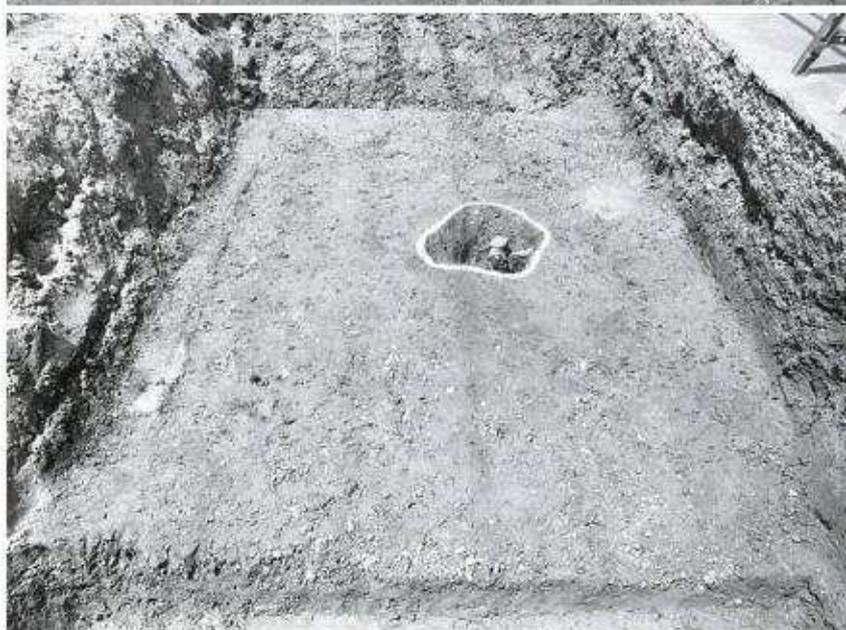
08-2b区 (南東から)



08-2d区 (北西から)



08-2c区 01SK(南西から)



08-2c区全景(北西から)



08-2c区下層(南東から)



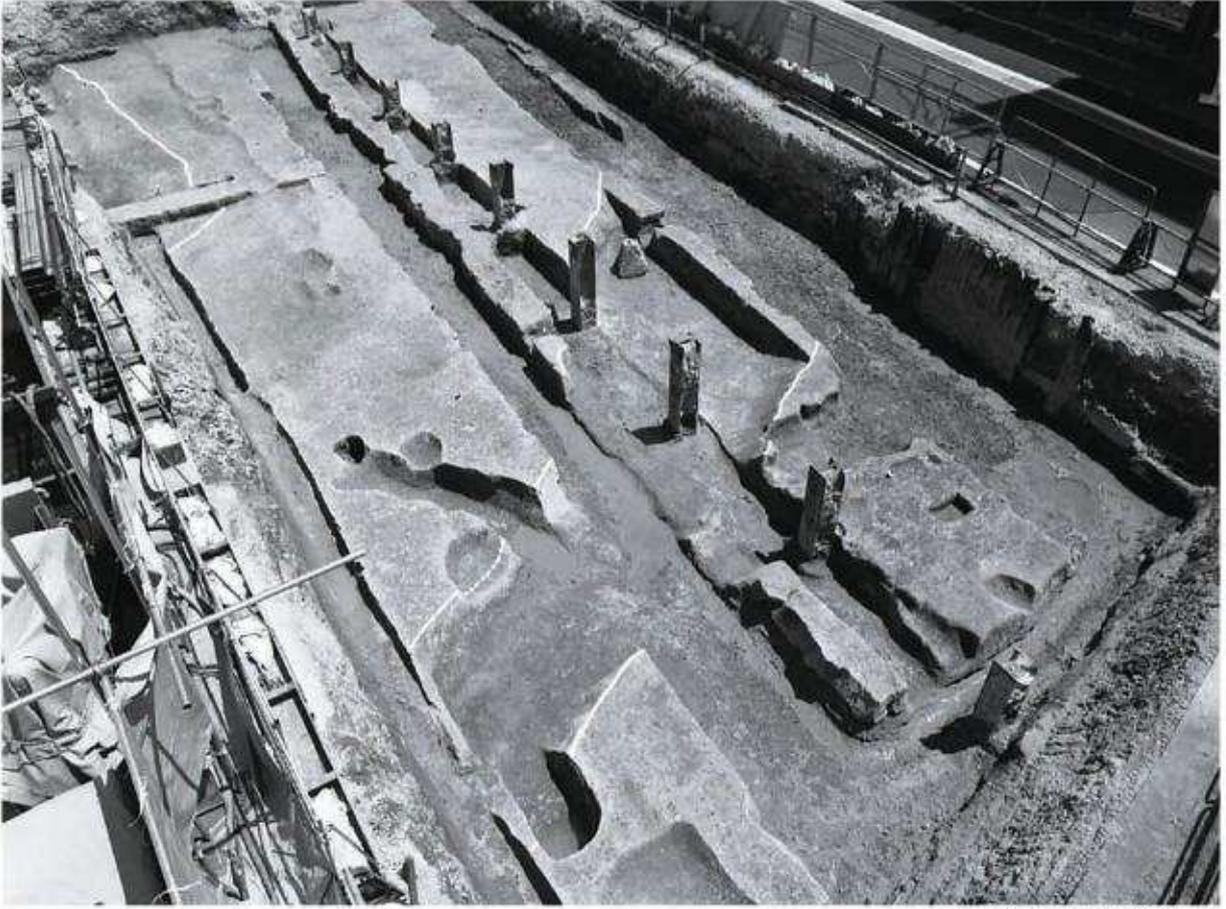
08-3a区全景（南東から）



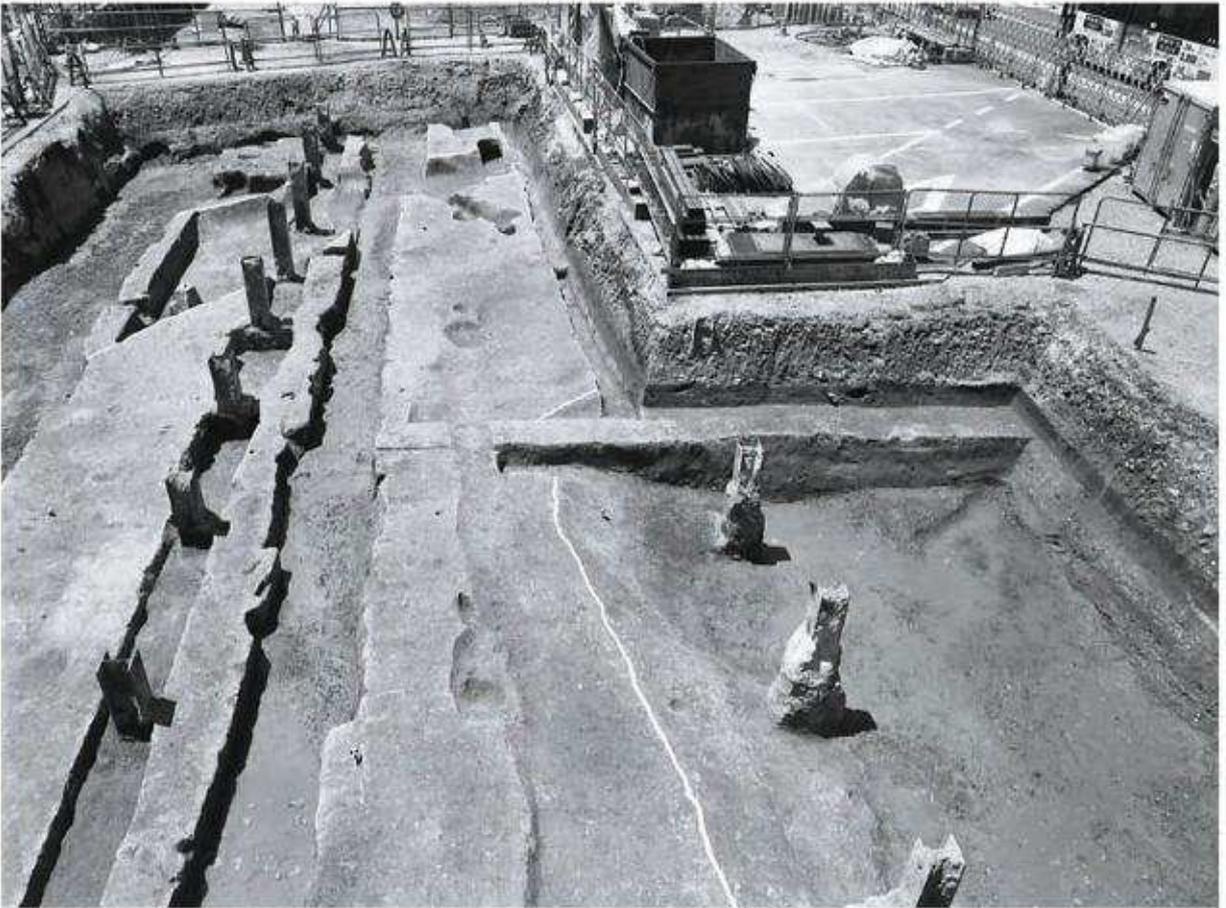
08-3a区全景（南西から）



08-3b区全景（南東から）



08-4区全景（北から）



08-4区全景（南東から）



08-4区 03SK (西から)



08-4区 03SK (西から)



08-4区 03SK断面 (南から)



08-4区 03SK北側 (南西から)



08-4区 03SK北側 (北西から)



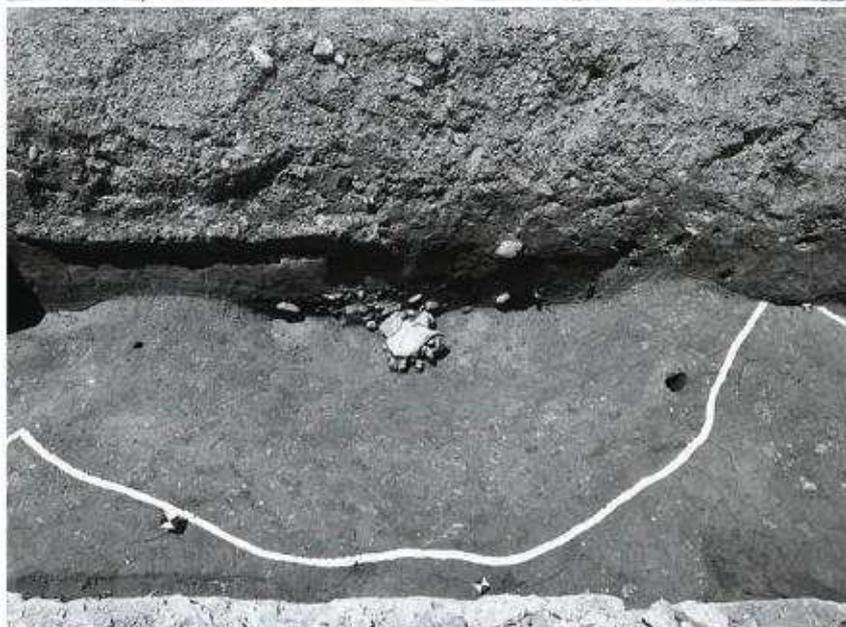
08-4区 03SK完掘時 (南西から)



08-5区全景 (北西から)



08-5区 02SD (南西から)



08-5区 01SK (南西から)



08-5区 02SD下層 (南西から)



08-5区 02SD下層 (北西から)



08-5区 01SK (西から)



08-5b区全景（南東から）



08-5b区 03SD（北東から）



08-6区全景（北西から）



08-6区壁際土器出土状況（北東から）



08-6区包含層内土器出土状況（北西から）



08-7a区全景（南東から）



08-7b区全景（北西から）



08-7c区全景（北西から）



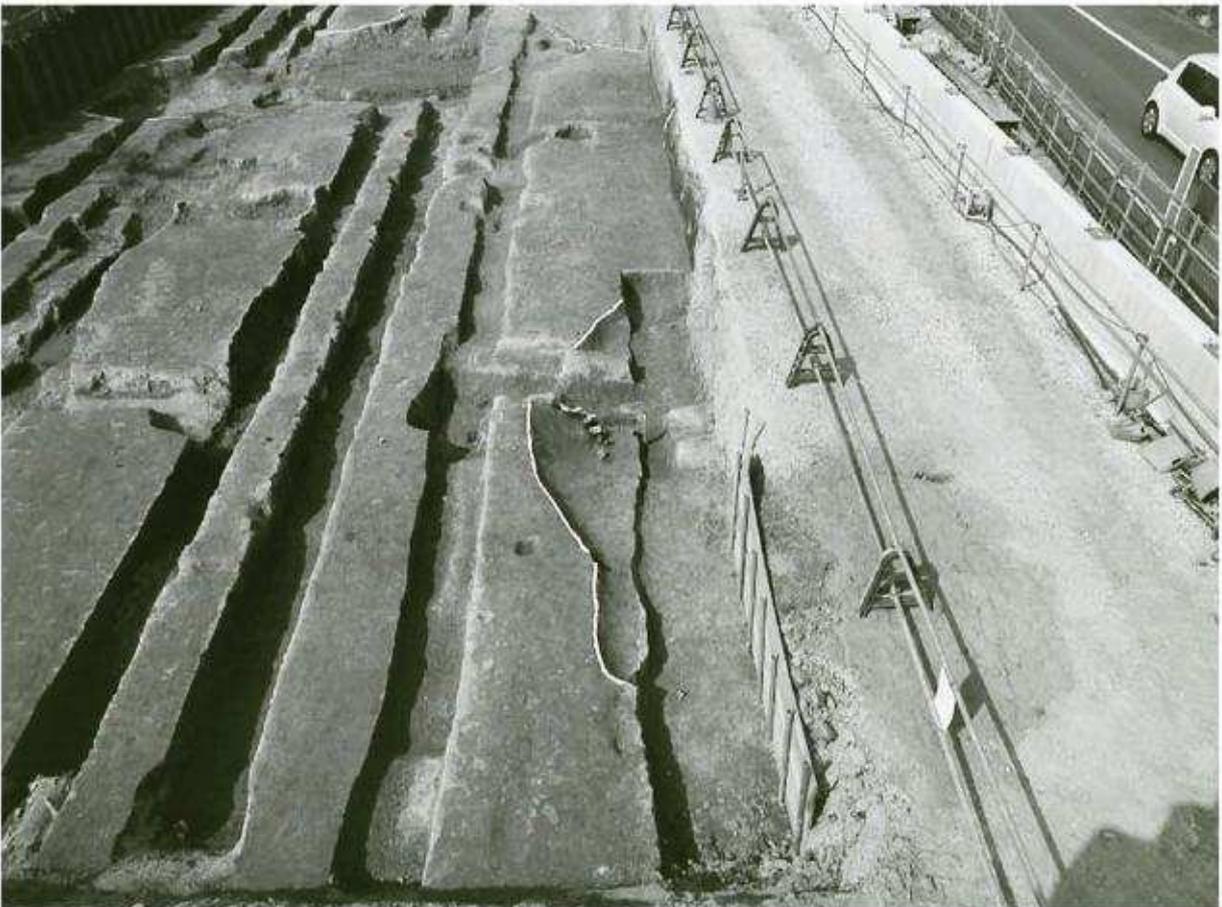
08-7d区（第2面）全景（北西から）



08-8区全景（北西から）



08-8区 01S Z 南西周溝 (北西から)



08-8区 01S Z 南西周溝 (南東から)



08-8区 01 S Z 南西周溝 (南東から)



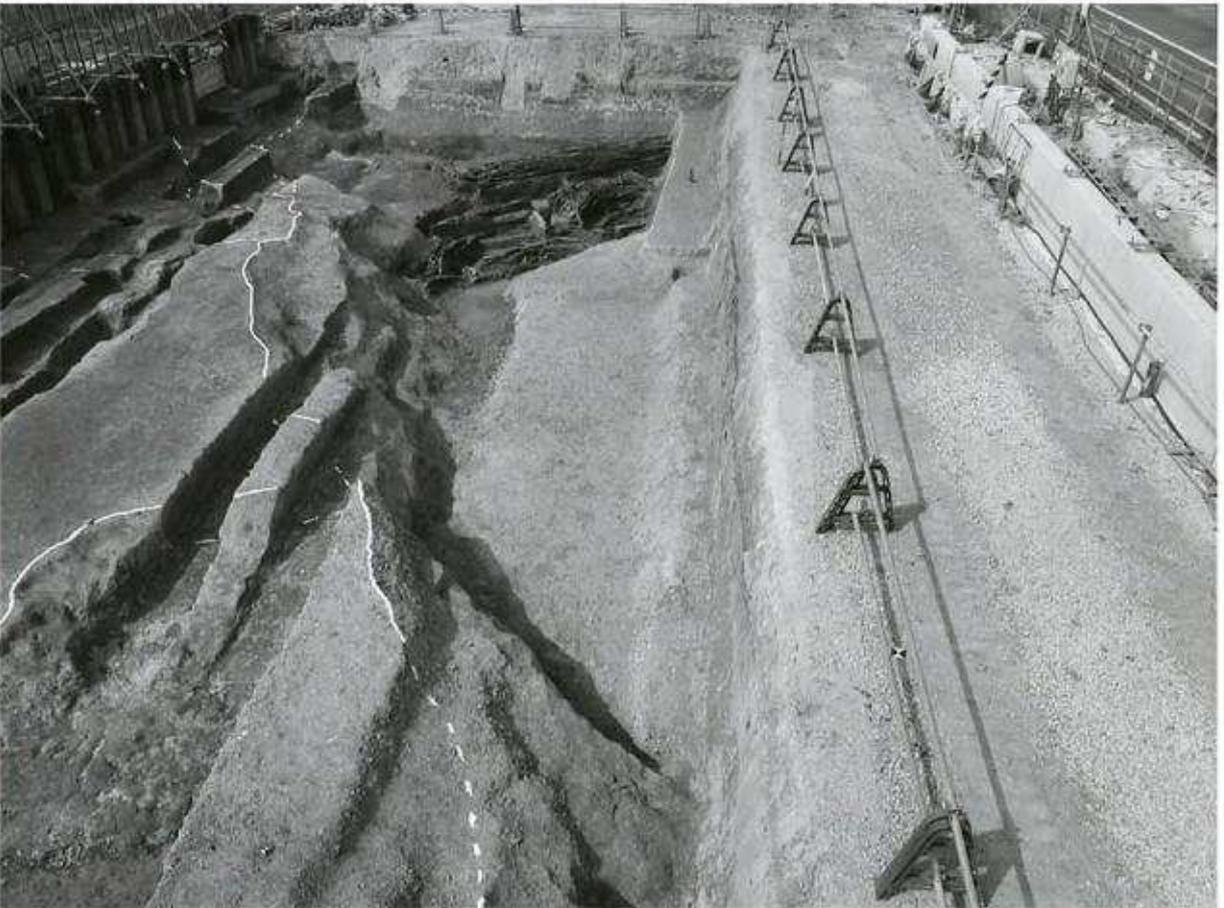
08-8区 01 S Z 南西周溝 (北西から)



08-8区 01 S Z 南西周溝土器出土状況
(南から)



08-8区 11NR (北西から)



08-8区 11NR (南東から)



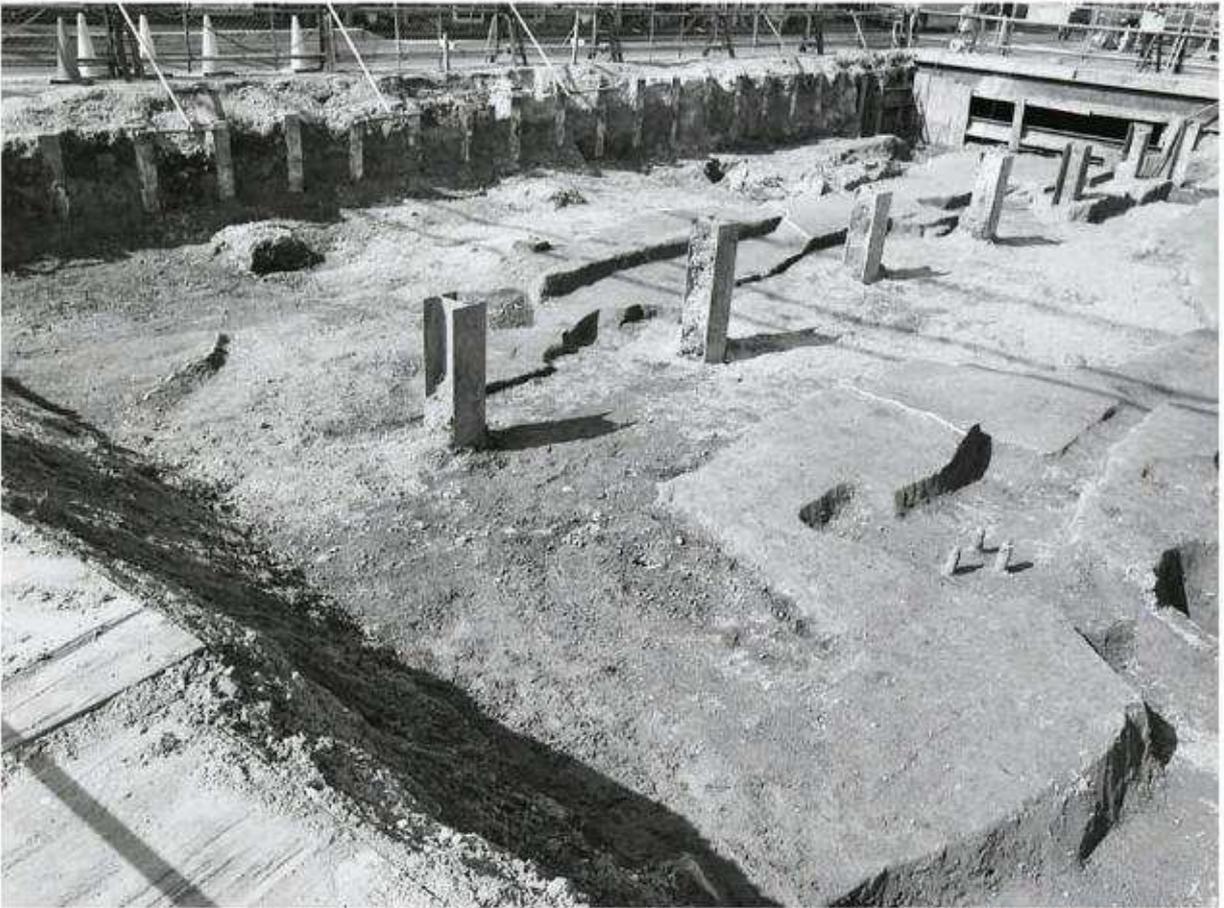
08-8区 02NR断面（南西から）



08-8区 02NR土器出土状況（西から）



08-11区全景（南東から）



08-11区全景（西から）



08-11c区全景(南東から)



08-11c区全景(西から)



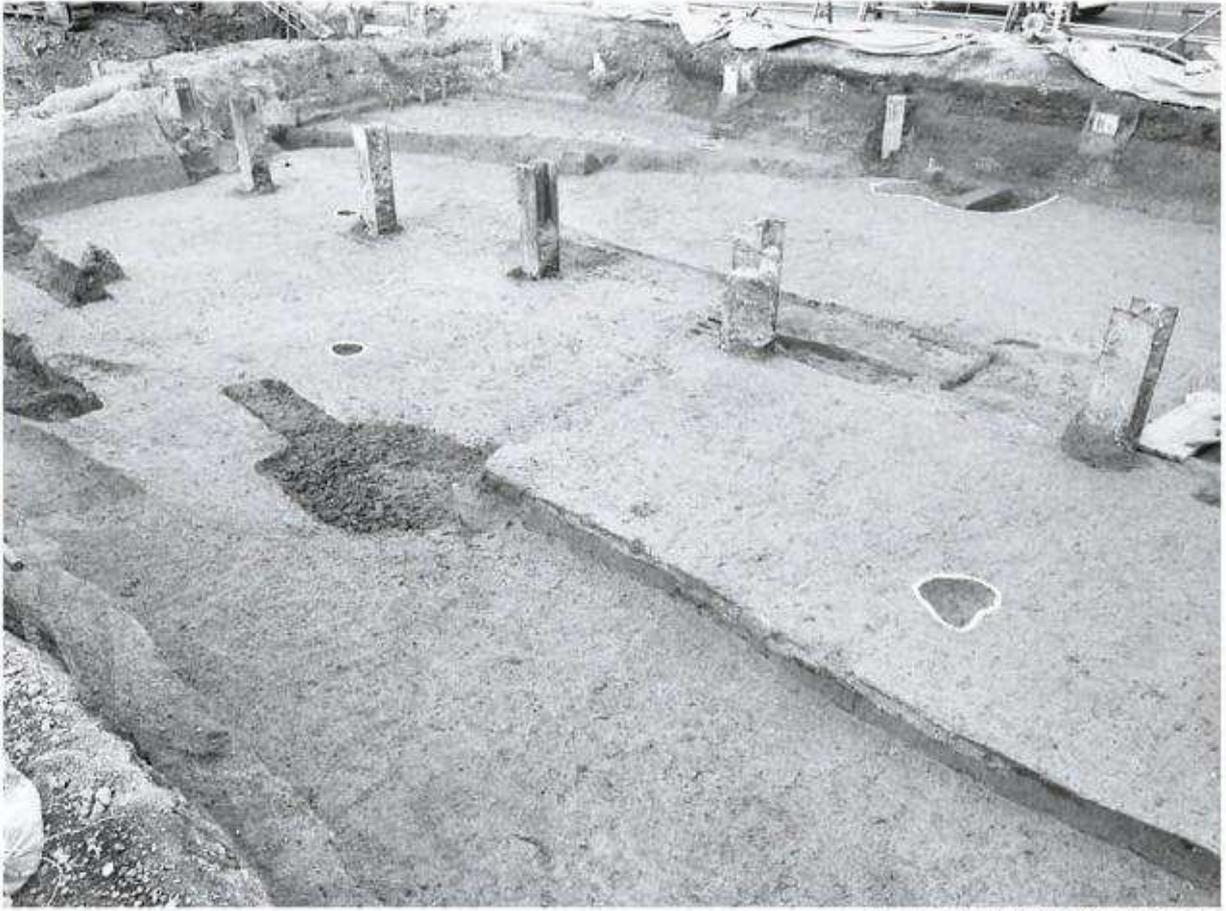
縄文土器出土状況（南西から）



縄文土器出土状況（南西から）



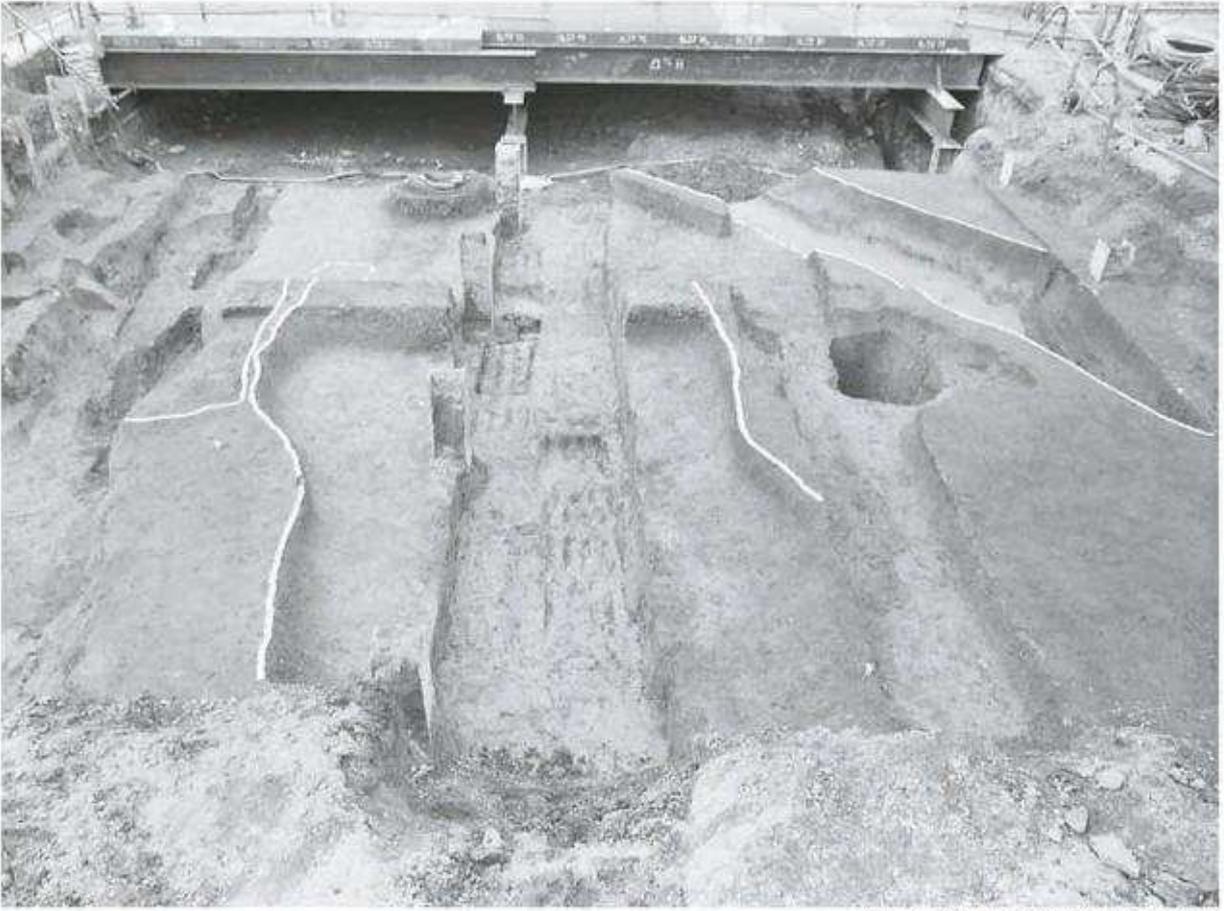
縄文土器出土状況（南西から）



08-11c区縄文時代面全景（南から）



08-11c区縄文時代面全景（北西から）



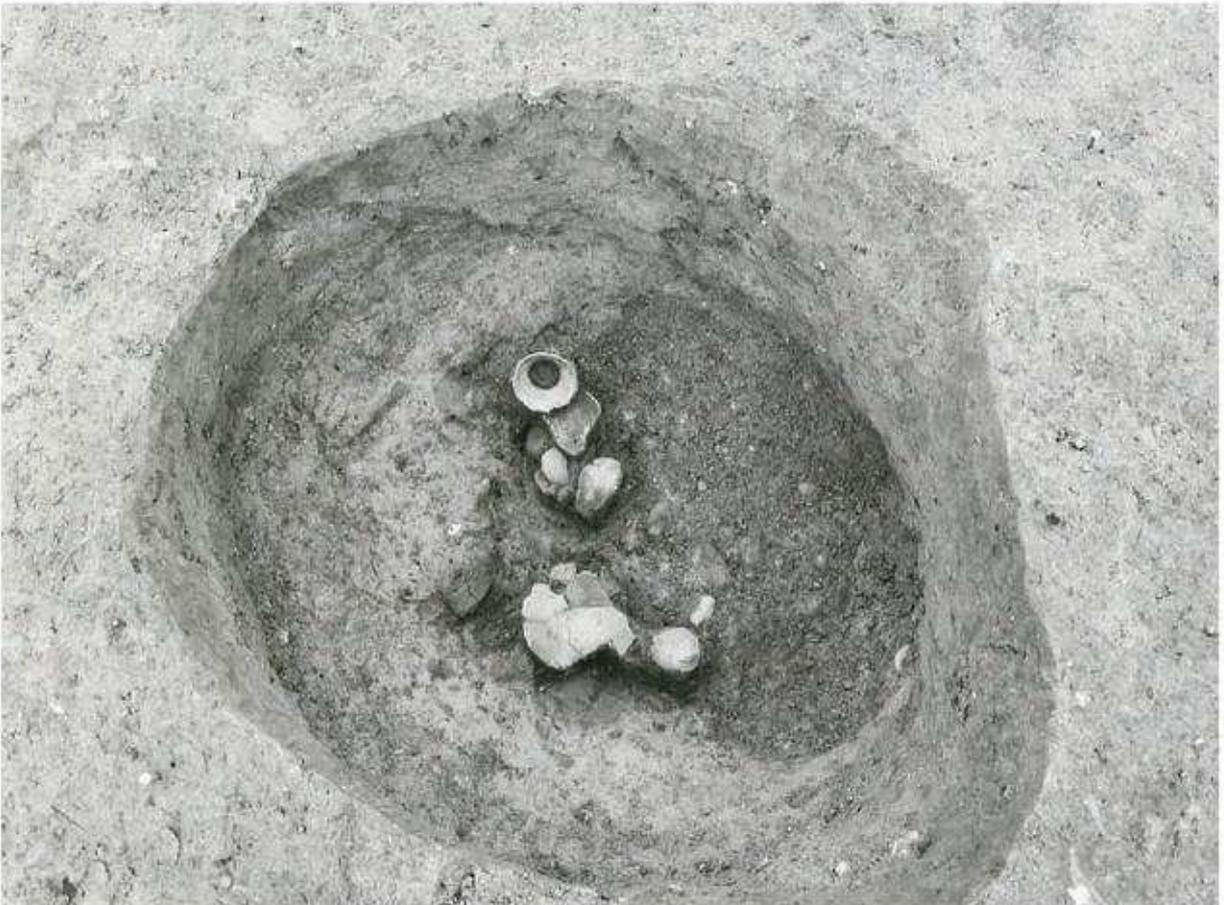
08-14区全景上層の遺構（南東から）



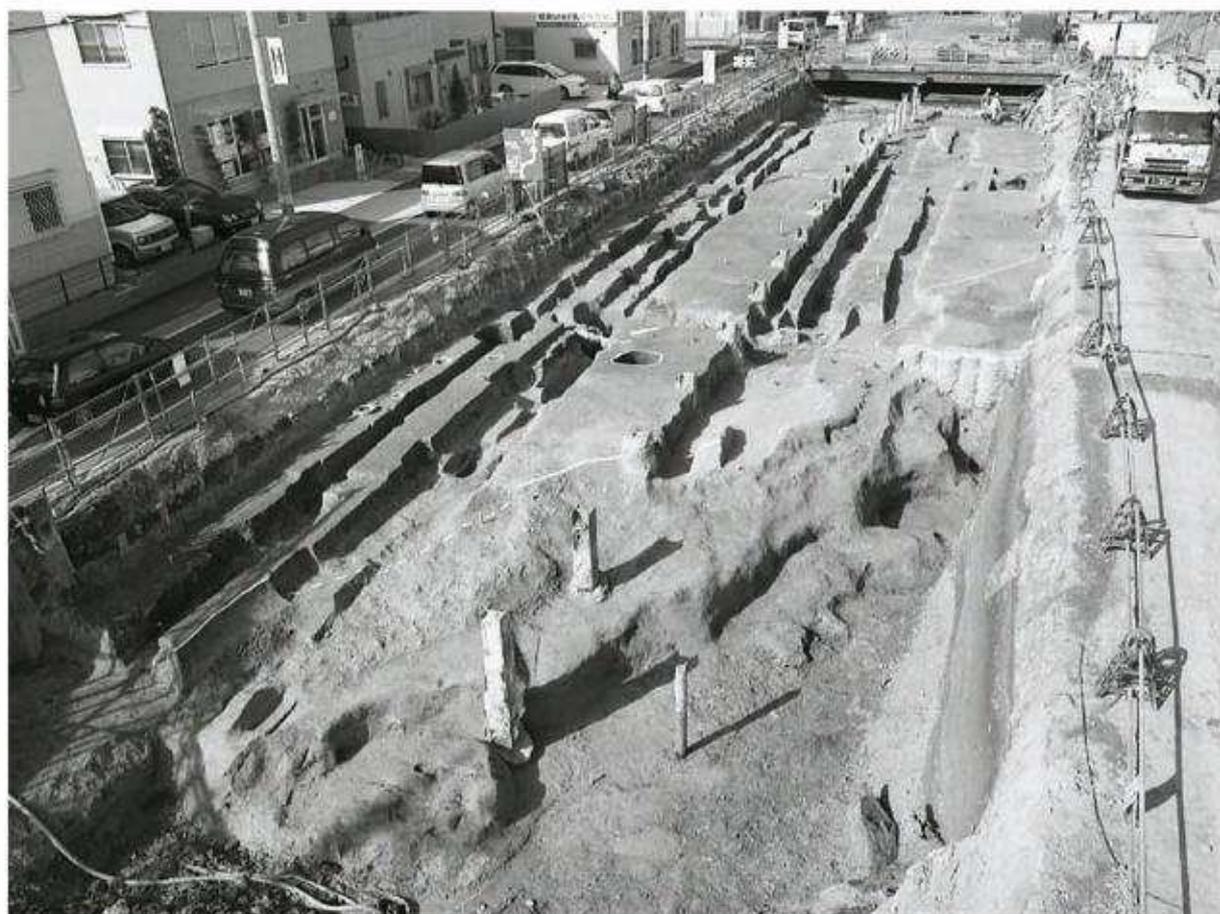
08-14区 02SD（東から）



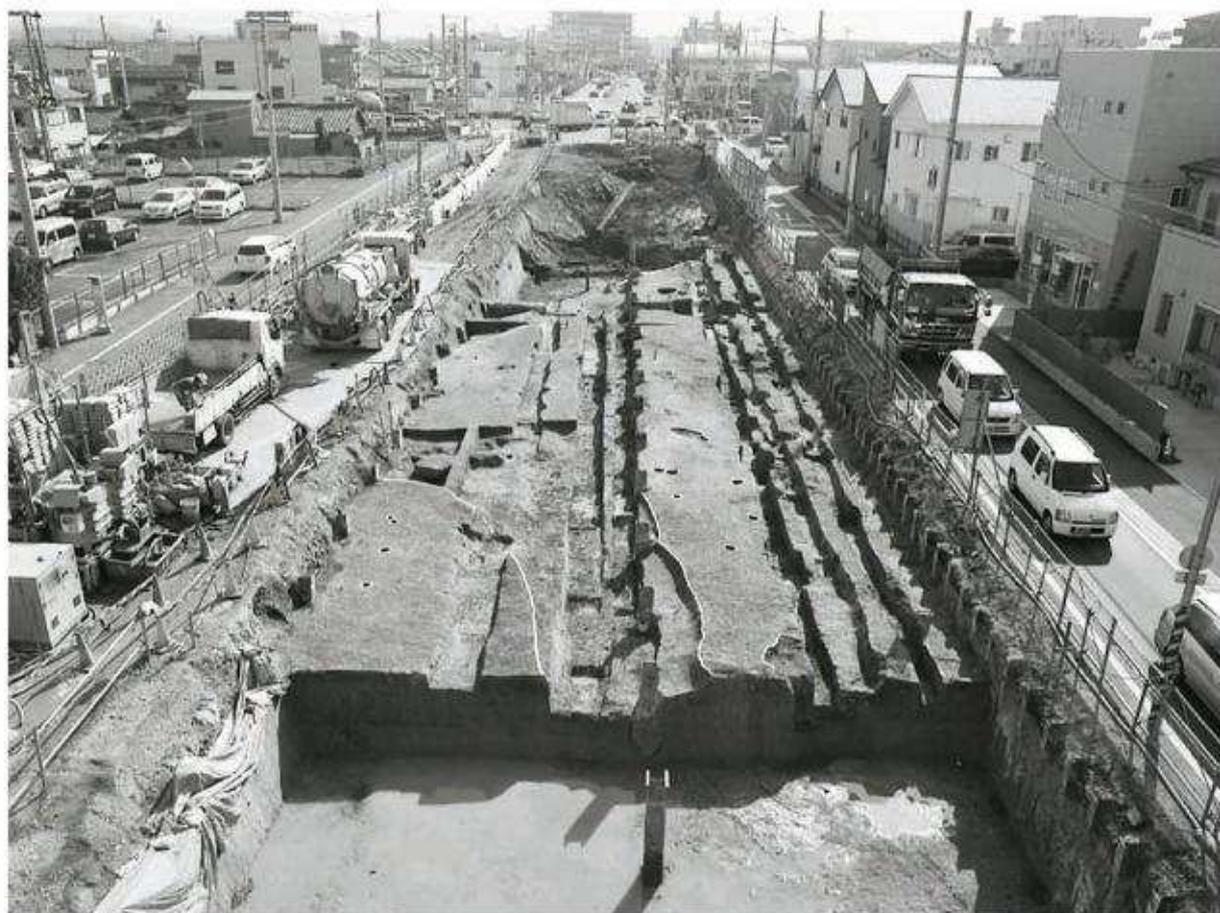
08-14区 04SK (南東から)



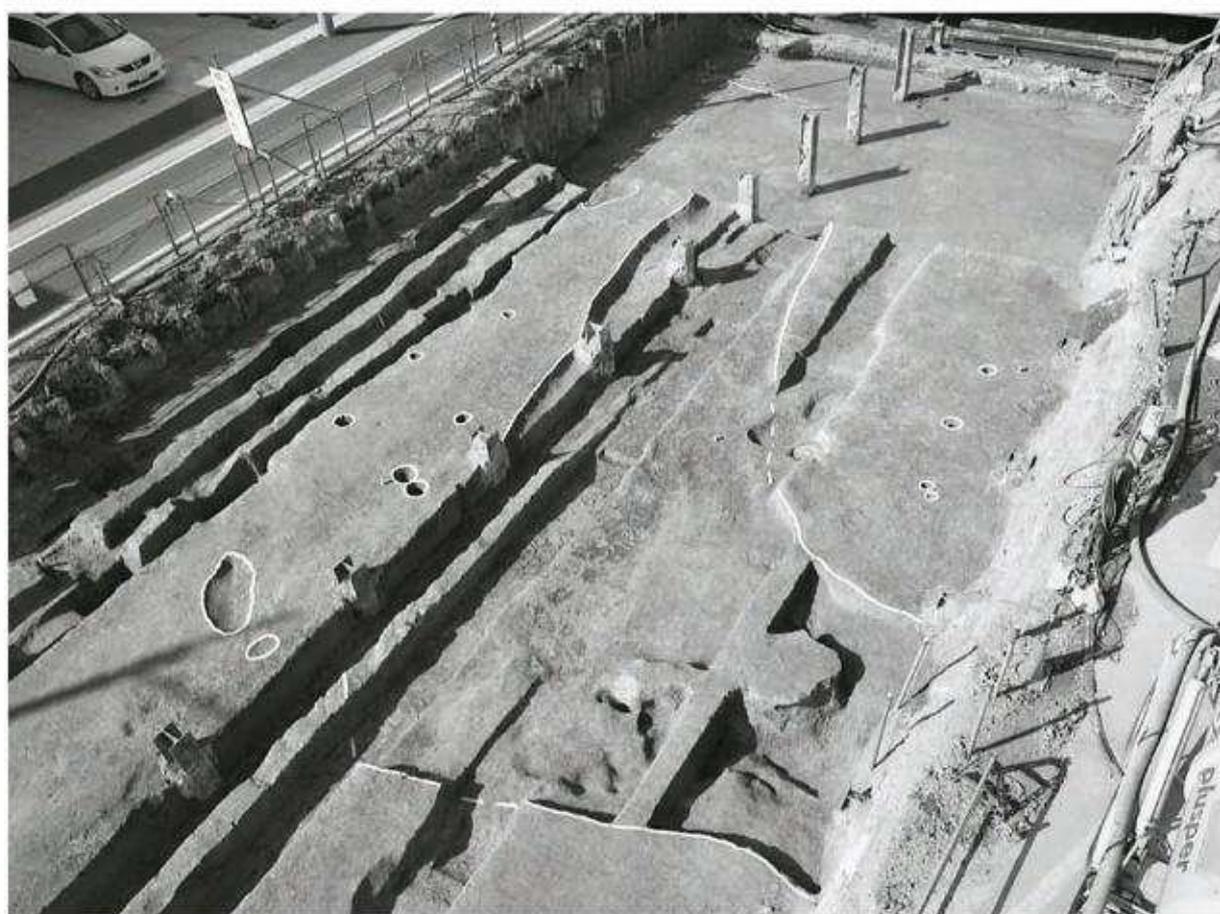
08-14b区 03SK (南東から)



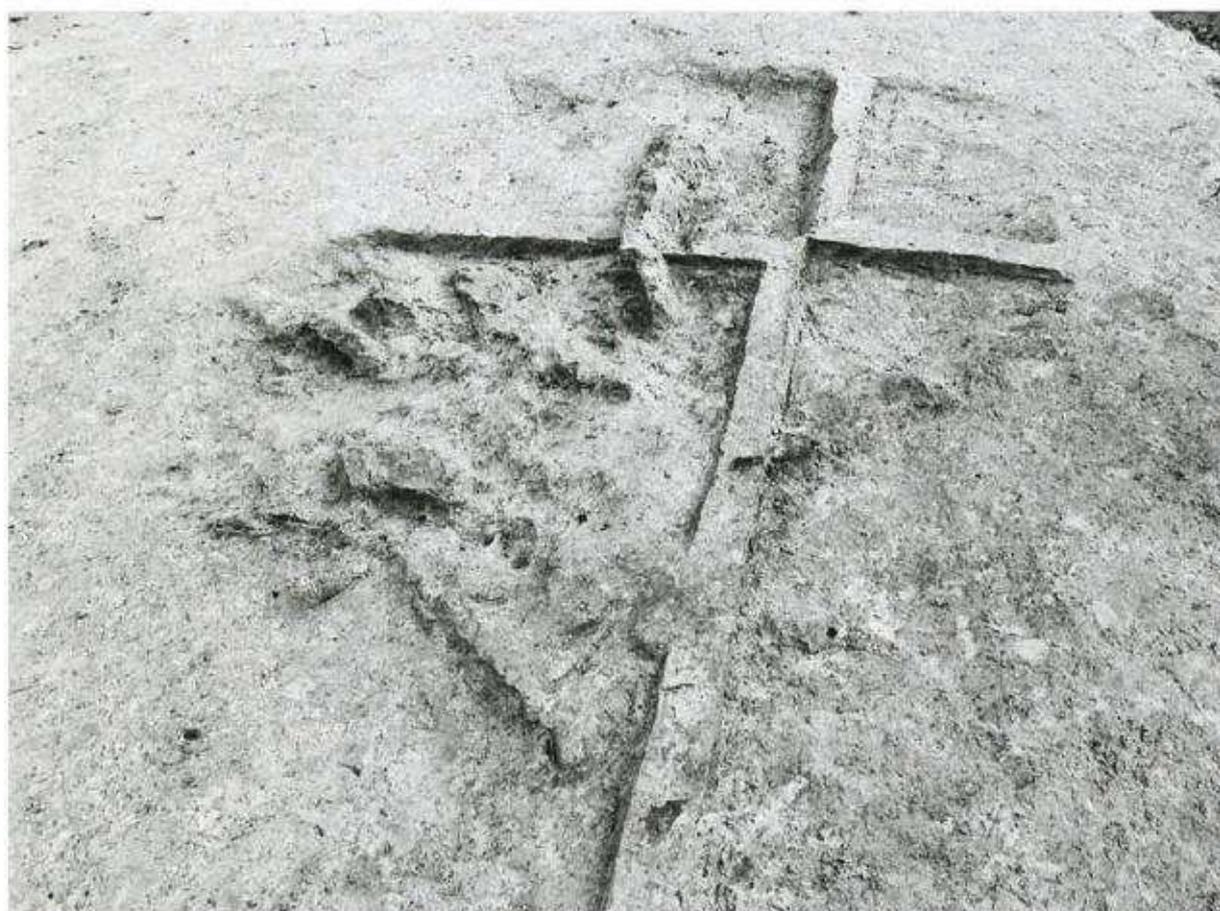
08-14b区全景（南東から）



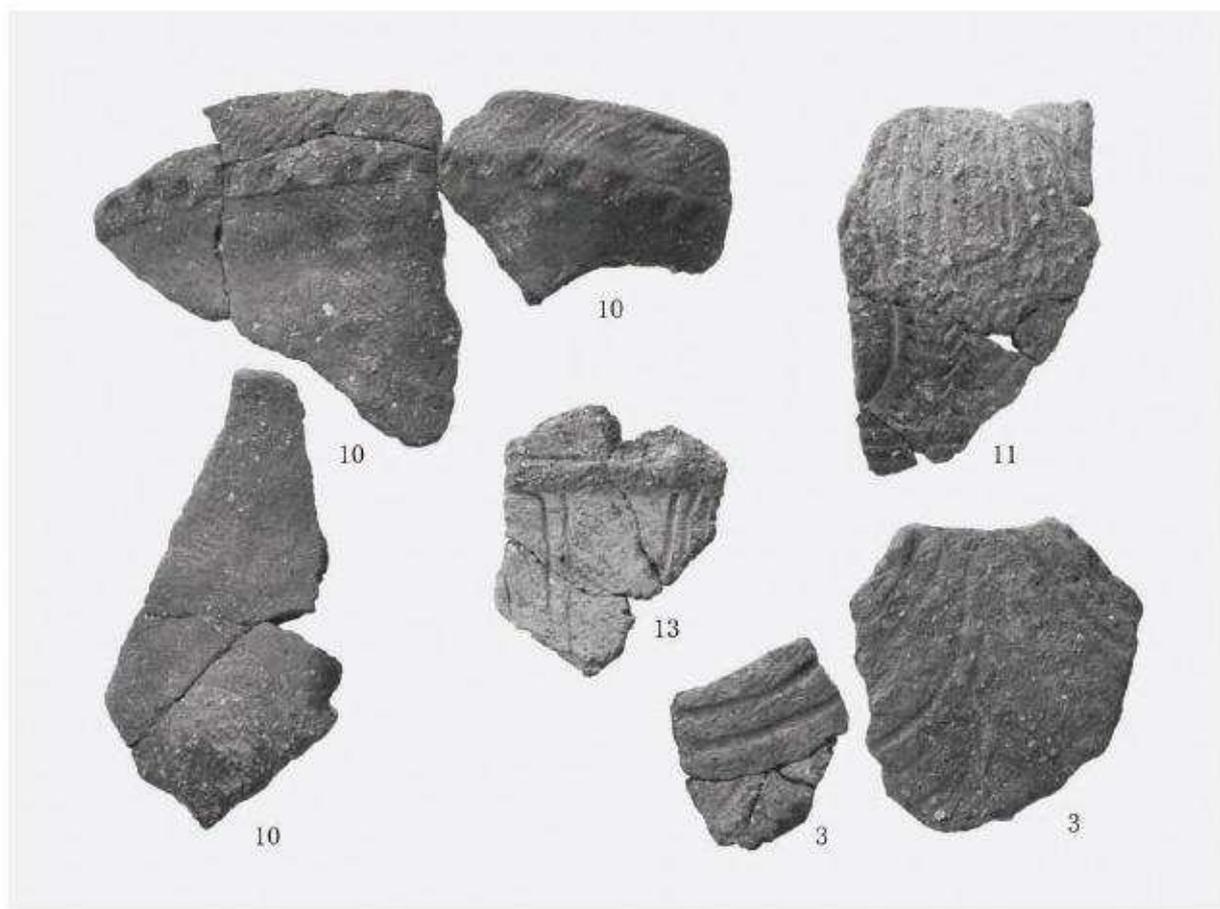
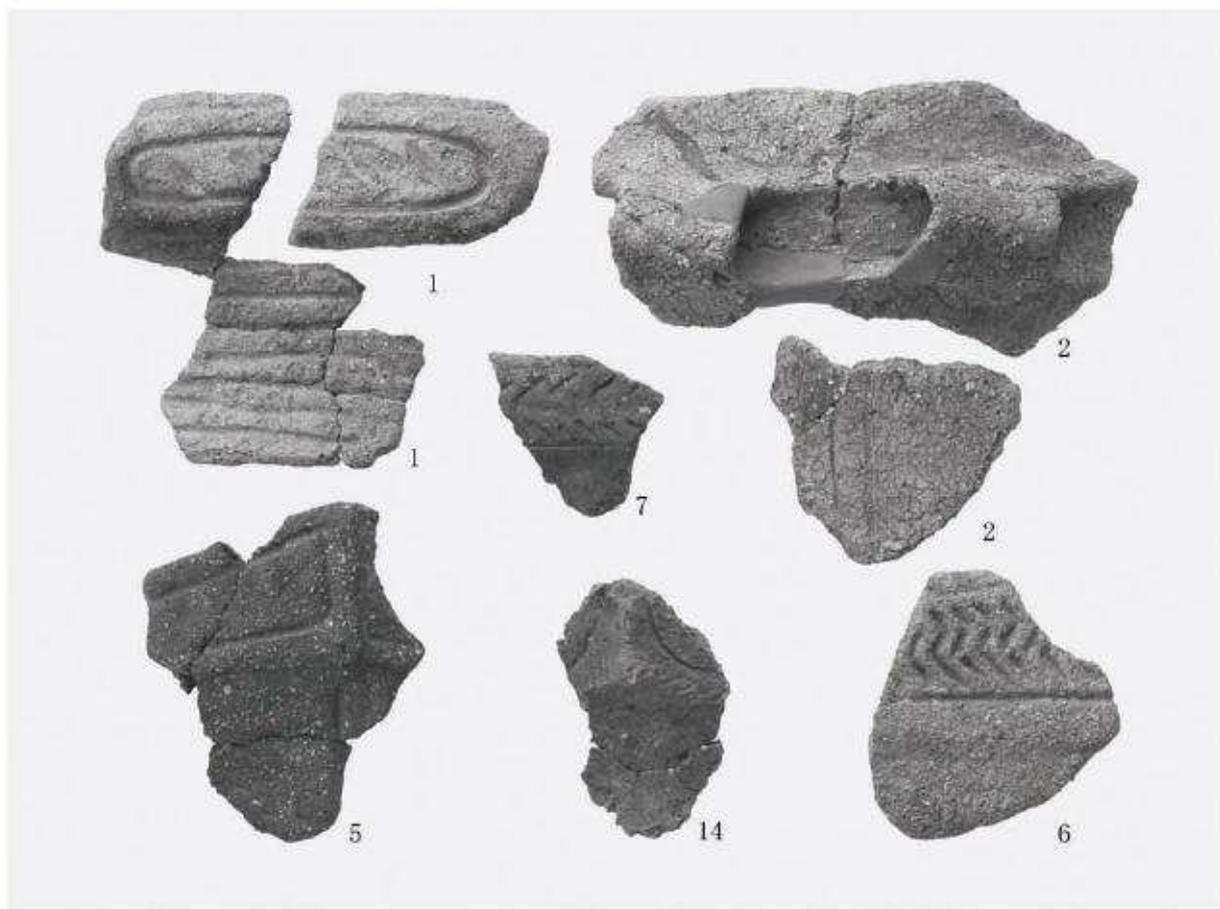
08-14b区全景（北西から）

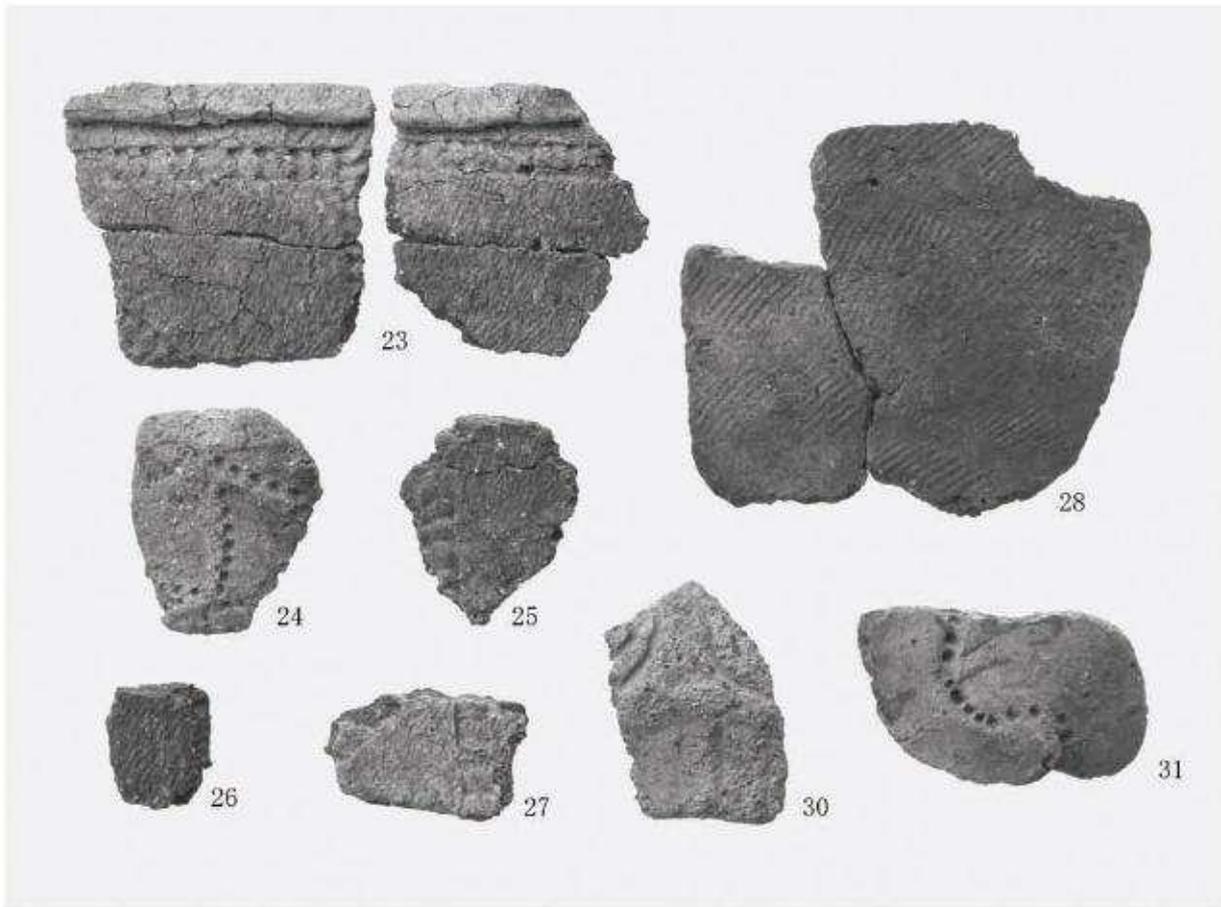


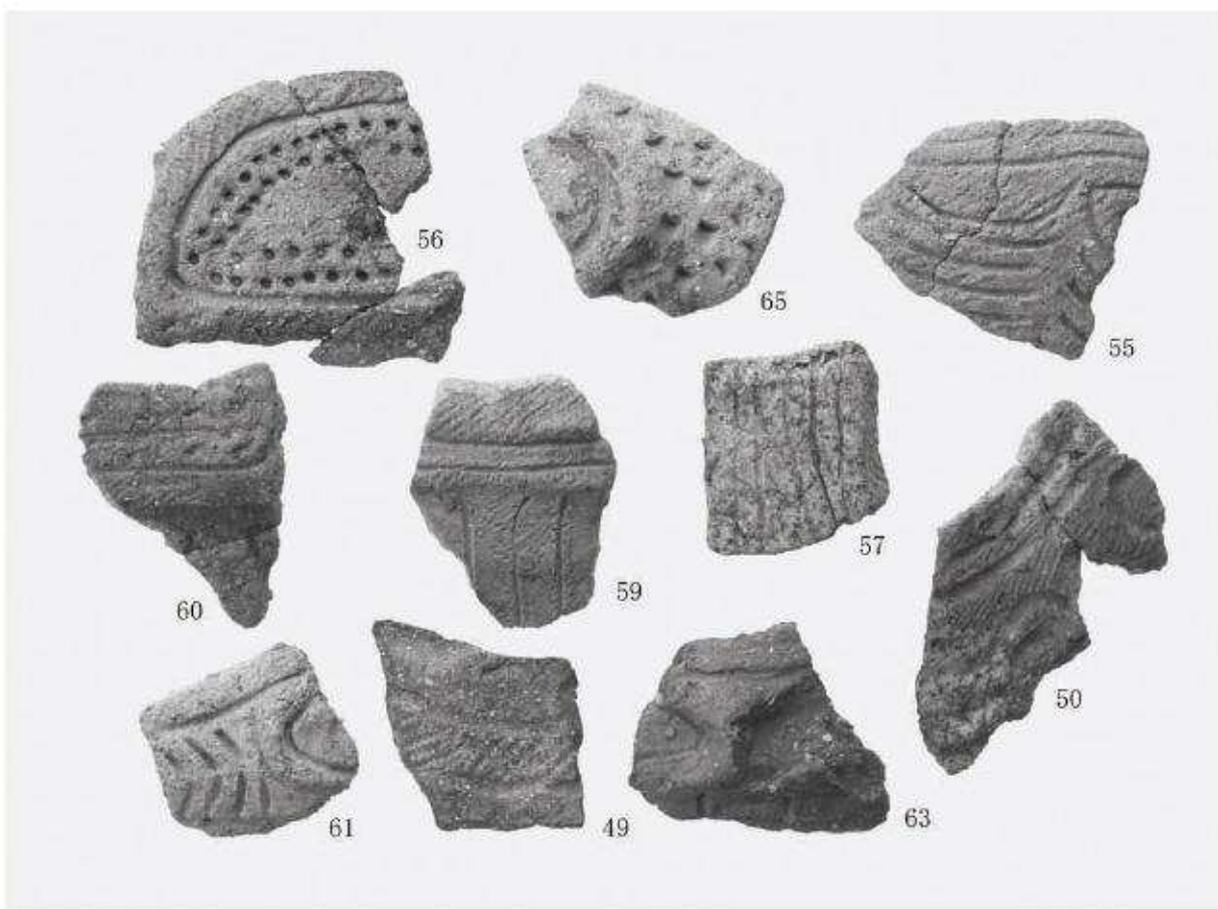
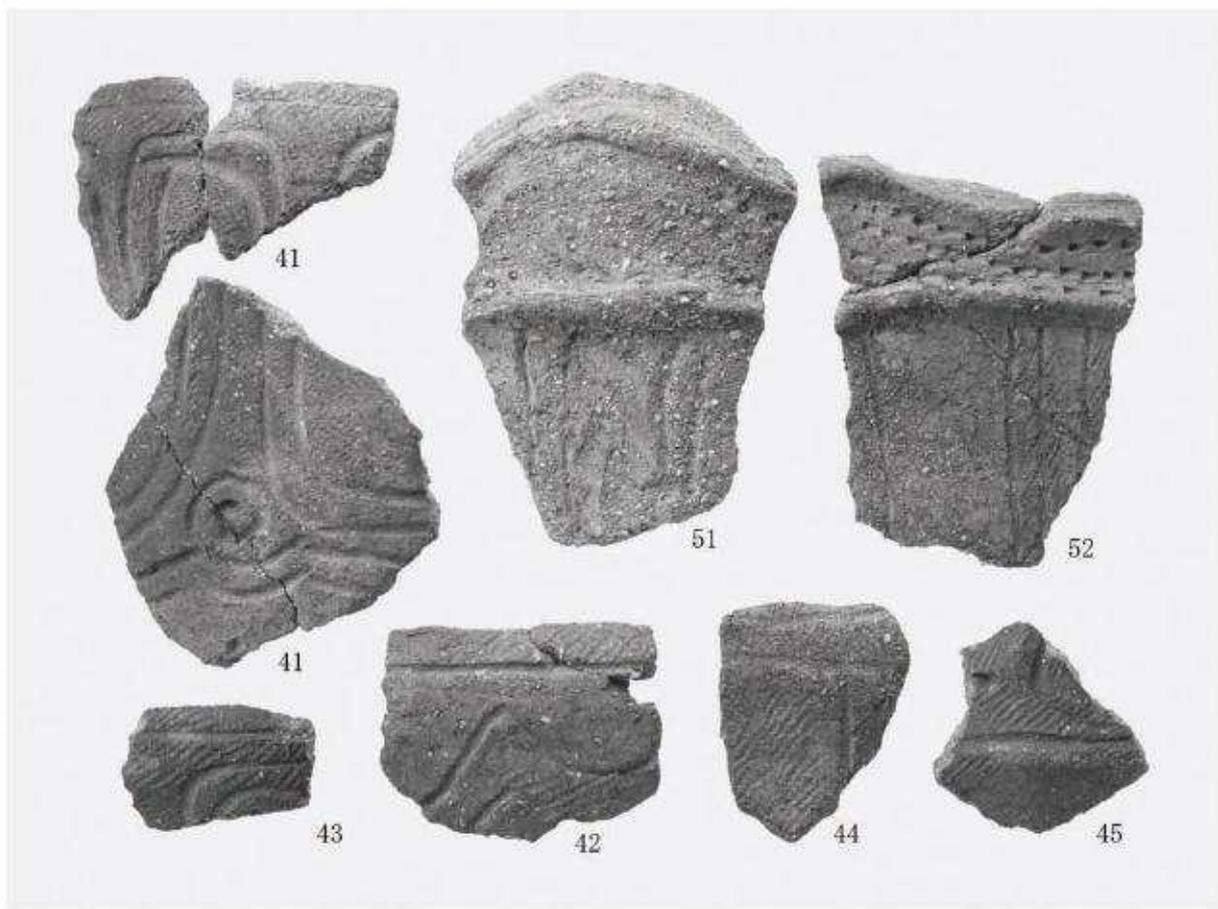
08-14b区21NR (南東から)

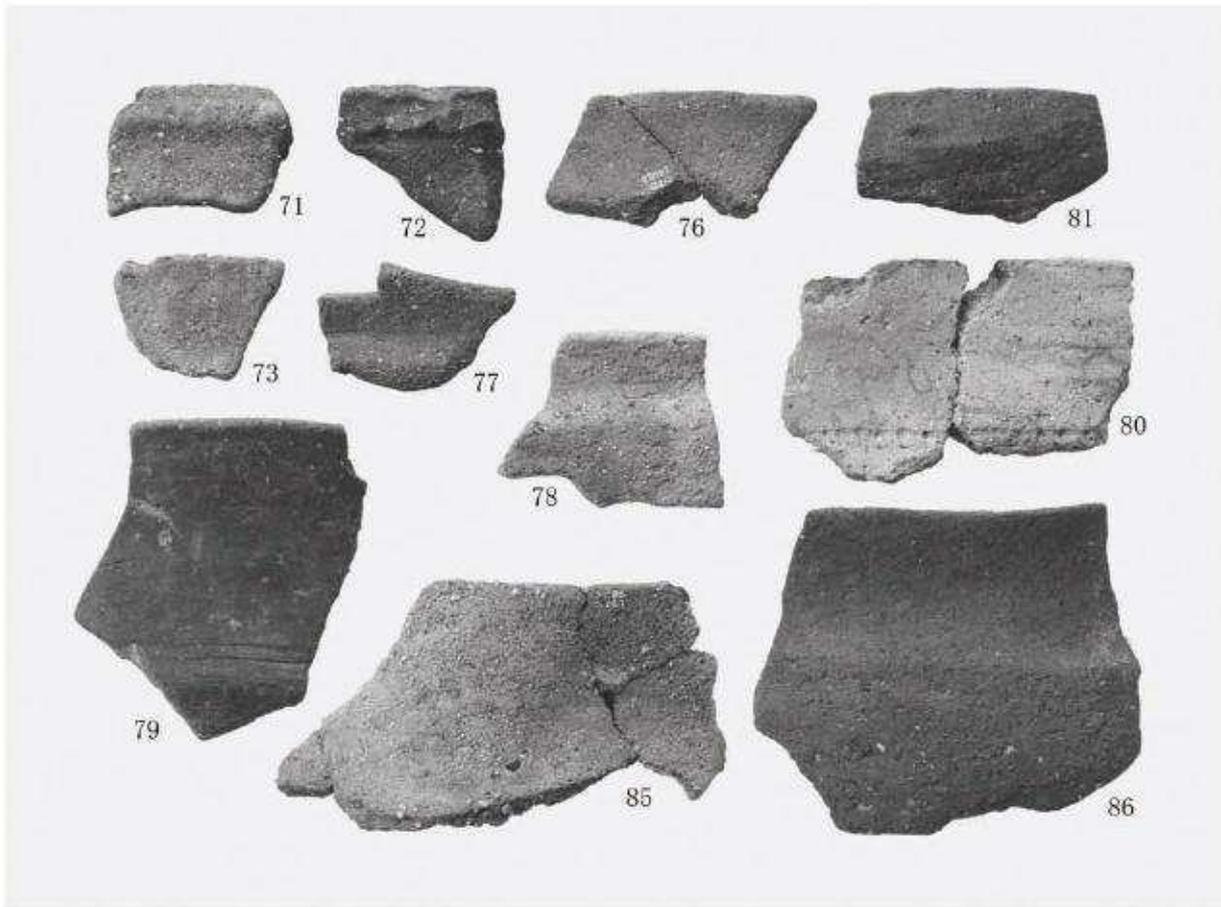


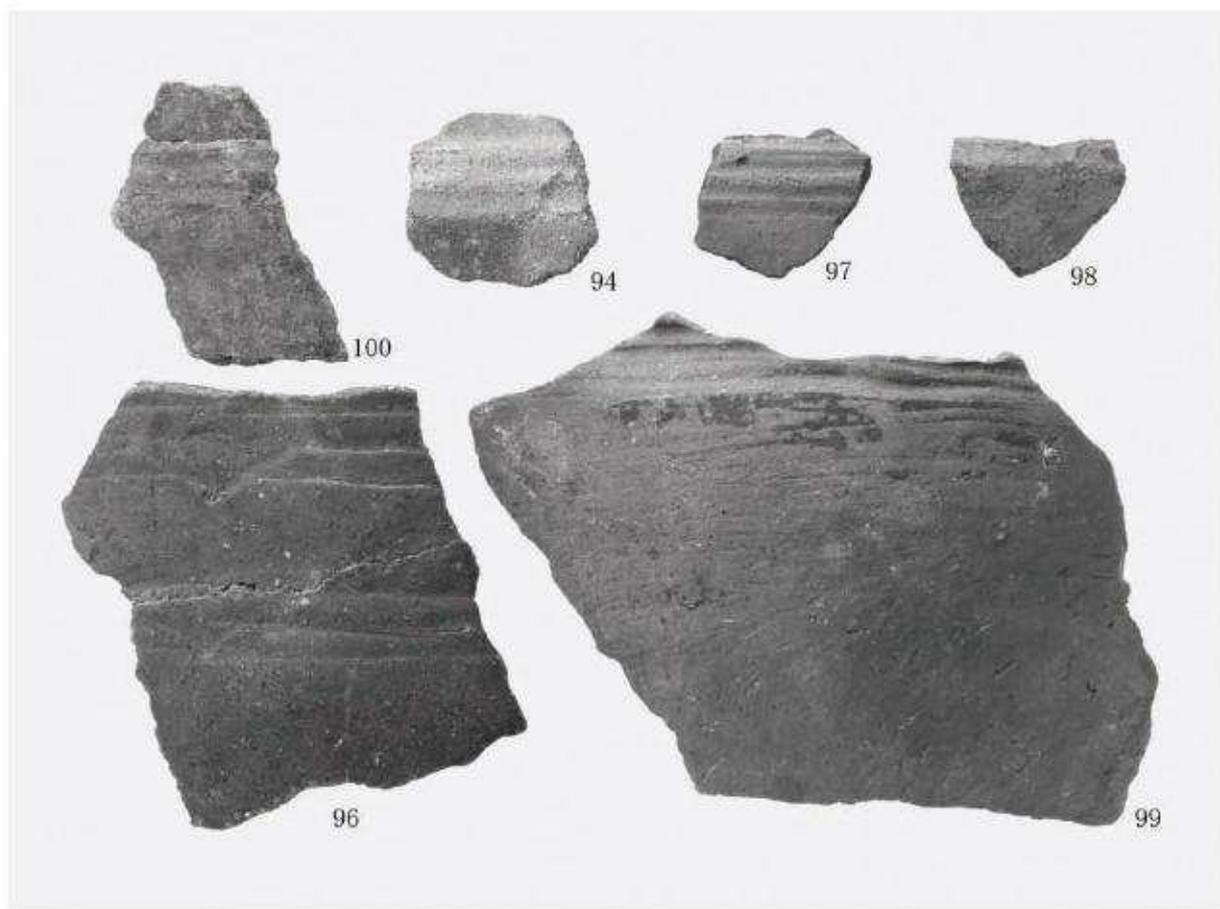
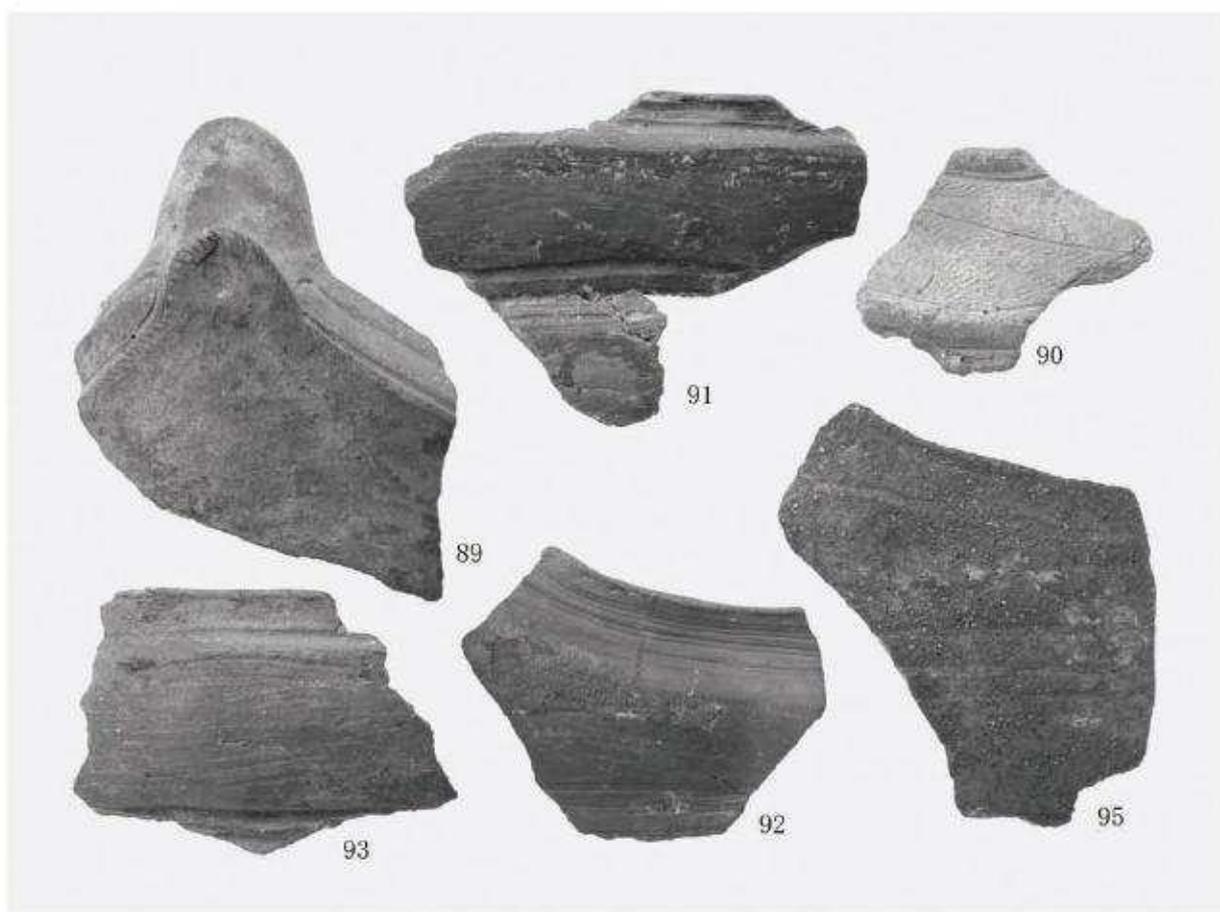
08-14b区41SX (北西から)

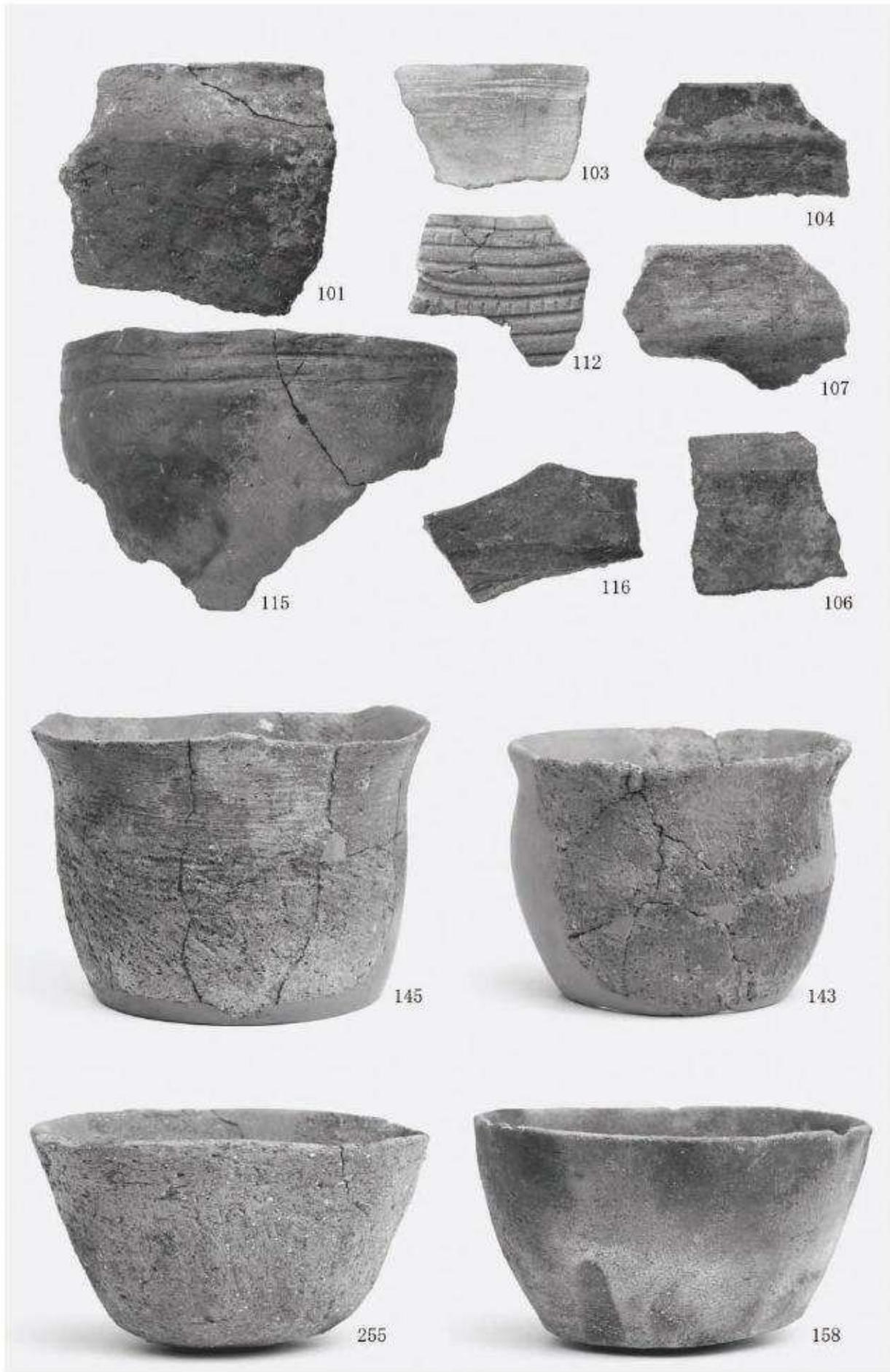


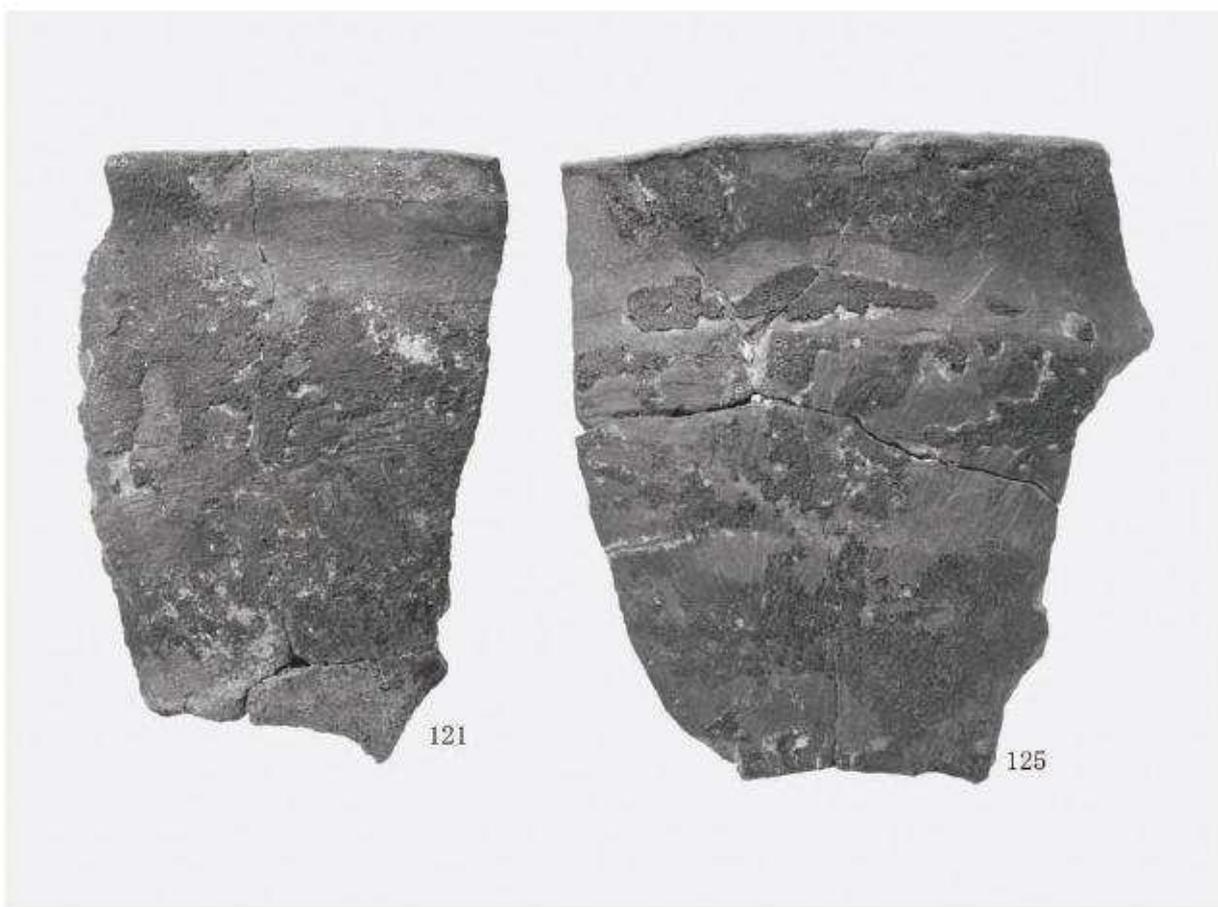
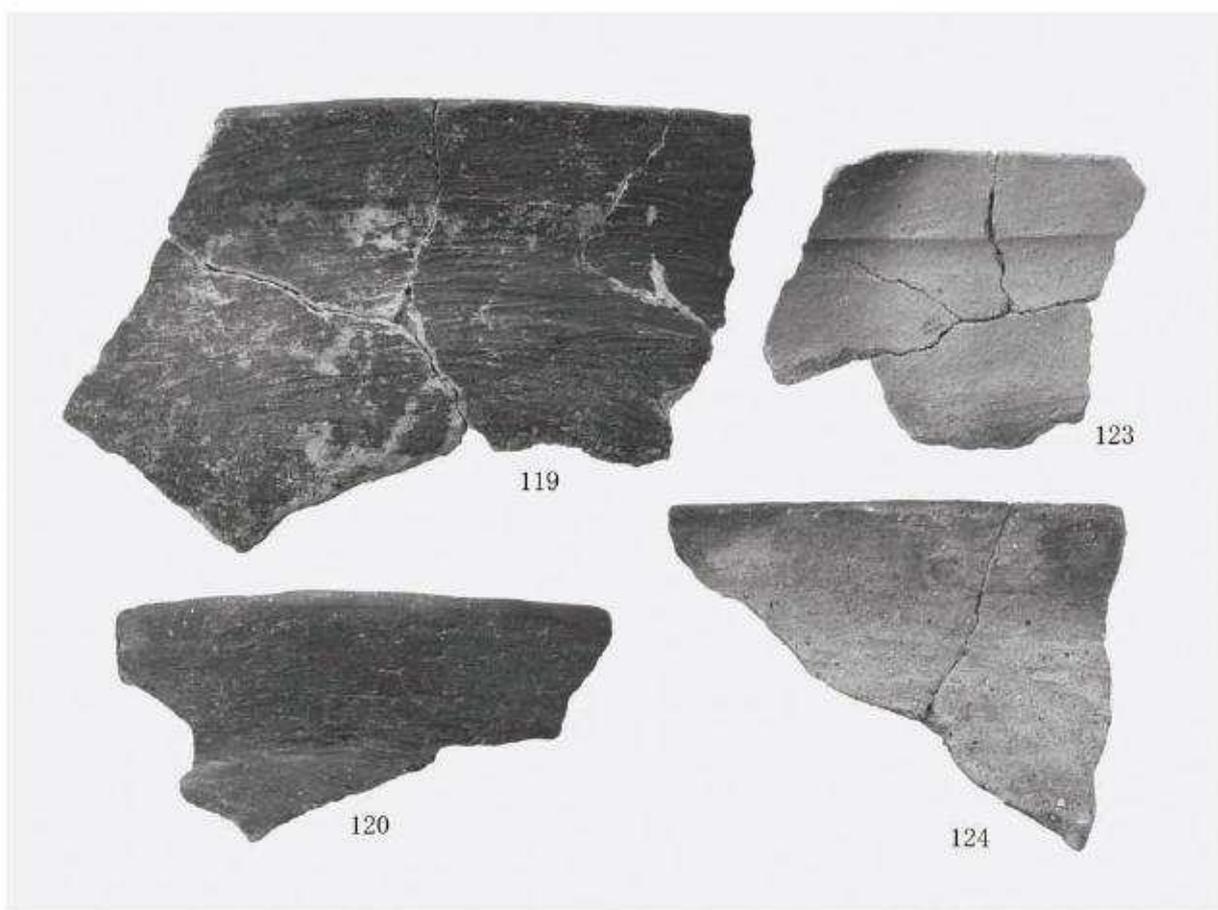


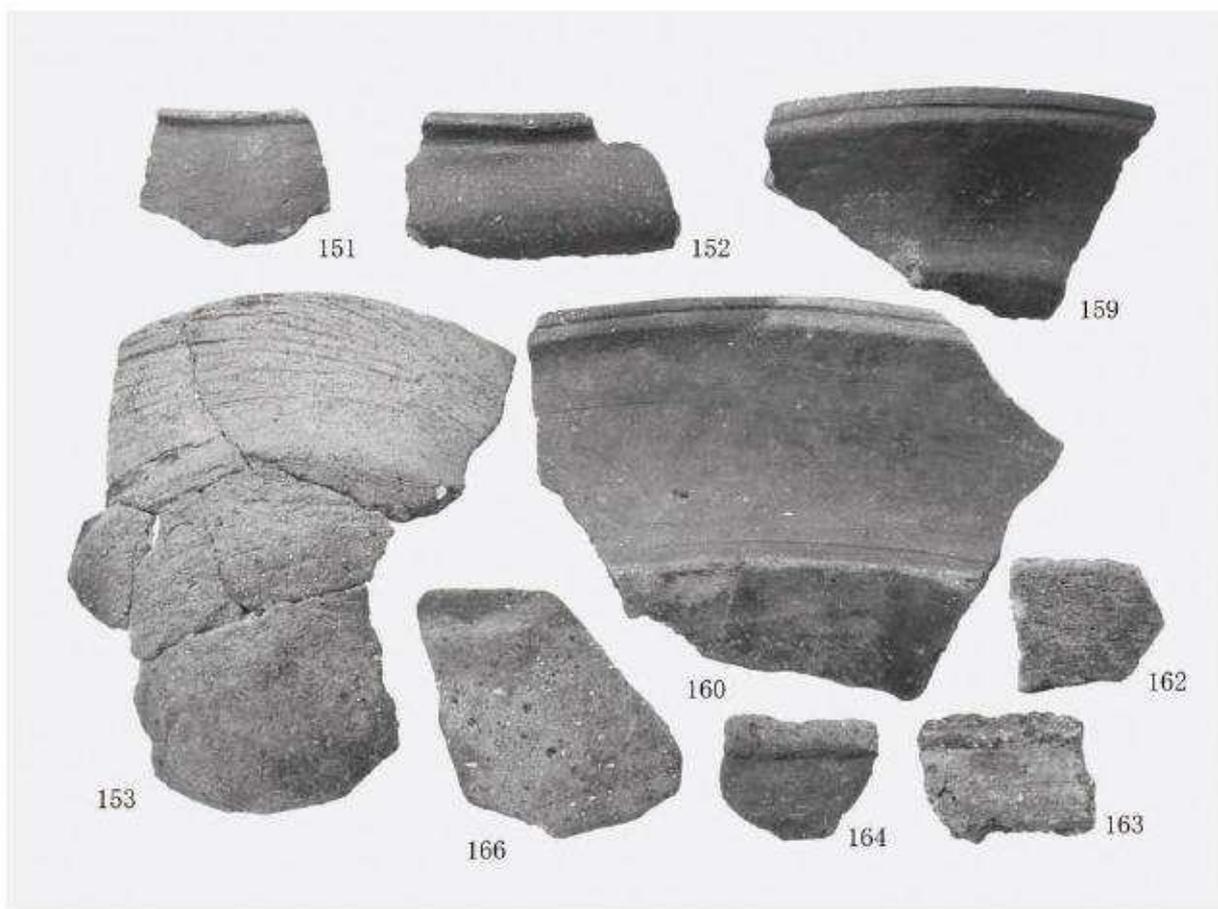
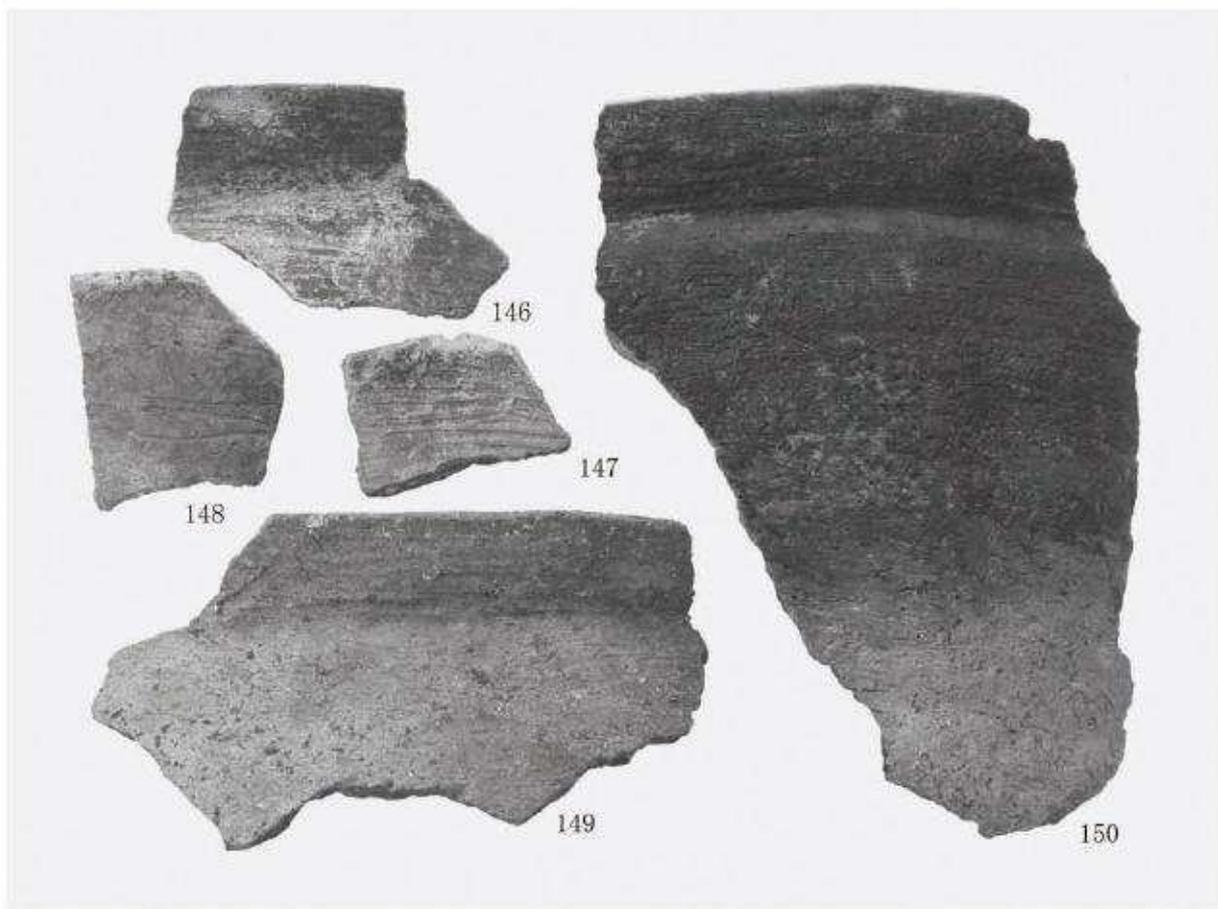


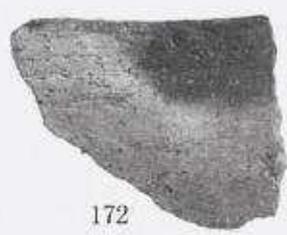


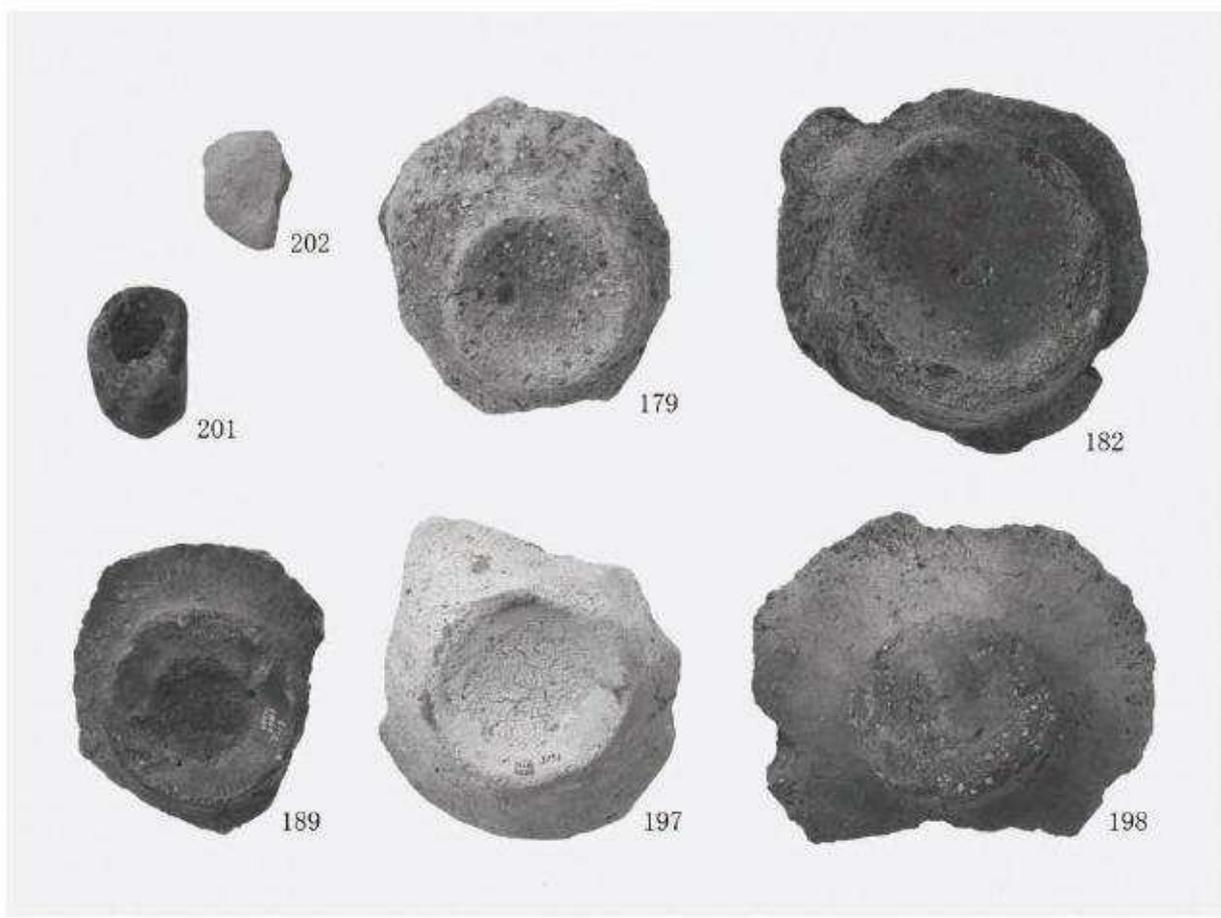
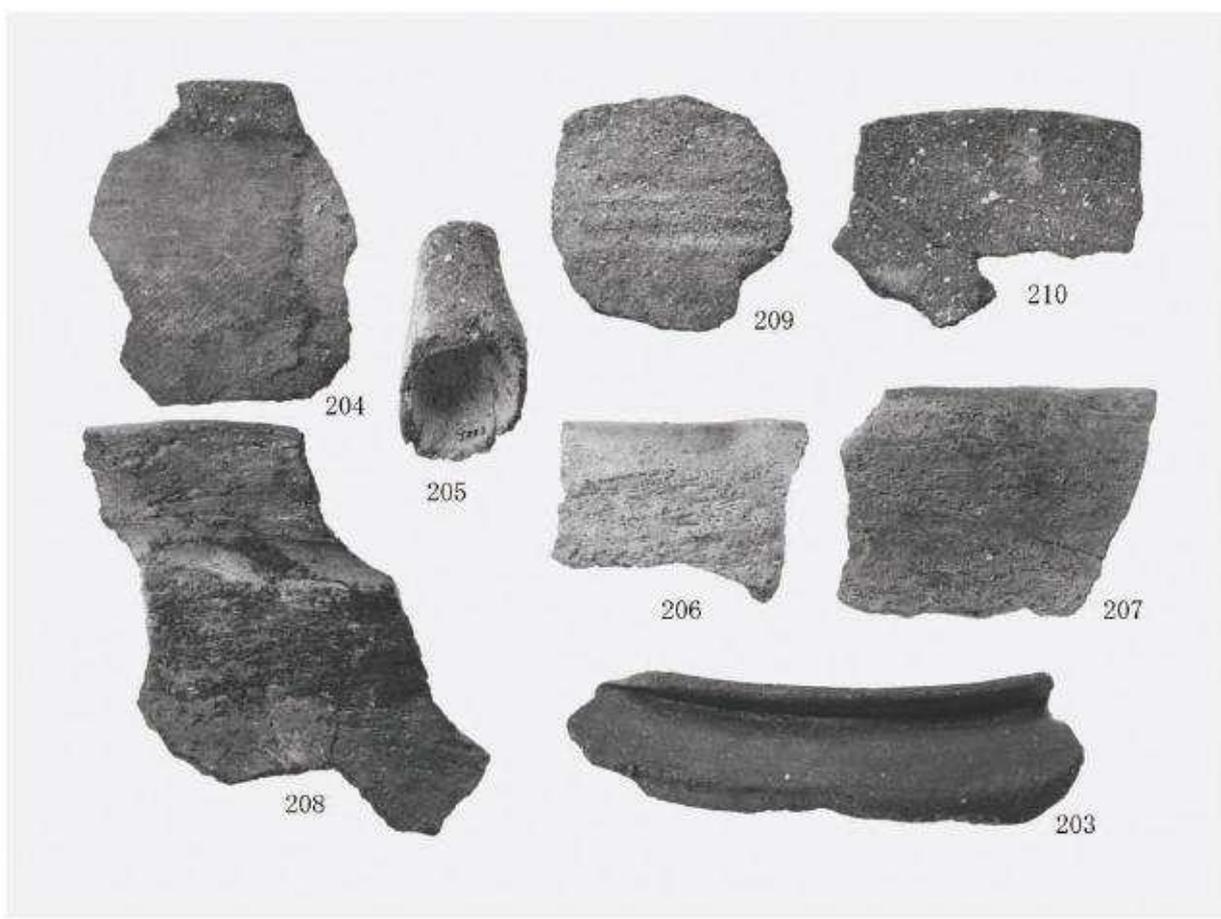


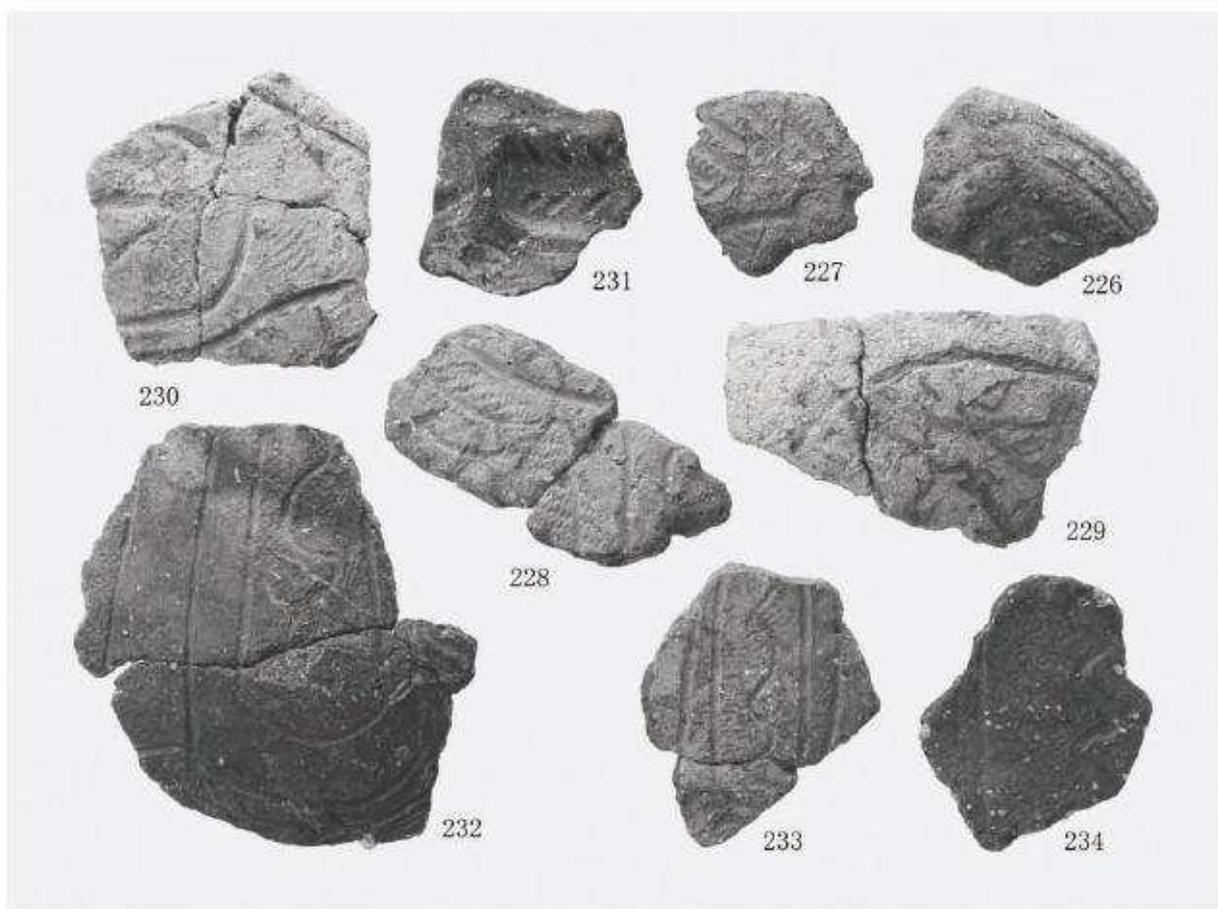
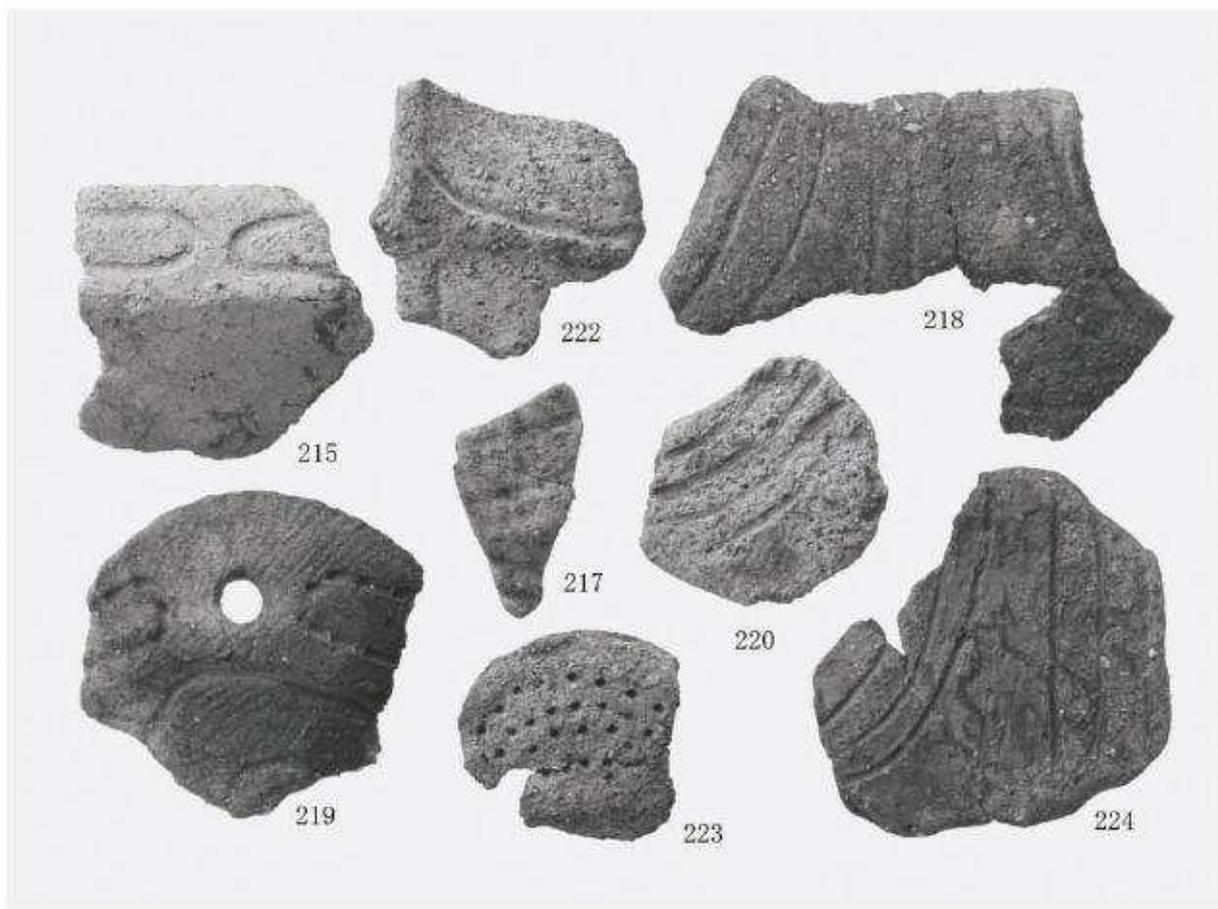


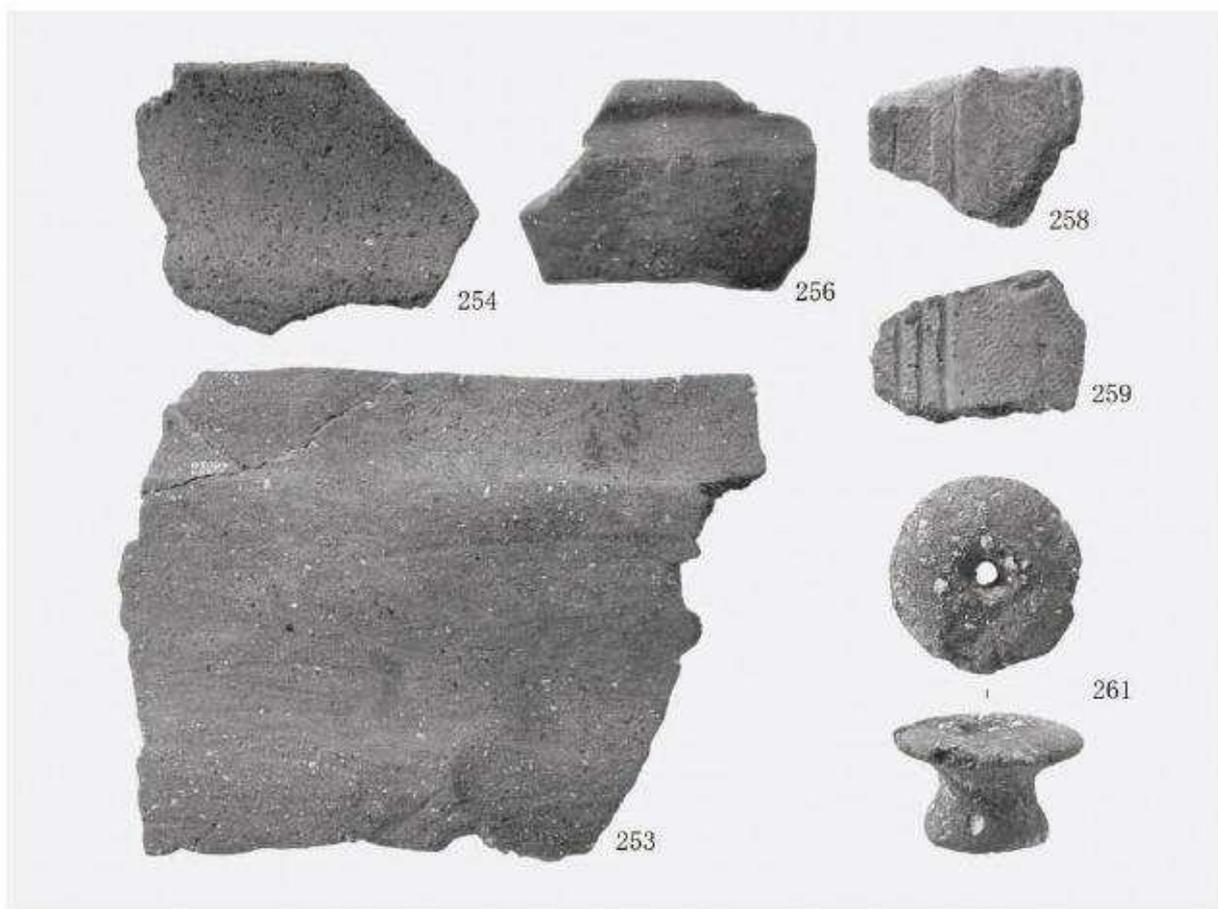
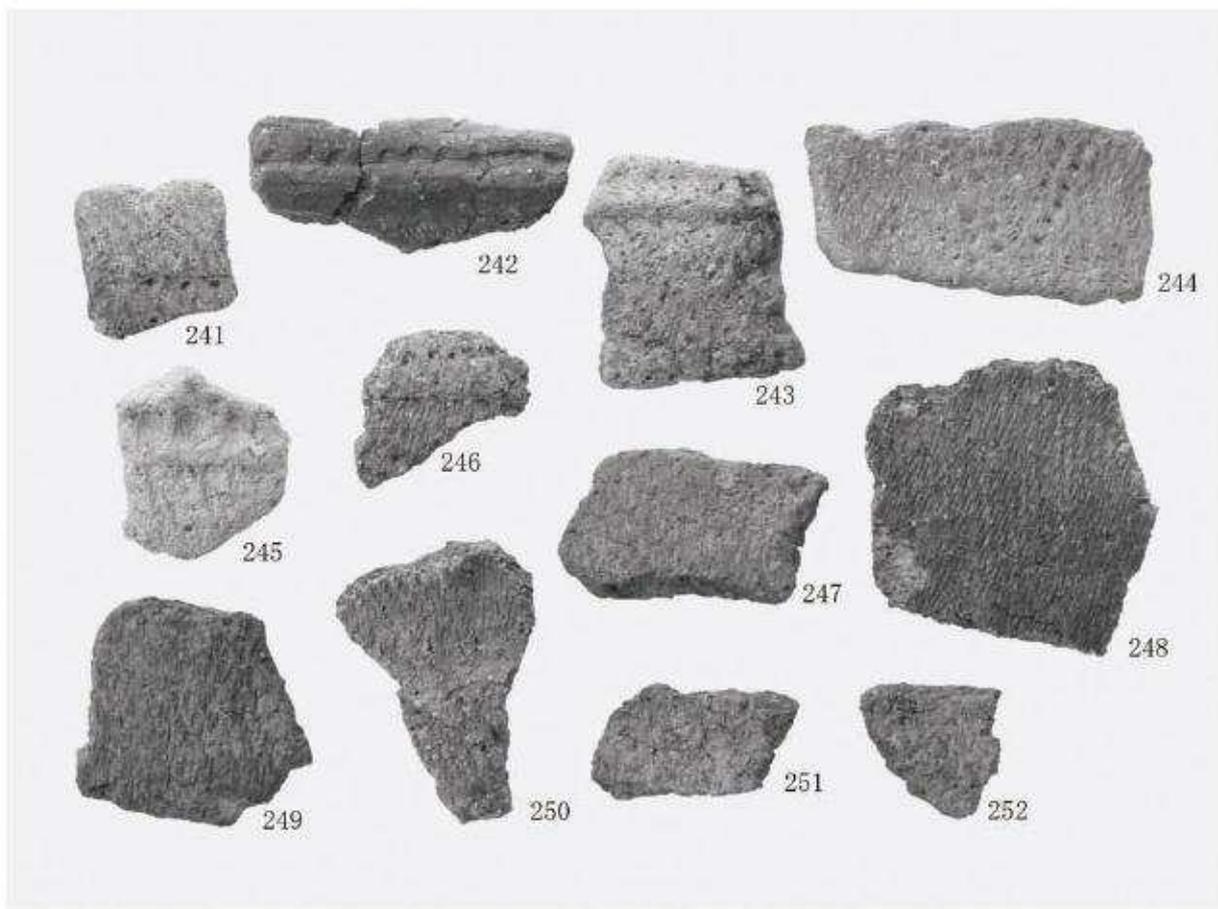




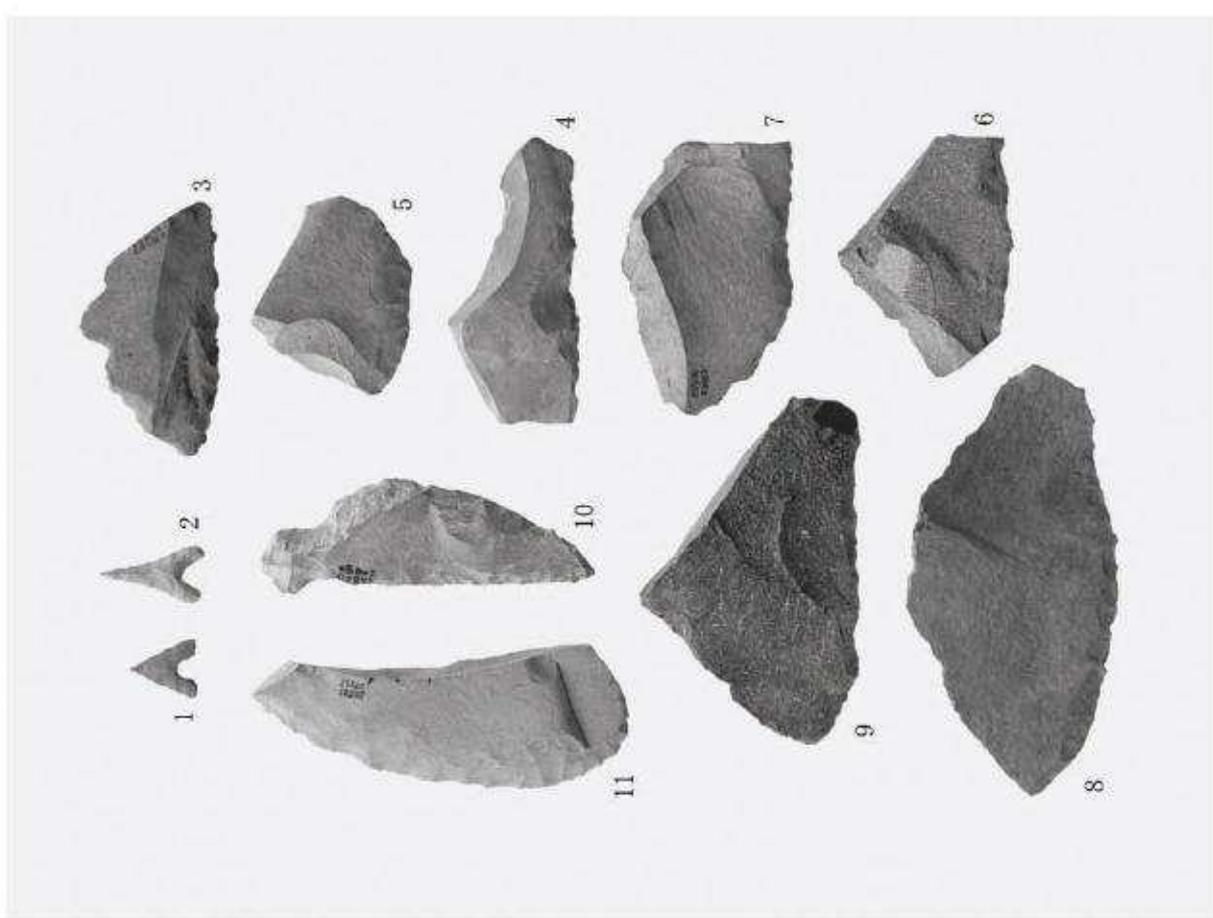
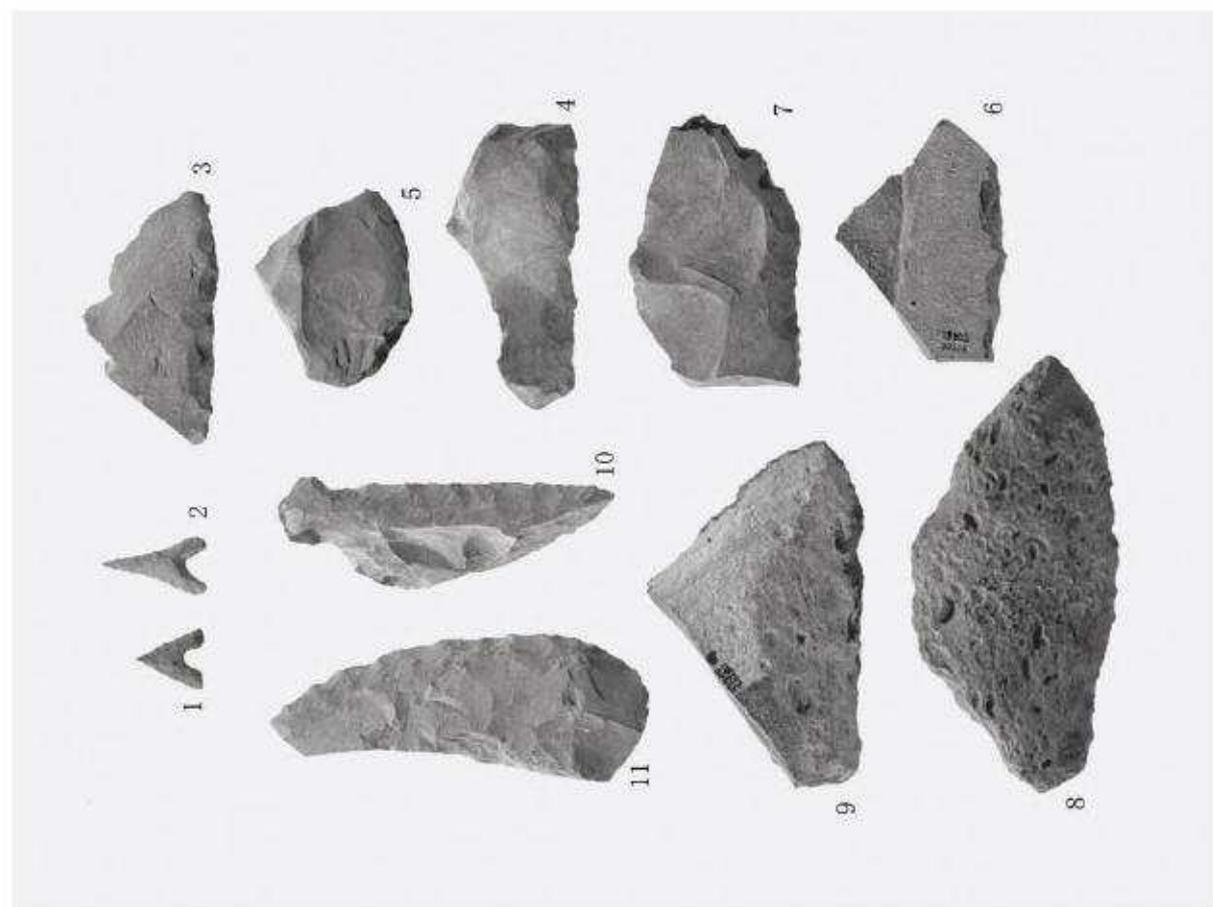




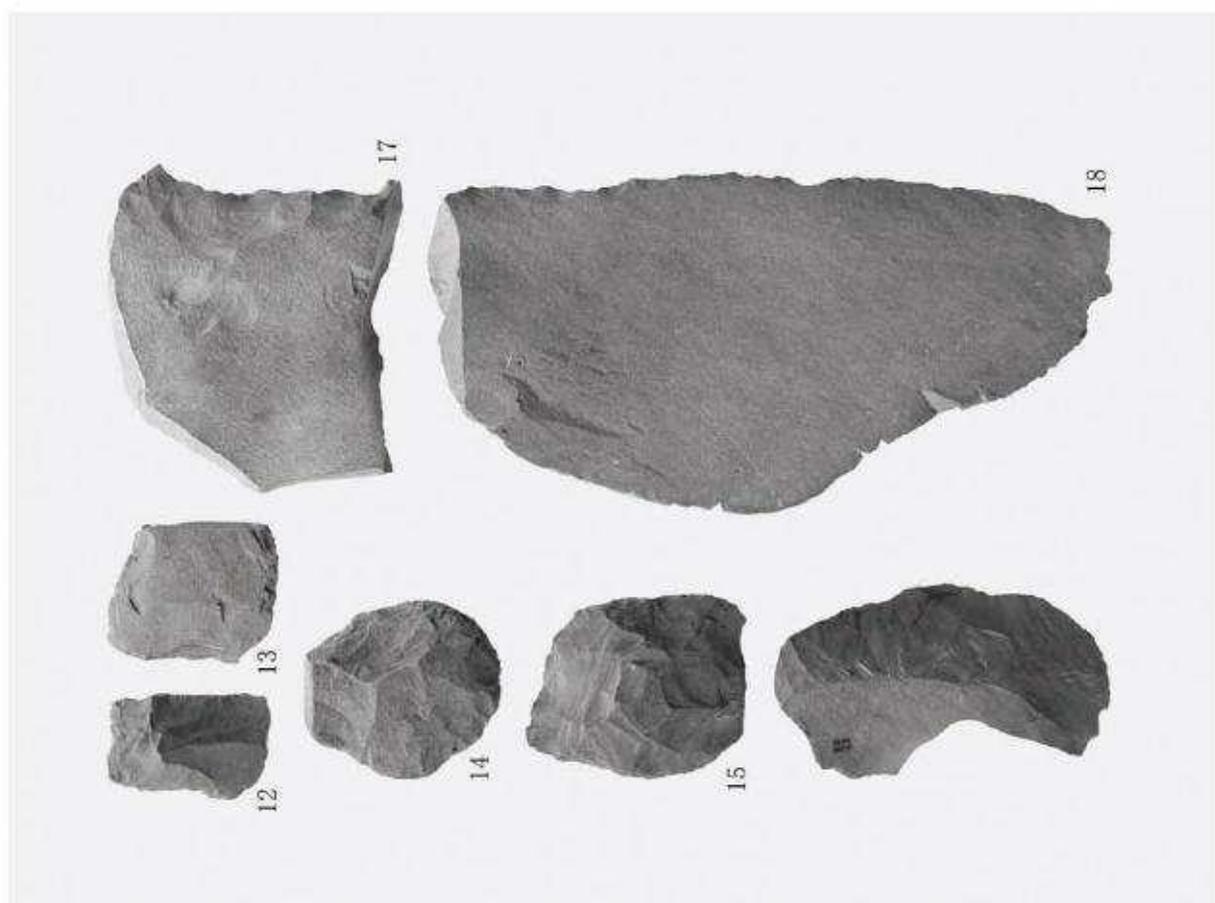
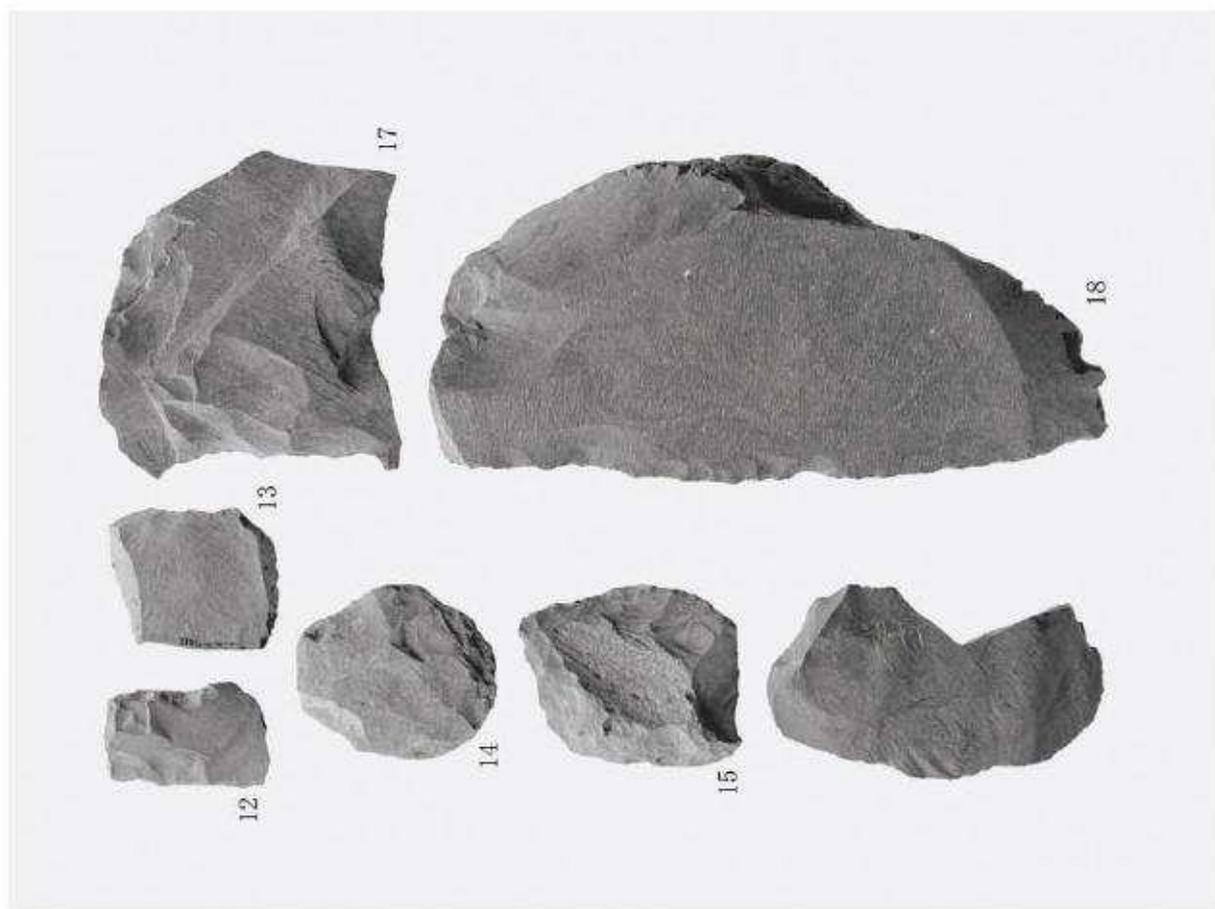


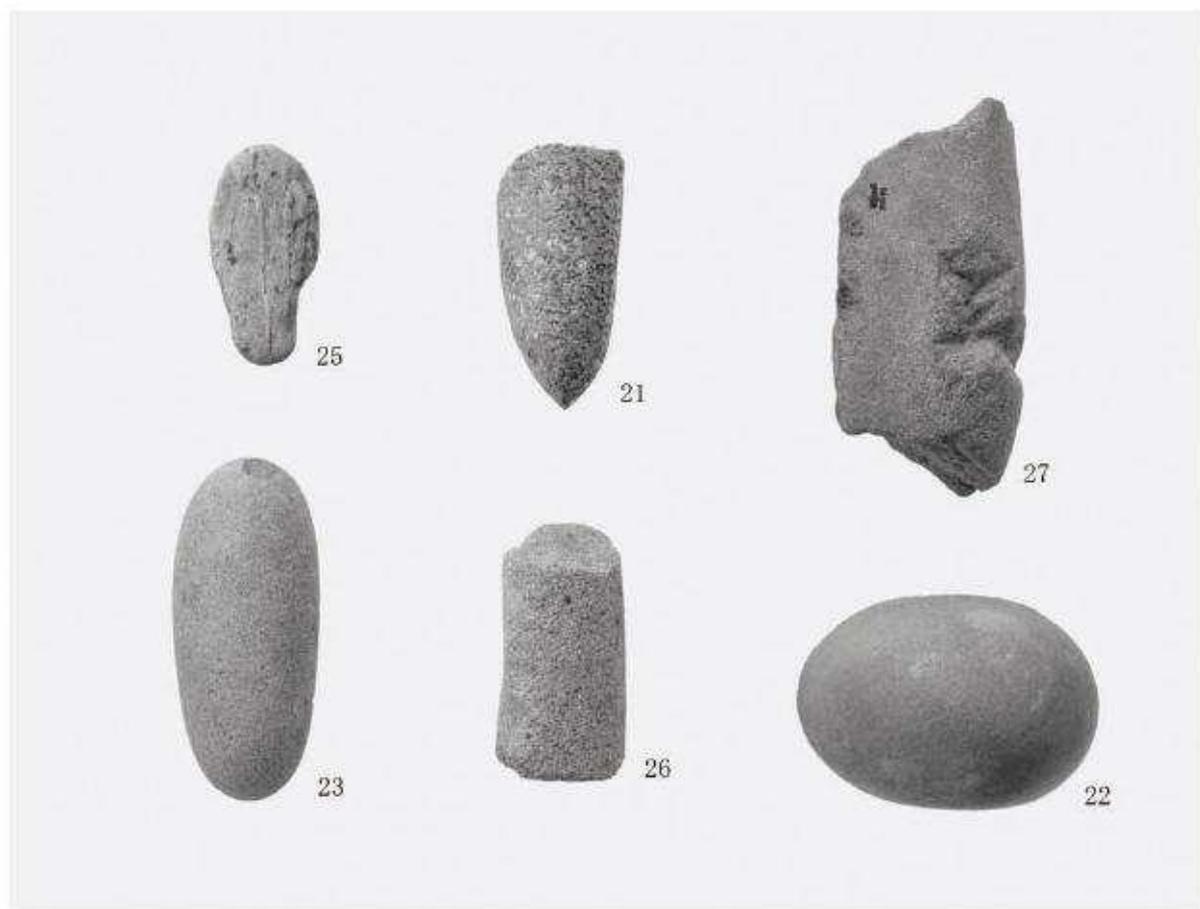
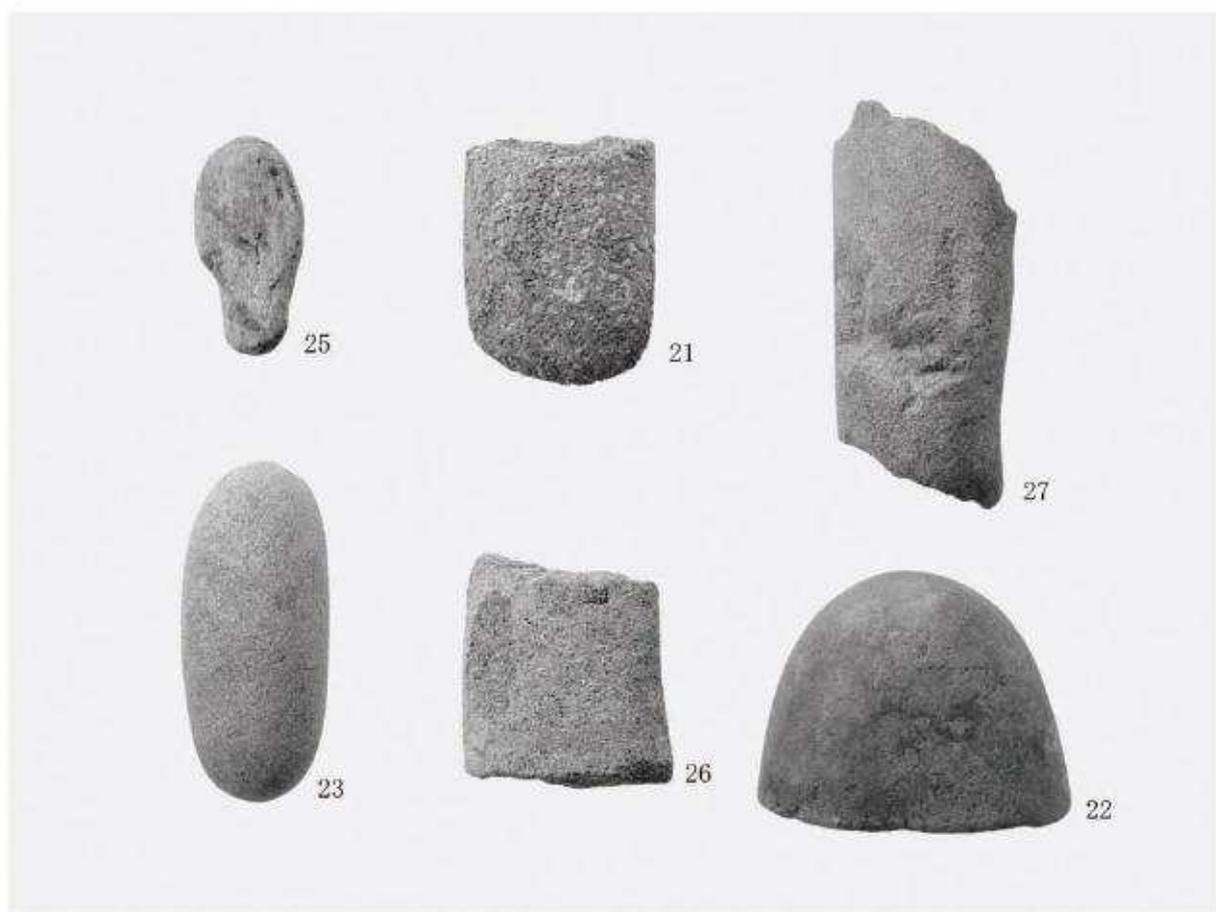


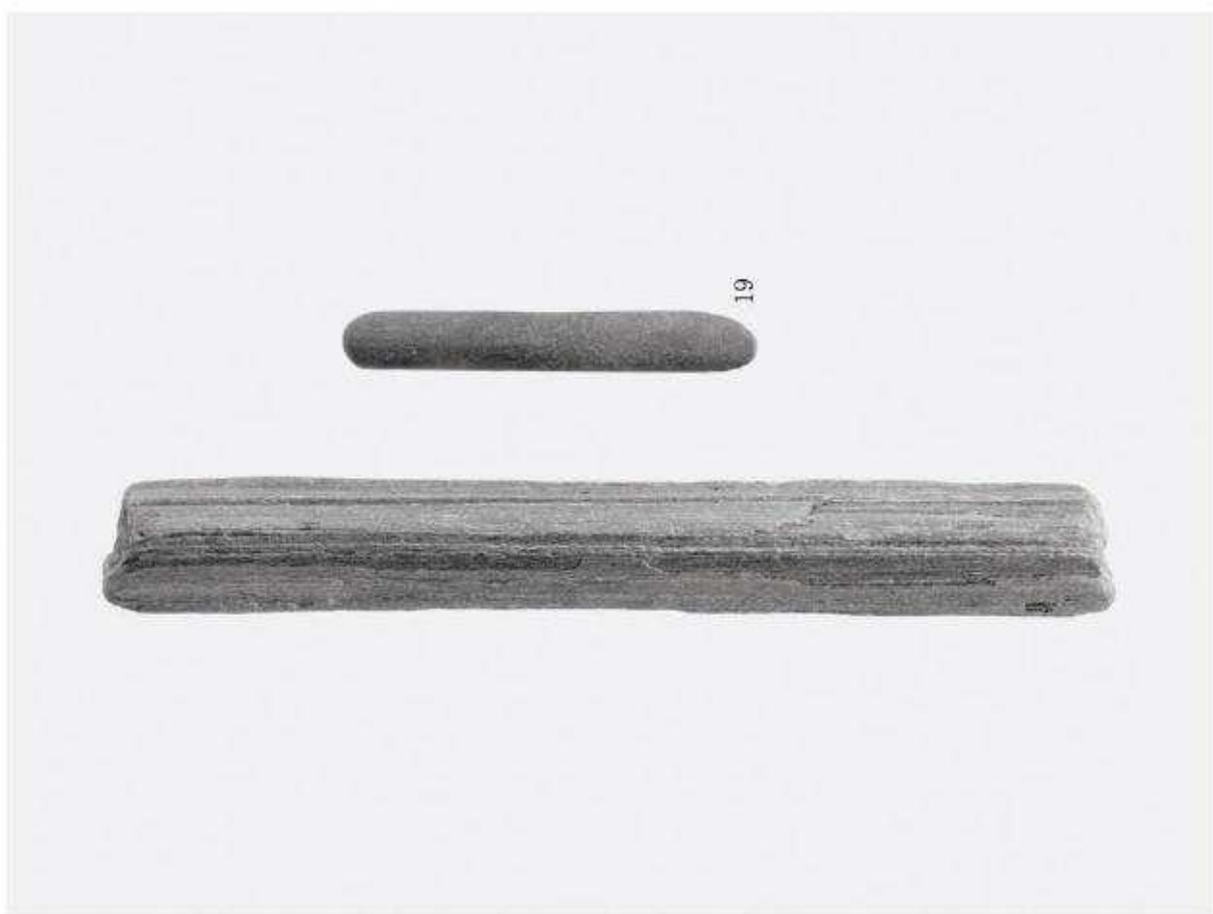


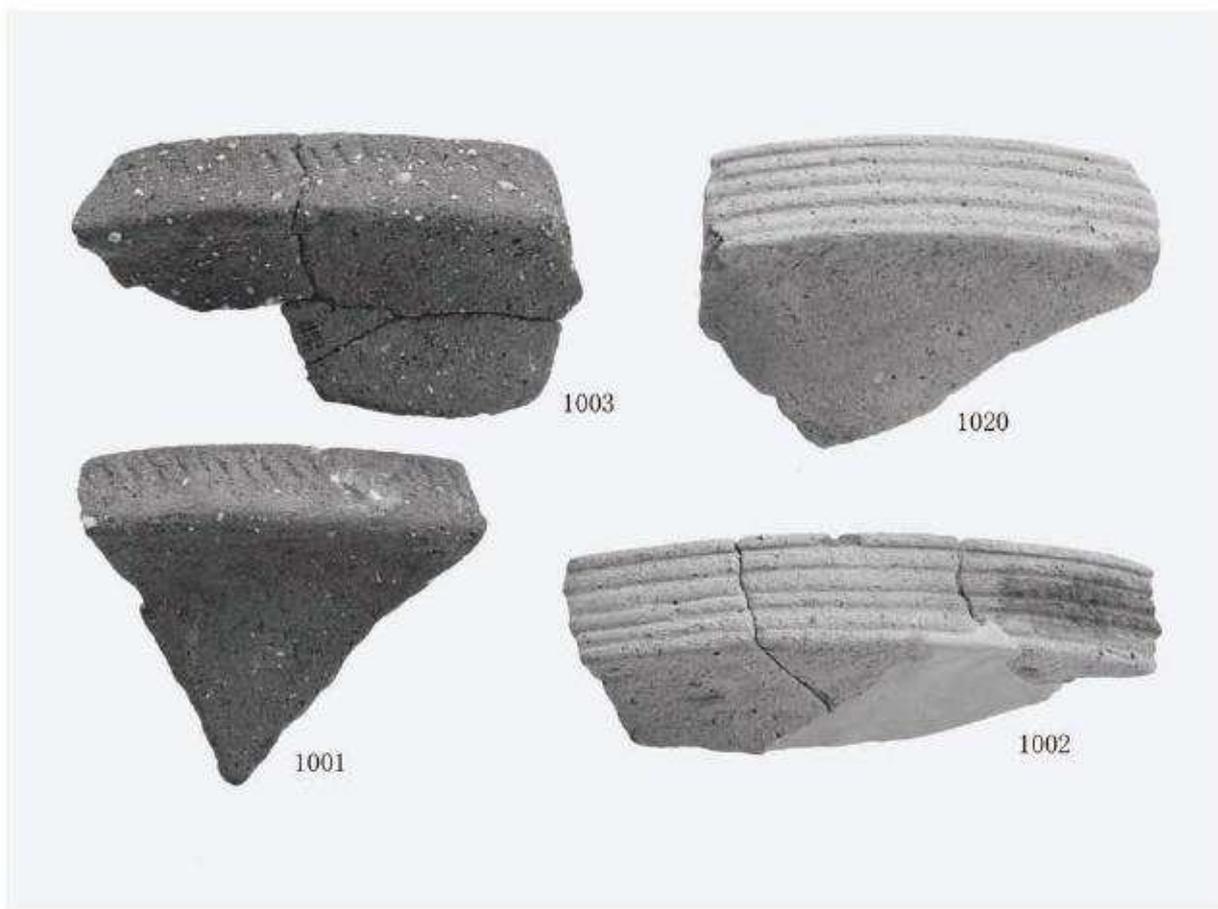
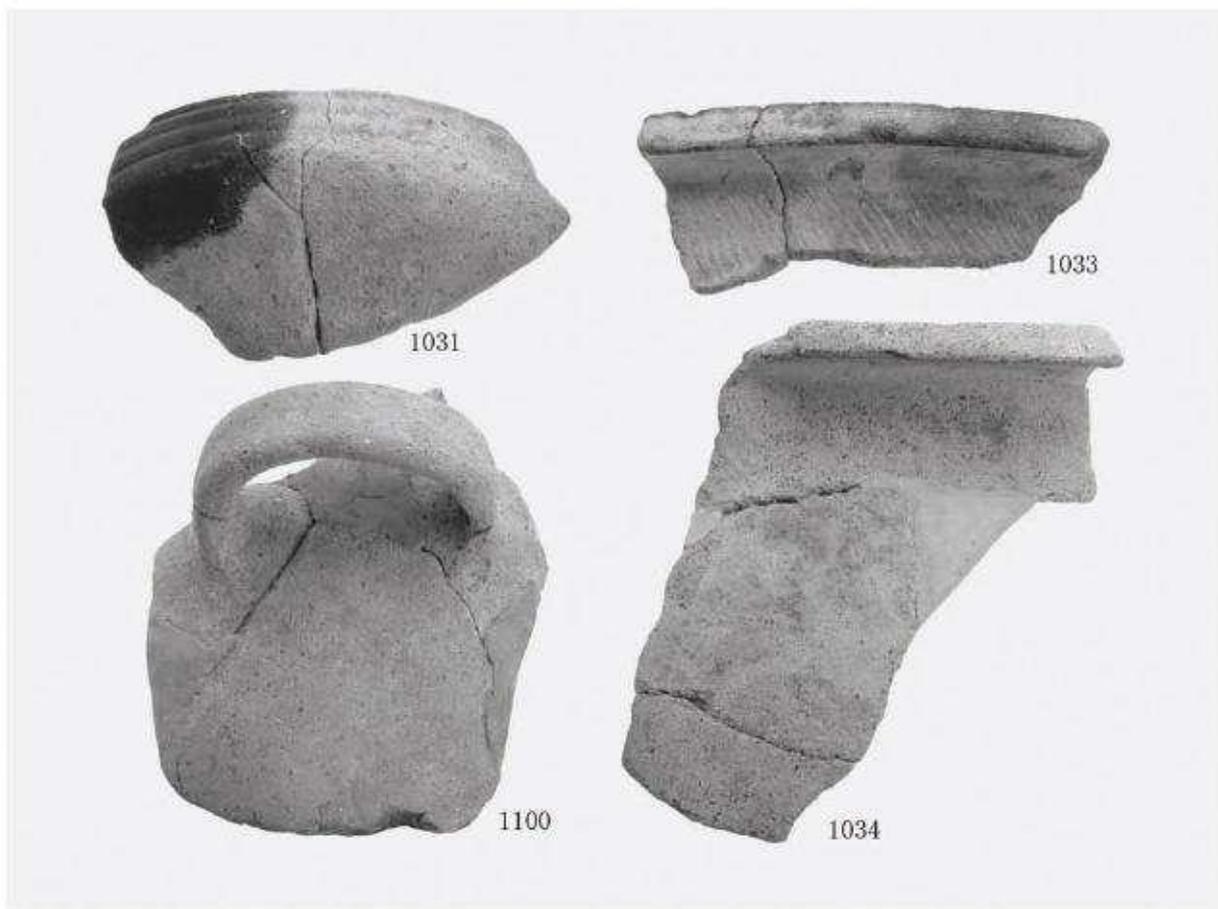


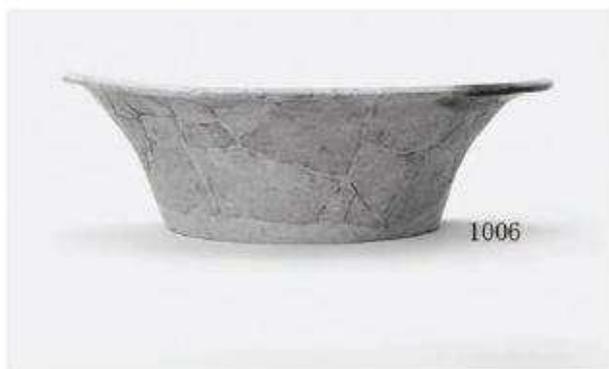
图版 50
石器 01

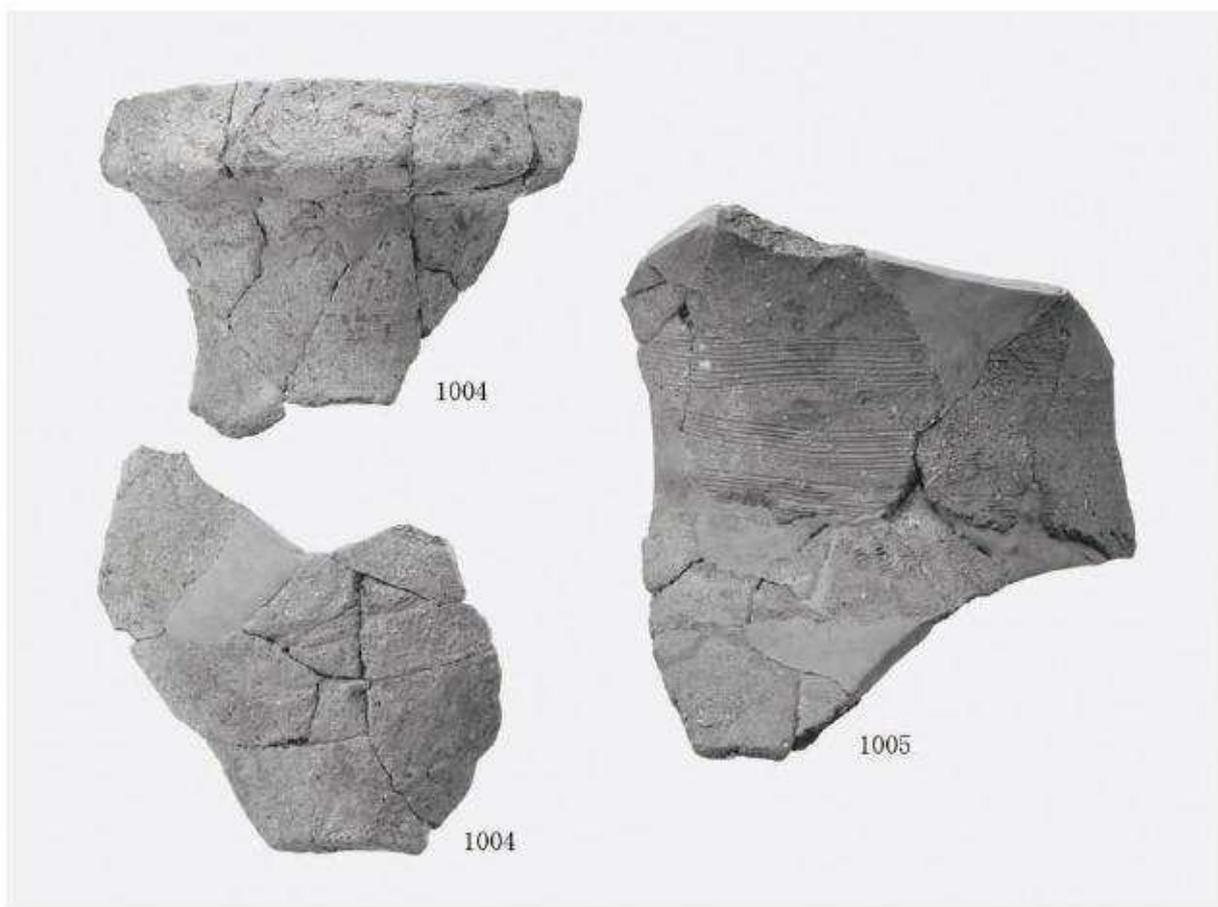
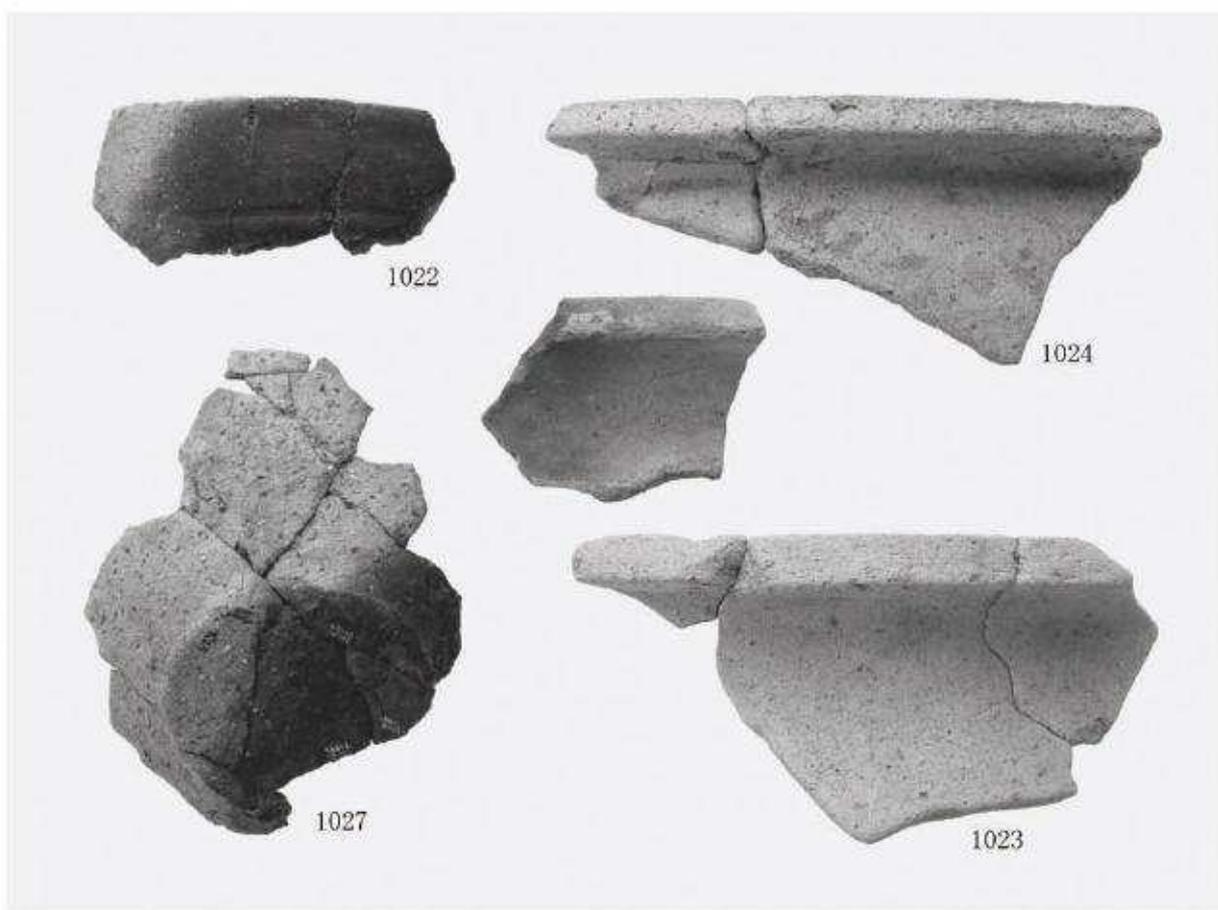


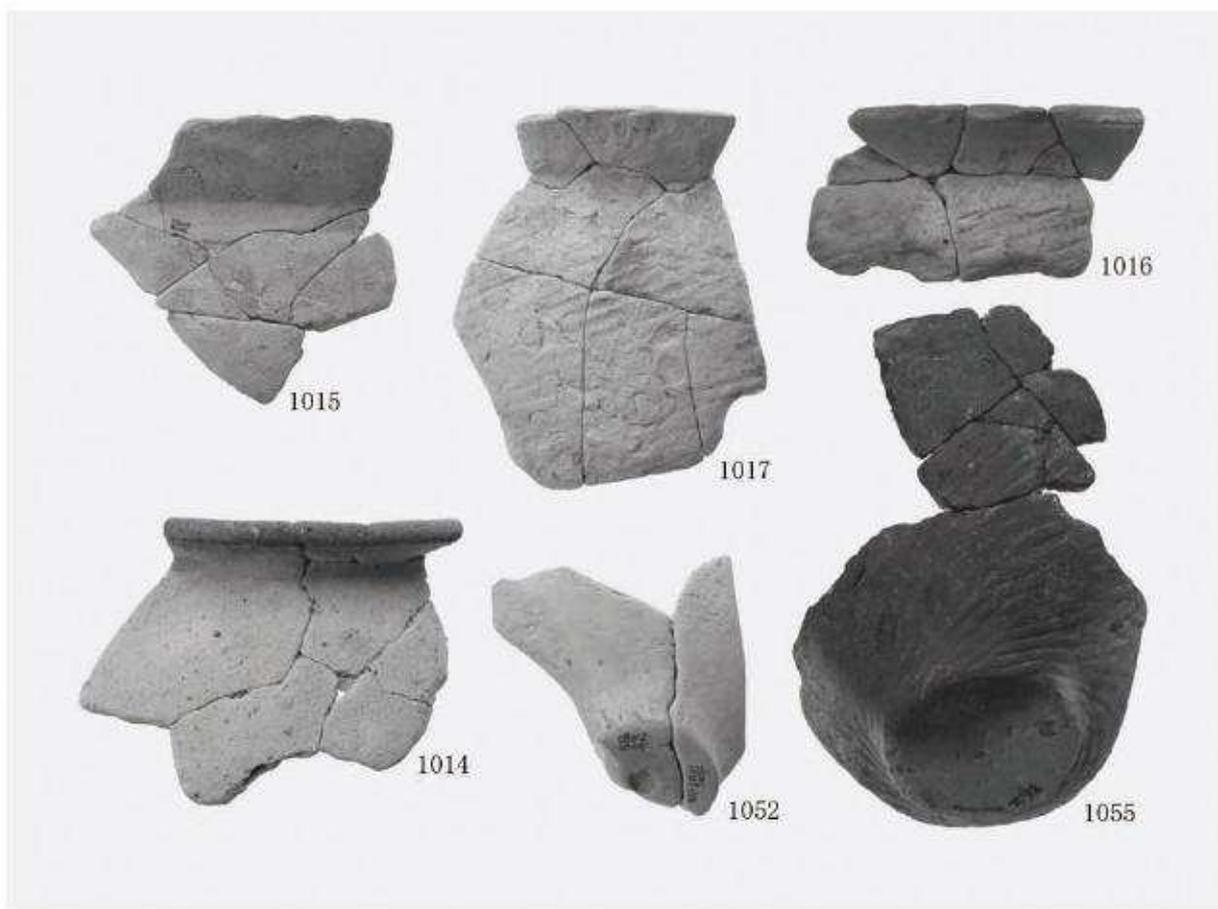
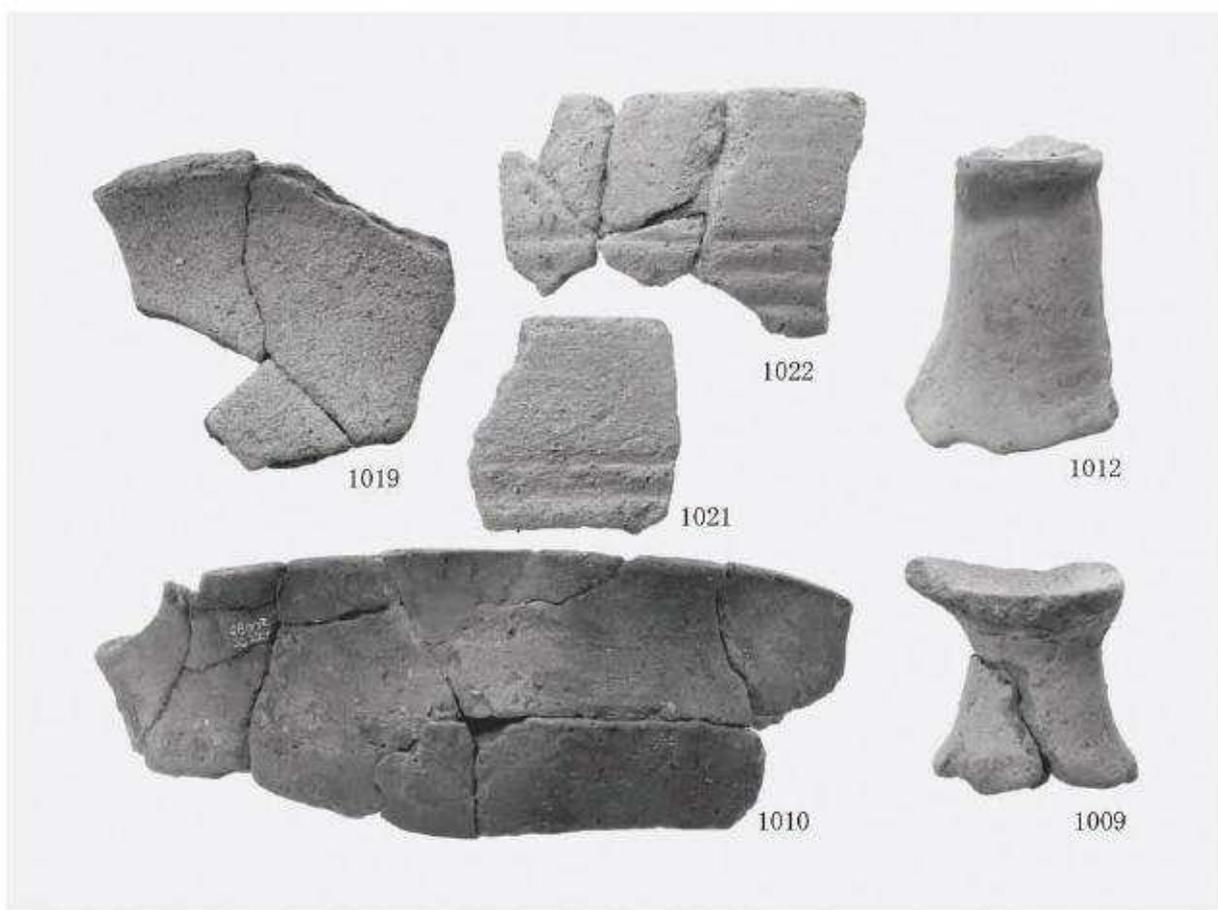


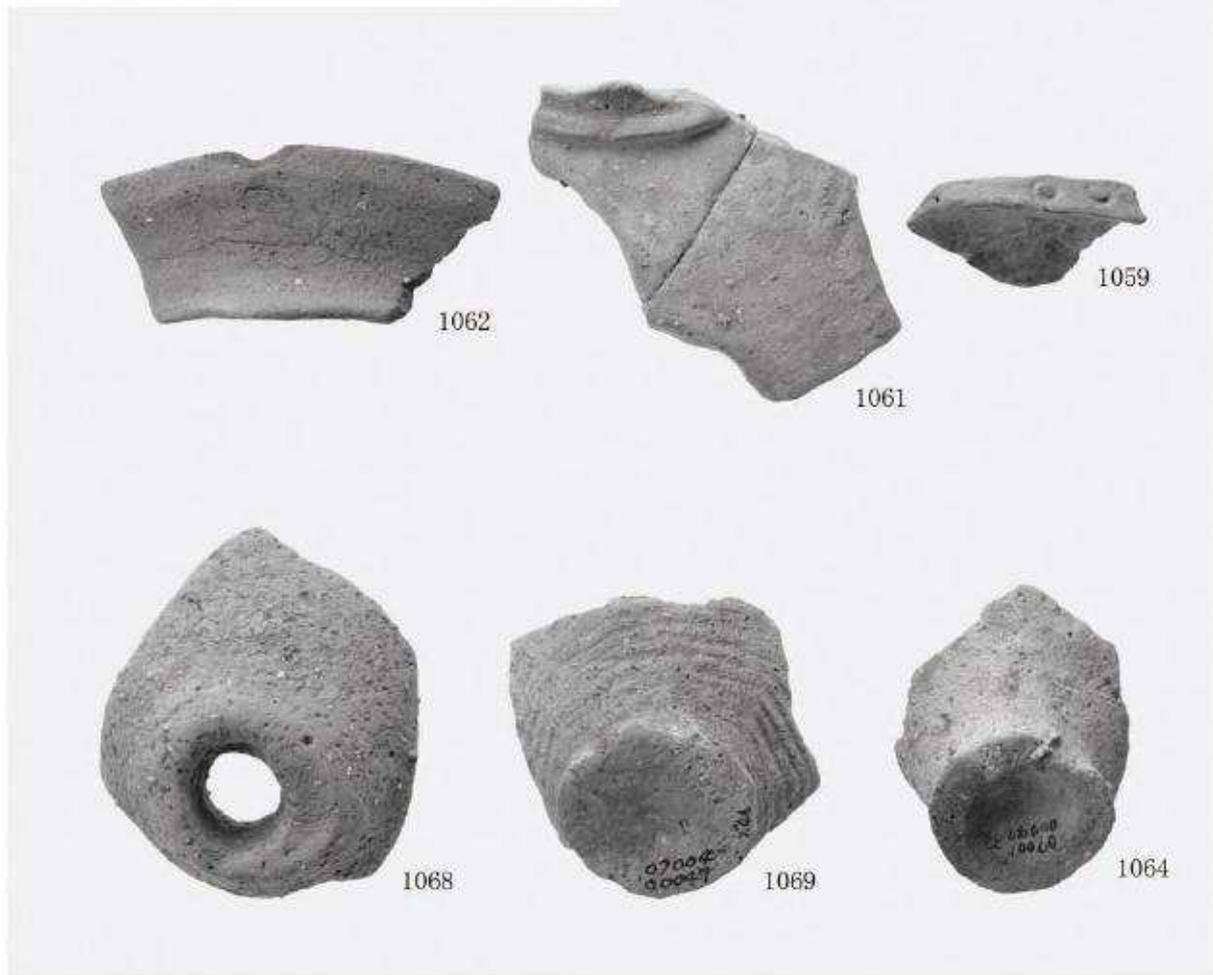


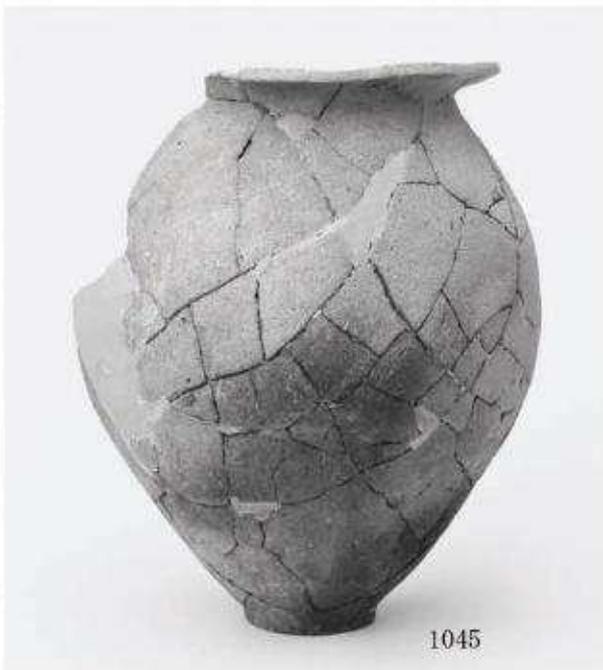
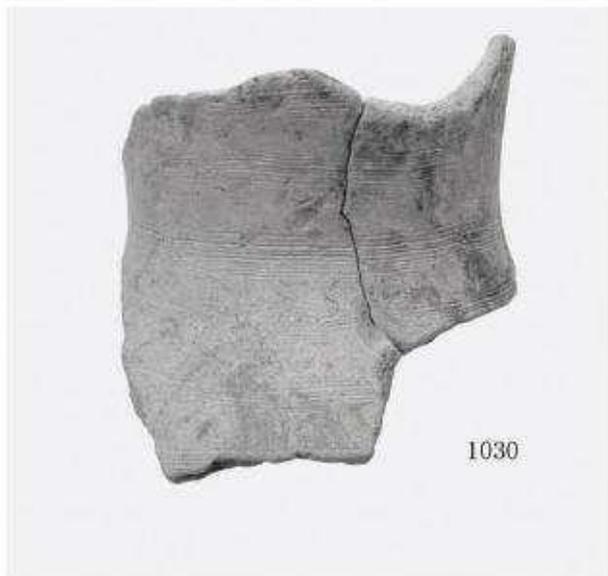














報 告 書 抄 録

ふりがな	ふちゅういせき に							
書名	府 中 遺 跡 II							
副書名	都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番	2010-10							
編著者名	阿部幸一 大野薫 妹尾裕介							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 Tn06-6941-0351 (代表)							
発行年月日	平成23年 3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ふちゅういせき 府中遺跡	いずみし 和泉市	27219	34	34° 28′ 35″	135° 25′ 35″	平成19年 4月 9日から 平成20年 3月31日 平成20年 4月 1日から 平成21年 3月 6日	3350㎡	都市計画 道路和泉 中央線整 備事業
	ふちゅうちゅう 府中町						3984㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふちゅういせき 府中遺跡 (豊中遺 跡)	集落跡	縄文時代 ～ 中世	縄文時代の貯蔵穴・河川 弥生時代の溝・土坑 古墳時代の溝・土坑	縄文土器 弥生土器 石器 土師器	縄文時代中期末 と晩期前半の土器 が纏まって出土し た。
要約	<p>平成19年度、20年度は和泉中央線の南西側拡幅部、平成20年度は南西側拡幅部とアンダーパスで掘り下げる既設道路部分の調査を実施した。</p> <p>縄文時代では中期末の貯蔵穴や柱穴、土坑、晩期前半の河道を検出した。弥生時代では前期頃の河道や平成15、17年調査で検出した方形周溝墓の溝と土坑、溝を検出した。弥生時代後期から古墳時代では溝や土坑を検出した。</p> <p>豊中遺跡から出土した縄文土器も掲載した。</p>				

大阪府埋蔵文化財調査報告2010-10

府 中 遺 跡 II

—都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

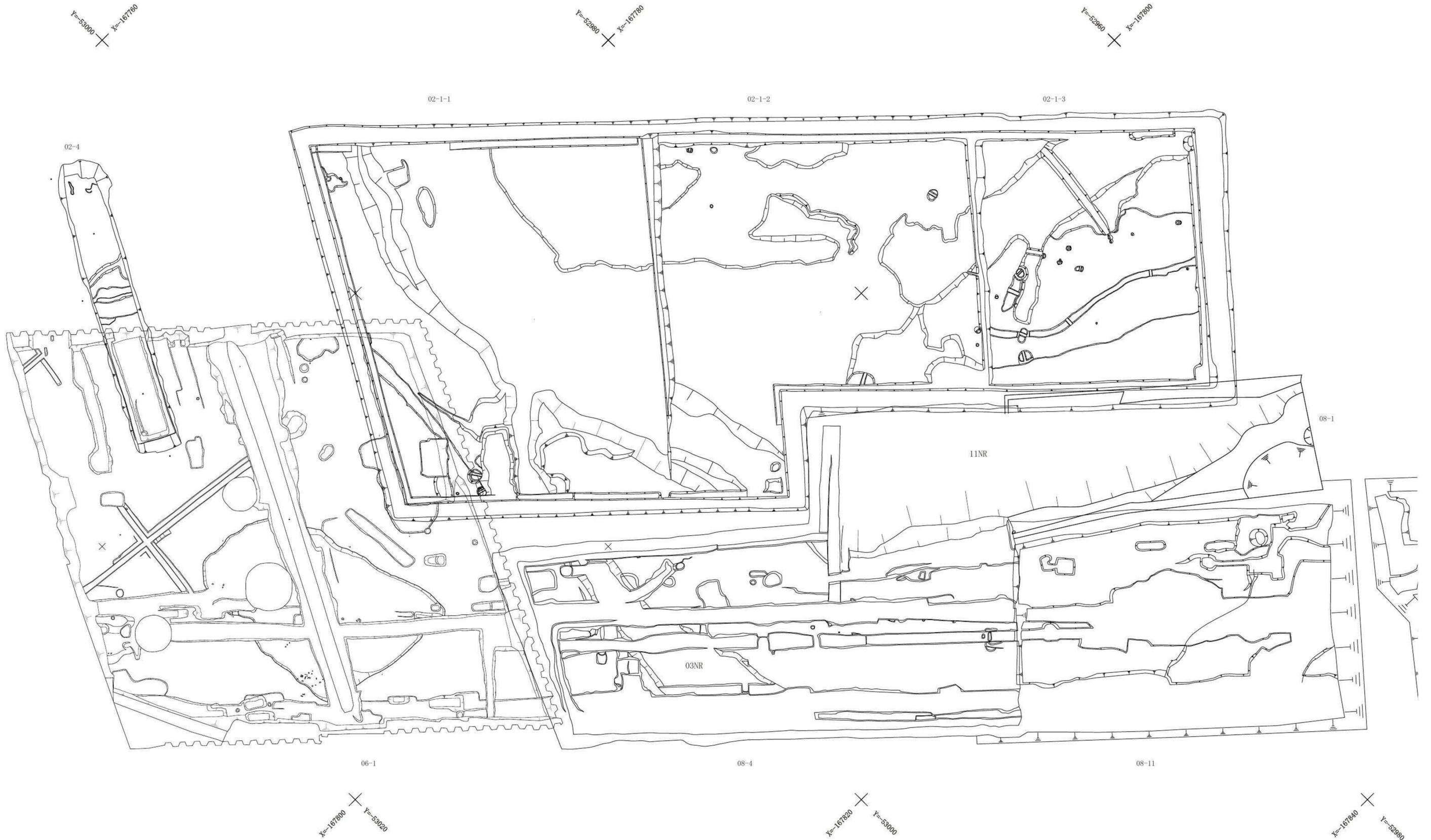
TEL 06 (6941) 0351 (代表)

発行日 平成23年 3月25日

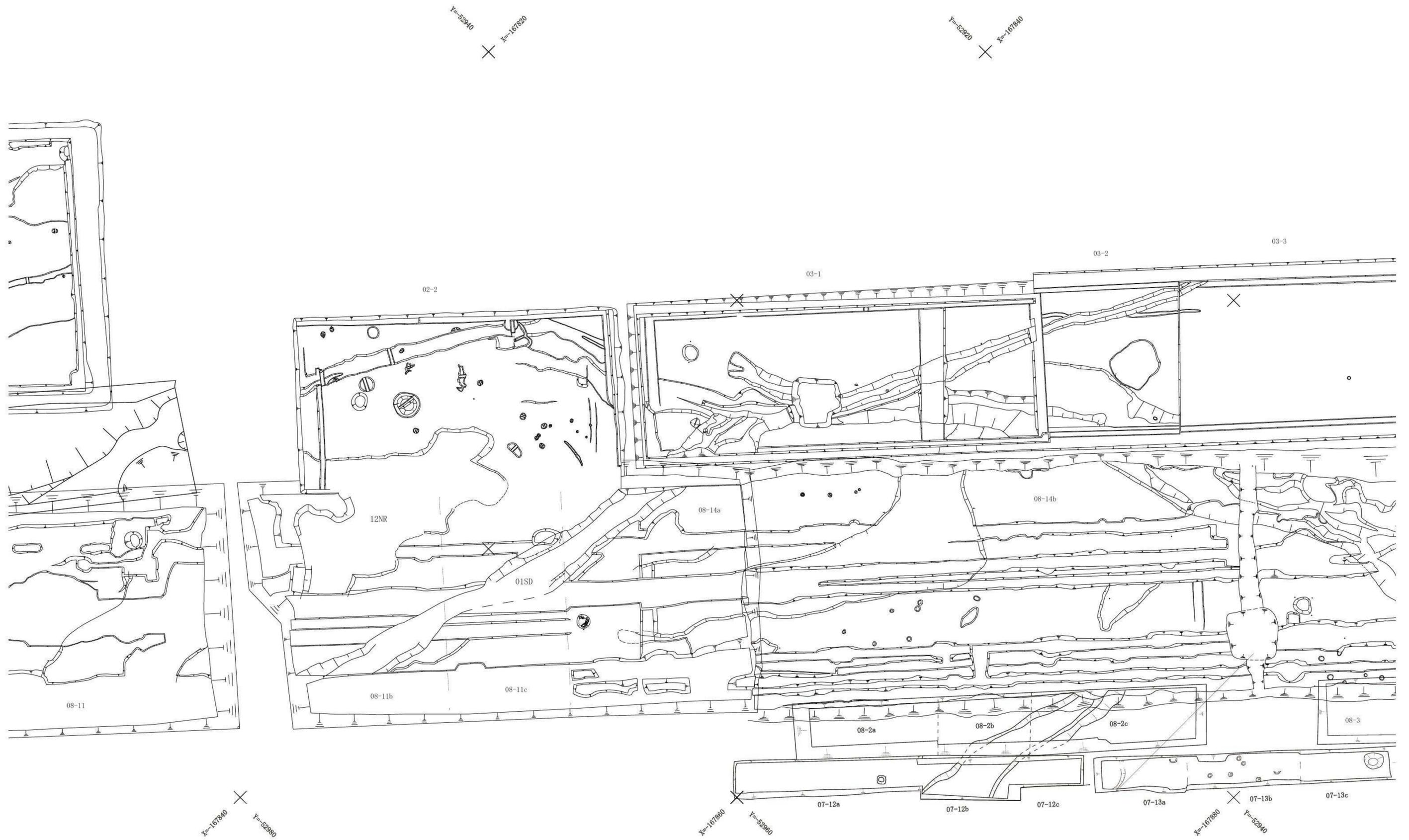
印刷 石川特殊特急製本株式会社

〒540-0014 大阪市中央区龍造寺町7番35号

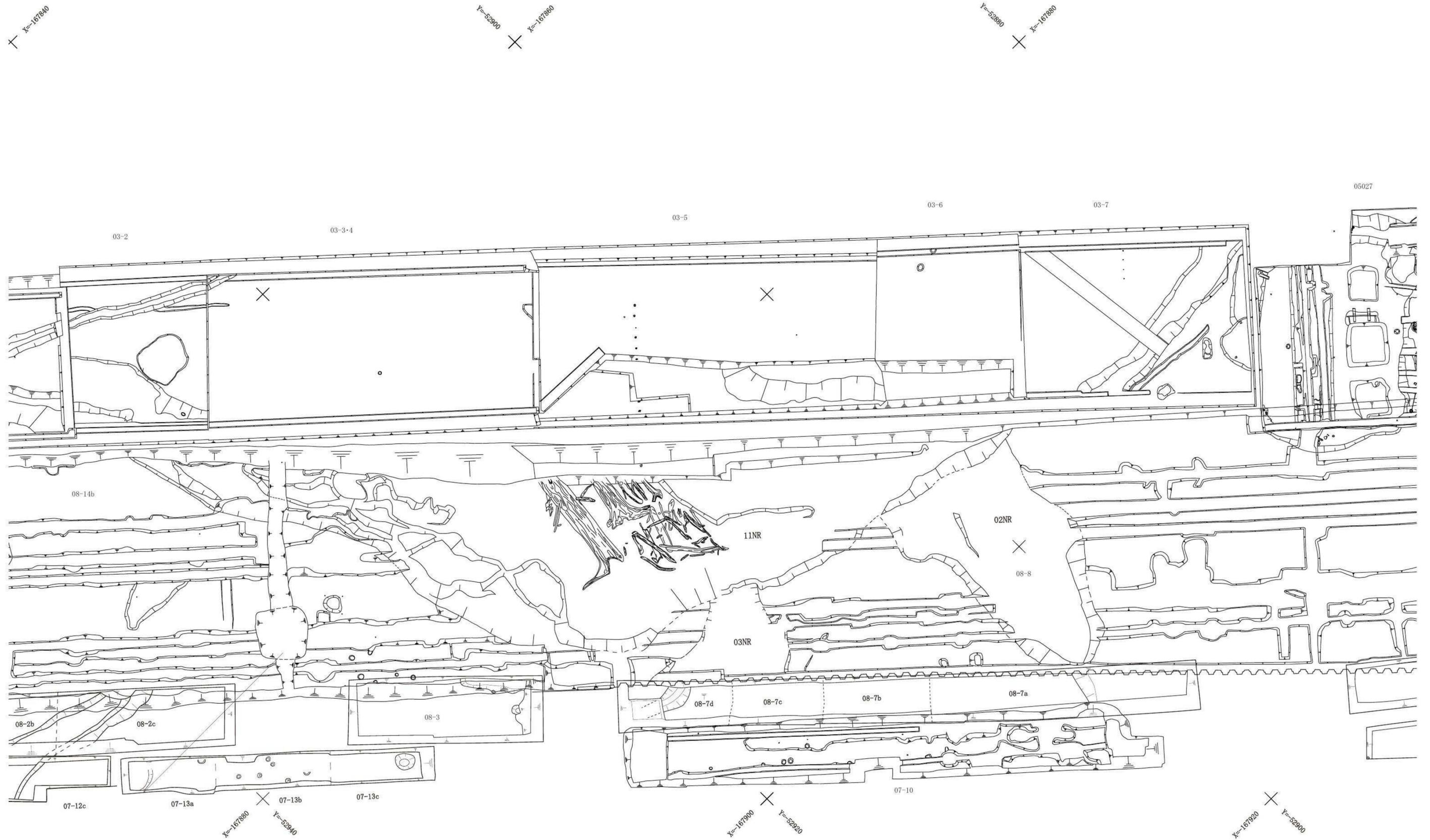
付图1 02-1区、02-4区、06-1区、08-1区、08-4区、08-11区平面图



付图2 02-2区、03-1区、03-2区、03-3区、07-12区、07-13区、08-2区、08-3区、08-11区、08-14区平面图



付图3 03-2区、03-3·4区、03-5区、03-6区、03-7区、05027区、07-10区、07-13区、08-3区、08-7区、08-8区、08-11区、08-14区平面图



付图4 02-2区、03-1区、03-2区、03-3区、07-12区、07-13区、08-2区、08-3区、08-11区、08-14区平面图

